山形県埋蔵文化財センター調査報告書第201集

鎌倉上遺跡第1・2次発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

鎌倉上遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第201集

2012

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

鎌倉上（かまくらかみ）遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第201集

平成24年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

1区完掘状況全景（北から）

2区完掘状況全景（北から）

1区竪穴住居跡群全景（西から）

2区南側竪穴住居跡群（西から）

2区北側竪穴住居跡群（西から）

古墳時代前期の出土遺物

古墳時代中期の出土遺物

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、鎌倉上遺跡の調査成果をまとめたものです。

鎌倉上遺跡は、山形県南部、置賜地方に位置する米沢市にあります。市には670か所を超える埋蔵文化財包蔵地が登録され、縄文時代から江戸時代にわたる各時代に地域の中心となるような遺跡が存在します。古墳時代は、県内でも特に古墳の分布が多く、古墳時代前期の前方後方墳である寶領塚古墳や、この地域の首長と推測される女性の人骨が発見された戸塚山古墳群などの注目される古墳が造営されています。中世では、長井氏・伊達氏の本拠として、江戸時代は上杉氏の城下町として栄えました。現在も、市内には歴史的な地名や名所が見られ、伝統を受け継ぎ、文化財を活用した整備が進められています。また、山形新幹線や高速道路の整備に伴い、県南の中核都市としての重要な役割を果たしています。

この度、山形県による一般国道287号米沢北バイパス道路改築事業（交付金･国道）に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、鎌倉上遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、古墳時代前期と中期の集落跡が確認され、前期の集落では竪穴住居跡、倉庫と考えられる掘立柱建物跡、畑の畝跡、捨場が検出されました。中期の集落では、複数の焼失住居が検出され、住居内からは使用されていた土師器や須恵器、建築部材が出土するなど、当時の生活を復元できる良好な資料を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成24年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　相馬周一郎

凡　例

1　本書は、一般国道287号米沢北バイパス道路改築事業（交付金・国道）に係る「鎌倉上遺跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　本書の執筆は、菅原哲文、山木巧が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、斉藤敏行、安部実、黒坂雅人、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。

5　遺構図等に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ST…竪穴住居跡	EL…カマド・炉跡	EP…住居内柱穴	ED…住居内周溝	EK…住居内土坑	
SB…掘立柱建物跡	EB…建物跡柱穴	SK…土坑	SP…柱穴	SG…河川跡	
SD…溝跡・畝状遺構	SX…性格不明遺構	RP…登録土器	RQ…登録石製品	RW…登録木製品	
P…土器	S…石	W…木			

7　遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。

8　遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。また、拓影断面図の配置は左から内面・外面の順に掲載した。

9　基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

10　発掘調査、整理作業および本書を作成するにあたり、下記の方々から御指導と御助言をいただいた。（敬称略）

福島県会津坂下町教育部文化振興班　吉田博行　阿部司
新潟県埋蔵文化財事業団　滝沢規朗　春日真実
新潟県村上市教育委員会　吉井雅勇　齋藤豊
米沢市教育委員会　手塚孝　菊地正信
東北芸術工科大学　北野博司
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館　佐藤鎭雄　秦昭繁

11　本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章　菅原哲文
第Ⅱ章　山木巧
第Ⅲ章　第1節　菅原哲文・山木巧　第2～4節　山木巧
第Ⅴ章　第1節　菅原哲文　第2節　山木巧

調査要項

遺跡名	鎌倉上（かまくらかみ）遺跡		
遺跡番号	202－033		
所在地	山形県米沢市窪田町小瀬字鎌倉上（くぼたまちこぜ　かまくらかみ）		
調査委託者	山形県		
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
受託期間	平成21年7月10日～平成22年3月31日		
	平成22年5月6日　～平成23年3月31日		
	平成23年5月20日～平成24年3月31日		
現地調査	平成21年7月21日～11月13日		
	平成22年6月1日　～10月15日		
調査担当者	平成21年度	調査課長	阿部明彦
		課長補佐	伊藤邦弘
		主任調査研究員	菅原哲文（調査主任）
		調査員	山木巧
	平成22年度	調査課長	阿部明彦
		課長補佐	伊藤邦弘
		主任調査研究員	菅原哲文（調査主任）
		調査員	山木巧
	平成23年度	整理課長	斉藤敏行
		考古主幹	黒坂雅人
		主任調査研究員	菅原哲文（調査主任）
		調査員	山木巧
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課		
調査協力	米沢平野土地改良区		
	窪田コミュニティーセンター		
	米沢市教育委員会		
	山形県教育庁置賜教育事務所		
業務委託	基準点測量業　有限会社ジェックス		
	地形・遺構測量業務（俯瞰撮影）　株式会社パスコ		
	理化学分析業務	株式会社加速器分析研究所	
		株式会社パレオ・ラボ	
		株式会社吉田生物研究所	
	遺物保存処理業務	株式会社吉田生物研究所	

発掘作業員	青木淳	赤井正寿	安達和弘	伊藤絹子	伊藤利信	岩崎清子	岩崎道雄
	大平昌一	大橋勝男	尾形貞一	小形昇	川井富助	楠　正	小浦俊英
	齊藤功	齊藤富男	坂野健二	佐藤武彦	佐藤忠明	佐藤利作	清水弘文
	神保好昭	須貝純一	鈴木京四郎	鈴木ひろ美	鈴木幸憲	寺島利雄	長谷川洋
	平吹孝二	藤倉真樹子	星龍一	丸山政義	三浦弘	横山幸三郎	吉田敬
	我妻清治	渡部惇	渡部信子	我孫子修一			（五十音順）
整理作業員	安達久恵	加藤慶則	関東美由樹	佐藤広幸	佐藤美恵子	柴田友恵	嶋田真奈美
	庄司佳子	白田光芳	東海林正裕	中嶋美恵子	萩生田裕樹子	渡邊かおり	
							（五十音順）

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過…… 1
　2　調査の概要…… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1　地理的環境…… 4
　2　歴史的環境…… 4
Ⅲ　遺構と遺物
　1　古墳時代の遺構…… 9
　2　古墳時代の遺物…… 17
　3　中世・近世の遺構と遺物…… 26
　4　その他の遺物…… 27
Ⅳ　理化学分析
　1　放射性炭素年代測定（1）…110
　2　放射性炭素年代測定（2）…113
　3　樹種同定…… 117
　4　漆製品の塗膜構造調査…… 120
Ⅴ　調査のまとめ
　1　古墳時代集落について…… 123
　2　出土遺物の特色…… 124
報告書抄録…… 巻末

表

表1　調査工程表…… 3
表2　遺跡地名表…… 7
表3　分布調査の出土遺物詳細表…… 77
表4　古墳時代遺物観察表…… 104
表5　陶磁器・遺構外遺物観察表…… 108
表6　木製品観察表…… 109
表7　石製品・石器観察表…… 109
表8　金属製品観察表…… 109
表9　試料一覧・放射性炭素年代測定結果…… 110
表10　暦年較正結果…… 111
表11　放射性炭素年代測定分析試料一覧…… 113
表12　暦年較正年代結果…… 114
表13　樹種同定分析試料一覧…… 118
表14　調査資料詳細表…… 120
表15　竪穴住居跡詳細表…… 128

図　版

第1図　調査区概要図…… 3
第2図　地形分類図…… 5
第3図　遺跡位置図…… 6
第4図　調査区全体図…… 28
第5図　2区北遺構配置図…… 29
第6図　2区中央遺構配置図…… 30
第7図　2区南・1区北遺構配置図…… 31
第8図　1区中央遺構配置図…… 32
第9図　1区南遺構配置図…… 33
第10図　調査区基本層序…… 34
第11図　ＳＴ20竪穴住居跡・ＳＸ19性格不明遺構…… 35
第12図　ＳＴ21竪穴住居跡 …… 36

第 13 図　ＳＴ 22 竪穴住居跡（1）…… 37
第 14 図　ＳＴ 22 竪穴住居跡（2）…… 38
第 15 図　ＳＴ 22 竪穴住居跡（3）…… 39
第 16 図　ＳＴ 100・101 竪穴住居跡 …… 40
第 17 図　ＳＴ 102 竪穴住居跡（1）…… 41
第 18 図　ＳＴ 102 竪穴住居跡（2）…… 42
第 19 図　ＳＴ 102 竪穴住居跡（3）…… 43
第 20 図　ＳＴ 103 竪穴住居跡（1）…… 44
第 21 図　ＳＴ 103 竪穴住居跡（2）…… 45
第 22 図　ＳＴ 104 竪穴住居跡（1）…… 46
第 23 図　ＳＴ 104 竪穴住居跡（2）…… 47
第 24 図　ＳＴ 105 竪穴住居跡（1）…… 48
第 25 図　ＳＴ 105 竪穴住居跡（2）…… 49
第 26 図　ＳＴ 106 竪穴住居跡（1）…… 50
第 27 図　ＳＴ 106 竪穴住居跡（2）…… 51
第 28 図　ＳＴ 107 竪穴住居跡（1）…… 52
第 29 図　ＳＴ 107 竪穴住居跡（2）…… 53
第 30 図　ＳＴ 108 竪穴住居跡…… 54
第 31 図　ＳＴ 118 竪穴住居跡…… 55
第 32 図　ＳＴ 120 竪穴住居跡・ＳＫ 158・159 土坑 …… 56
第 33 図　ＳＴ 125 竪穴住居跡・ＳＤ 112 ～ 117 畝状遺構…… 57
第 34 図　ＳＢ 2 掘立柱建物跡・ＳＤ 14 溝跡 …… 58
第 35 図　ＳＢ 54 掘立柱建物跡・ＳＤ 40 溝跡…… 60
第 36 図　ＳＢ 79 掘立柱建物跡・ＳＤ 65・66 畝状遺構…… 61
第 37 図　ＳＫ 111・131・133・164・177 土坑…… 62
第 38 図　1 区北畑畝状遺構…… 63
第 39 図　ＳＤ 56 ～ 62・70 ～ 72 畝状遺構 …… 64
第 40 図　ＳＤ 160・167・172・173 溝跡（1）…… 65
第 41 図　ＳＤ 160・167・172・173 溝跡（2）…… 66
第 42 図　ＳＤ 12・13・15・16 溝跡 …… 67
第 43 図　ＳＧ 1 河川跡（1）…… 68
第 44 図　ＳＧ 1 河川跡（2）…… 69
第 45 図　ＳＧ 130 河川跡…… 70
第 46 図　ＳＸ 63・119 性格不明遺構…… 71
第 47 図　ＳＸ 50 捨場出土遺物全体図 …… 72
第 48 図　ＳＸ 50 捨場遺物分布図（1）…… 73
第 49 図　ＳＸ 50 捨場遺物分布図（2）…… 74
第 50 図　ＳＸ 50 捨場遺物分布図（3）…… 75
第 51 図　ＳＸ 50 捨場土層断面・ＳＸ 49 集石…… 76
第 52 図　分布調査の出土遺物…… 77
第 53 図　古墳時代前期土器の器種分類…… 78
第 54 図　古墳時代中期土器の器種分類…… 79
第 55 図　ＳＴ 20・21・22 竪穴住居跡出土遺物 …… 80
第 56 図　ＳＴ 22・101・102 竪穴住居跡・ＳＤ 34・35 溝跡
出土遺物…… 81
第 57 図　ＳＴ 102・103 竪穴住居跡出土遺物 …… 82
第 58 図　ＳＴ 103 竪穴住居跡出土遺物…… 83
第 59 図　ＳＴ 103・104 竪穴住居跡出土遺物 …… 84
第 60 図　ＳＴ 104 竪穴住居跡出土遺物（1）…… 85
第 61 図　ＳＴ 104 竪穴住居跡出土遺物（2）…… 86
第 62 図　ＳＴ 105 竪穴住居跡出土遺物…… 87
第 63 図　ＳＴ 105・106 竪穴住居跡出土遺物 …… 88
第 64 図　ＳＴ 106 竪穴住居跡出土遺物…… 89
第 65 図　ＳＴ 106 ～ 108・118・125 竪穴住居跡出土遺物…… 90
第 66 図　ＳＤ 14・27・40・167 溝跡・ＳＢ 79 掘立柱建物跡
出土遺物…… 91
第 67 図　ＳＤ 172・173 溝跡・ＳＧ 1 河川跡・ＳＸ 19 性格不明
遺構出土遺物…… 92
第 68 図　ＳＸ 50 捨場出土遺物（1）…… 93
第 69 図　ＳＸ 50 捨場出土遺物（2）…… 94
第 70 図　ＳＸ 50 捨場出土遺物（3）…… 95
第 71 図　木製品（1）…… 96
第 72 図　木製品（2）…… 97
第 73 図　木製品（3）…… 98
第 74 図　木製品（4）・漆製品 …… 99
第 75 図　石製品（1）…… 100
第 76 図　石製品（2）…… 101
第 77 図　石製品（3）…… 102
第 78 図　ＳＤ 13・16 溝跡・遺構外出土遺物 …… 103
第 79 図　暦年較正年代グラフ（1）…… 112
第 80 図　暦年較正年代グラフ（2）…… 115
第 81 図　暦年較正年代グラフ（3）…… 116
第 82 図　分析木材顕微鏡写真（1）…… 118
第 83 図　分析木材顕微鏡写真（2）…… 119
第 84 図　竪櫛模式図・塗膜分析顕微鏡写真（1）…… 121
第 85 図　塗膜分析顕微鏡写真（2）…… 122
第 86 図　竪穴住居跡集成…… 127
第 87 図　竪穴住居跡カマド・規模一覧…… 128
第 88 図　遺物出土量分布図 …… 129
第 89 図　古墳時代前期の出土土器集成（1）…… 130
第 90 図　古墳時代前期の出土土器集成（2）…… 131
第 91 図　古墳時代中期の出土土器集成（1）…… 132
第 92 図　古墳時代中期の出土土器集成（2）…… 133
第 93 図　古墳時代中期の出土土器集成（3）…… 134
第 94 図　時期別遺構配置図…… 135

写真図版

巻頭写真１　１区完掘状況・２区完掘状況
巻頭写真２　１区竪穴住居跡群全景
巻頭写真３　２区南側竪穴住居跡群・２区北側竪穴住居跡群
巻頭写真４　古墳時代前期の出土遺物・古墳時代中期の出土遺物
写真図版１　調査区全体図・基本層序
写真図版２　ＳＴ 20 竪穴住居跡
写真図版３　ＳＴ 21 竪穴住居跡
写真図版４　ＳＴ 22 竪穴住居跡（１）
写真図版５　ＳＴ 22 竪穴住居跡（２）
写真図版６　ＳＤ 34・35 溝跡
写真図版７　ＳＴ 100・101 竪穴住居跡
写真図版８　ＳＴ 102 竪穴住居跡（１）
写真図版９　ＳＴ 102 竪穴住居跡（２）
写真図版 10　ＳＴ 102 竪穴住居跡（３）
写真図版 11　ＳＴ 103 竪穴住居跡（１）
写真図版 12　ＳＴ 103 竪穴住居跡（２）
写真図版 13　ＳＴ 103 竪穴住居跡（３）
写真図版 14　ＳＴ 104 竪穴住居跡（１）
写真図版 15　ＳＴ 104 竪穴住居跡（２）
写真図版 16　ＳＴ 104 竪穴住居跡（３）
写真図版 17　ＳＴ 105 竪穴住居跡（１）
写真図版 18　ＳＴ 105 竪穴住居跡（２）
写真図版 19　ＳＴ 105 竪穴住居跡（３）
写真図版 20　ＳＴ 106 竪穴住居跡（１）
写真図版 21　ＳＴ 106 竪穴住居跡（２）
写真図版 22　ＳＴ 107 竪穴住居跡（１）
写真図版 23　ＳＴ 107 竪穴住居跡（２）
写真図版 24　ＳＴ 108 竪穴住居跡
写真図版 25　ＳＴ 118 竪穴住居跡
写真図版 26　ＳＴ 120・125 竪穴住居跡
写真図版 27　ＳＢ２掘立柱建物跡
写真図版 28　ＳＤ 14 溝跡
写真図版 29　ＳＢ 54 掘立柱建物跡
写真図版 30　ＳＢ 79 掘立柱建物跡
写真図版 31　ＳＫ 111・133 土坑
写真図版 32　ＳＫ 41・135・148 ～ 153 土坑
写真図版 33　ＳＫ 158・159・164・177 土坑・ＳＰ柱穴
写真図版 34　ＳＤ 160・167・172・173 溝跡（１）
写真図版 35　ＳＤ 160・167・172・173 溝跡（２）
写真図版 36　ＳＤ 160・167・172・173 上層出土遺物
写真図版 37　ＳＤ 12・13・16 溝跡・畝状遺構
写真図版 38　ＳＧ１河川跡（１）
写真図版 39　ＳＧ１河川跡（２）
写真図版 40　ＳＧ 130 河川跡
写真図版 41　ＳＸ 19 性格不明遺構
写真図版 42　ＳＸ 63・119・161 性格不明遺構
写真図版 43　ＳＸ 49・50 捨場
写真図版 44　ＳＸ 50 捨場
写真図版 45　竪穴住居跡出土遺物集合（１）
写真図版 46　竪穴住居跡出土遺物集合（２）
写真図版 47　ＳＴ 20・21 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 48　ＳＴ 22 竪穴住居跡・ＳＤ 34・35 溝跡出土遺物
写真図版 49　ＳＴ 101・102 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 50　ＳＴ 102・103 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 51　ＳＴ 103 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 52　ＳＴ 103・104 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 53　ＳＴ 104 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 54　ＳＴ 104 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 55　ＳＴ 105 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 56　ＳＴ 105 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 57　ＳＴ 106 竪穴住居跡出土遺物（１）
写真図版 58　ＳＴ 106 竪穴住居跡出土遺物（２）
写真図版 59　ＳＴ 107・108・118・125 竪穴住居跡出土遺物
写真図版 60　ＳＤ 14・27・40 溝跡・ＳＢ 79 掘立柱建物跡・ＳＫ 133・158 土坑出土遺物
写真図版 61　ＳＤ 167・172・173 溝跡・ＳＧ１河川跡・ＳＸ 19 性格不明遺構出土遺物
写真図版 62　ＳＸ 50 捨場出土遺物（１）
写真図版 63　ＳＸ 50 捨場出土遺物（２）
写真図版 64　ＳＸ 50 捨場出土遺物（３）
写真図版 65　ＳＸ 50 捨場出土遺物（４）・木製品（１）
写真図版 66　木製品（２）
写真図版 67　木製品（３）
写真図版 68　石製品・石器・ＳＤ 13・16 溝跡出土遺物

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

鎌倉上遺跡は、一般国道287号米沢北バイパス道路改築事業（交付金・国道）により、平成20年度に行われた山形県教育委員会による遺跡詳細分布調査で確認され、登録された遺跡である。平成20年12月11・12日に試掘調査を実施したところ、古墳時代前期を中心とする遺構・遺物が確認され、古墳時代の集落跡であることが明らかとなった。その結果を基に関係機関との調整を図った結果、事業区内について記録保存を目的とした緊急発掘調査を行う運びとなった。発掘調査は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが県からの委託を受けて行った。

2　調査の概要

A　発掘調査

第1次調査は、平成21年7月21日から開始した。調査区は、遺跡にかかる道路部分7,000㎡が対象であり、南側を1区、北側を2区とした。第1次調査は、南側3,500㎡について実施した。重機を用いて表土を除去し、面整理を行い、遺構検出を行った。遺構は、精査・写真や平面・断面の記録作業を行い、委託業務による空中写真撮影を実施している（第1図）。

グリッド（地区割り）は、世界測地系をもとに平面直角座標系第Ⅹ系：X＝-227220.000、Y＝-63400.000を、原点X＝0、Y＝Aとし（0－A）、南北軸（X軸）は南から北へ、東西軸（Y軸）は、西から東へ、5m毎に昇順でアルファベットと整数でグリッド番号を割り当てた（第1図）。遺構の登録番号は、第Ⅰ次調査時には、1～81まで、第2次調査が100～210とした。登録遺物番号は、第1次調査が1～134、第2次調査が200～405である。

第1次調査では、中世の遺構と古墳時代の竪穴住居跡3棟を検出し、広範囲にわたる遺物包含層ＳＸ50が確認された。このため、当初の調査期間では1区の調査を終了するのが困難と判断し、事業側と協議した結果、当初10月16日を11月13日まで調査期間を延長し（延べ115日）、現地調査を実施した。

第2次調査は、平成22年6月1日から10月15日までの137日間で実施した。発掘調査面積は3,500㎡である。古墳時代の竪穴住居跡12棟、河川跡などの遺構が検出され、当初予定よりも遺構と遺物の量が増加したが、常時排水作業や稼働日の調整により、予定した期間内で終了することができた。

B　遺跡の層序

基本層序を第12図に掲載する。1区と2区では、堆積状況がやや異なっており、区別に基本層を設定した。

1区の層序であるが、大別層でⅠ～Ⅳ層を設定した。Ⅰ層は、Ⅰa、Ⅰb層に細分される。Ⅰa層は黒褐色シルトの表土、Ⅰb層は黒褐色～灰黄褐色シルトで、耕作の影響を受けている層である。Ⅱ層は、a・b・c・dに細分される。Ⅱa・Ⅱbは1区の東半部に認められ、Ⅱa層はしまりや粘性の強い黒褐色シルト層、Ⅱb層はより黒色が強く、古墳時代前期の土師器片を含む。Ⅱc・Ⅱd層は、1区西側に確認される層である。Ⅱc層は、黒褐色の泥炭層、Ⅱd層は黒褐色シルト層である。

Ⅲ層は、古墳時代前期の遺物を含む包含層である。1区西壁を中心に分布する黒色シルトのⅢa層、分布域が広い黒褐色粘質シルトのⅢb層に細分される。

Ⅳ層は、古墳時代の遺構検出面である。a・bに細分される。Ⅳa層は黄灰色粘質シルト、Ⅳb層は褐色粘質シルトや黄灰色シルトである。

2区は、調査区北壁の断面を提示した。基本層は、Ⅰ～Ⅲ層を設定している。Ⅰ層は表土であり、内容によってa～c層に細分している。Ⅱ層は、黒色粘質シルトのa層、褐灰色砂質シルトのb層に細分される。概ね、1区のⅡ層に対応すると考えられる。Ⅲ層は、黄灰色砂質シルトで、古墳時代の遺構検出面である。2区のⅣ層に対応する。

C　整理作業

整理作業は、平成21年11月9日から平成22年3月31日、平成22年11月1日から平成23年3月31日、平成23年6月1日から平成24年3月31日の期間で実施した。出土遺物は、洗浄作業後に注記を行った。注記は遺跡名「カマクラ上」、第2次調査遺物には「カマクラ上2」、出土地点を明記し、現場で登録したものには登録番号を付した。

木製品は、洗浄後、少量の水を入れたポリエチレンチューブに遺跡名・出土地点を記したラベルと一緒に梱包した。その後、平成22年度と23年度に、大型品や特に脆弱な遺物は委託による高級アルコール法による保存処理を、小型品については糖アルコール含浸法による保存処理を施した。

修復作業は、土師器、須恵器、中近世の陶磁器に分類した後、遺構ごとに接合を行い、周辺遺構やグリット出土遺物との接合を実施した。

抽出した土師器を中心とする遺物は実測図の作成を行い、拓本が必要なものは底部等の拓本を採った。遺物実測図は、デジタルトレースを行い、拓本と組み合わせて編集を行った。

遺構全体図は、各年度に業務委託を行った平面図をもとに作成し、個別の遺構図は、委託平面図と手取りの断面図をデジタルトレースしたものを合成し作成した。

遺構写真は、現場で撮影したものから報告書に掲載するものを抽出した。遺物は、欠損箇所を補修した後に単体や集合の写真撮影を実施し、報告書に掲載する写真を選別した。

作成した遺構図・遺物図・遺物観察表・写真図版の編集を順次行いながら、併行して本文執筆を行った。業務委託による理化学分析は、放射性炭素年代測定、樹種同定分析を行い、結果を第Ⅳ章に掲載している。

D　資料比較検討・調査指導

資料比較検討および調査指導について述べる。

平成22年3月10・11日にかけて、鎌倉上遺跡出土の古墳時代前期に比定される土師器の検討を行った。比較する資料については、地理的な要因や遺物の特徴が近似することから、福島県の会津地域、北陸地方の新潟県の同時期と目される遺物を対象とした。なお、資料を所蔵する福島県会津坂下町教育委員会、新潟県埋蔵文化財センターにて、鎌倉上遺跡の出土遺物を持参して、時期や技術系譜について比較・検討を行った。検討の結果、1次遺物の大半が北陸地方の漆町編年の8・9群に比定されることが明らかとなった。また、北陸地方や東海地方の遺物と共通した特徴を持つ遺物が少量認められた。

平成23年3月10日には、鎌倉上遺跡で確認された建物跡について検討するため、新潟県村上市に所在する道端遺跡の調査資料と出土遺物を実見した。道端遺跡は、阿賀野川以北の拠点的な集落跡と考えられている。なかでも円形周溝状の遺構が伴う建物跡は、祭場的施設との見解がある。このような溝状遺構に区画される建物跡は、北陸地方で数例確認されており、「広溝式建物跡」として認識されている。鎌倉上遺跡においても、周囲に溝状遺構が見られるST22竪穴住居跡や、溝跡が伴う掘立柱建物跡がある。これらの溝状遺構が関連する建物跡について道端遺跡の円形周溝状遺構との比較を行った。その結果、掘立柱建物跡に隣接する溝跡から出土した遺物について、共通した土師器の器種組成がみられた。

3月17日には、米沢市教育委員会が所蔵する大清水遺跡、二タ俣A遺跡、上新田a遺跡出土の土師器を実見した。大清水遺跡と二タ俣A遺跡は、当地域でも数少ない古墳時代前期に比定されている。市内に存在する古墳時代の集落跡の出土資料を検討することで、鎌倉上遺跡の主体となる時期や技術系譜について認識を深めた。

同年9月27日には、福島県会津坂下町教育委員会にて、所蔵されている中平遺跡の出土遺物の実見を行った。中平遺跡は、河川の氾濫によって短期間で埋没した古墳時代中期の集落跡である。竪穴住居跡や畝状遺構をはじめ、製鉄を行った鍛冶工房が良好な状態で確認されている。特に竪穴住居跡内出土の一括資料は、古墳時代中期の遺物を検討する際の指標にもなっている。鎌倉上遺跡では、カマドを有する竪穴住居跡から古墳時代中期に属する土師器が多量に出土している。これらの出土土師器の比較を主体に検討を行った。その結果、出土した須恵器の併行時期などから、大半が古墳時代中期後半を主体とすることが明らかとなった。また、土師器の坏類においては、器形や大きさに多様な様相がみられることが両遺跡で把握された。

同年11月18日、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館の秦昭繁氏による、鎌倉上遺跡出土の石製品の石材と産地の検討を依頼した。その結果、管玉・臼玉は在地の緑色凝灰岩を使用している可能性が高いこと、紡錘車や石製模造品は、滑石や粘板岩を使用し、県外の石材を使用していることが明らかとなった。

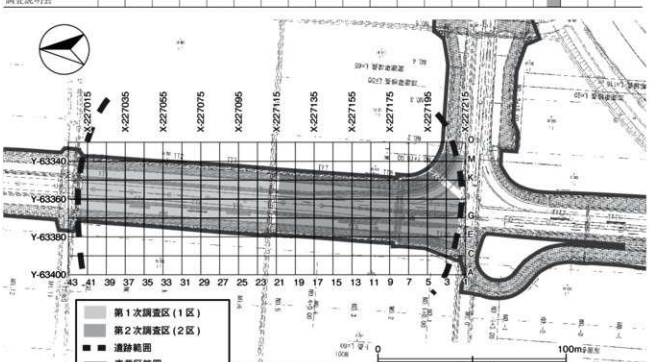
同年10月17日に、東北芸術工科大学の北野博司准教授より、古墳時代の土師器・須恵器と、古墳時代の集落構成や遺構について調査指導をいただき、以下の御教示をいただいた。

外周に溝を巡らす竪穴系の建物は北陸に多く、沖積地への適応と考えられる。古墳時代前期の土師器では、直口壺、二重口縁壺、北陸北東部系能登甕が多い組成で、漆町編年の８・９群に相当する。須恵器の年代は５世紀後半から末に収まる。カマドは２個が1か所主体で、くびれが強い甕を含めて使い分けが明瞭でない甕も使用される（ＳＴ105・106）。組成は、甕類は、２リットルサイズと小型の直置きに使用される２タイプと、大型の鉢、短頸壺状の鉢、壺（液体を注ぐための）、有蓋の短頸壺、須恵器模倣坏で構成される。

表１　調査工程表

平成21年	7月			8月			9月				10月					11月	
作業内容 ／ 週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	
表土除去																	
グリッド設定																	
面整理・遺構検出																	
遺構精査																	
記録（作図・写真）																	
その他（環境整備等）																	
調査説明会																	

平成22年	6月				7月					8月					9月					10月	
作業内容 ／ 週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
表土除去																					
グリッド設定																					
面整理・遺構検出																					
遺構精査																					
記録（作図・写真）																					
その他（環境整備等）																					
調査説明会																					



第１図　調査区概要図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

鎌倉上遺跡が所在する米沢市は、山形県の最南端に位置する。市域は、東西 32.1 ㎞、南北 28.2 ㎞、面積 548.74 ㎢を測る。山地・火山地が 74.3％と構成の大半を占め、丘陵地 5.7％、台地・段丘 7.8％、低地が 12.2％となっている。東方は、粟士山・駒ケ岳・栗子山といった奥羽山系の嶺々に限られ、磐梯朝日国立公園の一角をなす吾妻の山塊が南を画している。東南に聳え立つ山々は福島県との境界ともなっている。米沢市はこれらの山々と西部に広がる低平な玉庭丘陵と笹野山地に囲まれた典型的な盆地である。

したがって、気候は寒暖の差が大きい盆地性内陸型である。年間降水量は少ないが、冬期は降雪量が多く、市街地でも積雪量が 1 m を越える豪雪地帯である。また、内陸盆地の中では平均風速が最も強い地域である。

奥羽山系や吾妻山系に源を発する鬼面川・松川（最上川）・羽黒川・天王川（梓川）の河川は、氾濫原を形成しつつ北流している。これら諸河川は、やがて合流し最上川となって県内を貫き、県土を潤しながら日本海へと注ぐ。米沢盆地の南端から中央は、各々の河川によって形成された緩やかな扇状地で、低地の占める割合が高い。土地利用状況は、農地 10.5％・森林 77.1％・宅地 3％・その他 9.4％である。低地・台地は、藩政時代またはそれ以前から高密度の農業的利用が進められており、沖積低地や緩傾斜の扇状地面は水田として開墾され、自然堤防や急傾斜の扇状地面・台地は主に桑園や畑地として利用されている。

鎌倉上遺跡は、市街地から北へ約 3 ㎞離れた窪田地区に位置する。西側を流れる鬼面川と、東側の最上川に挟まれた谷底平野部の平地に立地し、地形分類上は鬼面川右岸の後背湿地にあたる。表層地質は未固結の礫および砂、泥からなる沖積堆積物である。耕作土壌は礫質灰色低地土に属し、非固結堆積岩を母材としている。堆積様式は水積で、30 ～ 60 ㎝以内に礫層または砂層が含まれる。土質は一般的に粘質または砂礫質である。

2　歴史的環境

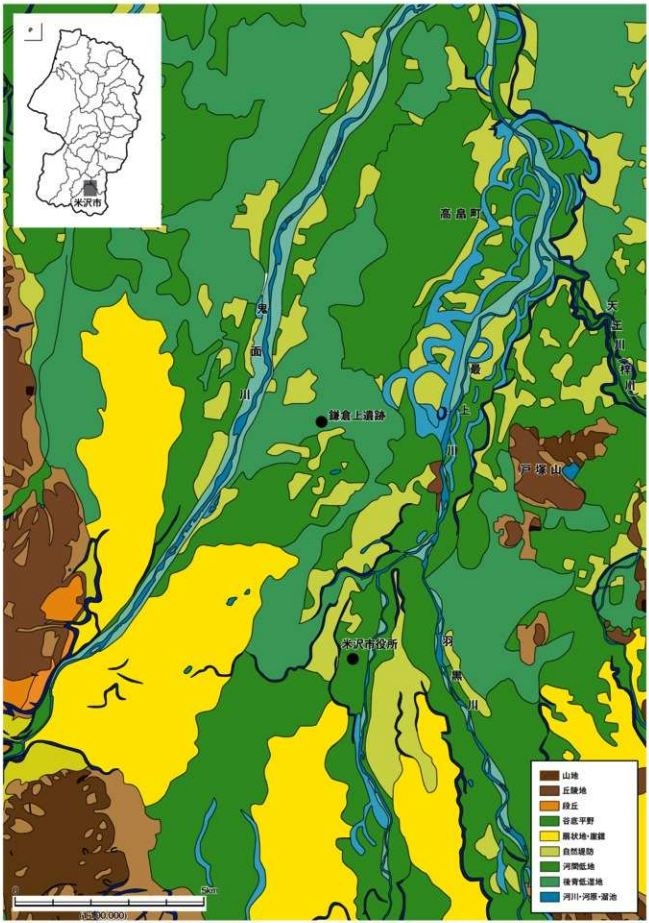
米沢市では、様々な事業に関して数多くの遺跡の調査が実施されている。その結果、現在までに 670 箇所を超える遺跡の存在が確認されている。

縄文時代の遺跡としては、国指定の史跡「一ノ坂遺跡」があげられる。市街地の西方約 2 ㎞の笹野山西端の微高地に位置し、縄文時代前期初頭の遺跡とされている。なかでも国内最長の大型竪穴住居跡は、石器製作を専業とする石器工房跡と推定されている。

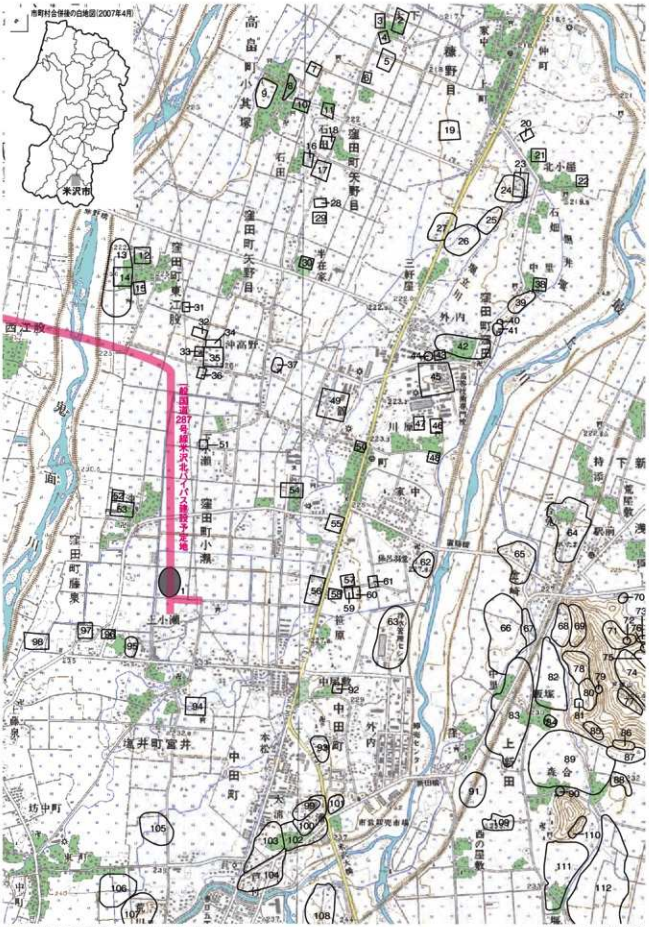
弥生時代の遺跡は極めて少なく、市内で確認されるのは 4 ヶ所である。清水北 C 遺跡は、弥生時代の集団墓地跡と考えられる遺跡で、当時の墓制の一つである再葬墓が大小合わせて 25 基確認された。出土した土器には籾痕が認められ、当地域で稲作が行われていたことを証明するものである。

古墳時代に入ると、丘陵や山麓に大小の古墳が多く築造される。万世町の比丘尼平遺跡では、県内初出となる古墳時代前期の方形周溝墓が 3 基、近接する八幡堂遺跡においても 5 基確認されている。市街地の北東部にある戸塚山古墳群は、山頂や山麓を中心に総数 193 基の古墳が群集する古墳群である。前方後円墳や帆立貝式古墳、横穴式石室墳が各所に存在し、5 世紀後半から 8 世紀の末期古墳まで長期間にわたり造営されている。特に戸塚山 137 号墳（帆立式古墳）の箱式石棺からは、この地域の首長と推測される女性の人骨が発見されている。置賜地方では、全国的に古墳築造が終焉した 8 世紀代にも牛森古墳などの横穴式石室墳が築造され続けている。

奈良・平安時代の遺跡は、平野部の主要な河川に沿って広範囲に分布する。置賜地方は「日本書紀」持統天皇 3（689）年に「陸奥国優嗜曇郡」の記述が史料的に初見である。和銅 5（712）年には、陸奥国の記述の中に「置賜郡」の名が見られ、陸奥国から分割して「出羽国置賜郡」になったと解釈されている。大浦遺跡では、具注暦の漆紙文書や布目瓦が出土し、8 世紀後半から 9 世紀前半まで機能していた置賜郡衙跡と推定される。また、笹


米沢市
高畠町
鬼面川
鎌倉上遺跡
最上川
天王川
稽川
戸塚山
米沢市役所
羽黒川
山地
丘陵地
段丘
谷底平野
扇状地・崖錐
自然堤防
河間低地
後背低湿地
河川・河原・湿池
5km
(1:50,000)

第２図　地形分類図



※国土地理院発行２万５千分の１地形図「米沢北部」を使用

第３図　遺跡位置図

表2　遺跡地名表

No	遺跡名	時代	種別	No	遺跡名	時代	種別
1	鎌倉上	古墳（前期・中期）	集落跡	57	竜入田屋敷	中世	城館跡
2	大下屋敷北館	中世	城館跡	58	窪田館野館	中世	城館跡
3	大下屋敷西館	中世	城館跡	59	谷地在家館	中世	城館跡
4	大下屋敷	中世	城館跡	60	下ノ在家館	中世	城館跡
5	沖の館	中世	城館跡	61	川崎屋敷	中世	城館跡
6	外屋敷	中世	城館跡	62	保内宮堂	奈良～平安	集落跡
7	窪田屋敷田館	中世	城館跡	63	笹原	弥生・奈良・平安	官衙・散布地
8	遺季屋	縄文	包蔵地	64	三号目館	中世	城館跡
9	小其塚館	中世	城館跡	65	金ヶ崎 a	奈良・平安	集落跡
10	丹後館	中世	城館跡	66	中川原館	中世	城館跡
11	矢野目西屋敷	中世	城館跡	67	中川原	奈良・平安	集落跡
12	四郎右ェ門壇館	中世	城館跡	68	戸塚山幼稚園 a	縄文（前期）	集落跡
13	東江股	縄文（晩期）	集落跡	69	金ヶ崎古墳群	古墳（終末期）	群集墳
14	台之南館	中世	城館跡	70	小山塚	中世	塚
15	北ノ屋敷	中世	城館跡	71	堪入西塚群	中世	塚群
16	高野屋敷遺館	中世	城館跡	72	戸塚山北古墳	古墳（前期）	古墳
17	次兵衛屋敷	中世	城館跡	73	戸塚山館	中世	城館跡
18	石田屋敷	中世	城館跡	74	堪入東塚群	中世	塚群
19	沖の前館	中世	城館跡	75	堪入廃寺	中世	寺院
20	内方館	中世	城館跡	76	上浅川堪入 a 古墳群	古墳（終末期）	古墳
21	北小屋屋敷	古墳	城館跡	77	山頂古墳群	古墳（中期・後期）	群集墳
22	高在家館	中世	城館跡	78	飯塚北古墳群	古墳（終末期）	群集墳
23	田中屋敷	中世	城館跡	79	戸塚山石切跡	古墳（終末期）	石切場
24	飯塚館	中世	城館跡	80	飯塚南古墳群	古墳（終末期）	群集墳
25	堂ノ下	奈良・平安	集落跡	81	森台館	中世	城館跡
26	南原	古墳・奈良・平安	集落跡	82	戸塚山幼稚園 b	縄文・奈良～中世	集落跡
27	館屋敷	中世	城館跡	83	上折田 b	奈良・平安・中世	集落跡
28	矢野目古屋敷	中世	城館跡	84	飯塚館	中世	城館跡
29	入生屋敷	中世	城館跡	85	森台西古墳群	古墳（終末期）	群集墳
30	半在家館	中世	城館跡	86	森台東古墳群	古墳（終末期）	群集墳
31	東江股堰の内館	中世	城館跡	87	森台	縄文・奈良	集落跡
32	大増屋館	中世	城館跡	88	薬師山古墳群	古墳（終末期）	群集墳
33	早稲田堰台館	中世	城館跡	89	上折田 c	奈良・平安・中世	集落跡
34	井戸尻館	中世	城館跡	90	森台土壇	中世	土壇
35	桐井屋敷	中世	城館跡	91	上折田 a	縄文・古墳（後期）	集落跡・祭祀跡
36	矢野目前田館	中世	城館跡	92	中屋敷	中世	城館跡
37	蜜源尾古墳	古墳（前期）	古墳	93	外ノ内館	中世	城館跡
38	中里屋敷	中世	城館跡	94	塩野中屋敷	中世	城館跡
39	中里	中世	集落跡	95	大西	古墳・平安・中世	古墳・集落跡
40	窪田古墳	古墳（後期）	古墳	96	杉之崎下館	中世	城館跡
41	外ノ内塚群	中世	土壇	97	流北館	中世	城館跡
42	外ノ内	縄文（中期・後期）	集落跡	98	天神前中館	中世	城館跡
43	窪田下前田館	中世	城館跡	99	大浦 d	中世	集落跡・城館跡
44	八幡塚古墳	古墳（中期）	古墳	100	大浦館	中世	城館跡
45	窪田荒館	中世	城館跡	101	大浦舘ノ内館	中世	城館跡
46	川原屋敷	中世	城館跡	102	大浦 c	奈良・平安・中世	官衙・集落跡
47	小谷屋敷	中世	城館跡	103	大浦 b	奈良・中世	官衙・集落跡・城館跡
48	御行屋敷	中世	城館跡	104	大浦 a	縄文（中期）・奈良・平安	官衙・集落跡
49	窪田館	中世	城館跡	105	西町田下	奈良・平安	集落跡
50	窪田屋敷裏館	中世	城館跡	106	上町	縄文（晩期）	集落跡
51	立屋敷	中世	城館跡	107	荒川 2	縄文・奈良・平安・中世	城館跡・集落跡
52	鷺巻館	中世	城館跡	108	八木橋 a	縄文・中世	集落跡
53	田中屋敷	中世	城館跡	109	西の屋敷	奈良・平安・中世	集落跡
54	窪田新館	中世	城館跡	110	泉太神社古墳群	古墳（終末期）	群集墳
55	唐屋敷	中世	城館跡	111	照野橋	奈良・平安・中世	集落跡
56	窪田元屋敷	中世	城館跡	112	堰場	奈良・平安・中世	集落跡

原遺跡は木簡・墨書土器や円面硯の出土から古代置賜七郷の一つ「広瀬郷」との見解もある。11 世紀摂関政治の最盛期には、米沢は成島荘として摂関家の荘園となっている。

中世に入ると、鎌倉期の武将大江広元の次男時広が「長井庄」の地頭として、暦仁元（1238）年、米沢に居城を構えたと伝えられる。大江氏は長井氏を称し、八代約 200 年に及ぶ支配を続けたが、天授 6（1380）年に伊達宗遠の侵攻によって長井氏は置賜を追われ、置賜は伊達領となった。以後置賜支配の中心は高畠であったが、15 代伊達晴宗が当主となり米沢に入部後、その中心が移った。支配は輝宗・政宗と続いたが、天正 19（1591）年に豊臣秀吉により政宗が岩出山へ移封となり、210 年間にわたる伊達氏の治世は終わりを告げる。1590 年の奥州仕置において米沢は蒲生氏の支配下に置かれ、農村は文禄 3（1594）年検地によって年貢の村請制のもとに共同体として編成され、武家の支配する近世領知制社会の基礎とされた。このとき、村名と村域が画定し、現在は大字名として存続している。1598 年、上杉氏が 120 万石の大大名として会津に移封され、米沢は家老直江兼続の治めるところとなる。1601 年関ヶ原の敗戦で上杉氏は本拠を会津から米沢に移し、ここに米沢藩 30 万石が成立した。米沢藩政の基礎確立は重臣直江兼続に負うところが大きい。この時期、積極的な新田開発が行われ、寛永 15・16（1638・39）年の総検地では実高約 51 万石を記録したとある。ところが、寛文 4（1664）年、表高 15 万石に減封。それでも家臣の召し放ちは知行取で約 1 割、全体でも約 2 割に止まり、領知高の割に多数の家臣団を擁し続け、藩財政や家臣の生活の窮乏化に拍車がかかった。明和 4（1767）年、恒常的な財政難に苦しむ米沢藩に、日向高鍋藩藩主秋月種美の二男が 9 代藩主として迎え入れられた。上杉鷹山である。鷹山による改革により、殖産興業・農村復興・借用金の完済がなされた。そして、戊辰戦争では仙台藩とともに奥羽越列藩同盟の盟主として新政府と対立し、のち降伏。明治 4（1871）年の廃藩置県にともない置賜県となり、明治 9 年には山形県に合併、明治 22 年（1889）年市制が施行され現在にいたっている。

鎌倉上遺跡の主体である古墳時代の遺跡は、市内で約 40 遺跡を数える。特に本遺跡が所在する窪田地区では、最上川と鬼面川によって形成された自然堤防上に墳墓などが多く存在する。

同地区内の資領塚古墳は、墳長約 70 m規模と推定される東北地方でも最大級の前方後方墳であり、川西町天神森古墳、南陽市稲荷森古墳と共に 4 世紀後半に属する県内最古の大型古墳でもある。八幡塚古墳や窪田古墳は、古墳時代中期に属する円墳である。墳丘を巡る周溝からは、同時期の遺物が多く出土している。北小屋屋敷遺跡と大西遺跡では、円形・方形状の周溝跡が数基まとまって認められている。これらは古墳時代前期に見られる方形周溝墓が、在地化して古墳時代中期にまで後続した「周溝墓」との見解もある。

一方で、これらの古墳の基盤となるべき集落跡に関しては調査例が少なく、集落全体を把握できるものは限られる。特に古墳時代前期の集落跡は極めて少なく、万世町にある大清水遺跡・二夕俣 A 遺跡の 2 か所を数えるのみである。大清水遺跡の竪穴住居跡は、住居周辺に数珠状に連続して土坑状遺構が認められ、住居に伴う外周施設として機能していたと考えられている。米沢市と高畠町の境界に所在する南原遺跡は、古墳時代中期を主体とする集落跡である。弧状を呈する河川跡の両側には、竪穴住居跡が 33 棟確認されており、同時期の集落形成の様相を把握し得るものである。また住居内出土の一括出土遺物は、同時期の土器組成を検討するにあたって指標となる資料である。近接する中里遺跡についても、古墳時代中期から後期の竪穴住居跡が 10 棟以上確認されており、出土遺物の検討から福島県会津地方との類似性が指摘されている。

参考文献

郷土出版社　2001　『図説　置賜の歴史』
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1994　『南原遺跡・堂ノ下遺跡・飯塚館跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 2 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2000　『中里遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集
米沢市　1991　『米沢市史　原始・古代・中世編・近世編Ⅰ』
米沢市教育委員会　1998　『米沢遺跡地図』米沢市埋蔵文化財調査報告書第 60 集
山形県　1985　『土地分類基本調査　米沢・関　国土調査』

Ⅲ　遺構と遺物

1　古墳時代の遺構

第４～９図に調査区の遺構配置図を示す。

主体を占める古墳時代の遺構は、古墳時代前期と中期に属する遺構に分けられる。古墳時代前期に所属する遺構は、調査区１区と２区南半域、古墳時代中期の遺構は２区北半域に分布する。以下遺構毎に詳細を述べる。

A　竪穴住居跡

検出された竪穴住居跡は15棟を数える。古墳時代前期の住居跡が６棟、カマドを有する古墳時代中期の住居跡が７棟、不明２棟である。

ＳＴ 20 竪穴住居跡（第11図、写真２）

１区北東隅の19－Ｋグリッドに位置し、住居跡の東半域が調査区外となる。周辺に存在する畝状遺構を切って構築される住居跡である。検出された住居跡は、上面部が削平を受けており、床面が僅かに確認されるのみである。西壁を基にした主軸方向はＮ-10°-Ｗを示す。（平面形）住居隅が僅かに丸みを持つ隅丸方形と推測される。規模は、南北3.85ｍ、東西は検出長2.80ｍを測る。（堆積土）覆土は、黒褐色と灰色を基調とするシルト質土で15㎝程の層厚である。４層は床面全体にみられる貼床である。（壁面）壁高は10～15㎝を測り、壁面が外傾して立ち上がる。（床面）ほぼ平坦で、貼床が確認される。（柱穴）未検出。（炉跡）住居中央部に広がる炭化物層の直下に、床面が被熱した地床炉の痕跡が認められる。（出土遺物）住居床面から、土師器の高坏、直口壺、甕が出土する（１～４）。（時期）出土遺物や住居形態から古墳時代前期後半（４世紀後半）の住居跡と考えられる。

ＳＴ 21 竪穴住居跡（第12図、写真３）

１区北側の東寄り19－Ｊグリッドに位置し、周辺に存在する畝状遺構を切って構築される住居である。西壁を基にした主軸方向はＮ-10°-Ｗを示す。（平面形）四隅が僅かに丸みを持つ隅丸方形を呈する。規模は、南北3.50ｍ、東西3.20ｍ、床面積が約11.2㎡を測る。（堆積土）覆土は黒褐色質土を基調とし、地山を塊状に含む４層が住居の貼床にあたる。（壁面）壁高は10～15㎝を測り、壁面が外傾して立ち上がる。（床面）貼床が５㎝程の層厚で、床面全体に見られる。（柱穴）未検出。（炉跡）住居内中央の西寄りに広がる炭化物層の直下に、床面が被熱した地床炉の痕跡が認められる。（出土遺物）住居北西隅に集中してみられる。土師器の器台、二重口縁壺、甕、小型甕が出土する（５～11）。（時期）出土遺物や住居形態から古墳時代前期後半（４世紀後半）の住居跡と考えられる。

ＳＴ 22 竪穴住居跡（第13～15図、写真４～６）

１区北側の中央18・19－Ｈグリッドに位置し、主軸方向はＮ-21°-Ｗを示す。（平面形）四隅が僅かに丸みを持つ隅丸方形を呈する。規模は、南北4.95ｍ、東西4.80ｍ、床面積が約23.8㎡を測る。（堆積土）覆土は、オリーブ黒色と黒褐色を基調する２層に区別され、30㎝程度の層厚を測る。炭化物層の４層では、多量の遺物と共に炭化した木材片が確認される。これらは住居構築材の一部と考えられ、本住居跡が焼失住居であることが把握される。６層は、地山質土を塊状に含む貼床にあたる。（壁面）壁高は25～35㎝を測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。（壁溝）北東隅の一部を除き、壁溝が認められる。（床面）貼床が10㎝程の層厚で、床面全体に見られる。（柱穴）住居跡の四隅を結ぶ対角線上には、柱穴ＥＰ44～47の４基が位置する。柱穴間の柱心距離は、北西側ＥＰ44から右回りで2.40ｍ、2.00ｍ、2.44ｍ、2.20ｍとなり、柱穴の抜き取り痕から径15～20㎝程の柱材が推測される。ＥＰ47底面では、長石が１点確認される。（炉跡）住居中央に広がる炭化物層の直下には、床面が被熱した地床炉の痕跡が認められる。周囲には煮炊きに使用した土師器甕や、台坏甕の脚台、被熱した面がある礫石がみられる。（外周溝）溝状遺構ＳＤ34～36は、本住居壁面から外側へ約1.00～1.40ｍの間隔に位置し、溝幅50～95㎝、検出面からの深さは10～20㎝程度を測る。削平により、北側の溝部分は確認されないが、住居を円状に囲む形を呈し、南側が開口すると推測される。これらの溝状

遺構は、本住居に付随する一連の外周溝として把握される可能性がある。(出土遺物) 住居床面から、土師器の小型丸底鉢、直口壺、甕が出土する（12～18)。また、住居の構築材と思われる炭化材も確認された。(時期) 住居形態や出土遺物から古墳時代前期後半（４世紀後半）の住居跡と考えられる。

ＳＴ 100 竪穴住居跡（第 16 図、写真７）

２区北東隅の 41 －Ｌグリッドに位置し、住居跡の北東域が調査区域外となる。検出された住居跡の南西域は、耕作等の削平や撹乱で遺存状況が悪い。西壁を基にした主軸方向はＮ-23°-Ｗを示す。(平面形) 規模は不明であるが、方形を呈すると推測される。検出長で南北 3.80 m、東西 2.50 m を測る。(堆積土) 覆土は、黒色砂質シルトで、約７～15 ㎝の層厚を測る。(壁面) 壁高は 15 ㎝程を測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。(壁溝) 床面からの深さは５㎝程度で、住居跡西・南壁に部分的にみられる。(床面) ほぼ平坦で、住居内の縁辺部を中心に、黒褐色砂質シルトの貼床が確認される。(住居内遺構) 柱穴やカマド等は未検出である。(出土遺物) 土師器の小片が少量出土したのみで、全体の器形が明らかな遺物は認められない。(時期) 住居跡の遺存状態や出土遺物が少量であるため、時期については不明である。

ＳＴ 101 竪穴住居跡（第 16 図、写真７）

２区北側の 39 －Ｌグリッドに位置し、住居跡の東域が調査区域外となる。検出された住居跡の西域では、住居の西壁と床面が確認される。西壁を基にした主軸方向はＮ-20°-Ｗを示す。(平面形) 平面形、規模は不明であるが、住居全体の形状から隅丸方形を呈すると推測される。南北 4.00 m、東西は検出長 1.80 m を測る。(堆積土) 暗灰黄色のシルト質土で、20 ㎝程度の層厚を測る。(壁面) 壁高は 15 ㎝程度を測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) ほぼ平坦であり、硬化した面や貼床は認められない。(住居内遺構) 柱穴やカマド、壁溝は未検出である。住居内西側には、南北に長い楕円形を呈するＥＫ 136 が確認される。規模は、長径 1.30 m、短径 35 ㎝、床面からの深さは 25 ㎝前後を測る。性格については、不明である。(出土遺物) 住居床面から、土師器の鉢、甕が出土する（25～27)。(時期) 出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半～６世紀初）の住居跡と考えられる。

ＳＴ 102 竪穴住居跡（第 17～19 図、写真８～10）

２区北側の東寄り 38 －Ｌグリッドに位置する。住居跡の南西隅がＳＫ 128 土坑に切られる重複関係にある。主軸方向はＥ-８°-Ｓを示す。(平面形) 四隅が僅かに丸みを持つ隅丸方形を呈する。規模は、南北 3.65 m、東西 3.70 m、床面積が約 13.5 ㎡である。(堆積土) 覆土は、黒褐色を基調する粘質土で、35 ㎝程度の層厚を測る。４・６層の床面直上層では、遺物と共に炭化した木材片が確認される。(壁面) 壁高は約 20～30 ㎝を測り、壁面が外傾して立ち上がる。(壁溝) 未検出。(床面) 貼床は認められず、地山面が床面と考えられる。床面直上には、部分的にワラ状の炭化物が確認される。(柱穴) 住居内中央には、主柱穴２基が確認される（ＥＰ 203・204)。東西軸に並び、柱心距離は 1.60 m、床面下 50～75 ㎝を掘り込んで据えている。柱材は、径 20 ㎝の外皮が残る丸太材である。詳細はⅣ章理化学分析の年代測定・樹種同定の項を参照されたい。また、住居跡の外周には、支柱と考えられる柱穴が複数認められる（第 19 図)。(カマド) 東壁の南寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は長さ 1.00 m、幅 20 ㎝を測り、緩やかな傾斜で立ち上がる。煙道部の付け根はトンネル状を呈する。燃焼部の最大幅は 40 ㎝程で、カマドの支脚である礫石が確認される。袖部は、地山面を利用した造りで良好に残存し、焚口には径 40 ㎝程の炭化物の広がりが見られる。(貯蔵穴) 南壁中央でＥＫ 139 が確認される。径 1.00 m の楕円形を呈し、床面からの深さは 30 ㎝程である。底面出土のＲＷ 280 板状木製品は、貯蔵穴の上蓋と考えられる。(出土遺物) 住居床面から、土師器の坏、鉢、甕が出土する（28～39)。(時期) 出土遺物や住居形態から古墳時代中期（５世紀末～６世紀初）の住居跡と考えられる。

ＳＴ 103 竪穴住居跡（第 20・21 図、写真 11～13）

２区北側の東寄り 36・37 －Ｋグリッドに位置する。住居跡西側に位置するＳＤ 126 溝跡に切られる重複関係がある。主軸方向はＮ-５°-Ｗを示す。(平面形) 若干東西に長い隅丸方形を呈する。規模は、各中央で南北 5.10 m、東西 5.45 m、床面積が約 27.8 ㎡である。(堆積土) １～３層は自然堆積層である。４・６層を中心に遺物が出土する。(壁面) 壁高は 20 ㎝程度を測り、壁面が垂直に近い角度で壁が立ち上がる。(床面) 貼床は認められず、

地山面を床面としたと考えられる。(柱穴) 住居跡の四隅を結ぶ対角線上に、柱穴ＥＰ 205 ～ 208 の４基が位置する。各柱穴間の柱心距離は、北西側ＥＰ 205 から右回りで 2.60 m、2.65 m、2.50 m、2.55 mを測る。各柱穴の下部には、径 20 ㎝程の外皮が残る丸太材が認められる。掘り方は確認されなかった。詳細はⅣ章の理化学分析の年代測定・樹種同定の項を参照されたい。(壁溝) 未検出。(カマド) 北壁中央に構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は長さ 95 ㎝、幅 30 ㎝を測る。燃焼部の最大幅は 40 ㎝程で、煮炊きに使用した土師器甕や甑と共に、カマドの支脚石が確認された。袖部は、地山面を利用した造りであるが、遺存状態はあまり良好ではない。(貯蔵穴) カマドの西脇には、貯蔵穴ＥＫ 156 が確認される。長径 85 ㎝、短径 65 ㎝程の楕円形を呈し、床面からの深さは 40 ㎝である。上面や覆土中には、幅５㎝の板材が貯蔵穴の長軸方向に並んで出土する。これらは貯蔵穴の上蓋であったと考えられる。(出土遺物) 住居床面から、土師器の坏、甑、鉢、壺、甕が出土する (40 ～ 69)。また、住居南側や北西隅に構築材と思われる炭化材も多く認められた。(時期) 出土遺物から古墳時代中期 (５世紀後半～６世紀初) の住居跡と考えられる。

ＳＴ 104 竪穴住居跡 (第 22・23 図、写真 14 ～ 16)

２区北側の中央 38・39 － Ｉグリッドに位置する。主軸方向はＥ -32° - Ｓを示す。(平面形) 若干南北に長い隅丸方形となる。規模は、各中央で南北 5.30 m、東西 5.15 m、床面積は約 27.3 ㎡である。(堆積土) 住居壁際に 20 ㎝程度の層厚が残存するのみで、堆積状況は不明である。(壁面) 壁高は 15 ～ 20 ㎝を測り、壁面が外傾して立ち上がる。(床面) 中央部を除く四方の壁際には、地山質土を塊状に含む貼床がみられる。住居内の南側で検出した溝ＥＤ 155 は、間仕切り溝と推測される。(柱穴) 住居跡の四隅を結ぶ対角線上に、柱穴ＥＰ 168 ～ 171 の４基が位置する。柱穴の柱心距離は、南東側ＥＰ 171 から右回りで 2.30 m、2.50 m、2.50 m、2.35 mを測る。各柱穴に柱材が認められるが、腐食が激しく判然としない。(壁溝) 未検出。(カマド) 東壁の北寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は長さ 1.60 m、幅 30 ㎝を測り、緩やかな傾斜で立ち上がる。燃焼部の最大幅は 40 ㎝程で、煮炊きに使用した土師器甕やカマドの支脚である長石が確認される。袖部は灰白色の粘質土で造り出され、礫石と一部土師器の甕片を用いて袖端部を構成している。(貯蔵穴) 南壁中央には、貯蔵穴ＥＫ 154 が確認される。長径 95 ㎝、短径 70 ㎝の楕円形を呈し、床面からの深さは 50 ㎝程である。(集石) 南西隅の床面には、10 ㎝大の長楕円形の礫が計 18 個確認される。１区包含層でも同様の集石が確認されており、形状や出土状況から「編物用石錘」と推測される。また、住居西側の床面では、径約 10 ㎝の扁平石がまとまって確認される (ＲＱ 319 ～ 321)。台石に用いられたと思われる。(出土遺物) カマドを中心に遺物が多くみられる。須恵器の甕、土師器の坏、鉢、甑、甕、編物石が出土する (70 ～ 94・267 ～ 284)。(時期) 出土遺物から古墳時代中期 (５世紀後半～６世紀初) の住居跡と考えられる。

ＳＴ 105 竪穴住居跡 (第 24・25 図、写真 17 ～ 19)

２区北側の東寄り 36・37 － Ｉグリッドに位置する。西辺で測った主軸方向はＮ -12° - Ｅを示す。(平面形) 若干東西に長い隅丸方形を呈する。規模は、南北 5.20 m、東西 5.40 m、床面積は約 28.6 ㎡である。住居の床面や覆土中に炭化材や炭化物層が広範囲に分布する。焼失住居と考えられる。(堆積土) 上部は削平されて、下層の黒褐色砂質シルトを中心とする覆土のみが残存する。(壁面) 壁高は 20 ㎝程度を測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。(床面) 貼床は認められず、地山面を床面としたと考えられる。(柱穴) 住居跡の四隅を結ぶ対角線上に、柱穴ＥＰ 183 ～ 186 の４基が位置する。各柱穴間の柱心距離は、北西側ＥＰ 183 から右回りで 2.70 m、2.70 m、2.65 m、2.45 mを測る。柱穴ＥＰ 185 には、径 10 ㎝程の外皮が残る丸太材が認められる。詳細はⅣ章の理化学分析の年代測定・樹種同定の項を参照されたい。(壁溝) 未検出。(カマド) 北壁の中央に構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は長さ 1.20 m、幅 25 ～ 30 ㎝を測り、緩やかな傾斜で立ち上がる。燃焼部の最大幅は 30 ㎝程で、煮炊きに使用した土師器甕や甑と共に、カマドの支脚石が確認された。袖部は、にぶい黄橙色シルトを貼って構築される。(貯蔵穴) 南壁の中央には、貯蔵穴が２基が確認される。ＥＫ 157 は長径 1.25 m、短径 1.00 m前後の楕円形を呈し、床面からの深さは 30 ㎝である。ＥＫ 166 は、径 65 ㎝の円形を呈し、床面からの深さは 15 ㎝である。

（出土遺物）住居南東隅の床面には、住居廃絶時に廃棄された、須恵器の坏身、土師器の坏、鉢、壺、甕、甑が出土する（95～121）。ＥＫ157覆土からは、滑石製の紡錘車（紡輪）が出土する（308）。（時期）出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半～６世紀初）の住居跡と考えられる。

ＳＴ106竪穴住居跡（第26・27図、写真20・21）

２区北側の東寄り34・35－Ｉグリッドに位置する。西辺で測った主軸方向はＥ-８°-Ｓを示す。（平面形）若干東西に長い隅丸方形を呈する。規模は、各中央で南北3.45ｍ、東西3.95ｍ、床面積は約13.6㎡である。（堆積土）１～４層は後世の自然堆積層、５・６層は住居廃絶直後に堆積した層と考えられる。７層は黒色シルトの炭化物を多く含む層で、遺物がまとまって出土する。（壁面）壁高は50㎝程度を測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。（床面）貼床は認められず、地山面を床面としたと考えられる。（柱穴）湧水が多く、検出できなかった。（壁溝）未検出。（カマド）東壁の北寄りに構築され、煙道部、袖部、燃焼部が検出された。煙道部は地面をトンネル状に掘り込み、長さ75㎝、幅20㎝を測り、煙道の奥壁で急に立ち上がる。燃焼部の最大幅は70㎝程で、カマドの支脚である長石が確認された。燃焼部内には、完形の土師器坏が出土した（125）。袖部は地山を削り出して形成している。（貯蔵穴）カマドの南脇では、ＥＫ193が検出される。長径1.20ｍ、短径75㎝程の楕円形を呈し、床面からの深さは10㎝程である。覆土中から土師器の坏や鉢類が一括出土している。（出土遺物）カマド、貯蔵穴を中心に集中して認められる。土師器の坏、鉢、壺、甑、甕が出土する（123～146）。（時期）住居跡の形態や出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半～６世紀初）の住居跡と考えられる。

ＳＴ107竪穴住居跡（第28・29図、写真22・23）

２区南側の中央24－Ｊグリッドに位置する。住居跡の北壁は、ＳＧ130河川跡により若干切られている。主軸方向はＮ-７°-Ｅを示す。（平面形）若干南北に長い隅丸方を呈する。規模は、各中央で南北5.55ｍ、東西5.05ｍ、床面積は約28㎡を測る。（堆積土）覆土は20㎝程度の層厚で、堆積状況は不明である。（壁面）壁高は10～20㎝を測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。（壁溝）未検出。（床面）貼床は、住居内の外周に、５㎝程度の層厚で認められる。住居内南側の溝状を呈するＥＤ182は、間仕切り溝と考えられる。（柱穴）主柱穴であるＥＰ178～181の４基が確認される。住居跡の四隅を結ぶ対角線上に位置し、柱穴間の柱心距離は、北西側の柱穴ＥＰ178から右回りで2.60ｍ、2.80ｍ、2.70ｍ、2.75ｍを測る。柱穴の抜き取り痕から径約20㎝の柱材が推測される。（炉跡）住居中央の北寄りに広がる炭化物層の直下には、床面が被熱した地床炉の痕跡が認められる。（貯蔵穴）住居東側には、長径80㎝を測る楕円形を呈するＥＫ192が確認される。（出土遺物）土師器の甕、壺が出土する（147・148）。（時期）出土遺物や住居形態から古墳時代前期後半（４世紀代後半）の住居跡と考えられる。

ＳＴ108竪穴住居跡（第30図、写真24）

２区南側の東端23－Ｍグリッドに位置し、住居跡の東壁が調査区域外となる。検出された住居跡の西壁は、西壁と北西・南西隅の床面のみである。西辺で測った主軸方向はＮ-６°-Ｗを示す。（平面形）平面形・規模は不明瞭であるが、住居全体の形状から隅丸方形を呈すると推測される。西壁で南北5.85ｍ、東西検出長3.15ｍを測る。（堆積土）覆土は、黒褐色を基調とするシルト質土で、25㎝程度の層厚を測る。３層は地山質土を塊状に含む貼床にあたる。（壁面）壁高は20㎝を測り、壁面が垂直に近い角度で立ち上がる。（壁溝）南壁と南西隅の一部で、幅15㎝程の壁溝ＥＤ174が認められる。（床面）貼床は10㎝程の層厚で、検出された床面全体に見られる。（柱穴）住居跡の北西・南西側にあたる主柱穴ＥＰ175・176が確認される。柱穴間の柱心距離は2.85ｍを測り、床面から45㎝程度を掘り込んでいる。東壁にも同様に柱穴が位置し、住居の主柱穴は４基であったと推測される。（炉跡）未検出。（出土遺物）住居底面から、土師器の小型丸底鉢が出土する（149）。（時期）出土遺物から古墳時代前期後半（４世紀後半）の住居跡と考えられる。

ＳＴ118竪穴住居跡（第31図、写真25）

２区中央の西寄り35－Ｉグリッドに位置する。住居跡の中央を通るＳＤ122溝跡に切られる重複関係がある。北辺で測った主軸方向はＥ-７°-Ｓを示す。（平面形）若干東西に長い方形を呈し、四隅が僅かに丸みを持つ隅丸方形となる。規模は、各中央で南北3.20ｍ、東西3.70ｍ、床面積は約11.8㎡である。（堆積土）上層は

黒色シルトを基調とした自然堆積層、下層は黄灰色砂質層となる。(壁面) 壁高は5～25㎝程度を測り、壁面が僅かに外傾して立ち上がる。(床面) 概ね床面全体に黄灰砂質シルトが入る貼床が認められる。(柱穴) 住居跡の南東隅に柱穴ＥＰ190が確認されるが、住居の柱穴にはならない。(壁溝) 未検出。(炉跡) 住居中央には、被熱で床面が焼土化した地床炉の痕跡が認められる。(住居内遺構) 住居内北側には、ＥＫ189が確認される。長軸1.90ｍ、短軸55㎝程の長楕円形を呈し、床面からの深さは15㎝程度である。覆土中には、多量の炭化材が確認される。(出土遺物) 住居床面から、土師器の坏、鉢、甕が出土する (150～152)。(時期) 住居の形態や出土遺物から古墳時代中期 (5世紀後半～6世紀初) の住居跡と考えられる。

ＳＴ120竪穴住居跡 (第32図、写真26)

2区北側の東壁36－Ｌグリッドに位置し、住居跡の東域が調査区域外となる。検出された住居跡西域には、壁溝と考えられるコの字状の溝と、柱穴が4基が認められる。主軸方向はＮ－8°－Ｗを示す。(平面形) 平面形、規模共に判然としないが、壁溝の配置から方形状を呈すると推測される。規模については、壁溝の配置から南北4.30ｍ、東西2.20ｍ以上を測ると考えられる。(堆積土) 壁溝の覆土のみ認められ、床面からの深さは10㎝程度である。(壁面) 未検出。(床面) 削平により未検出。(柱穴) 住居西側には、南北軸に並ぶ柱穴が4基が確認される (ＥＰ144～147)。(出土遺物) 壁溝の覆土から土師器小片が少量出土する。(時期) 住居跡の遺存状態や出土遺物が少量であるため、時期については不明である。

ＳＴ125竪穴住居跡 (第33図、写真26)

2区南東隅の22－Ｋグリッドに位置し、住居跡の南域が調査区域外となる。周辺の畝状遺構を切って住居が構築され、西壁を基にした主軸方向はＮ－7°－Ｗを示す。(平面形) 全体の形状や住居隅部が僅かに丸みを持つ形から、隅丸方形を呈すると推測される。規模は、東西3.50ｍ、南北検出長2.40ｍを測る。(堆積土) 覆土は、黒褐色を基調とするシルト質土で、10㎝程度の層厚を測る。4層は、地山質土を塊状に含む貼床にあたる。(壁面) 壁高は10㎝程度で、壁面がやや外傾して立ち上がる。(床面) ほぼ平坦で、貼床が床面全体に見られる。(住居内遺構) 柱穴や壁溝は未検出である。(炉跡) 住居中央には、床面が被熱した地床炉の痕跡が認められる。(出土遺物) 住居床面から、土師器の高坏、甕が出土する (153・154)。(時期) 住居の形態や出土遺物から古墳時代前期後半 (4世紀後半) の住居跡と考えられる。

Ｂ　掘立柱建物跡

ＳＢ2掘立柱建物跡 (第34図、写真28)

1区北側の16－Ｊグリッドに位置する。(構造) 東西2間、南北2間の側柱建物で、西辺で測った主軸方向はＮ-25°-Ｗを示す。南東には出入口と推定されるＳＤ11を有する。(規模) 東西4.80ｍ、南北4.60ｍをを測り、面積は約21.8㎡となる。柱心距離は、北西辺のＥＢ3－ＥＢ4間から右回りに2.35ｍ－2.50ｍ、2.35ｍ－1.50ｍ－0.80ｍ、2.35ｍ－2.40ｍ、2.10ｍ－2.35ｍとなる。(柱穴) 一辺40～45㎝の隅丸方形を呈し、遺構検出面からの深さは30～45㎝を測る。ＥＢ4・6・10には径20㎝前後の柱痕が認められる。(出土遺物) 柱穴ＥＢ8から土師器片1点が出土する。建物跡の北側には、古墳時代の土師器甕や二重口縁壺が出土するＳＤ14溝跡が近接しており、本建物跡に付随する外周溝施設の可能性も考えられる。(時期) 出土遺物が僅少のため不明確だが、周辺の建物跡と同じ古墳時代前期後半 (4世紀後半) と推測される。

ＳＢ54掘立柱建物跡 (第35図、写真29)

1区北西の東壁Ｋ－17・18グリッドに位置する。検出されたのは、建物の西辺にあたる柱穴列であり、大半が調査区外の東側に位置すると推測される。主軸方向は、Ｎ-20°-Ｗをを示す。(構造) 南北4.40ｍ、各柱間の距離は2.20ｍである。(柱穴) 径40～50㎝程の柱穴で、遺構検出面からの深さは50㎝程を測る。建物跡の西隣には、赤彩された土師器壺などが出土したＳＤ40溝跡が位置し、本建物跡に付随する外周溝施設の可能性も考えられる。

ＳＢ79掘立柱建物跡 (第36図、写真30)

1区中央の西壁17・18－Ｇグリッドに位置する。検出されたのは、建物の東辺にあたる柱穴列で、建物の大半は調査区外の西側に位置すると推測される。主軸方向は、Ｎ－5°－Ｗを示す。(構造) 南北3.60ｍを測り、南東隅の柱穴ＥＢ77からＥＢ78まで1.85ｍ－1.75ｍとなる。(柱穴) 径30～40㎝程の円形を基調とし、検

出面からの深さは20㎝程度である。本建物跡と近接してＥＤ64溝跡が確認される。溝跡は「コ」の字状を呈し、ＳＢ79建物跡を囲むように配置している。本建物跡に付随する外周溝施設の可能性も考えられるが、建物を構成する柱穴が溝跡を切る重複関係を持つため、同時期に並存した可能性は低い。（出土遺物）柱穴上面と溝跡から土師器の壺が出土する（160・161）。（時期）出土遺物から古墳時代前期後半（４世紀後半）と推測される。

Ｃ　土坑・柱穴

ＳＫ111土坑（第37図、写真31）

２区南側の東寄り22･23－Ｊグリッドに位置する。（平面形）南北に長い楕円状を呈し、長辺1.95ｍ、短辺1.00ｍ、検出面からの深さは20㎝程である。（覆土）黒褐色土を基調とするシルト質土で、炭化物や焼土粒を多く混入する。（断面形）北側の一部に段を有するが、壁面が緩やかに立ち上がる箱形状を呈する。底面は凹凸が激しく、中央に径40㎝程の焼土塊の広がりが認められる。（出土遺物）土師器の細片が多量出土する。ＳＴ107竪穴住居跡から出土した遺物との接合資料が認められることから、住居跡に伴う廃棄土坑の性格も考えられる。

ＳＫ131土坑（第37図）

２区北側の西寄り38－Ｋグリッドに位置する。（平面形）不整形を呈し、西端を撹乱で切られる。長辺1.80ｍ、短辺1.15ｍ、検出面からの深さは20㎝程である。（覆土）有機物を含むシルト質土が20㎝程の層厚で堆積する。（断面形）壁面が緩やかに立ち上がる逆台形状を呈する。（出土遺物）覆土から土師器細片が出土する。（時期）出土遺物が僅少のため、不明である。

ＳＫ133土坑（第37図、写真31）

２区北側の38－Ｋグリッドに位置する。（平面形）不整楕円形を呈し、長辺3.65ｍ、短辺2.00ｍ、検出面からの深さは70㎝程である。（覆土）黒褐色と灰黄褐色を基調とする粘質土が堆積し、覆土から炭化した栗の種子が１点出土する（329）。（断面形）壁面が急に立ち上る逆台形状を呈する。底面には段が有り、南側が一段低くなる。（出土遺物）底面から土師器の坏と木製品が出土する（162・247～256）。木製品は、板状・棒状のものが多く出土する。なかでも256は、剜物の木製容器で、容器の下部に足が付くものである。樹種などの詳細は、Ⅳ章の記述を参照されたい。（時期）出土遺物から時期は、古墳時代中期（５世紀後半～６世紀初）と考えられる。近接する竪穴住居群に付随する貯蔵穴の性格が考えられる。

ＳＫ135土坑（第19図、写真32）

２区北側の東寄り38－Ｌグリッドに位置する。（平面形）径70㎝の円形を呈し、検出面からの深さは15㎝程である。（覆土）地山質土が混入する粘質土が大半を占め、５㎝程度の層厚で堆積する。（断面形）壁面が急に立ち上がる方形状を呈する。（時期）遺物の出土は無く、時期については不明である。

ＳＫ148～153土坑（第19図、写真32）

２区北側の38－Ｌグリッド付近に位置し、ＳＴ102住居跡に近接して確認される。（平面形）いずれも長辺40㎝～70㎝前後、短辺30㎝程の長楕円形を呈する。検出面からの深さは20～40㎝程度である。（断面形）壁面が急に立ち上がるＵ字状を呈する。（覆土）地山質土が塊状に混入する黒褐色の粘質土が大半を占める。（時期）遺物の出土は無く、時期については不明である。

ＳＫ158土坑（第32図、写真33）

２区北側の35－Ｌグリッドに位置する。遺構の東半域が調査区外となるため、平面形や規模は不明である。（堆積土）覆土は、黒色のシルト質土が大半を占める。（断面形）壁面が急に立ち上がる方形状を呈する。（時期）遺物の出土は無く、時期については不明である。（出土遺物）覆土から器形が明らかな土師器の鉢が１点出土する（163）。（時期）出土遺物から、古墳時代中期（５世紀後半～６世紀初）と考えられる。

ＳＫ159土坑（第32図、写真33）

２区北側の35－Ｌグリッドに位置する。（平面形）不整形を呈し、規模については、長辺1.40ｍ、短辺1.20ｍ、検出面からの深さは20㎝程度を測る。（堆積土）覆土は、黒色のシルト質土が大半を占める。（断面形）壁面が急に立ち上がる方形状を呈する。（出土遺物）遺構上面から土師器の細片が少量出土するのみである。（時期）出土遺物が僅少のため、不明である。

ＳＫ164土坑（第32図、写真33）

２区北側の38－Ｊグリッドに位置する。（平面形）長辺1.25ｍ、短辺40㎝の長方形を呈する。検出面からの深さは10㎝程度である。（堆積土）覆土は、黒色の粘質

土が大半を占める。（断面形）壁面が緩やかに立ち上がる逆台形状を呈する。（時期）遺物の出土は無く、時期については不明である。

ＳＫ 177 土坑（第 37 図、写真 33）

２区南側の 23 － Ｊグリッドに位置する。（平面形）長径 50 ㎝、短径 45 ㎝の長楕円形を呈する。検出面からの深さは 10 ㎝程度である。（堆積土）覆土は、黄色粘質土が大半を占める。（断面形）壁面が急に立ち上がるＵ字状を呈する。（時期）遺物の出土は無く、時期については不明である。

ＳＰ 134 柱穴（第 25 図、写真 33）

２区北側の 37 － Ｉグリッドに位置する。（平面形）長径 60 ㎝、短径 40 ㎝の長楕円形を呈する。検出面からの深さは 40 ㎝程度である。（堆積土）覆土は、黒色のシルト質土が大半を占める。（断面形）壁面が急に立ち上がるＵ字状を呈する。（時期）遺物の出土は無く、時期については不明である。

Ｄ　畝状遺構

畝状小溝（第 33・38・39 図、写真 37）

竪穴住居跡等の周辺で多く検出される。数条のまとまりを持ち、同一方向へ平行に延びる浅い溝状を呈する。遺構の形態や配置から、畝の間にあたる溝状部分と考えられる。（規模）長さ４ｍ前後に収まるものと、10 ｍ以上を測るものが認められる。幅は 20 ～ 30 ㎝前後、深さは 15 ㎝程で、底面には掘削による凹凸が認められる。（覆土）黒褐色土を基調とし、炭化物の混入が多く見られる。これらの炭化物層や遺構上面で土師器の細片が出土する。（時期）住居跡との重複関係から、古墳時代前期と考えられるものがある。

Ｅ　溝　跡

ＳＤ 167・172・173 溝跡（第 40・41 図、写真 34）

ＳＤ 167 溝跡は、２区 33 － Ｊ・Ｋ、34 － Ｊグリッド、ＳＤ 172 溝跡は、34・35 － Ｊ・35 － Ｋグリッド、ＳＤ 173 溝跡は 35 － Ｋ・Ｌグリッドで検出された。これらの３条の溝跡は、「コ」字状の配置をとり、内側には直径約 20 ～ 45cm のピット群が認められるが、建物を構成するような規則的配置は認められなかった。ただし、この３条の溝跡内や溝跡に囲われる内部には廃棄された遺物が大量に出土している。ＳＤ 167・172 溝跡は、ＳＤ 160 溝跡に切られる重複関係を持つ。それぞれ主軸方向はＳＤ 167 溝跡が、Ｎ－78°－Ｗ、ＳＤ 172 溝跡が、Ｎ－16°－Ｅ、ＳＤ 173 溝跡が、Ｎ－88.5°－Ｗを示す。（規模・断面形・覆土）ＳＤ 167 溝跡は、検出長約 4.65 ｍ、幅 0.5 ～ 1.00 ｍ、深さ 13 ㎝程、断面形は浅い皿状を呈する。覆土は上層が黒褐色砂質シルト、下層が黄灰砂質シルトである。ＳＤ 172 溝跡は、検出長約 5.90 ｍ、幅 0.6 ～ 1.15 ｍ、深さ 12 ㎝程、断面形は、浅い皿状を呈する。覆土は黒褐色砂質シルトである。ＳＤ 173 溝跡は、検出長約 6.50 ｍ、幅 0.3 ～ 1.15 ｍ、深さ 20 ㎝程、断面形は、壁面が緩やかに立ち上がるＵ字状を呈する。覆土は暗灰黄色砂質シルト～黒色シルトを主体とする。（出土遺物）溝の覆土や底面から遺物が大量に出土する。須恵器の有蓋高坏蓋、坏蓋、短頸壺、土師器の坏、鉢、甕、甕が出土する（165 ～ 174）。また、漆製品の竪櫛（266）や、臼玉、石製模造品、砥石（305・307・309・310）等が溝跡の周辺で出土している。（時期）これらの溝跡は、出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半～６世紀初）と考えられる。

Ｆ　河　川　跡

１区南東端と２区中央で、２条の河川跡が検出された。前者は南西から北東方向へ、後者は東西軸に延びており、双方とも両端が調査区外へ延びていると推測される。以下個別に説明を行う。

ＳＧ１河川跡（第 43・44 図、写真 38・39）

１区中央の南壁面から南東端７－Ｌグリッド付近にかけて、南西から北東へ直線的に延びる。（規模）検出長約 35 ｍ、川幅 4.20 ～ 3.20 ｍで、南西方向へ向かって少しずつ狭くなる。川底までの深さは、最深部で 90 ㎝余を測る。底面は窪地状に落ち込む箇所があるものの、全体的に小さな起伏がつく程度ある。（覆土）堆積層は大別層で８層を確認した。Ｆ１層、Ｆ２層は黒褐色の泥炭層で、河川跡の全面にわたって堆積している。Ｆ２はやや泥炭の分解が進んでいる。Ｆ３層は、黒色シルト層で分解した泥炭を含む。Ｆ４層は黒色～黒褐色シルトを主体とする層で、灰黄褐色シルトブロックを含む。部分的に、砂質が強い４ｂ層に分かれる。Ｆ５層は、砂を主体とする層である。Ｆ６層は、黒褐色の泥炭や、泥炭を含

む粘質シルト層である。（出土遺物）木製品として、F5層から259、F3a層から260が、F2層から257が出土した。土師器では、F5層から175、F3b層から177が出土した。（時期）放射性炭素年代測定では、F6層出土種子の年代が5世紀～6世紀前半、F2層出土の木製品が6世紀末～7世紀代という結果が得られている。これより、河川は古墳時代中期頃には機能していたが、以後堆積が進み、7世紀頃にはほぼ埋没したことが想定される。

SG 130 河川跡（第45図、写真40）

2区中央部の東壁面から西壁面に位置する。西北西－東南東方向に伸びる。検出面はⅡ層上面である。（規模）検出長約33m、川幅約20～27mを測る。調査では、幅70cm前後のトレンチを3本と、調査区西壁沿いにサブトレンチを設定し、堆積層と遺物の有無を確認した。川底までの深さは、最も深い地点で検出面から90cm程である。（覆土）5b～9層が河川の堆積層となる。5b・6層は泥炭層で、5b層には自然木を含むがやや分解が進む。7は、褐灰色シルト混じり泥炭層、8は黒色の泥炭層で自然木を多く含む。9は灰黄シルトで泥炭が混じる。（出土遺物）河川跡中央の西端トレンチから、木製品3点（261～263）が出土している。出土層は、東壁の6層対応すると考えられる（時期）出土木製品の放射性炭素年代測定では、4世紀～6世紀代という結果が得られている。古墳時代後期には、やや堆積が進んでいたが、河川として機能していたものと考えられる。

G　性格不明遺構

SX 19 性格不明遺構（第11図、写真41）

1区北東隅20－Kグリッドに位置する。（平面形）大半が調査区外となり、部分的な検出のため形状は不明である。規模は、南北2.25m、東西1.90mを測る。壁溝状の施設が認められるため、住居となる可能性も考えられる。（覆土）削平されたためか残存していない。（床面）平坦である。（遺構内施設）楕円形状の土坑、EK31が検出された。また、壁溝状の溝跡ED30がめぐる。（出土遺物）EK31内から、土師器壺（179）が出土した。また、ED30から土師器甕（180）が出土した。（時期）出土遺物から古墳時代前期後半（4世紀後半）と考えられる。

SX 63 性格不明遺構（第46図、写真42）

1区中央の東寄り14・15－Jグリッドに位置する。耕作等の削平で遺構底面が僅かに残るのみである。主軸方向はN－24°－Wを示す。住居跡の可能性も考えられるが、炉跡や柱穴は確認されない。竪穴状遺構と捉えたい。（平面形）南北に長い方形を呈し、各壁中央で南北3.00m、東西3.75mを測る。検出面からの深さは5cm程度である。（覆土）削平により覆土は確認されない。1層の黒色シルト層は、地山塊を含み、貼床の可能性がある。（床面）各壁際が中央部より若干窪む形状で、貼床により平坦にしていると考えられる。（出土遺物）床面から少量の土師器片が出土する。（時期）出土遺物が僅少のため不明である。

SX 119 性格不明遺構（第46図、写真42）

2区中央の西寄り38－Gグリッドに位置する。主軸方向はN・42°・Eを示す。（平面形）南北に長い方形を呈し、各壁中央で南北4.25m、東西3.15mを測る。検出面からの深さは20cm程度である。（覆土）黒色を基調とする粘質土が大半を占める。（床面）壁際が若干窪む形状がみられる。南側には、長さ3.00m、幅1.00m、床面から10cm程度の長楕円形の掘り込みEK132が確認される。（出土遺物）床面から少量の土師器破片が出土する。北側の床面からは、双孔円板状の石製品が1点出土している（306）。（時期）出土遺物から古墳時代中期の遺構と推測される。

SX 161 性格不明遺構（第19図、写真42）

2区の東壁面38－Lグリッドに位置し、遺構の東域は調査区外となる。（平面形）不整形を呈し、長軸1.50m、短軸80cmを測る。（覆土）黒褐色を基調とするシルト質土が大半を占める。床面からの深さは10cm程度である。北側に位置する柱穴EP162には、柱材が確認される。（出土遺物）覆土から少量の土師器破片が出土する。（時期）出土遺物が僅少のため、不明である。

H　捨　場

SX 50 捨場（第47～51図、写真43・44）

古墳時代の土師器を中心とした遺物が廃棄されている捨場である。1区東側にかけて広範囲に広がり、大別して18～20－E・Fグリッド、12～16－F・Gグリッド、8～10－Eグリッドの3つのブロックで捉えられる。S

D 12・13・15 溝跡、SD 71 ～ 72 畝状遺構に切られる重複関係がある。（平面形）３つのブロックは、全体的に南西から北西へ緩やかな弧状に分布する。規模は、北端のブロックが南北約 10 m、東西約５m、調査区中央のブロックが南北約 28 m、東西約 11 m、南端のブロックが南北約 11 m、東西約６mを測る。（覆土）堆積は、１～６層に分けられるが、１層は基本層のⅡb層、３層がⅢ層、５・６層がⅣ層に対応すると考えられる。遺物は、１層中や、３層との境界からの出土が多い傾向がある。（出土遺物）北側ブロックから土師器（195・197・208・213・215・219）が出土した。中央部ブロックから土師器（181・184 ～ 193・198・200・205 ～ 207・211・212・214・218・221 ～ 225）が出土した。南側ブロックでは、土師器（182・183・196・199・201・202・204・216・217・220）、石製品として管玉（303・304）が２点出土している。（時期）出土遺物から古墳時代前期後半（４世紀後半）に属する遺物が主体を占めている。

SX 49 集石（第 51 図）

２区中央の 14 － G・H グリッドに位置する。棒状礫が集中して確認されたことから、調査段階で遺物の出土範囲として遺構番号を付した。棒状礫の出土範囲は、長辺 90 ㎝、短辺 60 ㎝、不整形を呈する。（覆土）Ⅱb層に併行する堆積層の上面にあたり、周辺にみられる土師器と同様にSX 50 捨場に属すると考えられる。（出土遺物）出土した棒状礫は、計 18 個体を数える（285 ～ 302）。長楕円形を呈する自然礫を用いており、加工痕も認められない。棒状礫の集石は、２区のST 104 竪穴住居跡内でも同様に確認される。詳細については後述するが、これらは、編物石に用いたものと推測される。

2　古墳時代の遺物

本遺跡から出土した遺物は、プラスチックコンテナ約 57 箱分に及ぶ。これらは、古墳時代を主とする土師器や須恵器の土器類が大半を占める。他の遺物には、木製品、石器、石製品、中世・近世の陶磁器などが認められた。

A　土　師　器

（1）土師器の特徴と器種分類

遺跡の主体となる古墳時代の遺構と、捨場と考えられる遺物包含層から多量に出土する。これらは、出土した遺構の形態的な特徴や遺物の器種・器形から古墳時代前期と中期の二つの時期が把握される。

器種分類を提示した上で、先行して古墳時代前期の遺物、次に同時代中期の遺物の分類・特色を列記する。なお、分類の括弧内は代表的な遺物例を示す。分類基準は、以下のとおりである。

器種－土器の用途と形を基にした分類。蓋、小型土器、器台、高坏、坏、鉢、壺、甕、甑である。

器形－器形の形態や整形技法を基に分類し、坏A類・坏B類とした。また、口縁部の変化や部分的な形態差を基にした分類は、坏A１類・坏B２類、さらに形態変化が激しい場合はａ・ｂ…を追加し、坏A１ａ類などと表記した。

（2）古墳時代前期の土師器分類（第 53 図）

分類の中心となるものは、竪穴住居跡内の出土遺物である。欠落する器種については、一部SX 50 捨場出土遺物から抽出して用いた。

［蓋］SX 19 性格不明遺構出土の１点のみである。

A類：鉦（ほこん）状の摘みを有し、天井部から直線的に開く。器面には赤彩を施す。

［小型土器］手づくね成形した粗雑な作りの土器。

A類：柱状の底部が付き、鉢状を呈すると推測される。

［器台］器高 15 ㎝前後の器台である。受け部から脚部かけて貫通孔がある。

A類：受け部が椀状を呈し、外傾して立ち上がるもの。

B類：受け部が浅く、口縁部が僅かに内湾するもの。

C類：受け部が浅く、口縁部が外反するもの。

［高坏］出土量が少量であり、器形が把握されるものは限られる。

A類：脚部が直線的に開く「八」の字状を呈し、裾部が僅かに外方に開くもの。

１類　受け部が外傾して開き、口縁端部で内湾する

２類　脚部の裾が外方に長くのびるもの。

B類：基部から内湾して立ち上がる受け部が付き、脚部は中空棒状を呈する。

C類：脚部が直線的に開く「ハ」の字状を呈するもの。

［鉢］精製品である小型の丸底のものと、調整の粗い粗製のものが見られる。

A類：小型の丸底鉢で、精緻された胎土を用いている。器台との対応関係が考えられる。

B類：口縁部が外反するもの、口縁部に面取りをもつ。
C類：長頸の口縁部が付く体部の浅い平底鉢である。口縁部が僅かに内湾する。
D類：球胴状の体部に外傾する口縁部が付く。
［壺］複合口縁壺、直口壺がある。
A類：口縁部に段を有する複合口縁壺である。
　1類　二重口縁壺で、口縁部下端で平坦となって強い段を呈するもの。
　2類　二重口縁壺に類するが、段が不明瞭なもの。
　3類　折り返し状の口縁部を呈するもの。
B類：球胴状の体部に直立する口縁部が付く直口壺である。大型と小型のものに大別される。
　1類　大型の直口壺。
　2類　小型の直口壺。
C類：直立する短い口縁部が付くもの。
D類：口縁が外反・外傾するもの。
　1類　頸部のすぼまりが強いもの。
　2類　頸部のすぼまりが弱いもの。
E類：小型の精製品。小型器台とセットで使用された可能性がある。
［甕］大型と小型のものに大別される。
A類：口縁部の断面形態が「く」の字状に屈曲するもの。基本的な調整は、内外面ハケメ調整の後、口縁部が引き出されて横方向のナデ調整で整えられている。口縁部上半部は、丁寧に横方向のナデが施される。下半部には、ハケメ調整がナデ消されずに残存していることが多い。甕の大部分は、ここに分類される。口縁形態の違いで細分した。これらは、『北陸北東部系甕』「くの字口縁甕」「能登型甕」等と呼ばれる。
　1類　口縁端部が摘みあげられるもの。
　2類　面取りが強く、外側に若干引き出されるもの。
　3類　面取りが弱く、口縁部が緩やかに外反するもの。
　4類　面取りが認められないもの。
B類：口縁端部が強く外側に引き出され、口縁部が逆「コ」の字状を呈するもの。
C類：脚台の付く甕。所謂台付甕である。
　1類　脚台が直線的な「ハ」の字状を呈するもの。
　2類　脚台中位で内湾して膨らむもの。
D類：小型の甕を呈するもの。

（3）古墳時代前期の出土遺物

当期の出土遺物は、竪穴住居跡内出土の一括資料が大半を占める（ＳＴ20・21・22・107・108・125）。これらの住居跡は検出面が浅いため、殆どが床面直上から出土した遺物で、一括資料に恵まれるものは限られる。その中でも比較的まとまった遺物量が出土するのは、ＳＴ20・21・22竪穴住居跡である。竪穴住居跡出土の遺物を中心に、古墳時代前期に属すると考えられる遺構出土の遺物について詳細を述べる。

ＳＴ20竪穴住居跡

高坏、壺、甕が出土している（1～11）。1は高坏Ａ1類で、器形が把握できるものである。器面には、丁寧なヘラミガキとナデを施し、円窓は三方に穿かれる。2は、長頸の口縁部が欠損する壺で、壺Ｂ2類に分類される。4は、体部が球胴状を呈する甕Ａ3類である。器面の調整には、内外面にハケメ調整を施している。

ＳＴ21竪穴住居跡

器台、二重口縁壺、甕が出土する（5～10）。5・6は器台の受け部で、5が器台Ａ類、6が器台Ｂ類である。7は、二重口縁壺の頸部にあたる破片資料である。器形全体を把握し得ないが、口縁内部に段を作り出す壺Ａ類と考えられる。8～11は甕である。8は、口縁部の破片資料で、「コ」の字状を呈する甕Ｂ類である。11は、地床炉の直上層にて一括出土した甕で、肩部付近に最大径をもつ甕Ａ2類である。10は、小型甕の体部上半部と底部である。器高が15㎝以下に収まる甕Ｄ類と捉えた。口縁部は、頸部から僅かに内湾して直立する。器面の調整は、外面全体に細かいハケメ調整とナデ調整を施している。

ＳＴ22竪穴住居跡

当期の住居跡の中で最も多く遺物が出土する。他の住居跡と比較して掘り込みが深いため、出土遺物の一括性が高い。器種は、壺、小型丸底鉢、甕がある（12～18）。ここでは、住居跡に付随する可能性があるＳＤ34・35溝跡の出土遺物（19～24）も合わせて列記する。

12・13は壺Ｂ2類である。器形が把握される13は、口径11.2㎝、器高は15㎝と推測される。体部は球胴状を呈し、底部が丸底となる。焼失家屋出土のため、器面全体が被熱で赤味を帯びている。鉢Ａ類の14は、器台との対応関係が考えられる。器面の調整は、頸部外面に

縦方向のハケメ調整がみられる。15～17は、いずれも甕Ａ２類である。体部外面には、ハケメ調整とナデ調整がみられる。ハケメ調整は、目の粗いものと、目の細かいものが混在して認められる。15・16は、口縁部の形状が把握されるもので、口縁端部に面取りを施した「く」の字状口縁部が付くものである。甕Ｃ１類の18は、脚台が直線的に開くもので、砂粒などを含まない精錬された胎土を用いている。

前述した外周の溝跡出土遺物は６点である（19～24）。19は、受け部が内湾する高坏Ｂ類である。全体的に磨滅が激しく、器面の調整は不明瞭である。受け部の上半が欠損しているため不明確だが、本遺跡の分布調査の際に出土した高坏（第52図１）と同様に、口縁部が屈曲して外頸するものと考えられる。

20～22は甕である。甕Ａ１類の20、甕Ａ４類の21、甕Ｃ２類の22である。鉢Ｂ類の24は、底部から体部にかけて外傾して立ち上がり、体部と口縁部の境が強く張り出している。体部外面に丁寧なヘラミガキ調整とナデ調整が施される精製品と考えられる。

ＳＴ107竪穴住居跡

土師器の細片が多量出土するが、図化出来たのは壺２点である（147・148）。147は壺Ｂ２類、148は壺Ｄ１類に分類される。148は、最大径を胴部中位にもつ球胴状を呈し、器面の調整は、外面に目の細かいハケメとナデ調整が施される。

ＳＴ108竪穴住居跡

器形が把握されるのは149のみである。口径約10㎝、器高4.9㎝を測り、頭部から外傾して開く口縁部が付く鉢Ａ類に分類される。底部中央が円形に窪む凹状となる。器面の調整は、細かいヘラミガキとナデ調整が施され、内外面を赤色塗彩で装飾している。

ＳＴ125竪穴住居跡

高坏、甕が出土する（153・154）。高坏Ｃ類の153は、器高の低い小型の高坏で、脚部には円窓が認められない。154は、甕Ａ３類に属する。器面の調整は、体部の内外面に目の粗いハケメとナデ調整を施している。

掘立柱建物跡（ＳＢ２・54・53）では、直接関係する遺物は極僅かである。これらの建物跡に関連する遺物として、建物跡に近接する溝跡出土の遺物がある。ここでは、双方の出土遺物について列記する。

ＳＢ２掘立柱建物跡

直接的な出土遺物は認められないが、北側に近接するＳＤ14溝跡から壺、甕が出土する（155～157）。155・156は二重口縁壺である。なかでも156は、口縁部内面に平坦な段が作り出される壺Ａ類に属し、口径25㎝前後を測る大型のものと考えられる。157は、甕Ａ３類に分類される。精錬した胎土を用いて、器厚を薄く仕上げる作りである。

ＳＢ54掘立柱建物跡

直接的な出土遺物は認められないが、西側に近接するＳＤ40溝跡から壺が出土する（158・159）。158は、壺Ａ２類の上半部である。頸部のすぼまりが強く、頸部径が小さい。159は、壺Ｂ１類に分類される。最大径を下半にもつ皮袋形の胴部に、外傾して大きく開く長頸の口縁部が付く。口縁端部は欠損するため不明である。器面の調整は、丁寧なヘラミガキとナデ調整が施され、口縁部内面と外面全体を赤色塗彩で装飾している。

ＳＢ79掘立柱建物跡

壺が出土する（160・161）。160は、建物を構成する柱穴から出土した壺である。体部下半は欠損しているが、球胴状の体部に直立する口縁部が付く壺Ｃ類に分類される。器面の調整は、体部に細かいヘラミガキ調整と口縁部に横方向のナデ調整がみられる。161は壺の底部で、建物跡の外周溝と考えられるＥＤ64溝跡から出土する。器厚が薄く、内外面には、煤や炭化物が環状に付着しており、煮炊きの調理具に転用されたものと考えられる。

ＳＧ１河川跡

覆土中から３点が出土する（175～177）。175は下層出土の器台で、受け部が僅かに外反する器台Ｃ類に分類される。脚部は「ハ」の字状に開き、円窓が三方に穿かれる。器面の調整は、受け部外面で横方向、脚部外面では縦方向のヘラミガキ調整がみられる。176は、壺の口縁部片である。細片資料のため不明な点が多いが、大型の直口壺と推測される。177は、河川跡上層で出土した甕である。体部の下半に最大径を持つ下膨れの形状で、外傾する短い口縁部が付く。底部には、輪状の粘土紐を貼り付けている。外面には、縦方向に粗いハケメ調整を施し、口縁部付近に横方向のナデ調整がみられる。これは、古墳時代中期に属する小型の甕（Ｃ２ｂ類）と考えられる。

ＳＸ19 性格不明遺構

蓋、二重口縁壺、甕の３点が出土する（178 ～ 180）。178 は、釦状のつまみを有する蓋Ａ類である。器面は、外面に丁寧なヘラミガキを施している。残存状態は悪いが、外面に赤色塗彩が認められる。179 は、球胴状の体部をもつ壺Ａ２類である。遺構内の溝から出土した 180 は、甕Ａ２類に分類される。

遺構外出土遺物

１区調査区の西側で確認されたＳＸ50 掘場出土のものが大半を占める。器台、高坏、鉢、壺、甕の各器種のなかでも、器形や器種が把握される計 46 点を図化した（181 ～ 226）。ここでは、特徴的な遺物のみを取り上げ、その他は遺物観察表に参照されたい。

181 ～ 187 は器台である。受け部が欠損する脚部で、基部から脚部にかけて貫通孔をもつ。185・186 は、脚部の裾部が外方へ向かって「八」の字状に開く。器形が把握できる 187 は、受け部の口縁部が僅かに内湾して立ち上がる器台Ｂ類に分類される。脚部は、「ハ」の字状に直線的に開き、円窓が対角線上の四方に穿かれる。器面の調整には、ヘラミガキ調整とナデ調整を施し、受け部内面と外面全体を赤色塗彩で装飾している。

188・189 は高坏である。共に脚部の裾が外方へ向かって「八」の字状に開く。188 は、口縁部が内湾する埦状の受け部が付く高坏Ａ２類である。残存する脚部の形状から、円窓は三方に穿かれると捉えた。189 の脚部は、外面全体にヘラミガキとナデ調整を施し、赤色塗彩で器面を装飾している。円窓は三方に穿かれると考えられ、小型の受け部が付く高坏Ａ２類となろう。

190 ～ 194 は鉢である。190・191 は、短く外傾する口縁部が付く鉢Ｄ類である。191 は、底部中央が円形に窪む凹状となる。192・193 は、長頸の口縁部をもつ平底鉢で、鉢Ｃ類に分類される。体部が浅く、口縁部と体部の境には強い稜がみられる。194 は口縁部が折り返し状となる鉢である。器面の調整には、細かいハケメやナデを施している。

195 ～ 210 は壺である。器形は、小型壺、二重口縁壺、直口壺、単純口縁の壺があり、甕に転用したと考えられるものも認められる。

小型壺は、丸底の体部に直立気味の短い口縁部が付く 198 と、球胴状の体部に折り返し状の口縁部が付く 199 がある。198 が壺Ｅ類、199 はＡ３類に分類される。

200 ～ 202 は二重口縁壺で、いずれも口縁部から頸部にあたる。201・202 は、壺Ａ１類に分類される。頸部と口縁部の境となる屈曲部が強く張り出し、刺突を連続させた刻み目状の加飾が施されている。これらは、北陸地方にみられる土器様相と近似している。

205 ～ 207 は、壺Ｂ類である。205・206 は壺Ｂ２類に分類される。205 は、体部外面に赤色塗彩を施している。全体の器形が把握できる 206 は、体部中央で最大径を測り、口縁部が僅かに内湾する。207 は、壺Ｂ１類に分類される。口径 15.8 ㎝、器高 22.5 ㎝以上を測り、頸部から強く屈曲して開く口縁が付く。器面の調整は、体部に目の細かいハケメ調整がみられ、器厚が薄く仕上げている。

203・204・208 ～ 210 は、器面全体に被熱痕や煤が付着する壺で、調理具に転用して使用したと考えられる。口縁部の形状が把握できる 209・210 は、口縁部が弱く外反する。頸部の形状から壺Ｄ１類 195・196・208・209 と、壺Ｄ２類 210 に分けられる。

211 は、単孔のある底部資料である。器面は全体的に被熱痕があり、調整等は不明瞭である。外面全体に煤や炭化物が付着している。これは、有孔鉢と考えられる。

212 ～ 226 は甕である。口縁部の形状が把握できるものを中心に、計 14 点を図化した。

212 は、脚台の中位が膨らむ甕Ｃ２類に分類される。内面には、砂混じりの土を補充して、なで付けた痕跡がみられる。

213 ～ 224 は甕の口縁部である。これらは口縁部の形状が「く」の字状を呈する甕Ａ類 215 ～ 218・220・223・226、「コ」の字状の呈する甕Ｂ類 222・224 に大別できる。各々の口縁端部には、面を作り出したものが認められ、北陸北東部系の能登甕と呼ばれるものに近似する。全体の器形が把握される 225・226 は、体部が丸く張り、最大径が体部中央に求められる。

311・312 の２点は、ＳＤ13 溝跡底面から出土した古墳時代の土師器である。溝跡の埋没時に流れ込んだものと考えられる。311 は、手捏ぐねで成形した小型土器Ａ類である。外傾した口縁部が付く鉢形を呈すると考えられる。312 は、口頸部に刺突を施した隆帯が巡る壺である。器面には、赤色塗彩した痕跡が認められる。

（4）古墳時代中期の土師器分類（第54図）

分類の中心となるものは、当期に属する竪穴住居跡内出土の一括遺物である。器種は、坏、鉢、壺、甕、甑の5種類に大別し、口縁部や底部の形態と大きさの違いから細別した。器形や大きさの関係から、坏類の中でも器高が高いものを鉢類に、器高の低い小型の甕については、甕の範疇に含めた。

分類に際しては「山形県における古墳時代中期の土器様相（1）」（阿部・吉田2002）の分類基準に準拠する。なお、欠損により全体の形が明確でないものについても分類に加えたものがある。

［坏］口縁部の形態で大別した。底部の形状は、丸底と平底が混在して認められる。

A類：半球形の体部に、外反または外傾する口縁部をもつもの。底部は丸底と平底がある。

1類　体部下半が内傾した後に、外反する口縁部を呈する。両者の境は内外面共に稜線をもつ。

2類　口縁端部が外頸する口縁部を呈するもの。

B類：半球形の体部と内湾する口縁部からなる。体部と口縁部の境に稜線をもたない。底部は丸底と平底がある。

1類　口縁端部が内湾するもの。

2類　口縁端部が直立するもの。

3類　口縁部が僅かに外にのびるもの。

C類：扁平な半球形の体部とほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもつ。体部と口縁部の境には、外面に段、内面に稜線をもつ。須恵器模倣坏とされる。

1類　直行する部分が1/3以下のもの。

2類　直行する部分が1/3以上を占めるもの。

D類：半球形の体部と外反する口縁部をもつ。両者の境には、外面に段、内面に稜をもつ。

E類：深みのある埦状を呈する。

［鉢］口縁部が外反または直立し、器高が口径の1/2を上回るものを目安とした。調整はヘラミガキやナデ調整を基本とするが、一部ケズリやハケメ調整を施す粗製品もある。

A類：球状の体部に外反する口縁部が付くもの。

1類　底部が丸底のもの。

2類　平底、平底気味のもの。

B類：口縁部が外方向にやや直線的にのびるもの。

C類：底部から直立気味に立ち上がり、口縁部が僅かに外傾するもの。

D類：口縁下部に、注口や有孔が付くもの。

［壺］口縁形態と胴部の形状から細分した。

A類：複合口縁を呈するもの

B類：丸形となるもの。

1類　胴部が丸形で頸部が短いもの。

a類　口縁部が外反・外傾するもの。

b類　口縁部が内湾するもの。

2類　胴部が丸形で頸部が長いもの。

C類：球胴状の胴部から口縁部が短く外反するもの。（須恵器短頸壺の模倣）

D類：無頸のもの。

［甑］無底式の甕形甑と小型の単孔甑が認められる。

A類：無底式の甕形甑

1類　最大径が口縁部にあるもの。

2類　最大径が胴部にあるもの。

B類：小型の有底単孔甑

1類　丸底となるもの。

2類　平底となるもの。

［甕］器形や大きさから大別した。大半が外面に煤や炭化物が付着している。調整は、内外面ハケメまたは、ナデ調整を主体とするが、内外面にミガキやケズリ調整を施した個体も認められる。なお、小型の甕として分類に加えたものがある。

A類：器高23㎝以上となる大型で球胴形を呈するもの。

1類　頸のすぼまりが強い。

2類　頸のすぼまりが弱い。

a類　口縁部が強く外反するもの。

b類　口縁部が緩やかに外反するもの。

c類　口縁部が直行で外傾するもの。

B類：器高23㎝以上となる長胴化した体部のもの。

1類　頸のすぼまりが強い。

2類　頸のすぼまりが弱い。

a類　口縁部が強く外反するもの。

b類　口縁部が緩やかに外反するもの。

c類　口縁部が直行で外傾するもの。

C類：器高23㎝以下となる小型の甕。

1類　器高15㎝以上で頸が短いもの。

a類　口縁部が強く外反するもの。

b類　口縁部が直立して外傾するもの。

2類　器高15㎝以下で頸が短いもの。

a類　胴径が口径より大きいもの。

b類　胴径が口径と同じか小さいもの。

D類：菱形となるもの。

（5）古墳時代中期の出土遺物

大半は、調査2区に位置する竪穴住居跡内から出土した遺物である。以下、主な出土遺物の器種分類、特徴について列記するが、詳細は遺物観察表を参照されたい。

ＳＴ101竪穴住居跡

鉢、甕が出土する（26～27）。25は、口縁部が直線的に外傾する鉢B類に分類される。底部は平底気味である。器面の調整は、内面にミガキ調整、外面にナデとケズリ調整がみられる。26は、頸部から口縁部が外反する甕C1a類である。27は、最大径を胴部中位にもつ甕D類に分類される。すぼまりの強い頸部から、屈曲して開く口縁部が付く。

ＳＴ102竪穴住居跡

坏、鉢、甕が出土する（28～39）。焼失住居出土のため、各々の外面には、煤の付着や被熱面がみられる。

主体を占める坏類は、計9点を数える（28～35）。このうち、28～30は住居上層から出土する。床面直上出土の31・32・34・35は、口縁部が内湾する坏B類に分類される。33は、口縁部が直立気味に立ち上がる坏C類に分類される。36は、口径16.4㎝を測る大型の坏で、口縁外面に段をもつ坏D類に分類される。内湾する坏B類の内面には、放射状のミガキ調整が多く認められる。

37は、頸部から外傾する口縁が付く鉢A1類である。38は、短く外傾する口縁部が付く甕B2b類である。器面の調整は、体部下半から底部にかけて縦方向のケズリ調整がみられる。カマド付近に直置きして用いた調理具の性格が考えられる。

39は、最大径を胴部中位にもつ広口の甕で、口縁部が短く外反する甕A2a類に分類される。器面の調整は、体部外面にナデとケズリ調整、内面には横方向のナデ調整が幾重もみられる。底部は、厚みのある柱状を呈する。

ＳＴ103竪穴住居跡

坏、鉢、甕、甑が出土する（40～69）。40～56は坏類である。坏類は、A類40・41・46・48・50、B類53、C類42・43・45・51・52、D類44・54～56に大別される。このうちの51～56の6点は、内外面に赤色塗彩を施す赤色土器である。57・58は深みのある坏E類に分類され、口縁内面に明瞭な稜線が認められる。

甑は、カマド付近から集中して出土し、坏や鉢形の甑B1類59・60と、無底式の甑A2類である61が認められる。59は、口縁部が直線的に外傾する坏形に単孔があるもので、容量が小さいため、甑として機能するか検討する必要がある。

62は、口縁部が僅かに外反する甕C2b類に分類される。器面の調整は、体部中位から底部に縦方向のナデとヘラケズリ調整がみられる。内面には、ナデ調整と円状の煤の付着が認められる。カマドの火元に直置きして用いた調理具と考えられる。67・68は壺を転用した甕である。67は、頸部のすぼまりの強い壺B1a類に分類される。68は、体部が球胴状を呈する壺B1b類に属し、胴部中位の最大径は29㎝前後を測る。66・69は、長胴化した胴部をもつもので、甕B1c類に分類される。

ＳＴ104竪穴住居跡

坏、鉢、甑、甕が出土する（71～94）。坏類は、A類71・74～76・81・82、B類72・73・77～80の2類に大別される。これらは、底部が丸底状を呈するものが多い傾向がみられる。

83～85は、外反する口縁部が付く鉢A2類に属する。84には、底部に輪状の貼り付けが認められる。体部器面全体に被熱痕がみられ、赤みを帯びる。

86は、体部が内湾して立ち上がる壺の底部である。内面に吃水線が認められる。製作時に生じたへたりに、粘土を貼り付けて補修を施している。

87は、口縁端部が僅かに外反する甑B1類である。器面の調整は、内外面にハケメ調整、口縁部内面には横方向のナデ調整が施される。器厚が薄い作りである。88は、胴部中位が膨らむ甑A2類に分類される。口縁部が僅かに外反し、外面に縦方向のヘラケズリ調整、口縁部付近に横方向のナデ調整が施される。

89～94は甕である。甕A2a類92、甕B1a類93、甕B1b類90、甕B2a類91、甕B1c類94に分類される。外面に目の粗いハケメ、縦方向のケズリ調整を施し、柱状の厚みをもつ底部である。いずれもカマドにかけられた甕で、複数個設置されたものと考えられる。91は、頸部から直線的に外傾して開く口縁部が付くもので、

端部に僅かな平坦面をもつ形状である。

ＳＴ 105 竪穴住居跡

坏、鉢、甑、壺、甕が出土する（96 ～ 122）。主体を占める坏類は、Ａ類 99・103 ～ 105・108、Ｂ類 96・98・102・110・111、Ｃ類 97・101、Ｄ類 100・106・109 に大別される。このうちの７点は、内外面に赤色塗彩を施す赤色土器である（106 ～ 112）。口縁内面に、内削ぎを有するものが多い傾向がある。102、103 は、底部が幅広の平底となり、扁平な体部を呈する。

113 は、赤色塗彩を施した小型の壺である。口縁端部が内湾する壺Ｂ２類に分類される。内外面は、細かい単位のヘラミガキ調整を施している。水入れとして使用された細頸の精製壺と考えられる。

114 は、鉢Ｄ類に分類される。球胴状の体部に、短く外反する口縁部が付く。体部中位には、長さ３cm前後のＵ字状の注ぎ口が付く。片口状の口縁部をもつ鉢類は、県内でも数例認められるが、注ぎ口が付くものは確認されない。器面の調整は、体部の内外面に細かいハケメ調整と口縁部にナデ調整がみられる。

115 ～ 119 は、外反する口縁部が付く鉢である。丸底の鉢Ａ１類 115・117 と、平底の鉢Ａ２類 116・118・119 に分類される。なかでも 118 は、外面全体に横方向のヘラミガキ調整を施し、器面を赤色塗彩で装飾する精製品の鉢となろう。119 は、柱状の底部が付く大型の鉢である。器面の調整は、内面に一部ヘラミガキ調整が認められる。外面には、煤や炭化物の付着が認められ、直置きの調理具として使用されたと考えられる。

120 は、体部から口縁部にかけて外傾して開く甑Ａ１類である。口縁部は、体部との境で短く外傾して開く。器面の調整は、底部付近にハケメ調整、体部に縦方向のヘラケズリ調整が認められる。

121 は、甕Ｃ１ａ類の小型甕である。内外面に煤や炭化物の付着が認められ、119 の大型鉢と同様に直置きの調理具と考えられる。

122 は、壺を転用した甕である。器種分類は、壺Ｂ１ｂ類に分類した。口縁部中位には、沈線が１条巡っている。外面には、被熱によって煤が飛んだ火前が認められ、カマドに設置した状態が把握できる資料となる。底部には、支脚の跡も確認できる。カマドに設置して用いた湯釜の性格が考えられる。

ＳＴ 106 竪穴住居跡

坏、鉢、壺、甑、甕が出土する（123 ～ 146）。

坏類は、Ａ類 125 ～ 127、Ｂ類 123・124・128・129 に大別される。123 は、内面に放射状のミガキ調整がみられる。125・126 は、円形の窪みがある凹状の底部を有する。126 は、カマド内の底面から出土することや器面の被熱の度合いが高いことから、カマドの支脚として転用されたと考えられる。127 は、口径 17.8 cmを測る大型の坏で、外面下部には煤が全体的に付着している。128・129 は、扁平な体部に内湾する口縁が付く坏で、須恵器の坏身を模倣した可能性も考えられる。

130 は、短い口縁部が付く壺Ｂ１ｂ類である。器面全体に被熱痕がみられる。131 は、体部中位に最大径をもつ壺Ｂ２類である。直立する口縁部が付くと考えられる。精錬された胎土を用い、外面に細かいヘラミガキ調整を施している。ＳＴ 105 竪穴住居跡出土の 113 と同様に、水入れとして使用された細頸の精製壺と考えられる。132・133 は、短い口縁部が付く壺Ｃ類に分類される。これらは、須恵器の短頸壺を模倣したものと考えられる。器面の調整は、体部外面に目の粗いハケメとケズリ調整が認められる。

134 ～ 137 は、広口の鉢である。小型の 134 は、底部の幅が広い鉢Ｃ類に分類される。135 ～ 137 は、体部が内湾して屈曲し、外反する口縁部が付く鉢Ａ２類である。底面は、いずれも平底気味となる。

甑は２点である。鉢形の甑Ｂ２類 138 と、無底式の甑Ａ１類 139 に分類される。139 は、底部を摘み出して立ち上げる形状である。

140 ～ 145 は甕である。141・142 は、口縁部が短く外傾する小型の甕で、甕Ｃ２ｂ類に分類される。カマドがけではなく、直置きの調理具として使用されたと考えられる。140・142 の底部には、籾圧痕が認められる。

144 は、カマド付近からほぼ完形で出土した壺である。口縁部に段を有する壺Ａ類に分類されるが、甕に転用されたものと考えられる。体部下部には、環状の煤が付着し、内面に吃水（きっすい）線が認められる。器面の調整は、体部にミガキとナデ調整、頸部に横方向に連続させたケズリ調整がみられる。143・145 は、口縁部が直立気味に立ち上がる甕Ａ１ｃ類に分類される。器面の調整は、体部外面にケズリとナデ調整がみられる。

146は、最大径を胴部にもつ甕形を呈する。上半部の器形から偏の性格も考えられるが、底部付近が欠損しているため断定はできない。

ＳＴ 118 竪穴住居跡

坏、鉢、壺が出土する（150～152）。150は、口径が17.8㎝を測る大型の坏で、口縁端部が短く外傾する坏Ａ２類に大別される。小型の鉢である151は、口縁部が外傾する鉢Ａ２類に分類される。152は、底面に籾圧痕が認められる。

ＳＫ 133 土坑

162は、土坑の底面から出土した丸底の坏である。口縁端部が僅かに外反する坏Ａ２類に分類される。円形の窪みがある凹状の底部を呈する。

ＳＫ 158 土坑

163は、口縁部が広口となる小型の鉢で、鉢Ａ２類に分類した。口縁部内面には、明瞭な稜線が認められる。器面の調整は、体部外面に目の粗いハケメ調整と、口縁部に横方向のナデ調整がみられる。

ＳＤ 167・172・173 溝跡

上層から坏、鉢、壺が出土する（168～174）。

168･171は、口縁部が外傾する坏Ａ２類に分類される。いずれも底部は、丸底状を呈する。

169は、壺Ｄ類に分類される。口縁部下には、径３㎜の円孔が認められる。口縁端部は斜線状を呈しており、蓋が付く可能性が高い。類似するものとして、本遺跡の分布調査で出土した有孔の壺がある（第51図３）。

172･173は、口縁部が僅かに外傾して開く小型の甕で、甕Ｃ２ｂ類に分類した。体部外面には、縦方向の粗いハケメ調整と、ヘラケズリ調整がみられる。内面にベンガラと思われる赤色顔料が付着することから、彩色に用いた容器と考えられる。

174は、体部中央に最大径をもつ壺である。口縁部が直立気味に立ち上がる壺Ｂ１ａ類に分類される。器面には、体部外面にナデ調整と一部ケズリ調整がみられる。体部下部には、煤の付着が認められることから、甕に転用された可能性が高い。

Ｂ　須恵器

須恵器は、竪穴住居跡出土２点、溝跡１点、遺物包含層２点の計５点が出土した（70・95・165～167）。器種は、有蓋高坏の蓋、坏蓋、坏身、甕、短頸壺がある。

これらは、概ね陶邑古窯跡群編年のＴＫ 23～47（Ⅰ-４）型式に併行する時期に比定され、５世紀後半～末の様相を呈する。いずれも形状などの外見上の特徴が、陶邑産と共通する要素が多い。以下詳細を述べる。

70はＳＴ 104 竪穴住居跡出土の甕である。口縁部が直線的に外傾して開き、口縁端部がやや丸みを持つ。頸部外面には、細かい櫛描の波状文を施して器面を装飾している。破片資料のため全体を把握するには至らないが、ＴＫ 23 型式併行の時期と比定される。

95は口径 11.5㎝、器高 5.2㎝の坏身で、器形が明らかなものである。焼失家屋のＳＴ 105 竪穴住居跡から出土するため、外面には黒斑がみられる。口縁部はやや内傾し、口縁端部で丸みを持つ。受け部は、やや内傾して端部で丸みを持つ。底部の回転ヘラケズリの範囲は、2/3 強である。器形が扁平になる直前の段階のＴＫ 23 もしくはＴＫ 47 型式併行の時期に比定される。

165～167は、ＳＤ 167・172・173 溝跡上面、遺物包含層であるⅡｂ層から出土する。

165は、口径 13㎝、器高 52㎝の有蓋高坏の蓋である。中央が窪む扁平な摘みが付き、外面の突端部は、鋭く明瞭である。調整は全体にロクロナデを施し、外面天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/3 強でみられる。県内では、天童市西沼田遺跡出土の有蓋高坏の蓋と近似し、同遺物と並行するＴＫ 23～47 型式併行の時期と考えられる。

166は、口径 12.4㎝、器高 5㎝の坏蓋である。蓋の突端部は弱く、端部がやや丸みを持つ。調整は全体にロクロナデを施し、外面天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/3 強でみられる。ＴＫ 47 型式から次の段階への過渡期段階に併行する時期と考えられる。

167は、口径 11.8㎝、器高 7.3㎝の短頸壺である。やや張り出した胴部から直立する口縁部へと至り、口縁端部がやや丸みを持つ。調整は、口縁端部まで強いロクロナデ調整が施され、底部の回転ヘラケズリの範囲は 2/3 強でみられる。胎土は緻密で、焼成も良好である。ＴＫ 47 型式に併行する時期と考えられる。

Ｃ　木製品

古墳時代の木製品は、１次調査のＳＧ１河川跡、２次調査のＳＴ 102・103・105 竪穴住居跡、ＳＫ 133 土坑、

ＳＧ130河川跡等の遺構から出土している。遺存状態が比較的良好なものについて、40点を図示した。また、編台・容器・杭状の木製品等の主な木製品については、樹種の同定を実施した。詳細は第Ⅳ章に記載している。

竪穴住居跡からは、住居に関連する建築部材や柱材が出土している。性格が特定できない加工材も多い。木製品が出土した竪穴住居跡は、いずれも焼失住居と考えられ、炭化した部材が散見される。以下、出土遺構毎に内容を述べる。

227～238は、ＳＴ102竪穴住居跡出土の木製品で、住居の建築部材と考えられる。227・228・232・234・236は板材である。229・230・231・233・235は角材である。231・235は部分的に炭化している。これらの材は、住居の建築部材である。237・238は、住居の柱材である。両者とも、樹皮を部分的に残す丸太材であり、斧状工具で切断されている。237は、運搬の紐掛けのためと考えられる大きな抉りが1ヶ所施される。

239～244は、ＳＴ103竪穴住居跡出土の木製品である。239は、断面扇状の角材で両端を欠く。240は角材と思われる。炭化や腐食が目立つ。241～244は、住居の柱材である。丸太材の一端を裁断し、一部樹皮を残す。241・243は先端を平坦に成形し、242・244は先端をＶ字状に成形する。242は、側面に一部加工を施す。

245・246は、ＳＴ105竪穴住居跡出土の木製品である。245はＥＫ166出土の細い板材で、貯蔵穴の蓋材の一部に使用されたと思われる。246は、住居の柱材である。丸太材を切断しているが、切断面の仕上げは雑である。

247～256は、ＳＫ133土坑出土の木製品である。247・249～254は薄い板材である。248・255は角材である。248は一辺4.6cmの材であるが、一端を杭状に尖らせている。255は加工後の不要な材として廃棄されたと思われる。256は刳物の容器（槽）である。残存長は、57.2cm、幅29.1cm、高さ13.9cmで、削り出しによる脚が2ヶ所付く。容器長軸の上端に、ヒレ状の張り出し部を持つ。容器類は、山形市藤治屋敷遺跡、南陽市百刈田遺跡などで出土しているが、同様の形態をもつ容器類は、県内では確認されていない。

257～260は、ＳＧ1河川跡から出土した。257は、棒状の加工材で一端が破損する。角を面取りしている。258は、用途不明の断面長方形の角材であるが、側面が湾曲し、両端が細くなる。259は加工材で、板状の材の一端を尖らせる。また、片面が炭化している。260は、長さ176cmと大型で、編台の目盛板と考えられる。細い丸太材の両端を削り扁平にし、抉りを入れてホゾ状に成形する。また、材の中央部に、幅4～11㎜、長さ18～22㎜の刻み目が22ヶ所確認される。

261～263は、ＳＧ130河川跡から出土した。261は、残存長が324cmと長大な加工材で、一端はやや細くホゾ状の加工が施され、反対側は破損し形状不明である。断面円形に整形される。用途は不明である。262は、棒状の加工材で、一端を尖らせ、断面形は半円形を呈し丁寧に調整されている。全体的に薄く炭化する。263は一辺約1.7cmの角材で、両端を欠く。

264・265は、遺構外出土の木製品であるが、古墳時代の包含層に帰属するものと考えられる。264は、棒状の加工材である。部分的に抉り状の加工が入り、断面は円形状に整形される。265は、把手と考えられるが、何に付随するのか不明である。断面は円形に整形される。

D　漆製品

漆製品は、結歯式の竪櫛266の1点のみである。残存長は31×30㎜で、櫛の棟部のみが残る。竹櫛状の素材を糸で縛り、黒色漆を塗って固めて成形したものと考えられる。なお、製作時の所見については、第Ⅳ章4節に詳細を記載している。

E　石製品

石製品は、管玉、臼玉、石製模造品、紡錘車（紡輪）、砥石、棒状礫の計43点がある。遺構外出土のものは、全てⅡ層から出土した（第75～77図）。

303・304は、ＳＸ50掘場から出土した管玉である。碧玉（緑色凝灰岩）を素材とし、長さ21㎜前後、直径6.5㎜の円筒形を呈する。303は風化の影響を強く受けているため、表面の剥落や欠損部が見られる。304は比較的状態の良い完形品である。表面を丁寧に研磨し、両側から穿孔した孔は径約2㎜を測る。

305は、遺構外から出土した臼玉である。側面に稜が認められず、直線的で丁寧に研磨される。素材は碧玉（緑色凝灰岩）である。管玉と幅が近似することから、管玉状のものを切って作成したと考えられる。

306・307は、黒色の粘板岩を素材に用いた有孔の石製品である。306は、ＳＸ119性格不明遺構の底面から出土した双孔円板である。逆台形状を呈し、両側から穿孔した2つの孔が確認できる。307は、遺構外出土の勾玉形をなす石製模造品である。長さ44㎜、幅25㎜、厚さ6㎜を測る。頭部の穿孔は両側から行われている。頭部から尾部への屈曲は弱く、尾部には、若干の欠損が認められる。

本遺跡から北東約3㎞の南原遺跡からも、黒色系の粘板岩を用いた有孔円板が出土する。石製模造品に多く用いられる粘板岩は、県内では産出しない。また、石製模造品を製作する遺跡も現在までに確認されないことから、これらは他地域からの搬入品の可能性が高い。

308は、ＳＴ105竪穴住居跡の床面から出土した石製の紡錘車である。素材は滑石を用い、逆截頭円錐形を呈する。直径38㎜、孔径5.5㎜を測り、表裏面と側面に擦痕が観察される。古墳時代中期以降から截頭円錐形の滑石製紡錘車が多くなる傾向と対応している。

309・310は、遺構外から出土した砥石である。309は角状を呈する砥石で、磨面が5面で見られる。中央部の窪み状の欠損は、被熱した際の火はねによるものと考えられる。310は、凝灰質の砂岩、もしくは泥岩を素材とする板状の砥石である。面積の広い2面を使用し、磨面と数本の条痕が認められる。金属製品の仕上砥に使用したと考えられる。

267～302は、ＳＴ104竪穴住居跡とＳＸ49集石から出土した棒状礫である。出土点数は総計40点を数え、いずれも長楕円形や長方形を呈する自然礫を素材に用いている。長さ9～15㎝、幅3～6㎝、重量は平均で160ｇ前後を測る。敲打等の加工痕は認められない。法量が似通った礫が集中して出土することから、編物に用いた編物石として捉えた。

Ｆ　自然遺物

329は、ＳＫ133土坑の覆土出土の炭化した種子で、外皮が残存しているものである。

3　中世・近世の遺構と遺物

中世・近世の遺構は、いずれも溝跡である。出土遺物は少量であるが、陶磁器や曲物の底板等の木製品がある。

Ａ　遺　構

ＳＤ12溝跡（第42図、写真37）

1区北西隅の19・20－Ｆ、20－Ｇグリッドにかけて検出された。ＳＤ13・15溝跡に切られる重複関係を持つ。溝跡北側は、開田時の削平により消滅したと考えられる。（規模）検出長約9.33ｍ、幅30㎝前後、検出面からの深さは15㎝程である。（断面形）壁面が緩やかに立ち上がるＵ字状を呈し、底面には凹凸が若干見られる。（覆土）上層に黒褐色シルト、下層に灰色粘質土が堆積する。（出土遺物）底面から土師器片が多量出土するが、大半が周辺に近接する古墳時代の遺構からの流れ込みである。（時期）中世以前の時期と考えられるが、詳細は不明である。

ＳＤ13溝跡（第42図、写真37）

1区北壁面から中央部西壁10－Ｅグリッドにかけて検出された。南南西から北北東へ伸びる。ＳＤ12溝跡を切る重複関係を持つ。溝跡は北側の2区にまで至ると考えられるが、開田時の削平で消滅したと考えられる。（規模）検出長約110ｍ、幅1.0～1.3ｍ、検出面からの深さは25㎝程である。（断面形）壁面が急角度で立ち上がる逆台形状を呈し、ほぼ平坦な底面である。（覆土）黒褐色を基調とする粘質土で、上位層が植物遺体を含む有機物層である。（出土遺物）底面から土師器片が多量出土するが、古墳時代の包含層を切って造成された際の混入と考えられる。（時期）時期を示す遺物は乏しいが、放射性炭素年代測定では、溝底面から出土した骨片の分析により、13世紀代という結果が得られている。

ＳＤ15溝跡（第42図、写真37）

1区北西隅の19－Ｅグリッドで検出された。東西に伸びる。ＳＤ12溝跡を切る重複関係を持つ。（規模）長さ3.25ｍ、幅40㎝前後、検出面からの深さは10㎝程である。（断面形）壁面が急角度で立ち上がる逆台形状を呈し、ほぼ平坦な底面である。（覆土）黒色を基調とする粘質土である。（時期）遺物の出土が無く、不明である。

ＳＤ16溝跡（第44図、写真37）

1区中央の西寄り14－Ｅグリッドで検出された。主軸方向はＮ－20°－Ｅを示す。（規模）検出長約13.2ｍ、幅1.0～1.2ｍ、検出面からの深さは30㎝程である。（断

面形）壁面が急角度で立ち上がる逆台形状を呈し、ほぼ平坦な底面である。（覆土）黒色を基調とする粘質土で、酸化鉄を多量に含む。（出土遺物）ＳＤ13溝跡と同様、混入した土師器片の出土が多い。また、覆土中から唐津焼の皿が１点出土する。（時期）出土遺物から近世と推測される。

ＳＤ126溝跡（第20図）

２区32～36－Ｊ、37～40－Ｋ、40・41－Ｌグリッドにかけて検出された。ＳＤ123溝跡を切り、ＳＴ103竪穴住居跡に切られる重複関係を持つ。北北東から南南西に伸びる。（規模）検出長約43ｍ、幅35～115㎝である。（断面形）壁面が緩やかに立ち上がる浅い皿状を呈する。（覆土）黒褐色の粘質土を基とする自然堆積層である。（出土遺物）覆土や底面から土師器片が少量出土するが、周辺の古墳時代の遺構からの流れ込みである。（時期）覆土の状況より中世以降の時期と考えられる。

ＳＤ160溝跡（第40・41図、写真34・35）

２区34－Ｊ・Ｋグリッドにかけて検出された。ＳＤ167・172溝跡に切られる重複関係を持ち、北東から南西に伸びる。（規模）検出長約4.8ｍ、幅30～135㎝、溝南東端が深く落ち込み、検出面から最も深い地点で37㎝程である。（断面形）壁面が緩やかに立ち上がるＵ字状を呈する。（覆土）３層に分かれ、黒褐色シルトを基調とした自然堆積層である。（出土遺物）覆土や底面から土師器片が少量出土するが、周辺の古墳時代の遺構からの流れ込みである。（時期）覆土がＳＤ126溝跡と類似することから中世以降の時期と考えられる。

Ｂ　遺　物

中世・近世陶磁器（第78図）

出土した陶磁器について、以下に述べる。

327は、中国産の青磁碗である。鎬連弁文が施され、釉色はオリーブ灰色、胎土は灰色で緻密である。龍泉窯系青磁碗で、鎌倉時代のものと考えられる。315は、中世陶器片と思われるが、時期的な詳細は不明である。外面は黒褐色で焼き締めており、自然釉がかかる。灰白色の胎土は緻密で、内外面に白い微小な斑点がみられる。

近世陶磁器であるが、313・314は肥前陶器の皿である。313は、砂目積みで、内面に３ヶ所の目跡が認められる。高台は削り出し成形である。314は、底部が削りにより碁笥底となる。釉調が313と類似するので、砂目積みの段階と考えられる。両者は、17世紀前半に位置づけられる。318は、肥前系磁器の染付碗である。器形から18世紀末から19世紀前半と考えられる。見込に圏線と文様が描かれるが、残存部が少なく不明である。

316は、大堀相馬焼の碗で、糠白釉を施し、高台は露胎である。年代は19世紀代である。317は、会津本郷焼と思われる擂鉢体部破片である。卸目がまばらに施され、内外面は鉄釉により暗赤褐色を呈する。18世紀代と考えられる。

木製品（第78図）

中世の木製品は、ＳＤ13溝跡を中心に出土が確認された。６点を図示した。

319、324は、曲物の底板と考えられる。319は、底面の一部が炭化している。324は、中央に直径14㎜ほどの円孔がある。片面が被熱のためか黒変している。

320は箸の可能性が考えられる。幅８㎜、厚さは３㎜で、両端を欠く。炭化が認められる。

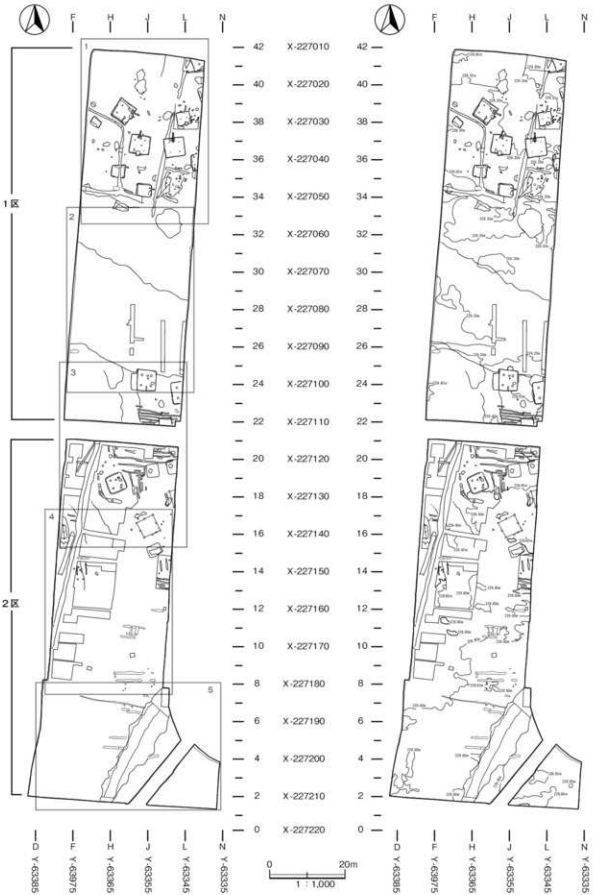
321～323は、用途不明の加工材である。321は、先端が尖り、反対側は円孔の加工が施されるが、孔の部位で破損している。322は、短冊状の材の中央に直径約10㎜の円孔がある。323は、板材状の一端に、抉り状の加工が施される。

4　その他の遺物

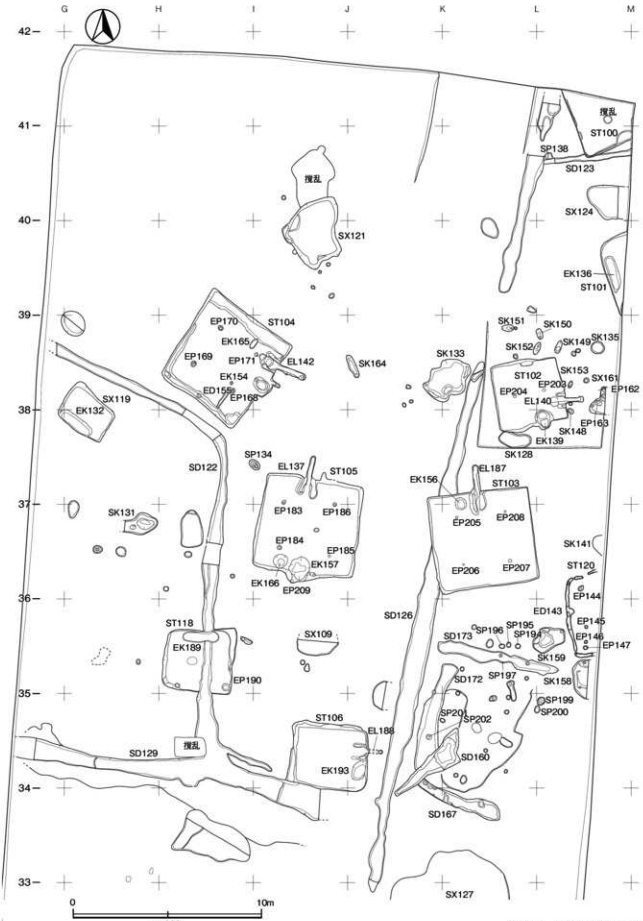
遺構外から出土した石器・須恵器有台坏である。325の石器は、Ⅱｂ層出土の剥片である。明確な二次調整を持たないが、石質が良好なため、実際に使用した可能性も考えられる。

326は、基本層序③地点の土層観察の際に出土した須恵器有台坏である。奈良・平安時代に属すると推測されるが、この時期に該当する遺構は認められなかった。

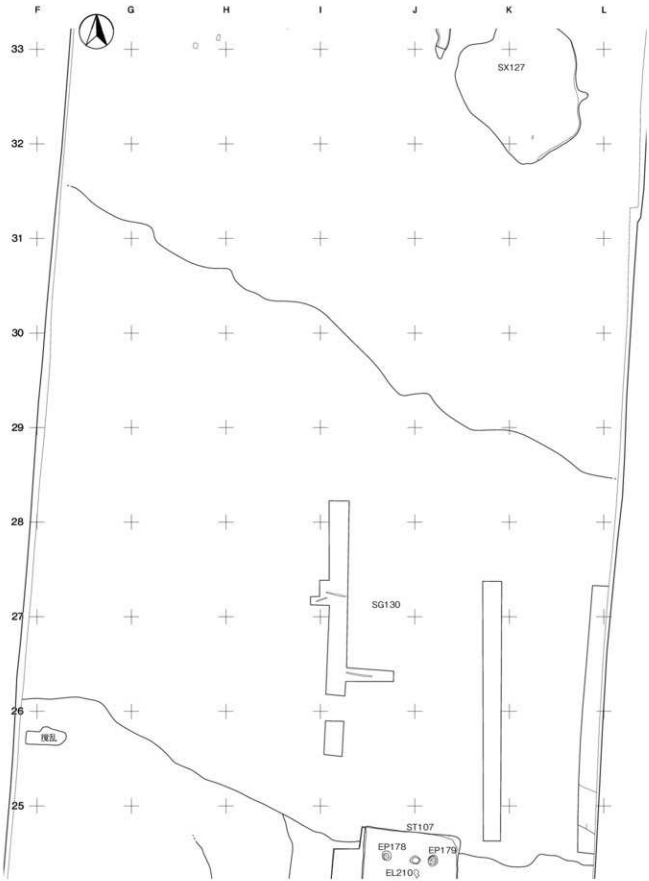
328は、Ⅱｂ層から出土した古銭である。北宋で鋳造された「咸平元寶」で、径24㎜、中央の方形状の孔は一辺７㎜である。11世紀前半頃の鋳造年代が知られている。


F
H
J
L
N
1区
2区
1
2
3
4
5
X-227010
X-227020
X-227030
X-227040
X-227050
X-227060
X-227070
X-227080
X-227090
X-227100
X-227110
X-227120
X-227130
X-227140
X-227150
X-227160
X-227170
X-227180
X-227190
X-227200
X-227210
X-227220
42
40
38
36
34
32
30
28
26
24
22
20
18
16
14
12
10
8
6
4
2
0
D Y-63385
F Y-63375
H Y-63365
J Y-63355
L Y-63345
N Y-63335
0
20m
1 : 1,000

第４図　調査区全体図

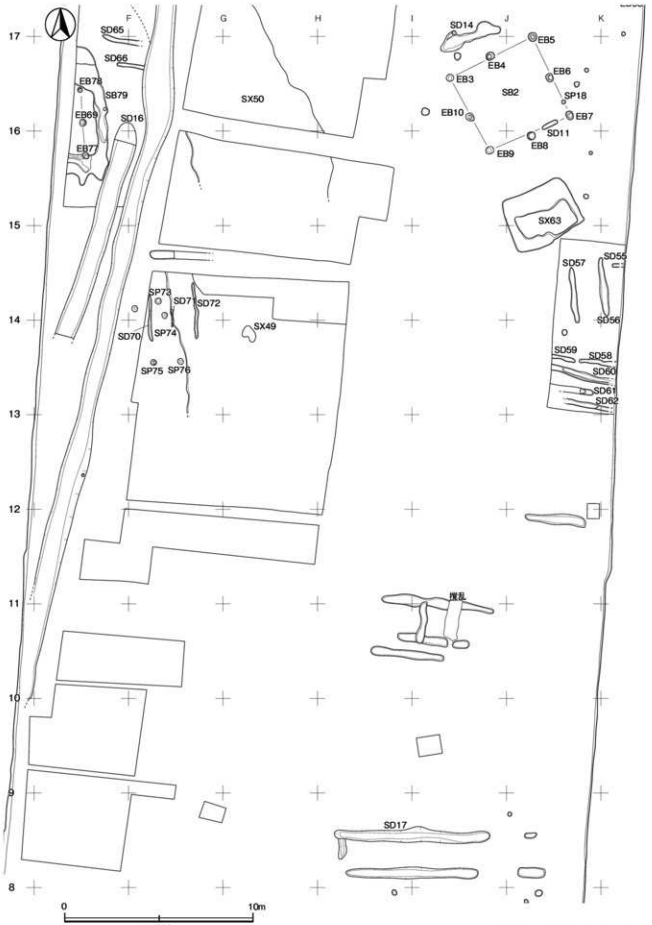


第5図　2区北遺構配置図

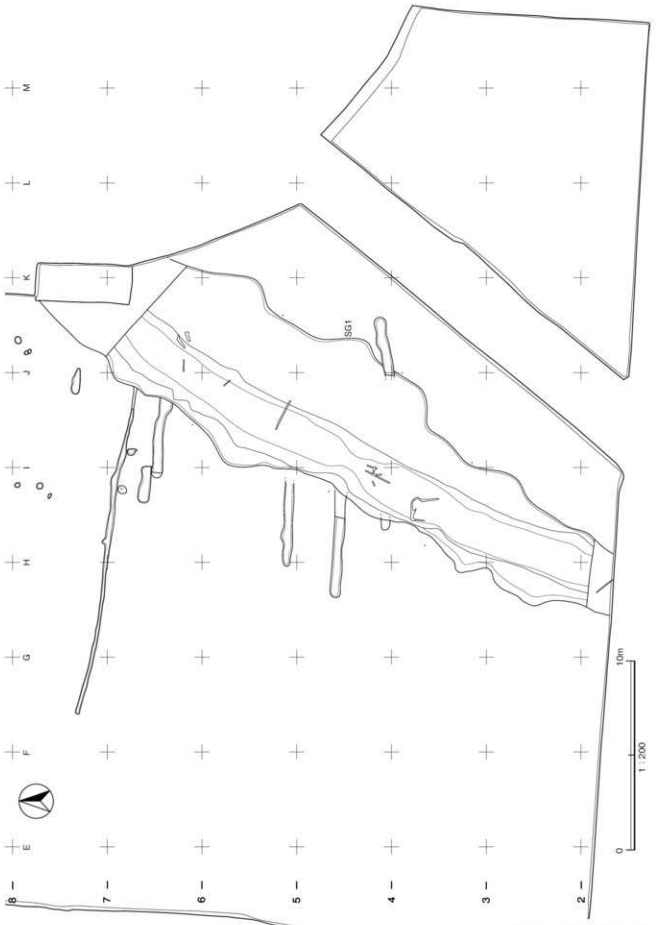


第6図　2区中央遺構配置図

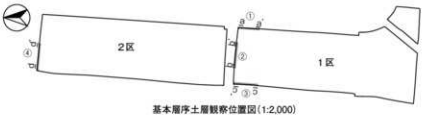
第７図　２区南・１区北遺構配置図



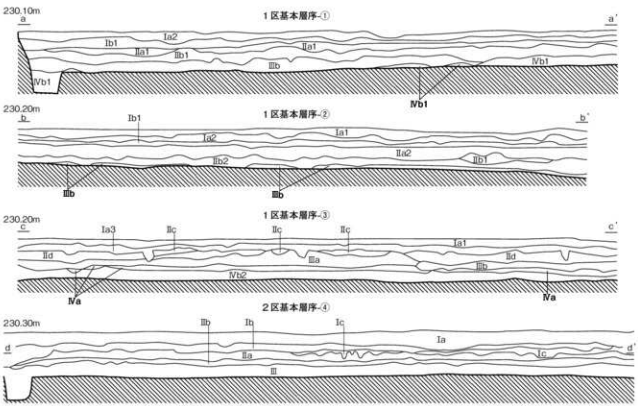
第８図　１区中央遺構配置図



第９図　１区南遺構配置図



基本層序土層観察位置図(1:2,000)



1区基本層序①～③

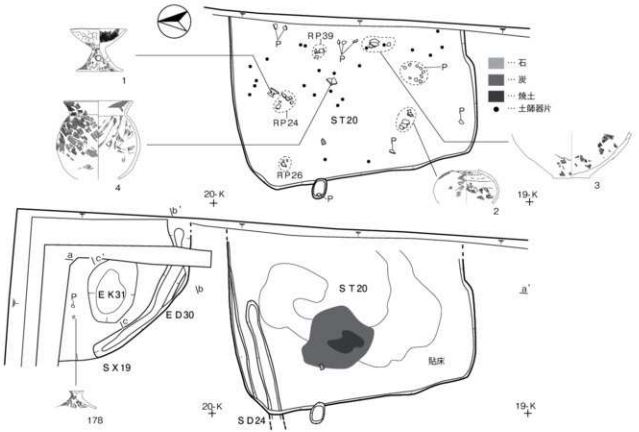
Ⅰa1	10Y R3/2	黒褐色シルト	しまり強い、表土
Ⅰa2	10Y R3/1	黒褐色シルト	酸化鉄を含む、耕作土
Ⅰa3	10Y R4/1	褐灰シルト	しまり強い、黒色泥炭を微量、酸化鉄を少量含む
Ⅰb1	10Y R3/1	黒褐色シルト	しまり強い、黒色シルトを３%含む、耕作の攪乱を受ける
Ⅰb2	10Y R4/2	灰黄褐色シルト	しまり強い、粘性中、黒褐色シルトを２%含む
Ⅱa1	2.5Y 3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、酸化鉄を含む
Ⅱa2	10Y R3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、炭化物を10%含む
Ⅱb1	10Y R2/1	黒色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、酸化鉄を含む、炭化物を微量含む
Ⅱb2	10Y R2/1	黒色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、黄灰色粘質シルトを５%含む
Ⅱc	10Y R2/2	黒褐色泥炭	しまり弱い、褐灰色シルトを10%含む、分解した泥炭層
Ⅱd	10Y R2/2	黒色シルト	しまり弱い、粘性弱い、褐灰色シルトを微量、酸化鉄を含む
Ⅲa	10Y R2/2	黒色シルト	しまり弱い、粘性弱い、褐灰色シルトを微量、酸化鉄を含む、遺物包含層
Ⅲb	2.5Y 3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、酸化鉄、炭化物を微量含む、遺物包含層
Ⅳa	2.5Y4/1	黄灰粘質シルト	しまり強い、粘性強い、酸化鉄を含む
Ⅳb1	10Y R5/1	褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、酸化鉄を含む、遺構検出面
Ⅳb2	2.5Y4/1	黄灰色シルト	しまり強い、粘性強い、酸化鉄を含む、遺構検出面

2区基本層序④

Ⅰa	10Y R4/1	褐灰色粘質シルト	しまり強い、表土
Ⅰb	10Y R3/1	黒褐色シルト	しまり強い、礫粒を３%、酸化鉄を少量含む
Ⅰc	10Y R4/2	灰黄褐色粘質シルト	しまり強い、粘性弱い、褐灰色粘土を５%、植物遺体を少量含む
Ⅱa	10Y R2/1	黒色粘質シルト	しまり強い、にぶい黄褐色シルトを３%、酸化鉄を少量含む
Ⅱb	10Y R4/1	褐灰色砂質シルト	しまり強い、黄灰色砂質シルトを２%、植物遺体を少量含む
Ⅲ	2.5Y6/1	黄灰色砂質シルト	しまり強い、礫粒を５%含む、遺構検出、地山

0　2m
1：60（断面図）

第10図　調査区基本層序



SX19

1	10YR3/2	黒褐色シルト	しまり強い、黒色シルトを25%含む、Ⅱb1層
2	2.5Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、酸化鉄を少量含む
3	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、植物遺体、炭化物を微量含む、Ⅱ層
4	2.5Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、Ⅳ層ブロックを少量含む
5	5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、SD30覆土
6	5Y2/1	黒色粘質シルト	粘性強い、炭化物を微量含む、EK31覆土

ST20

1	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、黄灰色シルトを2%、炭化物、酸化鉄を少量含む
2	5Y3/1	オリーブ黒色シルト	しまり強い、灰色シルトを10%含む
3	5Y4/1	灰色シルト	しまり強い、粘性弱い、黒色シルトを2%、酸化鉄を少量含む
4	5Y5/1	灰色シルト	しまり強い、黒色シルトを2%含む

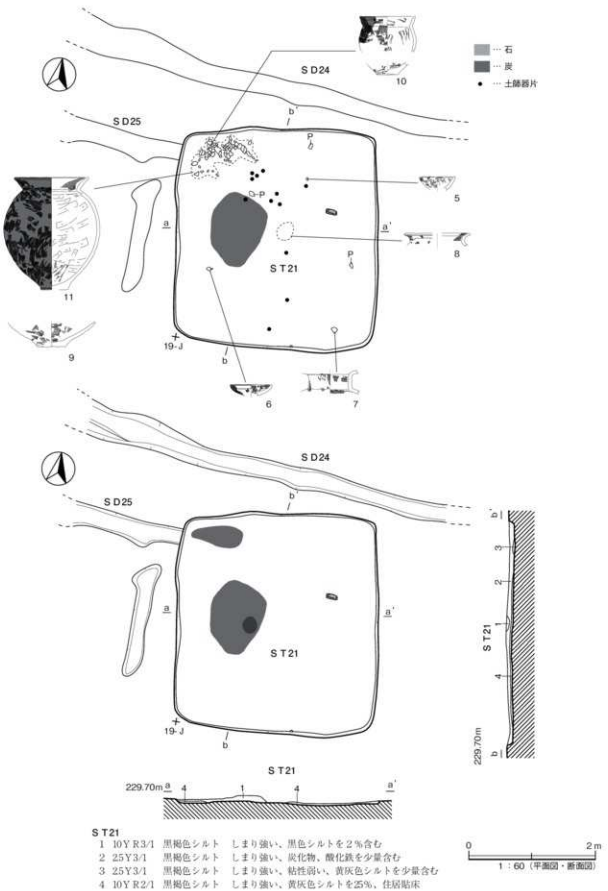
SX19 ED30

1	5Y2/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性弱い、植物遺体を少量含む

SX19 EK31

1	5Y2/1	黒色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、炭化物を微量、植物遺体を少量含む

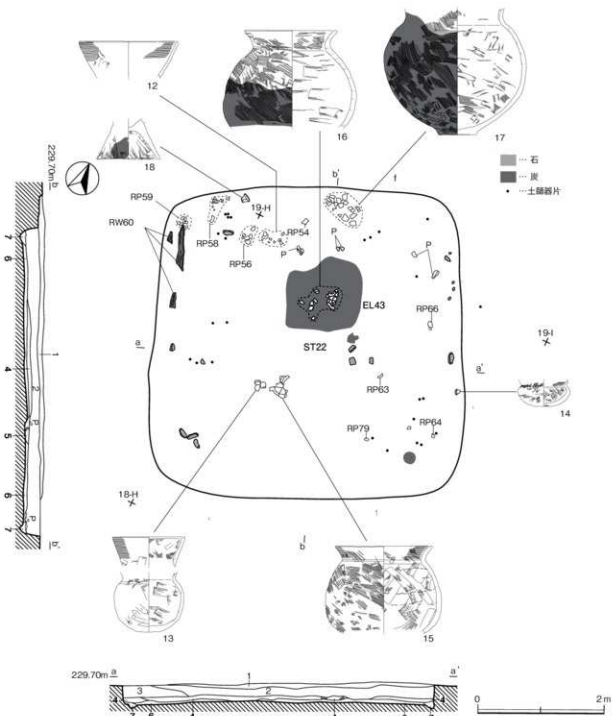
第11図　ST20竪穴住居跡・SX19性格不明遺構



ST21
1　10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、黒色シルトを２％含む
2　25Y3/1　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物、酸化鉄を少量含む
3　25Y3/1　黒褐色シルト　しまり強い、粘性弱い、黄灰色シルトを少量含む
4　10YR2/1　黒褐色シルト　しまり強い、黄灰色シルトを25％、住居貼床

0　2m
1：60（平面図・断面図）

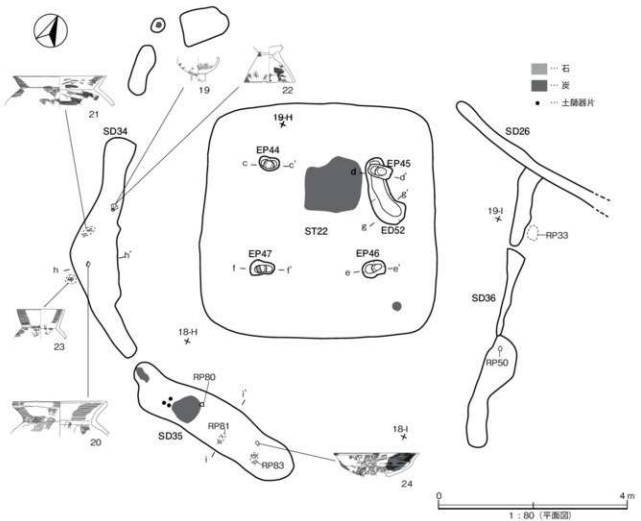
第12図　ST21竪穴住居跡

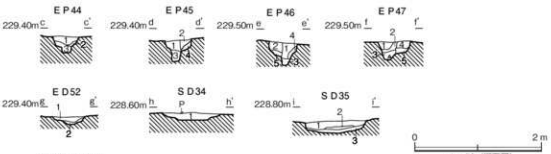


S T22

1	2.5Y5/2	灰黄褐色シルト	しまり強い、黒色シルトを15%含む
2	5Y3/1	オリーブ黒色シルト	しまり強い、植物遺体を少量、炭化物を微量含む
3	5Y3/1	オリーブ黒色シルト	しまり強い、粘性弱い、灰色シルトを15%含む
4	10Y R3/2	黒褐色シルト	しまり強い、オリーブ黒色シルトを10%含む、炭化物を15%含む
5	10Y R2/1	黒色粘質シルト	しまり強い、炭化物を非常に多く含む、炉跡上面の炭層
6	5Y3/1	オリーブ黒色シルト	しまり強い、灰オリーブ色微砂を30%含む、住居貼床
7	5Y5/1	灰色オリーブ砂	しまり強い、オリーブ黒色シルトを10%含む、住居内壁溝覆土

第13図　ＳＴ22竪穴住居跡（1）





S D34・S D35

1 10Y R3/1 黒褐色粘質シルト 炭化物を20%、遺物を少量含む
2 10Y R4/1 褐灰色粘質シルト 粘性弱い、黒褐色シルトを10%含む
3 10Y R2/1 黒色粘土 粘性強い、炭化物を10%、地山塊を20%含む

E P44・E P45

1 25Y2/1 黒色粘土 しまり強い、粘性強い、炭化物、地山塊を10%含む
2 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 しまり弱い、粘性強い、地山塊を10%を含む
3 25Y3/1 黒褐色粘土 しまり強い、褐灰色シルトを10%含む
4 10Y R4/1 褐灰色粘質シルト しまり強い、炭化物を10%含む

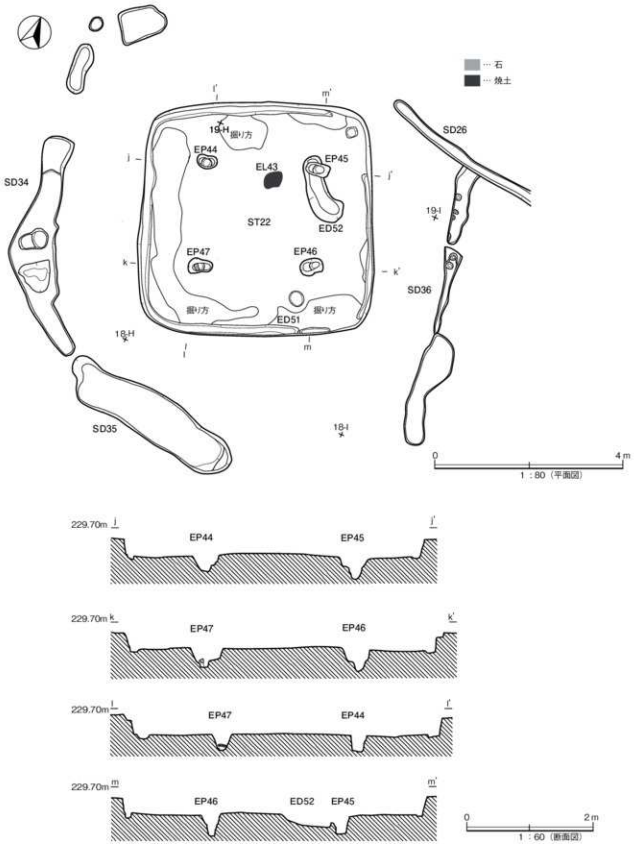
E P46・E P47

1 25Y2/1 黒色粘土 しまり強い、粘性強い、炭化物、地山塊を10%含む
2 25Y3/1 黒褐色粘土 しまり強い、炭化物を10%、地山塊を20%含む
3 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 しまり弱い、粘性強い、地山塊を10%、拳大の石を含む
4 25Y3/1 黒褐色粘土 地山質土を５%含む
5 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 しまり強い、粘性強い、地山塊を20%含む、抜き取り痕

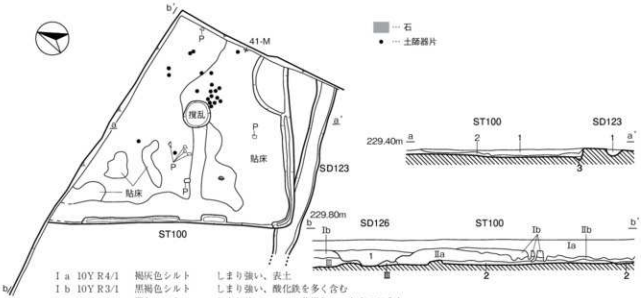
E D52

1 10Y R5/3 黄褐色粘質シルト 炭化物を５%含む、地山塊を10%含む
2 10Y R4/2 灰黄褐色シルト 炭化物を５%含む、地山塊を10%含む

第 14 図　ＳＴ 22 竪穴住居跡（2）



第15図　ＳＴ22竪穴住居跡（3）



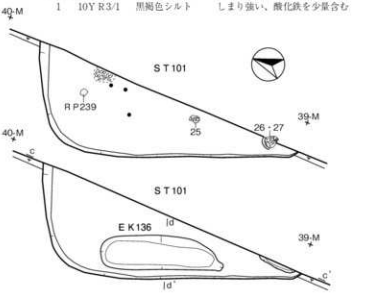
Ⅰa 10Y R4/1 褐灰色シルト しまり強い、表土
Ⅰb 10Y R3/1 黒褐色シルト しまり強い、酸化鉄を多く含む
Ⅱa 10Y R2/1 黒色シルト しまり強い、にぶい黄褐色シルトを3％含む
Ⅱb 10Y R4/1 褐灰砂質シルト 酸化鉄を少量含む
Ⅲ 10Y R4/2 灰黄褐色シルト

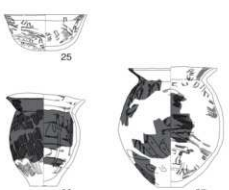
S T 100

1 10Y R1.7/1 黒色砂質シルト しまり強い、粘性弱い。礫を微量、暗褐色砂質シルトを2％含む
2 10Y R3/2 黒褐色砂質シルト しまり強い、粘性弱い、灰黄褐色シルトを5％含む
3 10Y R2/1 黒褐色シルト しまり強い、炭化物を2％含む

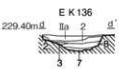
S D 123・126

1 10Y R3/1 黒褐色シルト しまり強い、酸化鉄を少量含む





0 2m
1：60（平面図・断面図）



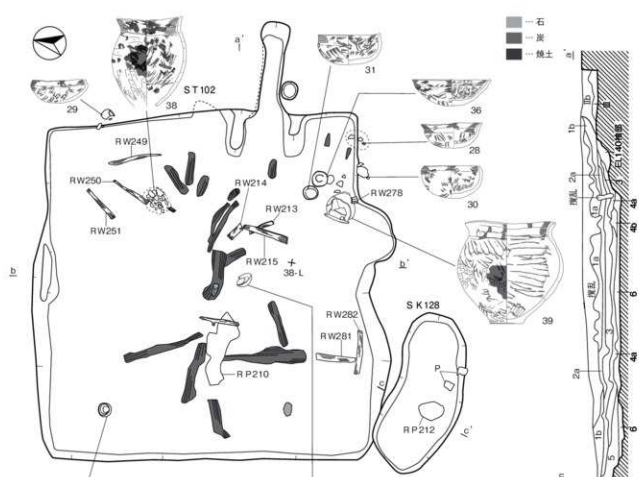
S T 101

1 10Y R3/2 黒褐色砂質シルト 粘性弱い、暗褐色シルトを5％含む
2 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 暗褐色シルトを10%、炭化物を5％含む
3 2.5Y5/1 暗灰黄色シルト 黄灰色シルトを5%、炭化物を3％含む
4 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト しまり強い、黄灰色シルトを10%、炭化物を3％含む
5 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト 黄灰色シルトを10%含む。
6 2.5Y2/1 黒色粘土 粘性強い、炭化物を3％、遺物を少量含む

E K 136

1 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト しまり強い、黄灰色シルトを10%含む
2 2.5Y2/1 黒色シルト 黒褐色シルトを3％含む

第16図 S T 100・101 竪穴住居跡



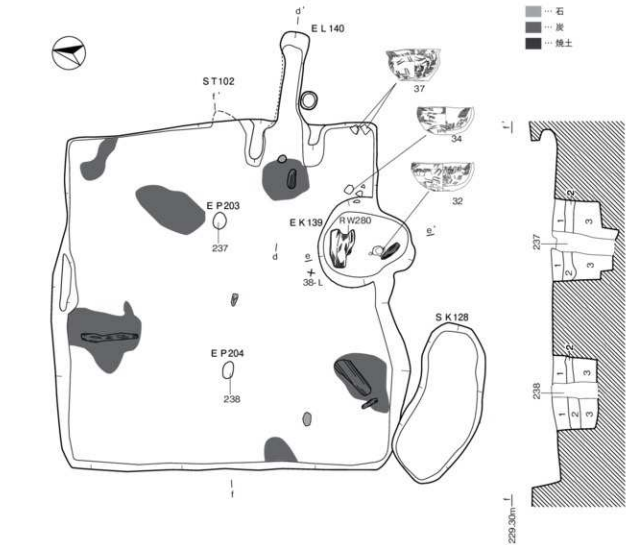
ST102

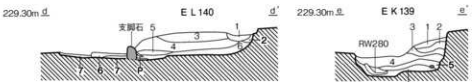
1a	10Y R2/2	黒褐色粘質シルト	粘性弱い、植物遺体を帯状に10%含む
1b	2.5Y5/1	褐灰色シルト	黄灰色シルトを３%含む
2a	10Y R2/1	黒色粘質シルト	粘性弱い、植物遺体を多く含む
2b	10Y R4/1	褐灰色粘質シルト	しまり強い、黄灰シルトと炭化物を５%含む
3	2.5Y8/2	灰白色粘土	粘性強い、炭化物を３%含む
4a	2.5Y2/1	黒色粘質シルト	黄灰色シルトを３%、炭化物を10%含む
4b	2.5Y3/1	暗褐色シルト	住居構築材（RW213～215）
5	2.5Y3/2	黒褐色シルト	しまり強い、黄灰色シルトと炭化物を10%含む
6	2.5Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、炭化物を15%含む（床面直上）
7	2.5Y2/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、炭化物を５%を含む、ＥK139覆土
8	10Y R3/2	黒褐色粘土	しまり強い、黄灰色シルトを３%含む
9	2.5Y5/2	灰黄褐色シルト	しまり強い、黒褐色シルトを３%含む

SK128

1	10Y R2/1	黒色粘質シルト	粘性弱い、炭化物を３%、遺物を含む
2	10Y R3/2	黒褐色シルト	しまり強い、黄灰色シルトを３%含む
3	2.5Y4/1	褐灰色シルト	炭化物を３%含む
4	2.5Y3/1	暗褐色シルト	黄灰色シルトを２%含む

第17図　ＳＴ102竪穴住居跡（1）





E K 139

1	2.5Y4/1	黄灰色シルト	灰黄色シルトを10%含む
2	2.5Y2/1	黒色粘土	粘性強い、酸化鉄を多く含む
3	5Y5/2	灰黄色シルト	しまり強い、灰黄色シルトを20%含む
4	2.5Y3/1	黒褐色粘土	粘性強い、炭化物を３%含む
5	2.5Y4/1	黄灰色粘質シルト	しまり強い、灰黄色シルトを20%含む
6	2.5Y3/1	黒褐色粘質シルト	炭化物を５%含む、木製品出土

E L 140

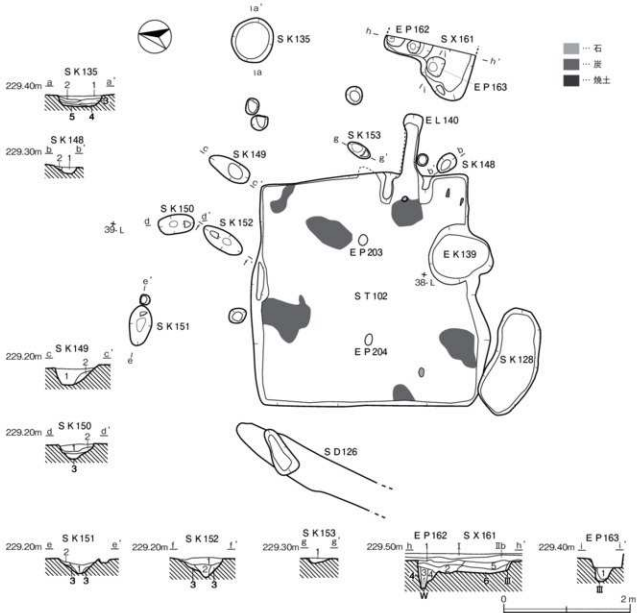
1	10YR4/2	灰黄褐色粘質シルト	粘性弱い、灰黄色シルトを３%含む
2	10YR2/1	黒色粘質シルト	炭化物を粒子状に５%含む
3	2.5Y7/2	灰黄色シルト	しまり強い、黒褐色粘土を５%を含む
4	2.5Y4/1	黄灰色シルト	しまり強い、灰黄色シルトと炭化物を３%含む
5	5Y5/2	灰オリーブ色シルト	しまり強い、酸化鉄を少量含む
6	2.5Y2/1	黒色粘質シルト	しまり強い、炭化物を10%含む
7	2.5Y5/2	暗灰黄色シルト	しまり強い、黒色粘土を１%含む

E P 203・E P 204

1	5Y5/1	灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い
2	5Y3/1	灰黄色シルト	しまり強い、粘性強い
3	5Y4/1	灰色砂	しまり強い

0　2m
1：40（平面図・断面図）

第18図　ＳＴ102竪穴住居跡（2）



S K 135

1	10Y R4/1	褐灰色粘質シルト	粘性弱い、炭化物を２％含む
2	2.5Y5/2	暗灰黄粘質シルト	粘性弱い、灰黄色シルトを５％含む
3	2.5Y3/2	黒褐色粘質シルト	しまり強い、炭化物を５％含む
4	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	しまり強い、灰黄色シルトを７％含む
5	10Y R2/1	黒色粘土	しまり強い、粘性強い

S K 148・149・150・151・152・153

1	10Y R3/2	黒褐色粘土	粘性強い、灰黄色シルトを10%含む
2	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質シルト	粘性強い、灰黄色シルトを５％含む
3	2.5Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、灰黄色シルトを３％含む

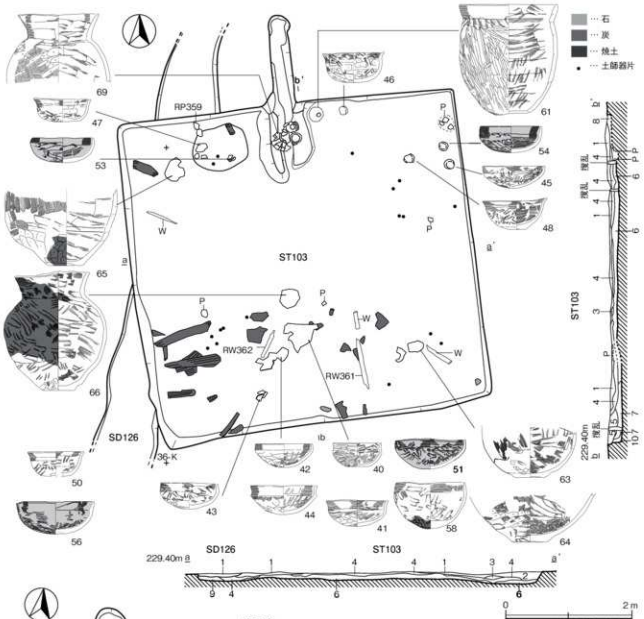
S X 161

1	10Y R2/1	黒色シルト	炭化物を５％含む
2	10Y R3/1	黒褐色粘質シルト	粘性弱い、灰黄色シルトを３％含む
3	10Y R3/3	暗褐色粘土	粘性強い、酸化鉄を少量含む、柱痕
4	5 Y6/2	灰黄色シルト	黒褐色粘土を３％含む、柱穴埋土
5	2.5Y3/2	黒褐色粘質シルト	灰黄色シルトを５％含む
6	2.5Y4/1	黄灰色シルト	黒褐色粘土を１％含む

E P 163

1	2.5Y3/2	黒褐色粘質シルト	

第 19 図　ＳＴ 102 竪穴住居跡（3）



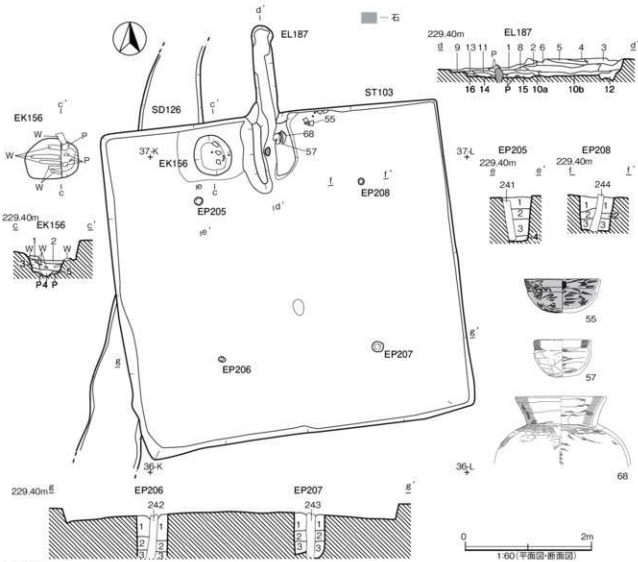
ST103

1	10Y R1.7/1	黒色シルト	しまり弱い、泥炭を含む
2	10Y R3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、炭化物、酸化鉄を少量含む
3	10Y R1.7/1	黒色シルト	しまり弱い、粘性弱い、酸化鉄を少量含む
4	10Y R5/2	灰黄褐色粘質シルト	粘性強い、炭化物を微量、黒色シルトを30%含む
5	10Y R3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、黒色シルトを5%含む
6	2.5Y2/1	黄灰色砂質シルト	しまり強い、黒褐色シルトを5%含む
7	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり弱い、炭化物、植物遺体を少量含む
8	10Y R3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、褐灰色シルトを微量含む
9	10Y R4/1	褐灰色シルト	しまり弱い、植物遺体を少量含む
10	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い

SD126

1	10Y R3/2	黒褐色粘質シルト	しまり強い、酸化鉄を微量含む

第20図　ST103竪穴住居跡（1）



EL187

1	10YR3/2	黒褐色シルト	しまり強い、灰黄褐色シルトを2%、酸化鉄を少量含む
2	10YR4/2	灰黄褐色シルト	しまり強い、粘性強い、黒色シルトを3%含む
3	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、暗灰黄色砂質シルトを20%、焼土を10%含む
4	10YR2/1	黒色シルト	しまり強い、暗灰黄砂質シルトを5%含む
5	10YR1.7/1	黒色シルト	しまり強い、酸化鉄を微量含む
6	10YR2/1	黒色シルト	しまり強い、酸化鉄を少量含む
7	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、粘性強い、黒褐色砂質シルトを10%含む
8	10YR4/1	褐灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、焼土粒を5%含む
9	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、植物遺体を少量含む
10a	10YR4/1	褐灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、焼土を少量含む
10b	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、焼土ブロックを10%含む
11	10YR4/2	灰黄褐色砂質シルト	しまり強い、植物遺体を少量含む、カマド崩落土
12	2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトを10%含む
13	10YR3/2	黒褐色シルト	しまり強い、にぶい黄褐色シルトを5%、炭化物を含む
14	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、粘性強い、黒褐色砂質シルトを10%含む
15	7.5YR3/2	黒褐色シルト	しまり強い、焼土
16	2.5Y5/1	黄灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、地山

EP206-207

1	5Y5/1	灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い
2	5YR3/1	オリーブ黒色シルト	しまり強い、粘性強い
3	5Y4/1	灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い

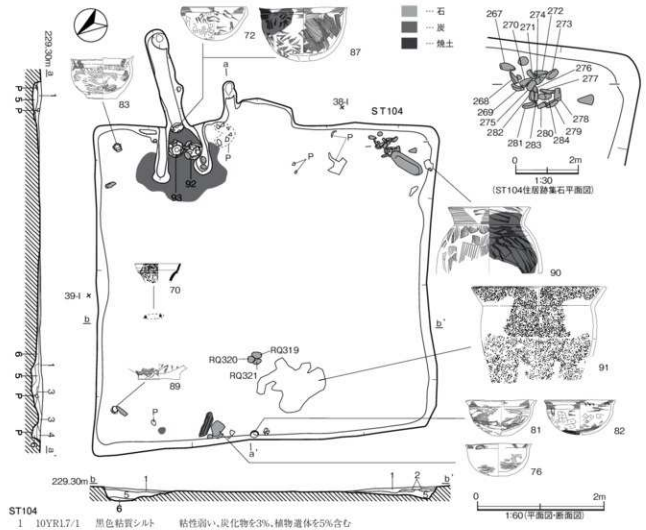
EP205-208

1	5Y5/1	灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い
2	5Y5/1	灰色砂	しまり強い
3	5YR3/1	オリーブ黒色シルト	しまり強い、粘性強い
4		礫層	

EK156

1	5Y4/1	灰色砂質シルト	炭化物を微量含む
2	2.5Y3/1	黒褐色シルト	炭化物を微量含む
3	2.5Y5/1	黄灰色砂質シルト	しまり強い、炭化物（φ5㎜）を微量含む
4	2.5Y3/2	黒褐色シルト	しまり強い、粘性強い、植物遺体を含む
5	5Y5/1	灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い

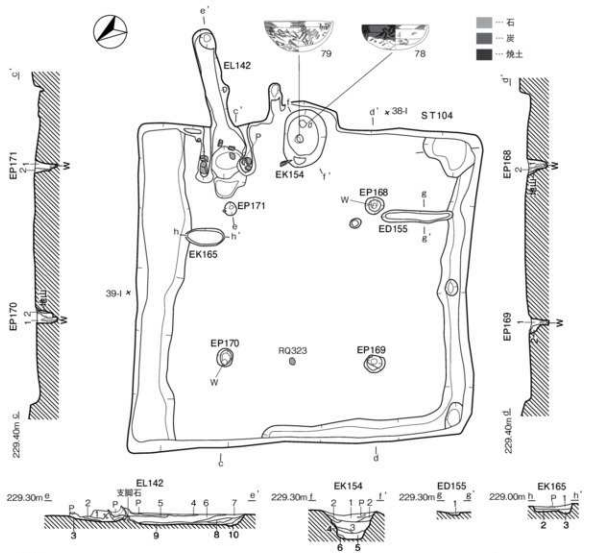
第21図　ST103竪穴住居跡（2）

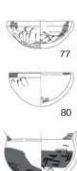


ST104

1	10YR1.7/1	黒色粘質シルト	粘性弱い、炭化物を3%、植物遺体を5%含む
2	2.5Y4/1	黒褐色砂質シルト	灰黄色シルトを20%、植物遺体を10%含む
3	10YR4/2	灰黄褐色細砂	しまり弱い、礫粒を少量含む
4	2.5Y5/2	暗灰黄色シルト	炭化物を3%含む
5	2.5Y3/1	黒褐色粘質シルト	粘性強い、灰黄色シルトを斑状に10%含む、貼床
6	10YR3/2	黒褐色粘土	粘性強い、灰黄色シルトを2%含む

第 22 図　ＳＴ 104 竪穴住居跡（1）





EL142

1	10YR3/1	黒褐色粘質シルト	しまり弱い、炭化物を3%、遺物を多く含む
2	10YR5/2	灰黄褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、焼土塊を20%、炭化物を10%含む
3	10YR1.7/1	黒色粘質シルト	しまり強い、粘性弱い、炭化物を10%含む
4	2.5Y5/2	暗灰黄色シルト	しまり強い、黒色粘土を3%含む
5	2.5Y6/2	灰黄色シルト	しまり強い、黒色粘土を1%含む、地山塊
6	2.5Y4/1	黄灰色シルト	しまり強い、灰黄色シルトを3%含む
7	5Y6/2	灰オリーブ色シルト	しまり強い、焼土を帯状に含む、炭化物を5%含む
8	2.5Y6/2	灰黄色シルト	しまり強い、地山塊
9	10YR3/2	黒褐色粘土	しまり強い、炭化物を5%を帯状に含む
10	5Y5/2	灰オリーブ色シルト	しまり強い、炭化物を1%含む

EP168・169・170・171

1	10YR3/3	暗褐色粘質シルト	粘性弱い、柱材片を多く含む(柱材)
2	2.5Y6/2	灰黄色シルト	礫石を少量含む(柱穴埋土)

EK154

1	10YR2/1	黒褐色粘質シルト	炭化物を3%含む、遺物を少量含む
2	5Y5/2	灰オリーブ色シルト	粘性強い、灰黄色シルトを5%含む
3	2.5Y2/1	黒色粘質シルト	粘性強い、灰黄色シルトを10%含む
4	2.5Y4/1	黄灰色粘質シルト	しまり強い、灰黄色シルトを5%含む
5	2.5Y2/1	黒色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物を3%、礫粒を少量含む
6	2.5Y4/1	黄灰色粘質シルト	粘性弱い、礫粒を少量含む

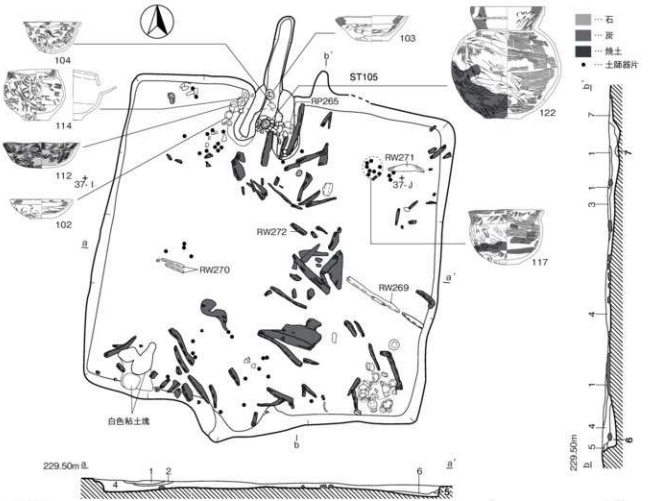
ED155

1	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質シルト	粘性弱い、黒褐色粘土を3%、下層に礫を少量含む

EK165

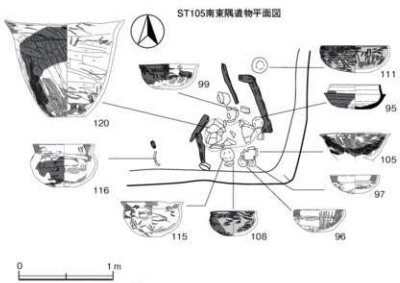
1	10YR2/1	黒褐色粘質シルト	炭化物を3%含む、遺物を含む
2	2.5Y2/1	黒色粘土	しまり強い、粘性強い、礫粒を少量含む
3	2.5Y4/1	黄灰色粘質シルト	しまり強い、礫粒を少量含む

第23図　ST 104 竪穴住居跡（2）

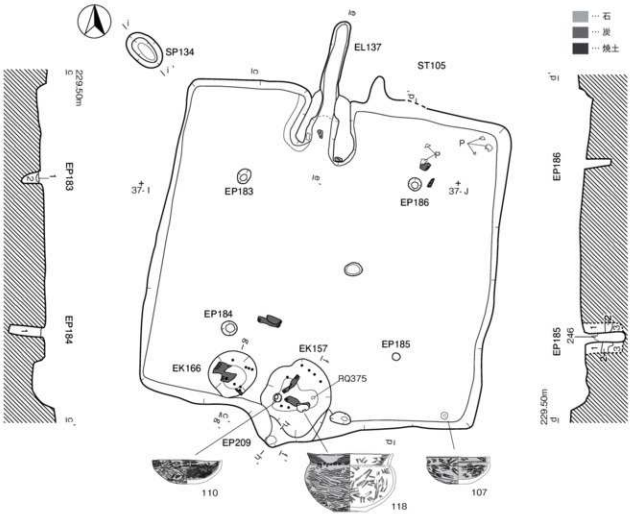


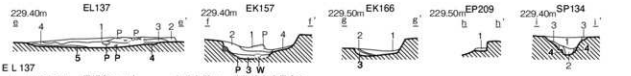
ST105

1	10Y R1.7/1	黒色シルト	粘性弱い、植物遺体を少量含む
2	10Y R6/1	褐灰色シルト	しまり強い、酸化鉄を少量含む
3	2.5Y 4/1	黄灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、炭化物を微量、黄灰色砂質シルトを5％含む
4	10Y R3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、植物遺体を5％含む
5	2.5Y 5/2	暗灰黄色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、壁の崩落土か
6	2.5Y 3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、炭化物を含む
7	2.5Y 2/1	黒色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、炭化物を微量、黄灰色砂質シルトを5％含む



第24図　ST105竪穴住居跡（1）





EL137

1	10YR3/1	黒褐色シルト	しまり強い、酸化鉄を少量含む
2	25Y5/3	黄褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトを微量含む
3	25Y4/1	黄灰色シルト	しまり強い、暗灰黄色シルトを３％含む
4	10YR3/1	黒褐色シルト	しまり強い、炭化物を少量、にぶい黄橙色シルトを３％含む
5	25Y6/2	灰黄色細砂	黒褐色シルトを５％含む

EK157

1	10YR1.7/1	黒色シルト	黄褐色砂質シルトを10％含む
2	25Y2/1	黒色シルト	炭化物を２％、黄灰色砂質シルトを５％含む
3	25Y3/1	黒褐色砂質シルト	炭化物を２％含む
4	25Y5/2	暗灰黄色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、黄灰色砂質シルトを５％含む

EK166

1	25Y4/1	黄灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、灰黄色砂質シルトを５％含む
2	10YR8/2	灰白色粘土	しまり強い、粘性強い、縦状に入る
3	10YR3/1	黒褐色シルト	しまり強い、粘性弱い、炭化物を少量含む

EP183

1	10YR5/2	灰黄褐色粘質シルト	粘性強い
2	25Y2/1	黒色シルト	しまり強い、粘性強い、植物遺体を多く含む

EP184

1	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、植物遺体を多く含む

EP185

1	25Y5/1	黄灰色砂	しまり強い
2	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、粘性やや強い
3	礫層		円礫含む

EP209

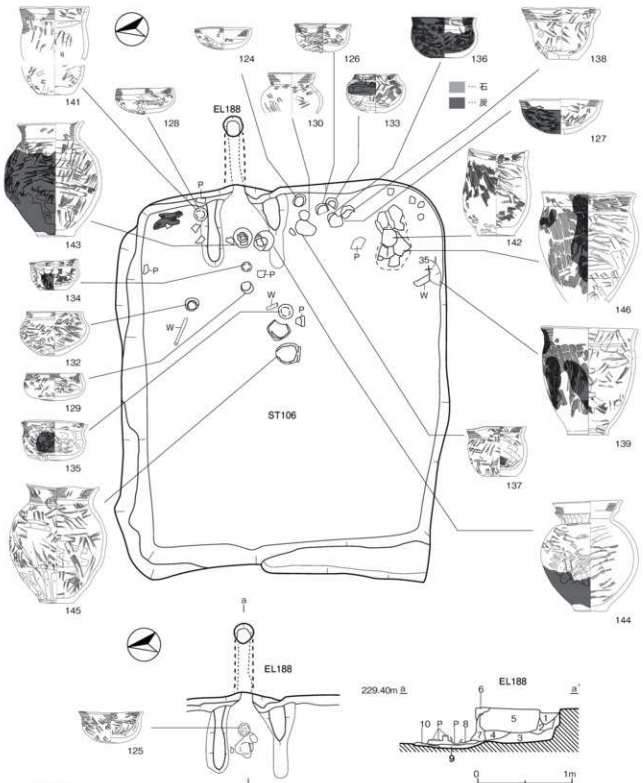
1	25Y2/1	黒色シルト	しまり強い、酸化鉄を微量含む

SP134

1	25Y2/1	黒色シルト	しまり強い

EK 166 出土遺物

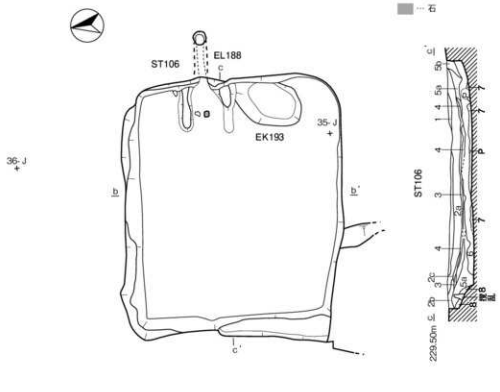
第25図　ST105竪穴住居跡（2）



EL188

10YR3/2	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、灰黄褐色砂質シルトを5%含む
10YR3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、炭化物を微量含む
10YR4/1	褐灰色砂	しまり強い
10YR3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、褐灰色砂質シルトを5%含む
2.5Y6/2	灰黄色砂	しまり強い、酸化鉄を少量含む
10YR4/1	褐灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、暗灰黄色砂質シルトを3%含む
2.5Y5/1	黄灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、焼土粒を5%含む
2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト	粘性弱い、炭化物を微量含む
7.5YR2/1	黒色シルト	粘性弱い、焼土、炭化物をやや多く含む
2.5Y5/2	暗灰黄色シルト	しまり弱い、炭化物を少量含む

第 26 図　ＳＴ 106 竪穴住居跡（1）

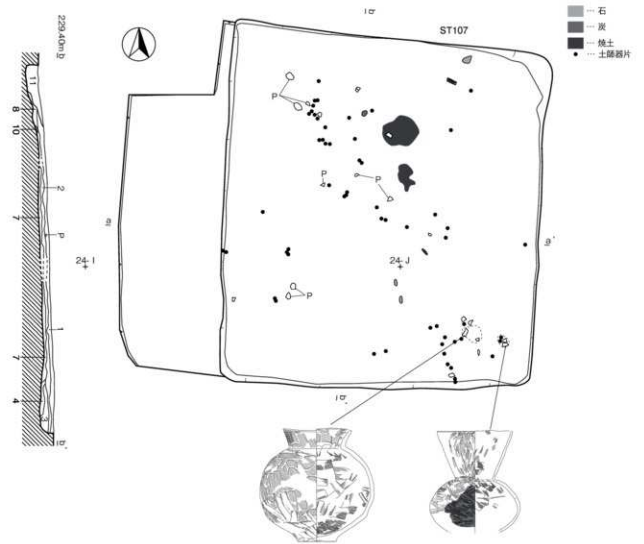


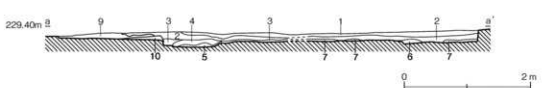
S T 106

1	10Y R2/2	黒褐色泥炭層	しまり強い、分解やや進んでいる
2 a	10Y R1.7/1	黒色泥炭層	しまり強い、分解進んでいる
2 b	2.5Y5/1	黄灰色砂	しまり強い、水成堆積
2 c	2.5Y2/1	黒色砂質シルト	しまり弱い、粘性弱い、黄灰色砂を末端に含む
3	10Y R5/2	灰黄褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い
4	10Y R2/1	黒色シルト	しまり弱い、褐灰色砂質シルトを10%含む
5 a	2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、黄灰色砂質シルトを３%、植物遺体を少量含む
5 b	2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト	しまり強い、炭化物を微量、黄灰色砂質シルトを10%含む
5 c	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、炭化物を少量、植物遺体を少量含む
5 d	10Y R2/1	黒色砂質シルト	粘性弱い、暗灰黄色砂質シルトを５%、植物遺体を含む
6	5 Y5/2	灰オリーブ色細砂	しまり強い、黒色シルトを２%、植物遺体を少量含む
7	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり弱い、植物遺体、炭化物を含む
8	2.5Y5/2	暗灰黄色砂	しまり強い、地山
9	5 Y4/1	灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、植物遺体を少量含む、地山
10	5 Y2/1	黒色シルト	しまり強い、粘性強い、酸化鉄を少量含む、地山
11	2.5Y4/2	暗灰黄色シルト	しまり強い、地山

0　2m
1：60（平面図・断面図）

第 27 図　ＳＴ 106 竪穴住居跡（2）

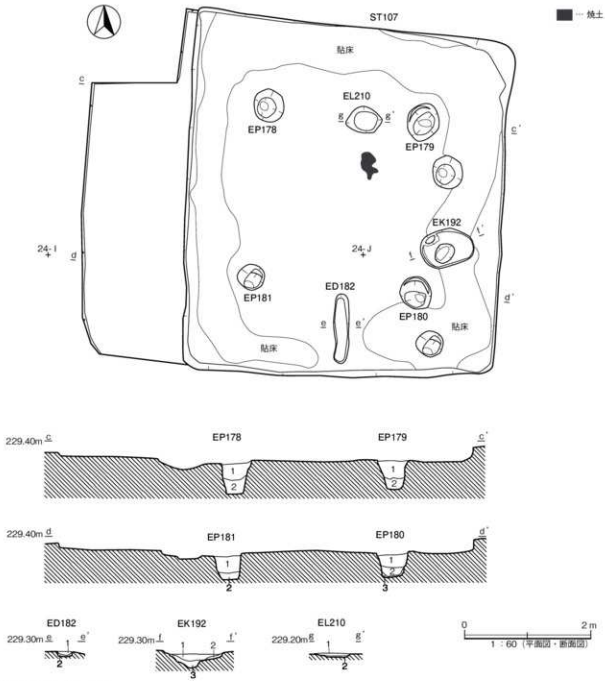




S T 107

1	10Y R3/1	黒褐色シルト	しまり強い、黒色シルトを３％含む
2	10Y R	黒褐色シルト	しまり強い、炭化物を微量、灰黄褐色シルトを３％含む
3	5Y4/1	灰色シルト	しまり強い、粘性強い、黒色シルトを５％含む、
4	25Y2/1	黒色シルト	しまり強い、粘性強い、黄灰色シルトを５％含む
5	5Y4/1	黄灰色シルト	しまり強い、黒色シルトを10％含む
6	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、粘性強い、黄灰色シルトを５％含む
7	25Y	暗灰黄色シルト	しまり強い、粘性強い、黒褐色シルトを５％含む
8	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、粘性強い、黄灰色シルトを５％、植物遺体を少量含む
9	10Y R3/1	黒色シルト	しまり強い、植物遺体を少量含む、地山
10	25Y4/1	黄灰色シルト	しまり強い、植物遺体を微量含む、地山
11	10Y R2/2	黒色泥炭層	しまり弱い

第 28 図　ＳＴ 107 竪穴住居跡（1）



EP178・179・180・181

1	25Y3/1	黒褐色粘質シルト	灰白色シルトを20%含む、炭化物を5%含む
2	25Y2/1	黒色粘土	粘性強い、灰白色シルトを10%、炭化物を3%含む
3	25Y3/2	黒褐色粘土	しまり強い、粘性強い、灰白色シルト、炭化物を3%含む

ED182

1	25Y3/1	黒褐色粘土	しまり強い、灰白色シルトを3%含む
2	25Y6/2	灰黄色粘質シルト	しまり強い

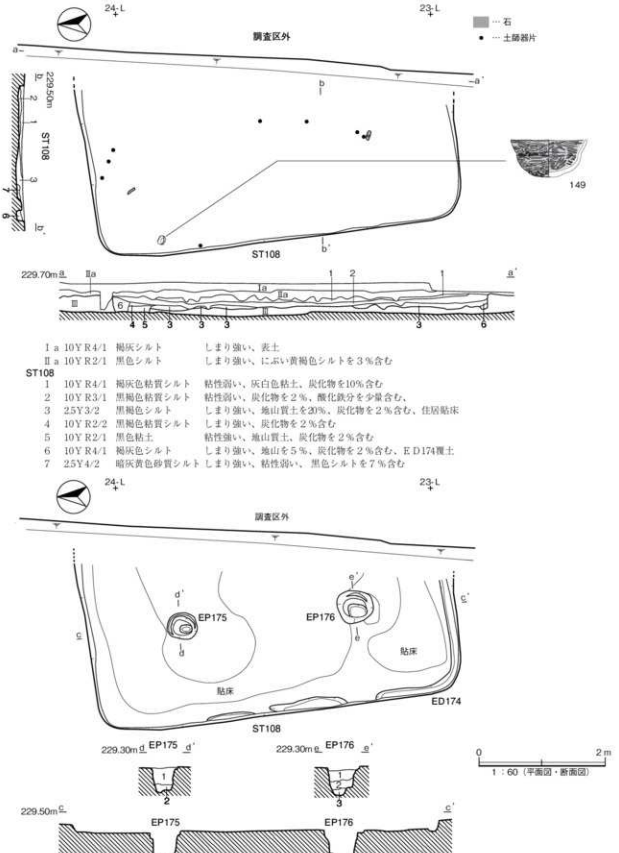
EK192

1	25Y3/2	黒褐色粘質シルト	粘性強い、灰白色シルトを3%含む
2	25Y3/3	暗褐色粘土	粘性強い、酸化鉄を少量含む
3	25Y2/1	黒色粘土	しまり強い、粘性強い、灰白色シルトを3%含む

EL210

1	5YR5/4	にぶい赤褐色シルト	炭化物を5%、焼土粒を斑状に15%含む
2	25Y5/2	暗灰黄色シルト	しまり強い、粘性強い、黒褐色シルトを5%含む

第29図　ST107竪穴住居跡（2）



Ⅰa 10YR4/1 褐灰シルト しまり強い、表土
Ⅱa 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、にぶい黄褐色シルトを3％含む

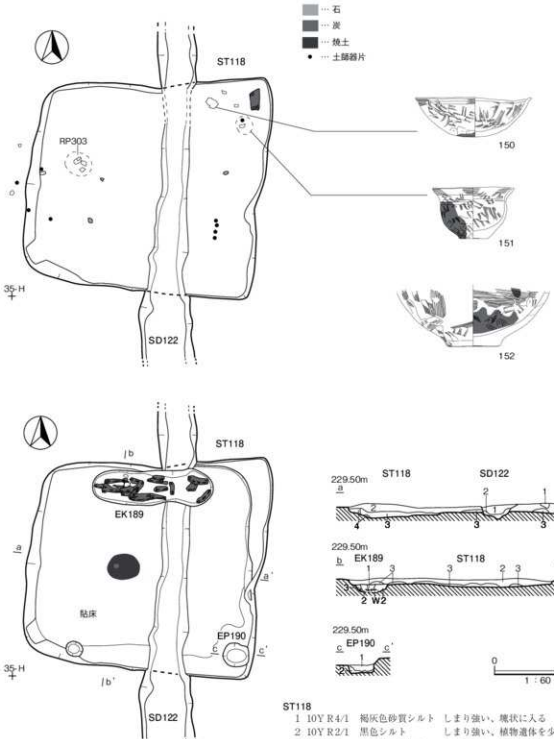
ST108

1	10YR4/1	褐灰色粘質シルト	粘性弱い、灰白色粘土、炭化物を10%含む
2	10YR3/1	黒褐色粘質シルト	粘性弱い、炭化物を2％、酸化鉄分を少量含む、
3	2.5Y3/2	黒褐色シルト	しまり強い、地山質土を20%、炭化物を2％含む、住居貼床
4	10YR2/2	黒褐色粘質シルト	しまり強い、炭化物を2％含む
5	10YR2/1	黒色粘土	粘性強い、地山質土、炭化物を2％含む
6	10YR4/1	褐灰色シルト	しまり強い、地山を5％、炭化物を2％含む、ED174覆土
7	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、黒色シルトを7％含む

EP175･176

1	2.5Y3/1	黒褐色粘質シルト	灰黄色シルトを20%、炭化物を7％含む
2	2.5Y2/1	黒色粘質シルト	粘性強い、灰黄色シルトを20%、炭化物を5％含む
3	2.5Y4/1	黄灰色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、炭化物を3％含む

第30図　ＳＴ108竪穴住居跡



ST118

1	10Y R4/1	褐灰色砂質シルト	しまり強い、塊状に入る
2	10Y R2/1	黒色シルト	しまり強い、植物遺体を少量含む
3	25Y4/1	黄灰砂質シルト	しまり強い、黄灰色シルトを５％含む
4	10Y R4/1	褐灰砂質シルト	しまり強い、灰黄褐色砂質シルトを５％含む

EK189

1	10Y R4/1	褐灰色シルト	しまり強い、粘性弱い、炭化物を微量含む
2	10Y R3/1	黒褐色シルト	しまり強い、炭化物を少量含む
3	10Y R3/1	黒褐色シルト	しまり強い、灰黄褐色砂質シルトを５％含む

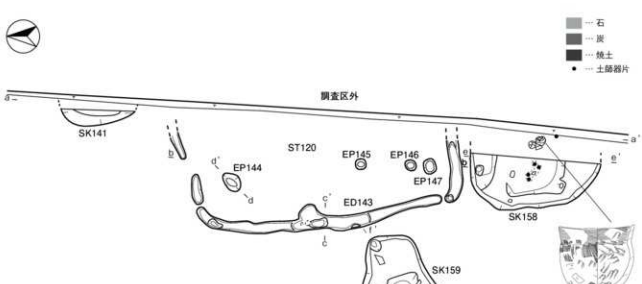
EP190

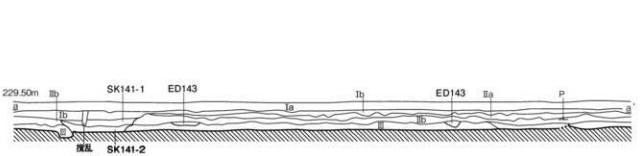
1	10Y R3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、酸化物を微量含む
2	10Y R4/1	褐灰色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、酸化物を微量含む

SD122

1	10Y R4/1	褐灰色シルト	しまり強い
2	10Y R3/1	黒褐色シルト	しまり強い、褐灰色砂質シルトを微量含む

第 31 図　ＳＴ 118 竪穴住居跡





Ⅰa　10Y R4/1　褐灰色粘質シルト　しまり強い、表土
Ⅰb　10Y R3/1　黒褐色シルト　しまり強い、礫粒を3％、酸化鉄を少量含む
Ⅱa　10Y R2/1　黒色粘質シルト　しまり強い、にぶい黄褐色シルトを3％、酸化鉄を少量含む
Ⅱb　10Y R4/1　褐灰色砂質シルト　しまり強い、黄灰色砂質シルトを2％、植物遺体を少量含む
Ⅲ　25Y6/1　黄灰色砂質シルト　しまり強い、礫粒を5％含む、地山

S T 120

E D 143
1　10Y R2/1　黒色粘質シルト　粘性弱い、炭化物を3％、遺物を少量含む
2　10Y R6/2　灰黄色シルト　黒色粘土を5％含む

E P 144
1　10Y R6/2　灰黄色シルト　黒色粘土を5％含む

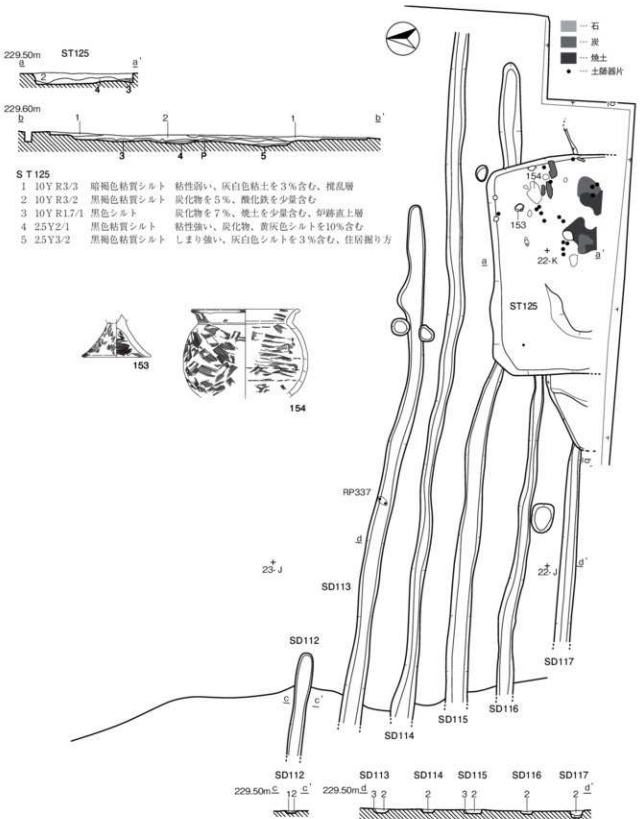
E P 145・146・147
1　10Y R2/1　黒色粘土　粘性強い、炭化物を3％含む

S K 141
1　10Y R3/2　黒褐色粘質シルト　炭化物を5％含む
2　10Y R3/3　暗褐色粘質シルト　炭化物を5％含む

S K 158
1　10Y R1.7/1　黒色シルト　しまり強い、酸化鉄を少量、灰黄褐砂質シルトを2％含む
2　10Y R1.7/1　黒色シルト　しまり強い、粘性強い、酸化鉄を少量、灰黄褐砂質シルトを7％含む
3　10Y R5/2　灰黄褐色砂　粘性弱い、黒色シルトを15％含む
4　10Y R5/2　灰黄褐色砂　しまり弱い

S K 159
1　10Y R2/1　黒色砂質シルト　しまり強い、酸化鉄を少量、炭化物を微量含む
2　25Y5/2　暗灰黄色砂　しまり強い、黒色シルトを5％含む

第32図　S T 120 竪穴住居跡・S K 158・159 土坑



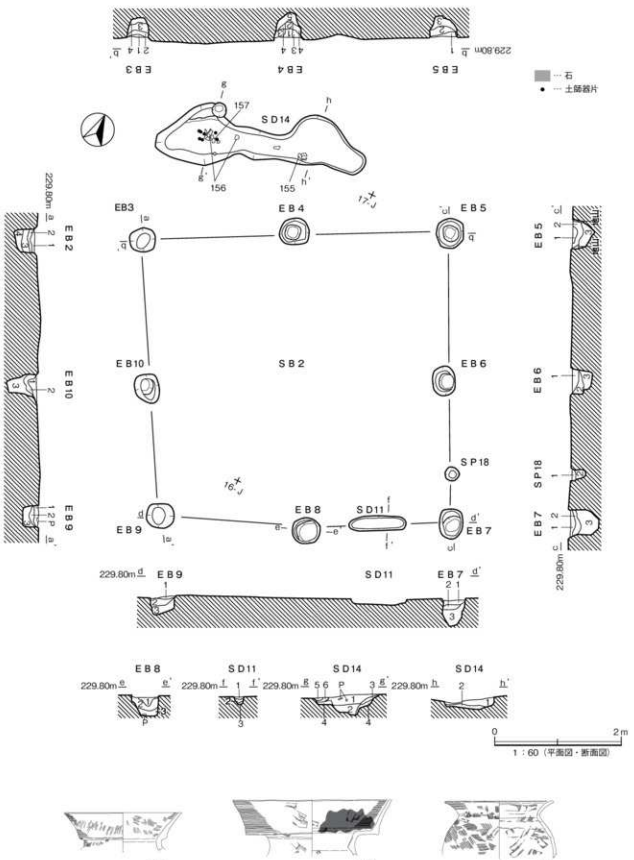
ＳＴ125

1	10Y R3/3	暗褐色粘質シルト	粘性弱い、灰白色粘土を３％含む、撹乱層
2	10Y R3/2	黒褐色粘質シルト	炭化物を５％、酸化鉄を少量含む
3	10Y R1.7/1	黒色シルト	炭化物を７％、焼土を少量含む、炉跡直上層
4	2.5Y2/1	黒色粘質シルト	粘性強い、炭化物、黄灰色シルトを10%含む
5	2.5Y3/2	黒褐色粘質シルト	しまり強い、灰白色シルトを３％含む、住居掘り方

畝状遺構（ＳＤ112～117）

1	2.5Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、酸化鉄を少量含む
2	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、暗灰黄色シルトを５％含む
3	2.5Y4/1	黄灰色粘質シルト	しまり強い、粘性弱い
4	2.5Y4/2	黄灰色シルト	しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を少量含む

第 33 図　ＳＴ 125 竪穴住居跡・ＳＤ 112 ～ 117 畝状遺構



第34図　ＳＢ２掘立柱建物跡・ＳＤ14溝跡

SB2

EB3

1	10YR4/1 褐灰色粘質シルト	しまり強い、灰白色シルトを斑状に10%、酸化鉄を含む
2	10YR3/1 黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ3mm）を5%、酸化鉄を含む
3	2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、灰白色シルトを斑状に5%含む
4	2.5Y2/1 黒色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ3mm）を10%、酸化鉄を含む

EB4

1	10YR2/1 黒色粘土	しまり強い、炭化物（φ3mm）を10%含む、柱痕
2	10YR2/1 黒色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ3mm）を10%含む、柱痕
3	10YR4/1 褐灰色粘質シルト	しまり強い、地山ブロックを斑状に10%含む
4	2.5Y3/1 黒褐色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ3mm）を10%、酸化鉄を含む
5	2.5Y2/1 黒色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ3mm）を5%、酸化鉄を含む

EB5

1	10YR3/1 黒褐色粘土	しまり強い、粘性強い、灰白色シルトを斑状に10%含む
2	2.5Y2/1 黒色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ3mm）を10%、地山粒を5%含む
3	10YR6/2 灰黄褐色シルト	しまり弱い、10YR3/1 黒褐色粘土を斑状に10%含む

EB6

1	10YR3/1 黒褐色粘土	しまり強い、粘性強い、灰白色シルトを斑状に10%含む
2	2.5Y2/1 黒色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ3mm）を10%、地山粒を5%含む
3	2.5Y2/1 黒色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、地山ブロックを斑状に10%含む

EB7

1	10YR3/1 黒褐色粘土	しまり強い、灰白色シルトを斑状に10%含む
2	2.5Y3/1 黒褐色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ2～3mm）を10%、酸化鉄を含む
3	2.5Y2/1 黒色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ2～3mm）を10%、酸化鉄を含む

EB8

1	10YR2/1 黒褐色粘質シルト	しまり強い、灰白色シルトを斑状に10%、炭化物（φ2～3mm）を10%含む
2	2.5Y3/1 黒褐色粘土	しまり強い、灰白色シルトを斑状に20%、炭化物（φ2～3mm）を10%含む
3	2.5Y2/1 黒色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ2～3mm）を5%含む、遺物を含む

EB9

1	10YR4/1 褐灰色粘質シルト	しまり強い、灰白シルトを斑状に10%、遺物を含む
2	2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト	しまり強い、炭化物（φ2～3mm）を10%、酸化鉄を含む
3	2.5Y2/1 黒色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ2～3mm）を5%、酸化鉄を含む

EB10

1	10YR4/1 褐灰色粘質シルト	しまり強い、灰白色シルトを斑状に10%、炭化物（φ2～3mm）を5%含む
2	2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト	しまり強い、炭化物（φ2～3mm）を10%、酸化鉄を含む
3	2.5Y2/1 黒色粘土	しまり強い、粘性強い、地山粒を5%、酸化鉄を含む

SD11

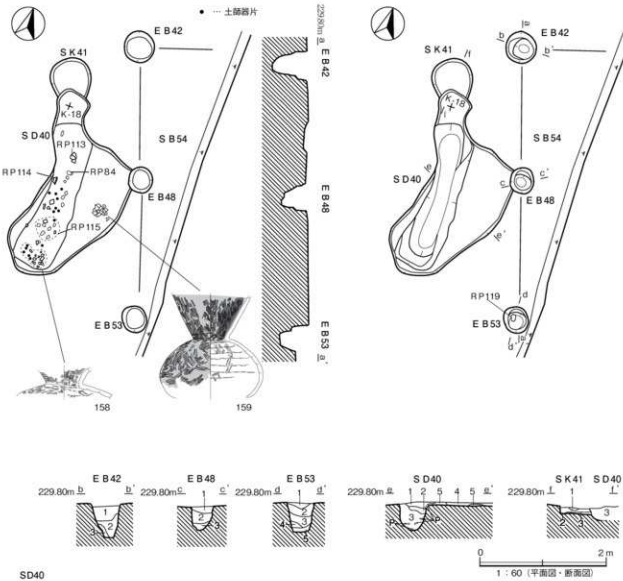
1	10YR4/1 褐灰色粘質シルト	しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを10%含む
2	2.5Y2/1 黒色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、炭化物を10%含む
3	2.5Y2/1 黒色粘土	しまり強い、粘性強い、地山ブロックを斑状に20%含む

SD18

1	10YR4/1 褐灰色粘質シルト	しまり強い、炭化物（φ5mm）を5%含む
2	2.5Y3/1 黒褐色粘土	しまり強い、粘性強い、炭化物（φ5mm）を5%、酸化鉄を含む

SD14

1	10YR4/1 褐色粘質シルト	しまり強い、炭化物を5%、遺物を多く含む
2	2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、地山を斑状に20%、植物遺体を10%含む
3	10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト	しまり強い、地山を斑状に20%含む
4	2.5Y3/1 黒褐色シルト	粘性強い、褐色粘土を斑状に5%含む
5	10YR4/1 褐色粘質シルト	地山を斑状に20%含む、撹乱
6	2.5Y2/1 黒色粘質シルト	粘性弱い、植物遺体を10%含む、撹乱



SD40

1	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、黄灰色シルト、炭化物を２％含む
2	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、灰黄色シルト、炭化物を２％含む
3	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、褐灰色シルトを10%、遺物を多量含む
4	25Y2/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い灰色シルトを５％含む
5	10YR3/1	黒褐色シルト	しまり強い、酸化鉄を含む

SK41

1	25Y8/2	灰白色粘土	しまり強い、酸化鉄を含む
2	25Y2/1	黒色シルト	しまり強い
3	10YR4/1	褐灰色粘質シルト	しまり強い

SB54

EB42

1	10YR2/1	黒色シルト	しまり強い、灰黄色シルトを10%含む、抜き取り痕
2	10YR2/1	黒色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、柱痕
3	5Y4/1	灰色シルト	しまり強い、灰色シルトを２％含む

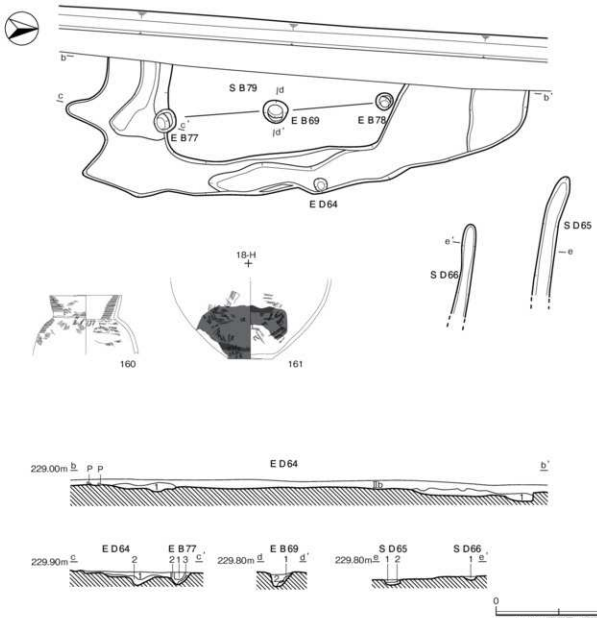
EB48

1	25Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、灰黄色シルトを10%含む
2	10YR2/1	黒色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、灰色シルトを20%含む
3	10YR2/1	黒色シルト	しまり強い、粘性強い、灰色シルトを５％含む

EB53

1	25Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、灰黄色シルトを粒状に含む
2	25Y3/2	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、灰色シルトを５％含む
3	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、粘性強い、灰色シルトを20%含む
4	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、粘性強い、灰色シルトを５％含む
5	25Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、粘性強い

第 35 図　ＳＢ 54 掘立柱建物跡・ＳＤ 40 溝跡



Ⅱb　2.5Y5/1　黄灰色シルト　　しまり強い、黒色シルトを20%含む

E D68

1
2　10Y R5/1 褐灰色粘質シルト　しまり強い、炭化物を５％を含む
　　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　しまり強い、黄灰色シルト、炭化物を10%含む

E B69

1　2.5Y2/1　黒褐色粘土　　しまり強い、粘性強い、黄灰色シルトを15%、炭化物を３％含む、柱痕
2　2.5Y5/1　黄灰色シルト　　しまり強い、黒褐色シルトを３％を含む
3　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　しまり強い、黄灰色シルトを５％、礫石を少量含む

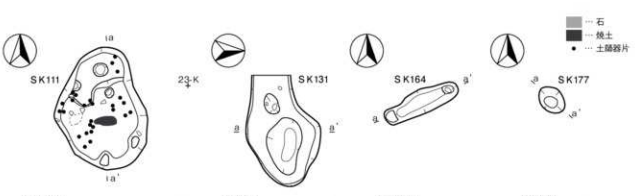
E B77

1　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまり強い、粘性強い、炭化物を５％を含む
2　2.5Y2/1　黒色粘土　　しまり強い、炭化物を５％を含む
3　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　しまり強い、黄灰色シルトを５％、礫石を少量含む

S D65・66

1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　しまり強い、黄灰色シルトを５％、炭化物を微量含む
2　2.5Y5/1　黄灰色シルト　　しまり強い

第 36 図　S B 79 掘立柱建物跡・S D 65・66 畝状遺構

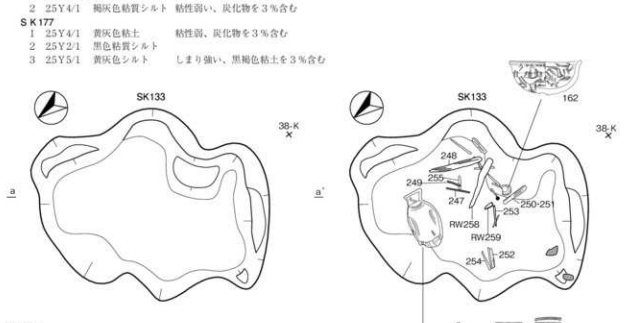


SK111
1　25Y2/1　黒色シルト　しまり強い、炭化物を微量、暗灰黄色砂質シルトを3％含む
2　25Y2/1　黒色シルト　しまり強い、黄褐色砂質シルトを20%、炭化物を微量含む
3　10Y R4/2　灰黄褐色シルト　しまり強い、粘性弱い、焼土、炭化物を微量含む
4　25Y5/1　黄灰色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、黒色シルトを10%含む

SK131
1　10Y R2/1　黒色シルト　しまり強い、植物遺体を少量含む
2　10Y R3/1　黒褐色粘質シルト　粘性弱い、植物遺体を多く含む

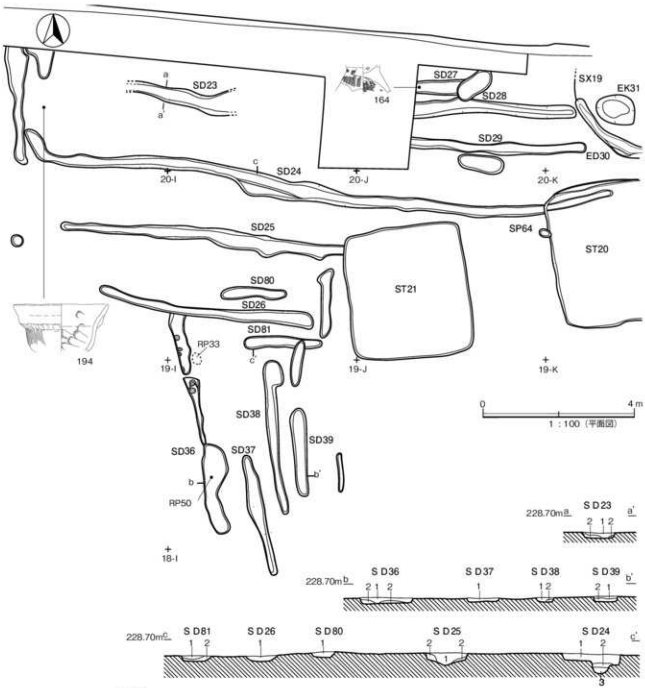
SK164
1　10Y R3/2　黒褐色粘質シルト　黄灰色シルトを10%含む
2　25Y4/1　褐灰色粘質シルト　粘性弱い、炭化物を3％含む

SK177
1　25Y4/1　黄灰色粘土　粘性弱、炭化物を3％含む
2　25Y2/1　黒色粘質シルト
3　25Y5/1　黄灰色シルト　しまり強い、黒褐色粘土を3％含む



SK133
1　10Y R2/1　黒色粘土　粘性強い、炭化物を3％含む
2　10Y R5/2　灰黄褐色粘質シルト　粘性強い、植物遺体を多く含む
3　25Y6/2　灰黄色シルト　黒色粘土を3％、酸化鉄を少量含む
4　25Y8/2　灰白色粘土　粘性強い、酸化鉄を少量含む
5　25Y2/1　黒色粘土　灰黄色シルトを1％含む
6　25 3/1　黒褐色粘土　粘性強い、酸化鉄を少量含む
7　25 3/1　黒褐色粘質シルト　しまり強い、灰黄色シルトを10%、炭化物を3％含む
8　25Y3/2　暗褐色粘質シルト　しまり強い、粘性強い、植物遺体・木製品を含む
9　25Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまり強い、灰黄色シルトを5％、木製品を含む、灰黄色シルトを5％含む
10　25Y3/1　黒褐色粘質シルト

第37図　SK 111・131・133・164・177 土坑



S D23
1　25Y3/1　黒褐色シルト　しまり強い、粘性強い、黄灰色シルトを５％、植物遺体を含む
2　25Y2/1　黒色シルト　しまり強い黄灰色シルトを２％含む

S D24
1　10Y R2/1 黒色シルト　しまり強い、灰黄褐色シルトを５％含む、酸化鉄を含む
2　10Y R3/1 黒褐色シルト　しまり強い、粘性強い
3　25Y3/1　黒褐色シルト　しまり強い

S D25
1　25Y2/1　黒色シルト　しまり強い、灰黄褐色シルトを５％、植物遺体を含む
2　10Y R4/1 褐灰色シルト　しまり強い

S D26
1　10Y R2/1 黒色シルト　しまり強い、灰黄褐色シルトを３％、炭化物を微量含む

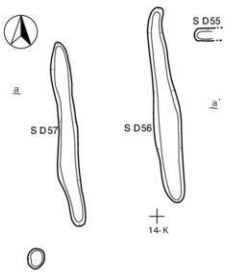
S D80
1　10Y R2/1 黒色シルト　しまり強い、灰黄褐色シルトを３％、炭化物を微量含む

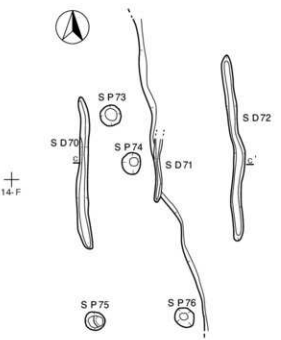
S D81
1　25Y3/1　黒色シルト　しまり強い
2　25Y4/1　黄灰色シルト　しまり強い

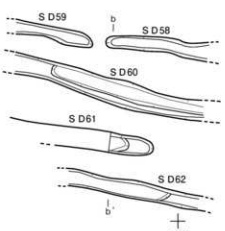
第 38 図　１区北側畝状遺構

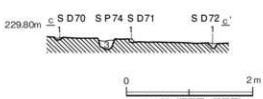
S D36・37・38
1　5Y2/1　黒色シルト　　しまり強い、褐色シルトを5％を含む
2　25Y3/1　黒褐色シルト　しまり強い

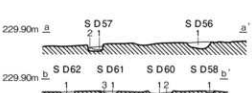
S D39
1　25Y2/1　黒色シルト　　しまり強い、暗黄灰色シルトを5％、炭化物、酸化鉄を微量含む
2　25Y4/1　褐灰色シルト　しまり強い











S D56
1　10YR2/1 黒色シルト　　しまり強い、灰黄褐色シルトを30％含む

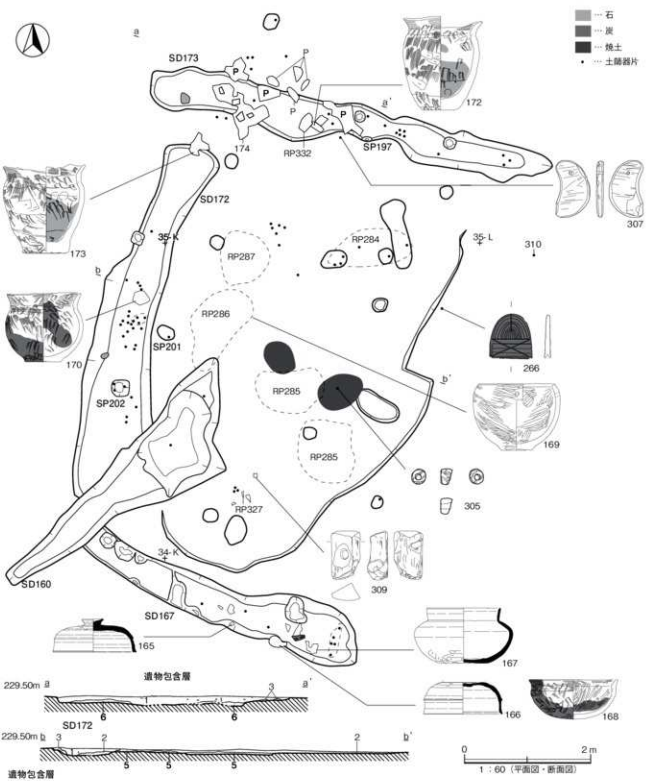
S D57
1　25Y3/2　黒褐色シルト　しまり強い、灰黄褐色シルトを15％含む
2　25Y4/1　黄灰色シルト　しまり強い

S D58・59・60・61・62
1　25Y3/1　黒褐色シルト　しまり強い
2　10YR2/1 黒色粘質シルト しまり強い、粘性強い
3　10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い

S D70・71・72
1　25Y2/1　黒褐色シルト　しまり強い、黄灰色シルトを2％含む

S P74
1　5Y2/1　黒色シルト　　しまり強い、灰オリーブ色砂質シルトを5％含む

第39図　S D 56～62・70～72 畝状遺構



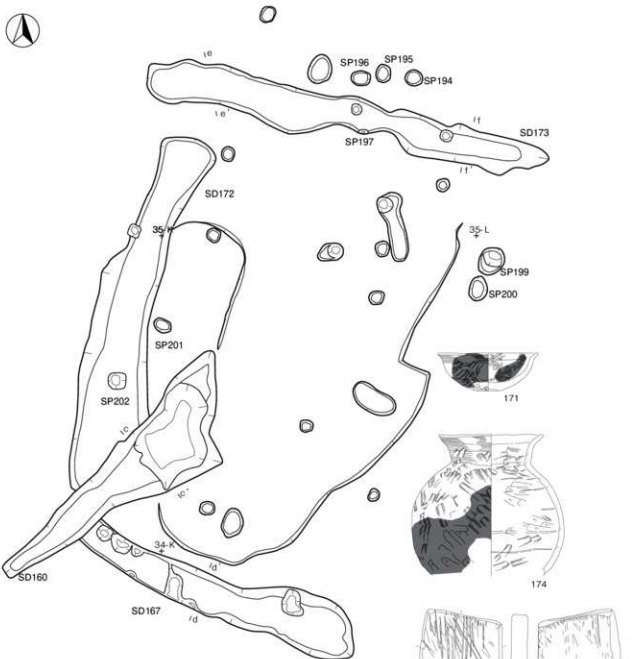
遺物包含層

1	10Y R2/2	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、炭化物を微量、灰黄褐色砂質シルトを２％含む
2	10Y R3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、灰黄褐色砂質シルトを５％含む
3	10Y R5/2	灰黄褐色砂	しまり強い、黒褐色砂質シルトを５％含む
4	10Y R2/2	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、炭化鉄を少量、炭化物を微量含む
5	10Y R5/2	灰黄褐色砂	しまり強い、黒褐色砂質シルトを５％含む
6	2.5Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、粘性強い、酸化鉄を少量、暗灰黄色砂質シルトを５％含む

ＳＤ172

1	10Y R2/1	黒色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を少量含む
2	10Y R1.7/1	黒色シルト	灰黄色砂を５％含む
3	2.5Y6/2	灰黄色砂	しまり強い

第40図　ＳＤ160・167・172・173溝跡（1）



S D160

1	10Y R2/2	黒褐色シルト	しまり強い、植物遺体を少量含む
2	2.5Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、粘性強い、植物遺体を微量含む
3	2.5Y2/1	黒色シルト	粘性強い

S D167

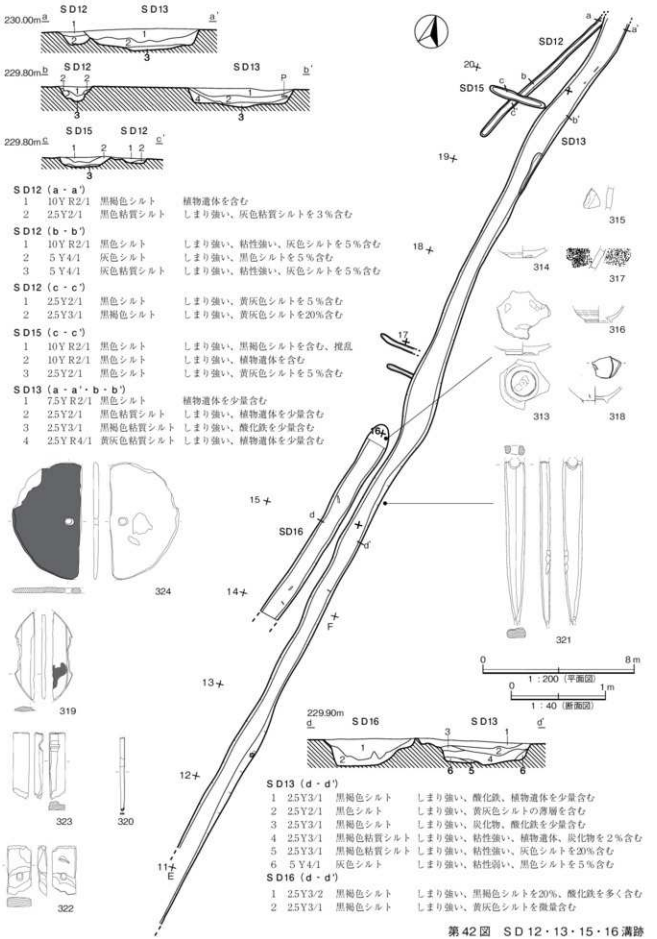
1	10Y R3/1	黒褐色砂質シルト	粘性弱い、炭化物を微量、にぶい黄褐色シルトを10%含む
2	2.5Y2/1	黄灰色砂質シルト	粘性弱い、黒褐色シルトを20%含む

S D173

1	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、黒色シルトを40%含む
2	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、暗灰黄色砂質シルトを3%含む
3	2.5Y5/2	暗灰黄色砂	しまり強い、粘性弱い、黒色シルトを5%含む

0　2m
1：60（平面図・断面図）

第41図　S D 160・167・172・173 溝跡（2）



SD12（a－a'）

1	10YR2/1	黒褐色シルト	植物遺体を含む
2	2.5Y2/1	黒色粘質シルト	しまり強い、灰色粘質シルトを3％含む

SD12（b－b'）

1	10YR2/1	黒色シルト	しまり強い、粘性強い、灰色シルトを5％含む
2	5Y4/1	灰色シルト	しまり強い、黒色シルトを5％含む
3	5Y4/1	灰色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、灰色シルトを5％含む

SD12（c－c'）

1	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、黄灰色シルトを5％含む
2	2.5Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、黄灰色シルトを20％含む

SD15（c－c'）

1	10YR2/1	黒色シルト	しまり強い、黒褐色シルトを含む、撹乱
2	10YR2/1	黒色シルト	しまり強い、植物遺体を含む
3	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、黄灰色シルトを5％含む

SD13（a－a'・b－b'）

1	7.5YR2/1	黒色シルト	植物遺体を少量含む
2	2.5Y2/1	黒色粘質シルト	しまり強い、植物遺体を少量含む
3	2.5Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、酸化鉄を少量含む
4	2.5YR4/1	黄灰色粘質シルト	しまり強い、植物遺体を少量含む

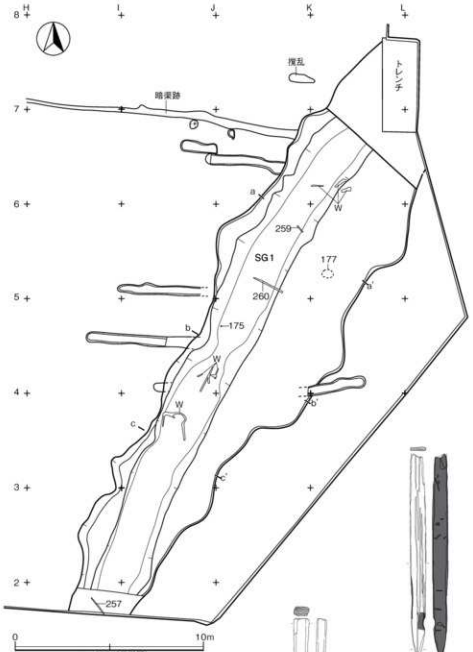
SD13（d－d'）

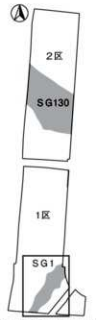
1	2.5Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、酸化鉄、植物遺体を少量含む
2	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、黄灰色シルトの薄層を含む
3	2.5Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、炭化物、酸化鉄を少量含む
4	2.5Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、植物遺体、炭化物を2％含む
5	2.5Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、灰色シルトを20％含む
6	5Y4/1	灰色シルト	しまり強い、粘性弱い、黒色シルトを5％含む

SD16（d－d'）

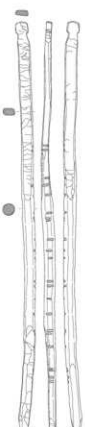
1	2.5Y3/2	黒褐色シルト	しまり強い、黒褐色シルトを20％、酸化鉄を多く含む
2	2.5Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、黄灰色シルトを微量含む

第42図　SD12・13・15・16溝跡

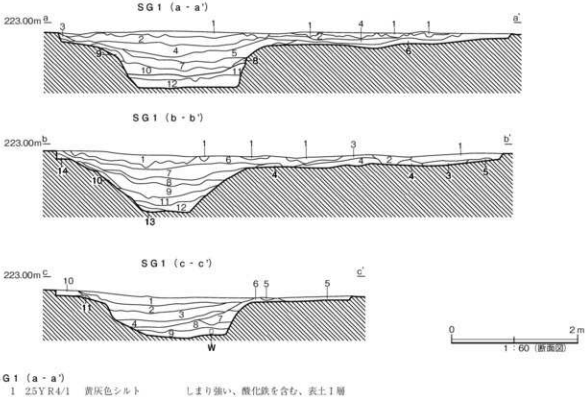




SG1河川跡位置図（1:2500）



第43図　SG1河川跡（1）



SG1（a - a'）

1	2.5Y R4/1	黄灰色シルト	しまり強い、酸化鉄を含む、表土1層
2	10Y R2/3	黒褐色泥炭	しまり弱い、粘性弱い、植物遺体を含む、F1層
3	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、植物遺体を少量含む、調査区北側Ⅳ層併行
4	2.5Y3/1	黒褐色シルト	泥炭層が分解した植物遺体を多く含む、F2層
5	2.5Y2/3	黒色シルト	しまり強い、泥炭層が分解した植物遺体を多く含む、F3層
6	2.5Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、下層に黄灰色シルトを含む
7	10Y R1.7/1	黒色シルト	しまり弱い、黄灰色シルトを30%、植物遺体を含む、F4a層
8	2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト	しまり弱い、粘性弱い、黄灰色シルトを5%、砂を10%、植物遺体を多く含む
9	2.5Y3/1	黄灰色シルト	しまり強い、黒色シルトを5%含む、6層に対応か
10	5Y5/1	灰色砂	しまり弱い、粗砂を含む、自然木が出土する、F4b層
11	10Y R2/3	黒褐色泥炭	粘性弱い、自然木が出土、F5層
12	10Y R2/3	暗オリーブ褐色シルト	しまり強い、粘性弱い、植物遺体を多く含む、F6層

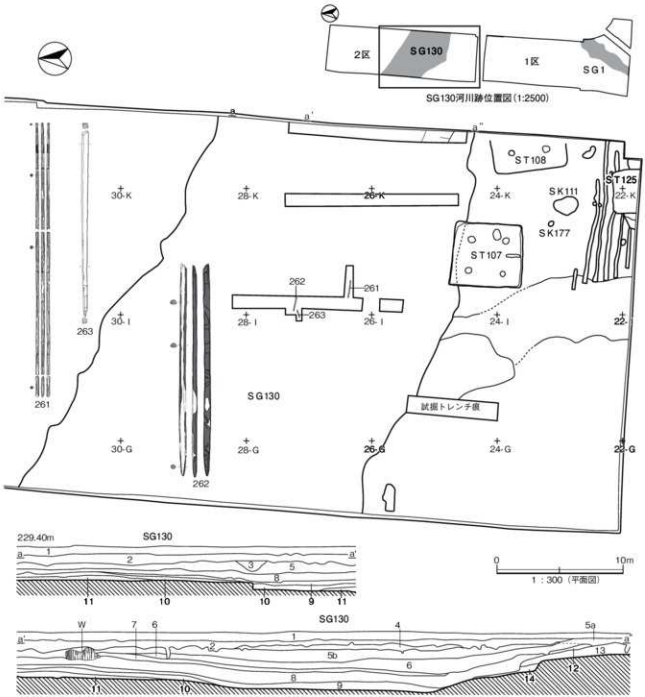
SG1（b - b'）

1	10Y R3/1	黒褐色シルト	しまり強い、黄灰色シルトを含む、1層併行
2	10Y R3/1	黒褐色シルト	植物遺体を多く含む、暗褐覆土
3	10Y R3/1	黒褐色シルト	黄灰色シルトを微量、植物遺体を少量含む
4	10Y R3/1	黒褐色シルト	黄灰色シルトを15%、植物遺体を少量含む
5	2.5Y2/1	黒色シルト	しまり強い、基本層
6	10Y R2/3	黒褐色泥炭	しまり弱い、粘性弱い、下層に黄灰色シルトを含む、F1層
7	2.5Y3/1	黒褐色泥炭	しまり弱い、泥炭は分解が進んでいる、F2層
8	10Y R2/1	黒色シルト	植物遺体を少量含む、F3層
9	2.5Y3/1	黒褐色シルト	粘性弱い、黒褐色シルトを20%含む、F4層
10	2.5Y4/1	黄灰色シルト	しまり強い、黒色シルトを3%含む
11	5Y4/1	灰色砂	しまり強い、F5層
12	10Y R2/3	黒褐色泥炭	細かい植物遺体を含む、F6層
13	10Y R3/1	黒褐色シルト	しまり強い、植物遺体を少量含む
14	2.5Y4/1	黄灰色シルト	しまり強い、Ⅳ層に対応する

SG1（c - c'）

1	10Y R2/2	黒褐色泥炭層	しまり弱い、粘性弱い、F1層
2	2.5Y R2/1	黒色泥炭	しまり弱い、粘性弱い、泥炭層が分解した植物遺体を多く含む、F2層
3	10Y R2/1	黒色シルト	灰黄褐色シルトを20%含む、F3層
4	10Y R3/2	黒褐色シルト	しまり強い、F4層
5	10Y R	黒褐色シルト	しまり強い、植物遺体を少量含む
6	2.5Y4/1	黄灰色シルト	しまり強い、下層に黄灰色シルトを含む
7	2.5Y3/2	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、砂ブロックを5%、植物遺体を微量含む
8	2.5Y5/2	明灰黄色砂	しまり強い、F5層
9	2.5Y3/1	黒褐色粘質シルト	しまり強い、粘性強い、植物遺体を含む、F6層
10	10Y R7/1	黒色シルト	しまり強い、酸化鉄を含む、Ⅱb層に対応か
11	2.5Y5/1	黄灰色細砂	しまり強い、Ⅳ層に対応

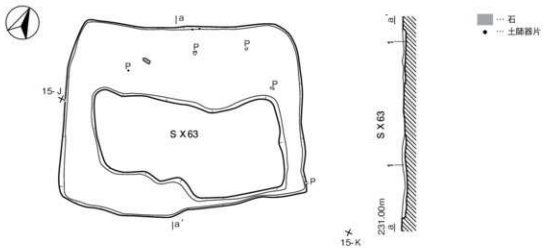
第44図　SG1河川跡（2）



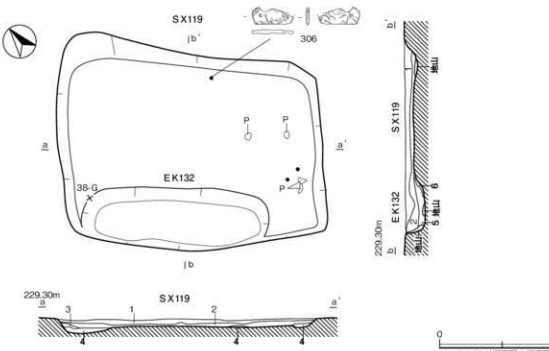
SG130

1	2.5Y4/1	黄灰色シルト	しまり強い、表土
2	2.5Y3/1	黒褐色シルト	しまり強い、粘性強い、酸化鉄を少量、炭化物を微量含む、表土
3	10Y R3/1	黒褐色シルト	しまり強い、酸化鉄を微量、泥炭ブロックを２%含む
4	10Y R5/1	褐灰色シルト	しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を少量、黒色シルトを３%含む、溝の覆土
5 a	10Y R2/1	黒色シルト	しまり強い、酸化鉄を少量、Ⅱａ層併行
5 b	7.5Y2/2	黒褐色泥炭層	黒しまり弱い、自然木を含む、やや分解が進行している
6	10Y R2/2	黒褐色泥炭層	しまり強い、上層より黒色が強い
7	10Y R5/1	褐灰色シルト泥炭層	しまり強い、周囲より白色が強い
8	2.5Y2/1	黒色泥炭層	しまり強い、未分解の植物や自然木を含む
9	2.5Y6/2	灰黄色シルト	しまり強い、泥炭を混入する
10	2.5Y2/1	黒色シルト	分解が進んだ泥炭を含む。Ⅱｂ層に併行するものか
11	7.5Y4/1	灰色細砂	しまり弱い、グライ化、Ⅲ層併行か
12	10Y R3/1	黒褐色砂質シルト	しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を微量含む。Ⅱｂ層に併行か
13	2.5Y4/2	暗灰黄色細砂	しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を含む。Ⅲ層に併行
14	7.5Y2/1	黒色粘質シルト	しまり強い、粘性強い

第45図　ＳＧ130河川跡

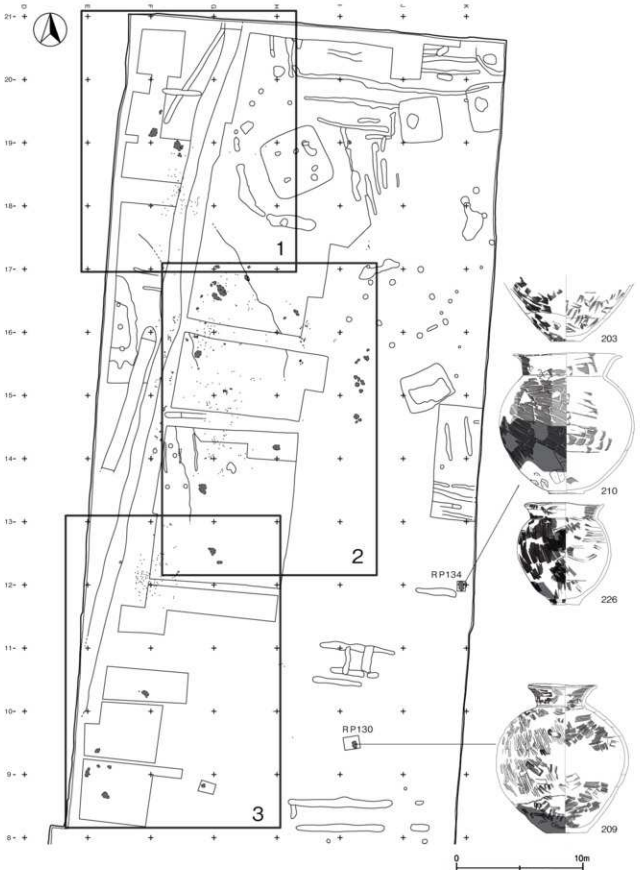


SX63
1　2.5Y2/1　黒色シルト　しまり強い、黄灰色シルトを5％、炭化物微量含む

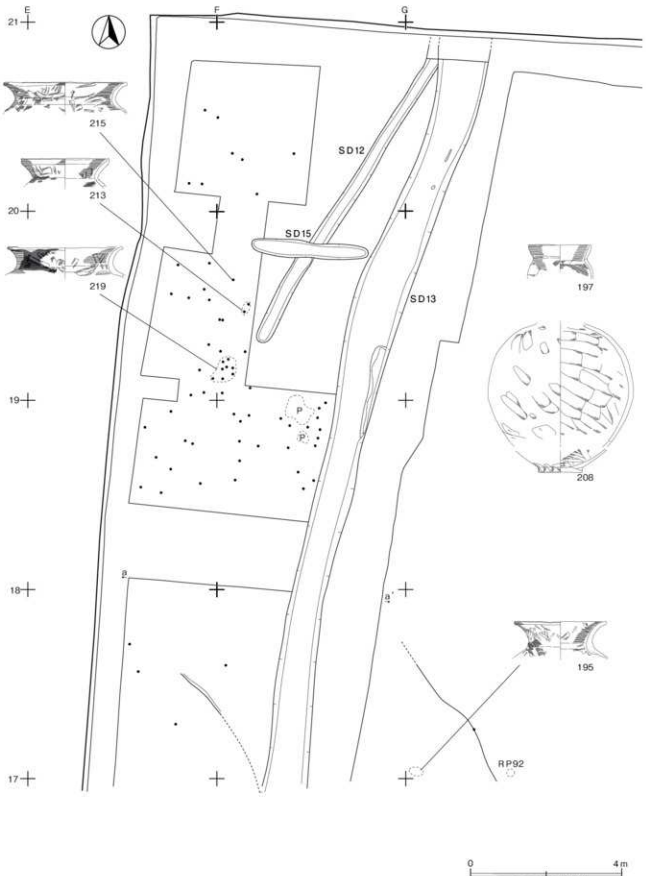


SX119
1　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　粘性弱い、黒色シルトを2％含む
2　10YR2/1　黒色粘質シルト　粘性弱い、灰黄色シルトを2％、炭化物を3％含む
3　2.5Y4/1　褐灰色シルト　しまり強い、灰黄色シルトを7％含む
4　10YR17/1　黒色粘質シルト　黒褐色砂質シルトを3％、炭化物を3％含む
5　2.5Y2/1　黒色粘土　しまり強い、粘性強い、炭化物を10%含む、EK132覆土
6　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　しまり強い、粘性強い、灰黄色シルトを3％含む、EK132覆土

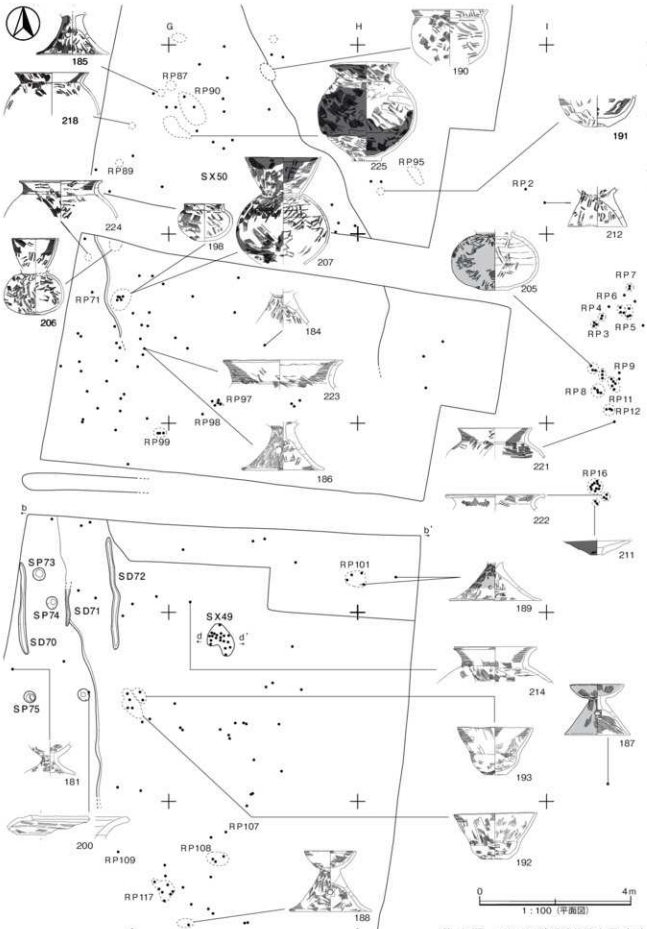
第46図　SX63・119性格不明遺構



第47図　SX50捨場出土遺物全体図

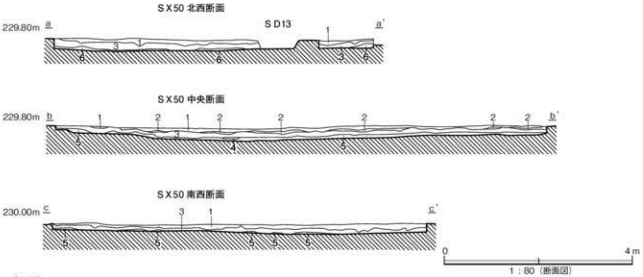


第48図　ＳＸ50 捨場遺物分布図（1）



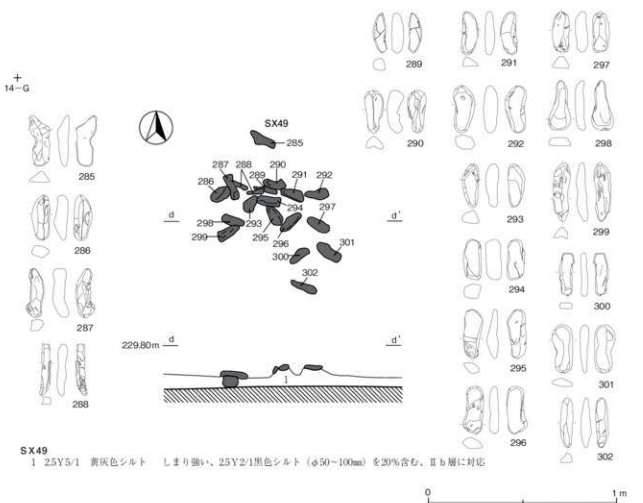
第 49 図　S X 50 捨場遺物分布図（2）

第50図　ＳＸ50 捨場遺物分布図（3）



SX50

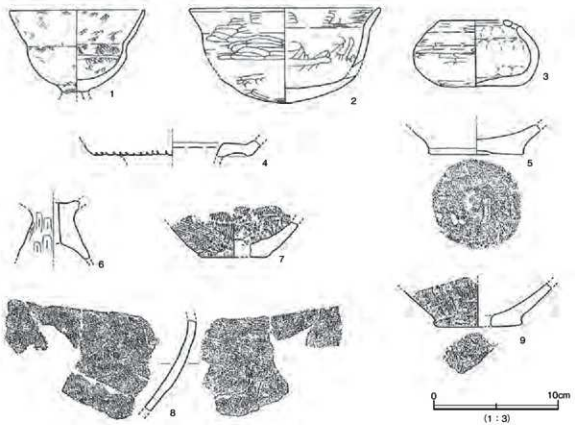
1　2.5Y5/1　黄灰色シルト　　しまり強い、2.5Y2/1黒色シルト（φ50～100mm）を20%含む、Ⅱb層に対応
2　2.5Y4/1　黄灰色シルト　　しまり強い、黄灰色シルトを10%、炭化物（φ2～5mm）を斑状に5%、遺物を多量含む、3層への漸移層
3　5Y2/1　黒色シルト　　しまり強い、粘性強い、2.5Y4/1黄灰色シルト（φ5～10mm）を2%含む、均質、基本層Ⅱ層に対応
4　2.5Y5/2　黒褐色シルト　　しまり強い、炭化物（φ2mm）を斑状に5%、黒色シルトを5%含む
5　2.5Y4/1　黒褐色シルト　　しまり強い、粘性強い、植物遺体を含む、基本層Ⅳ層に対応
6　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　　しまり強い、粘性強い、植物遺体を含む、基本層Ⅳ層に対応



SX49

1　2.5Y5/1　黄灰色シルト　　しまり強い、2.5Y2/1黒色シルト（φ50～100mm）を20%含む、Ⅱb層に対応

第51図　SX50 捨場土層断面・SX49 集石

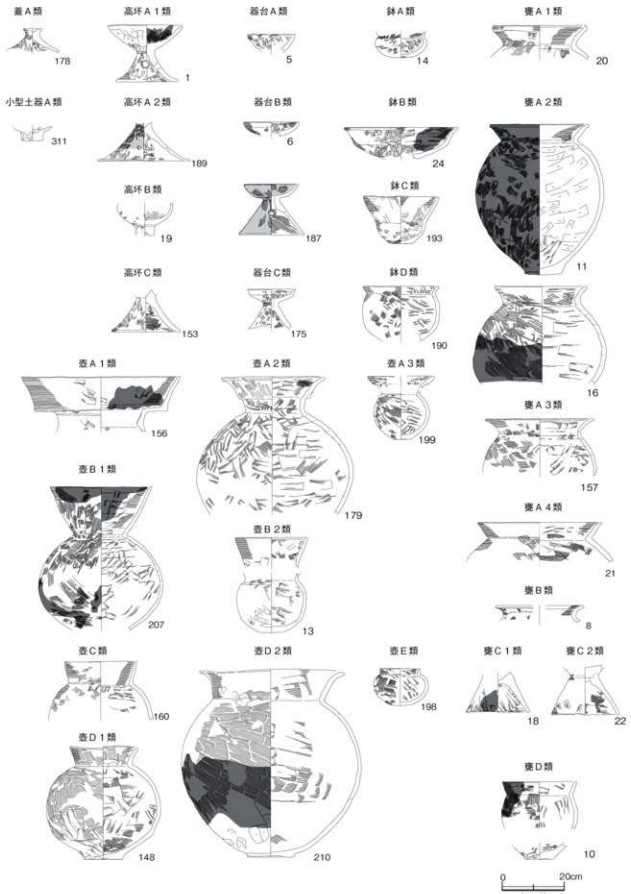


分布調査報告書（36）p.32を転載（山形県教育委員会2010）

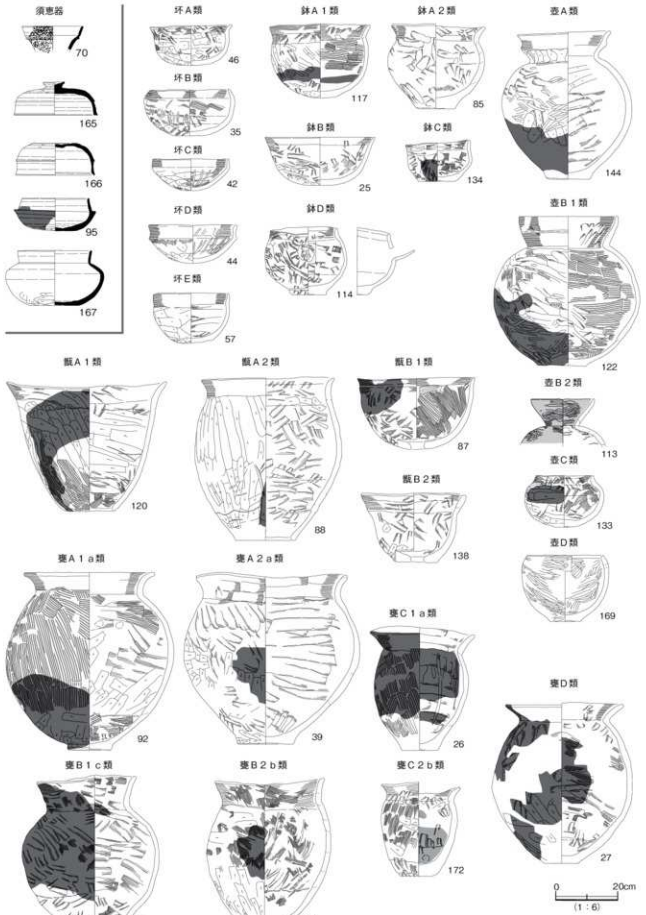
第52図　分布調査の出土遺物

表3　分布調査の出土遺物詳細表

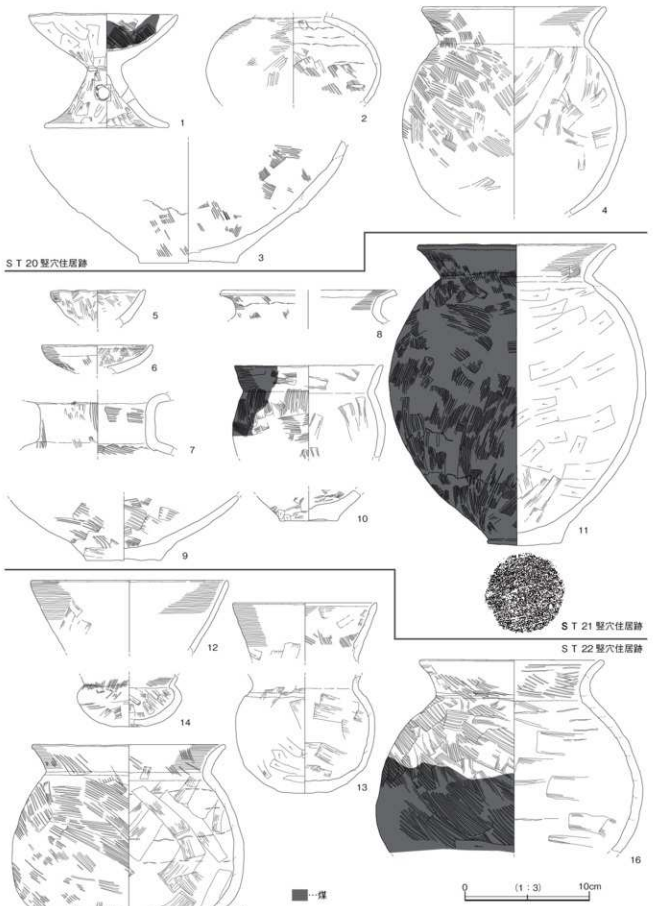
遺物番号	出土地点	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整 外面	内面	底部	備考
1	調査2区東　TT 1	土師器	高坏	108		(64.8)	4.5	ミガキ	ミガキ		報告書遺物№19に類似
2	調査2区西　TT 3	土師器	鉢	153		75	5.1	ミガキ	ミガキ	ケズリ	丸底状
3		土師器	壺	52.5	63	52.5	6.9	ミガキ	ナデ・指頭痕	ケズリ	口縁部下に有孔
4		土師器	壺				7.5	ナデ・刺突文	ナデ		頸部に刻み目状の刺突文
5		土師器	不明		72		7.8	ナデ			底部に輪台貼付
6		土師器	器台			(48)	9.0	ケズリ			貫通孔
7		土師器	不明		(51)		8.4	ハケメ、ナデ	ナデ		底部片
8		土師器	甕？				7.5	ハケメ、ナデ	ハケメ・ナデ		体部片
9		土師器	不明		(66)		8.4	ハケメ、ナデ		ナデ	底部片



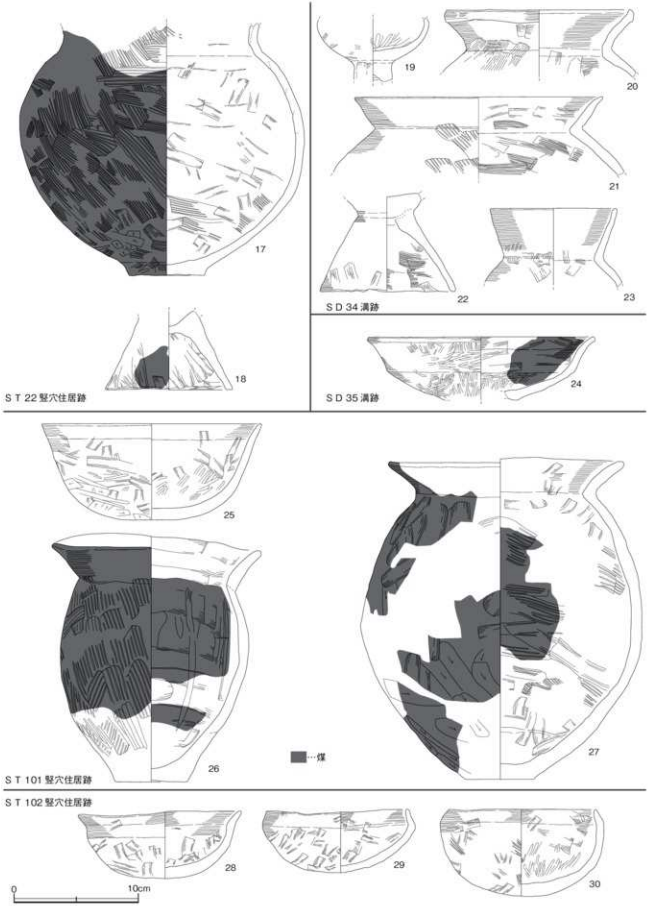
第53図　古墳時代前期土器の器種分類



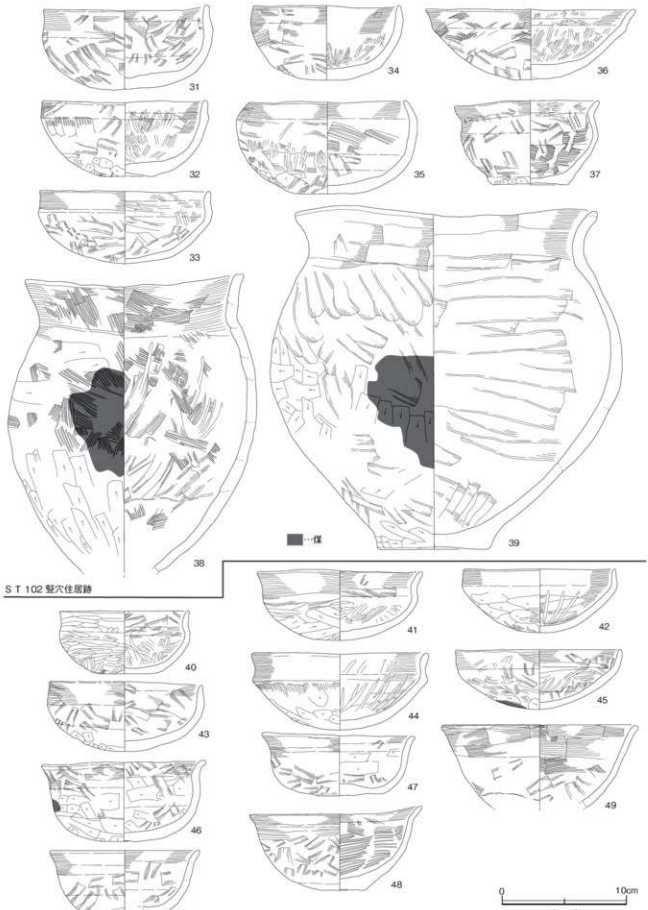
第 54 図　古墳時代中期土器の器種分類



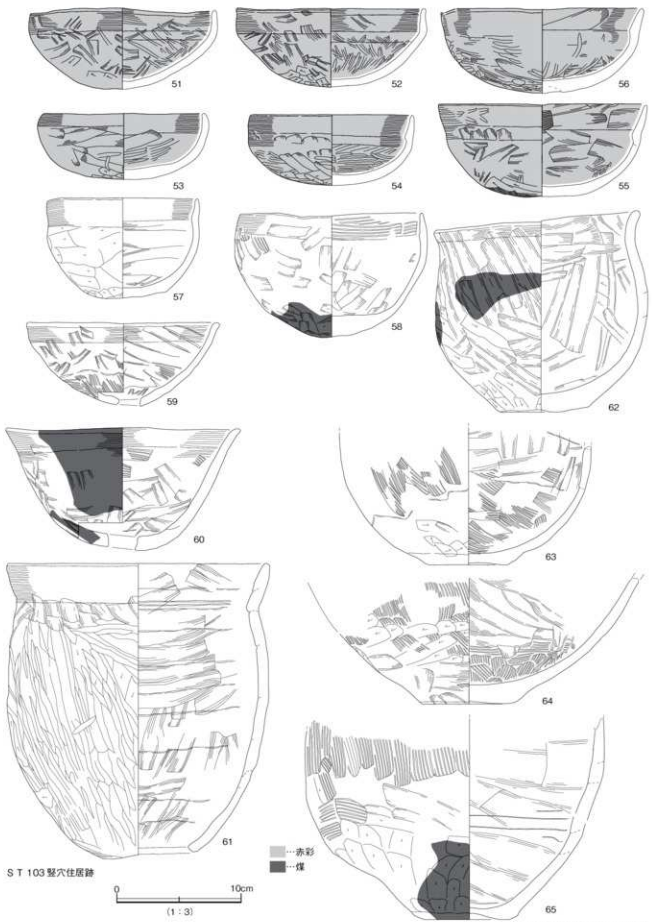
第 55 図　ＳＴ 20・21・22 竪穴住居跡出土遺物



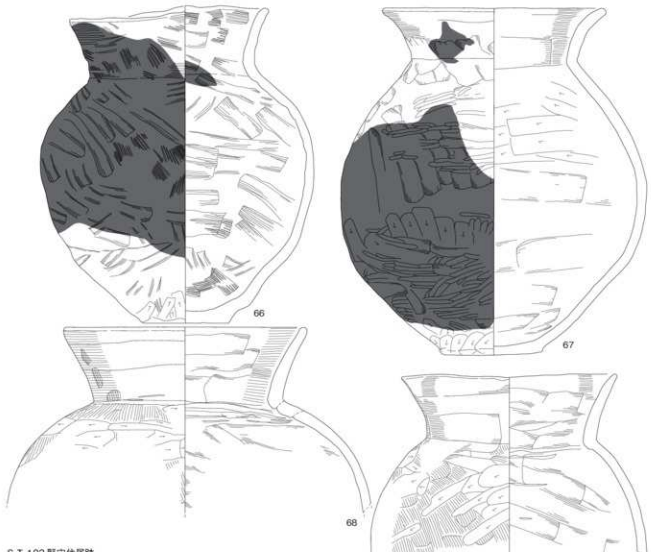
第 56 図　ＳＴ 22・101・102 竪穴住居跡・ＳＤ 34・35 溝跡出土遺物



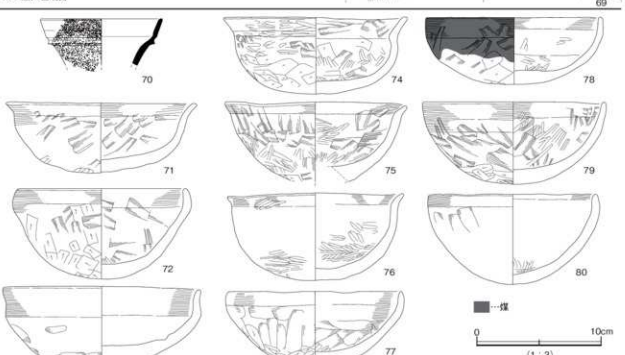
第57図　ＳＴ102・103 竪穴住居跡出土遺物



第 58 図　S T 103 竪穴住居跡出土遺物

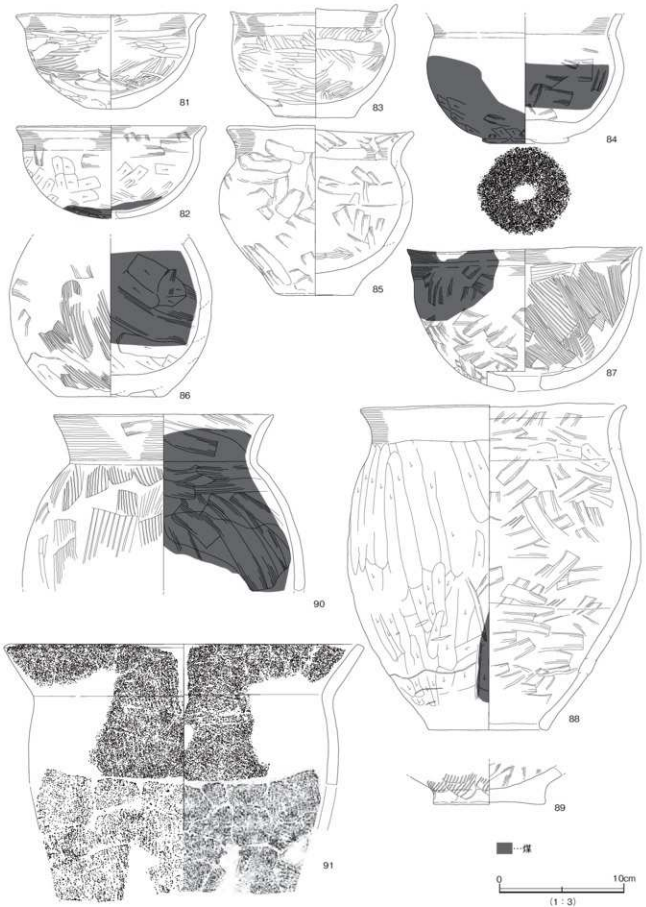


ＳＴ103竪穴住居跡



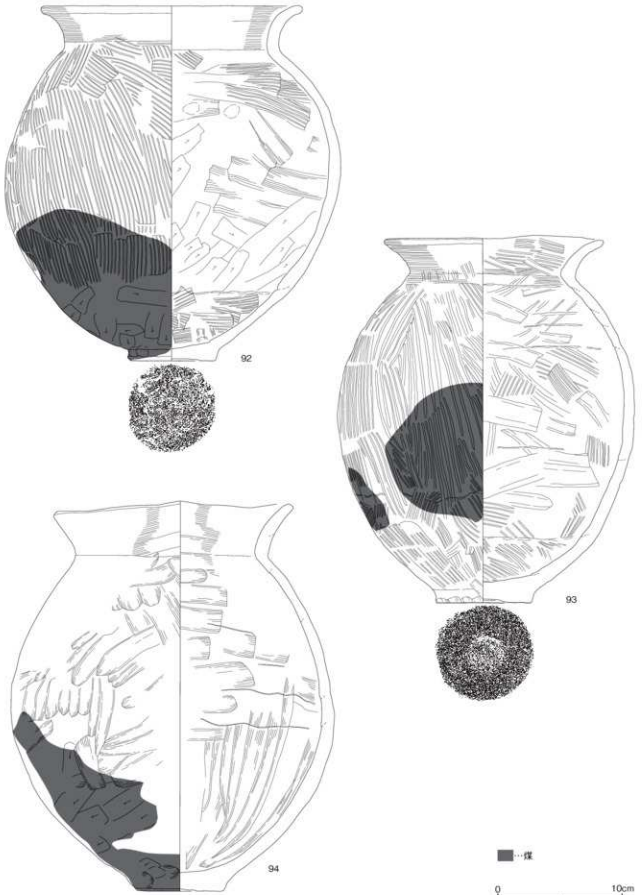
ＳＴ104竪穴住居跡

第59図　ＳＴ103・104竪穴住居跡出土遺物



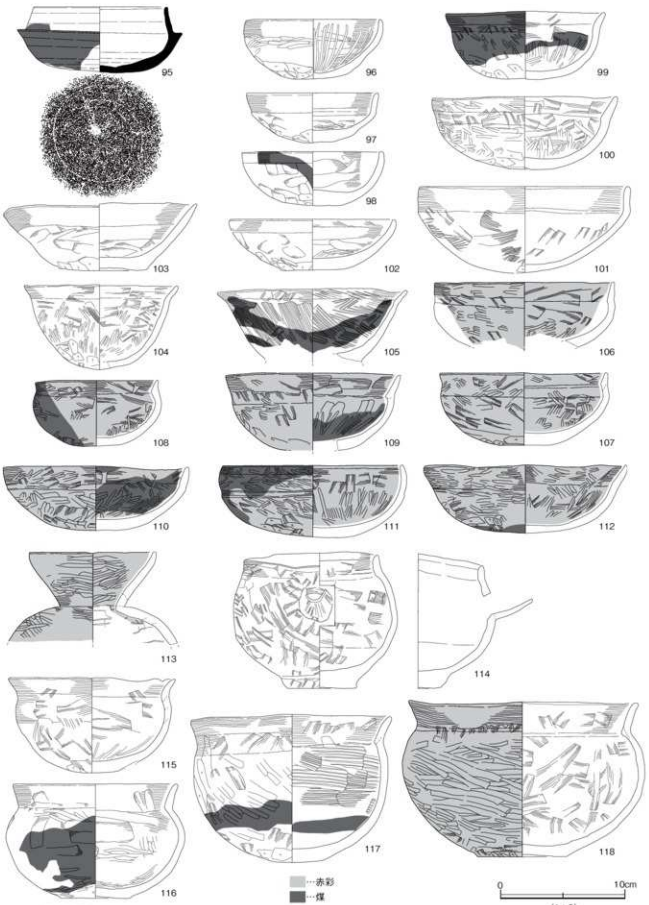
ＳＴ104竪穴住居跡

第60図　ＳＴ104竪穴住居跡出土遺物（1）



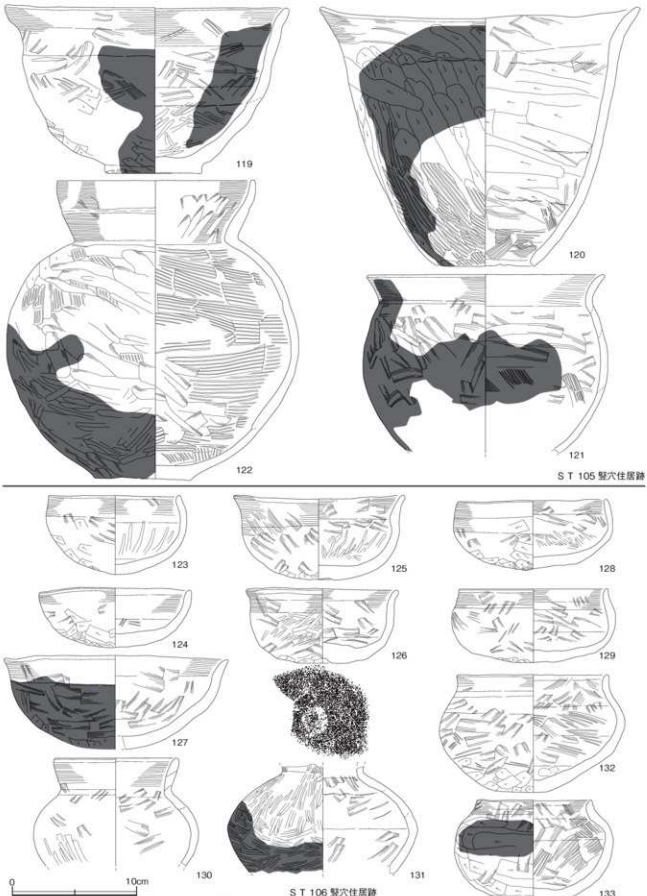
ＳＴ 104 竪穴住居跡

第 61 図　ＳＴ 104 竪穴住居跡出土遺物（2）

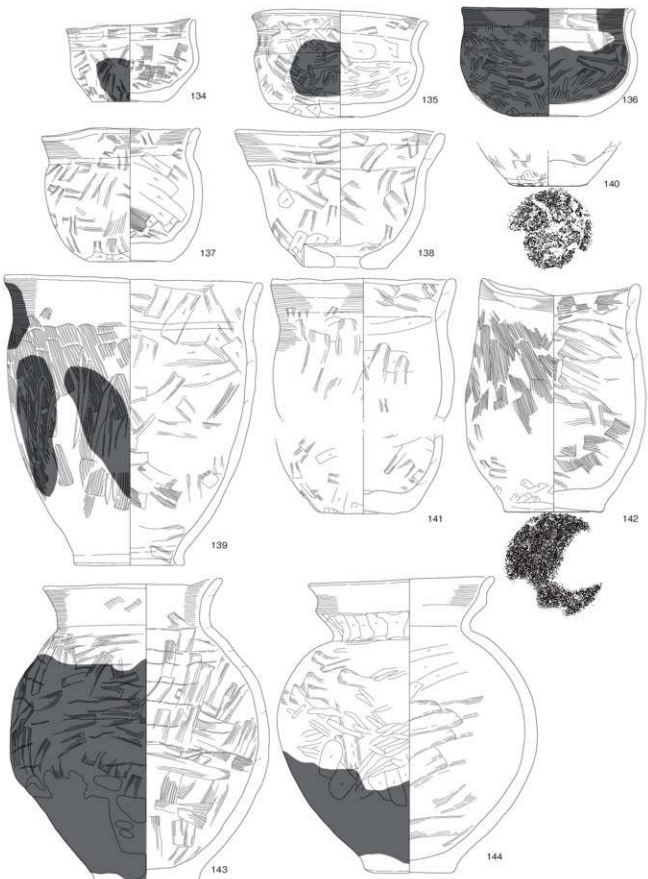


ＳＴ105竪穴住居跡

第62図　ＳＴ105竪穴住居跡出土遺物

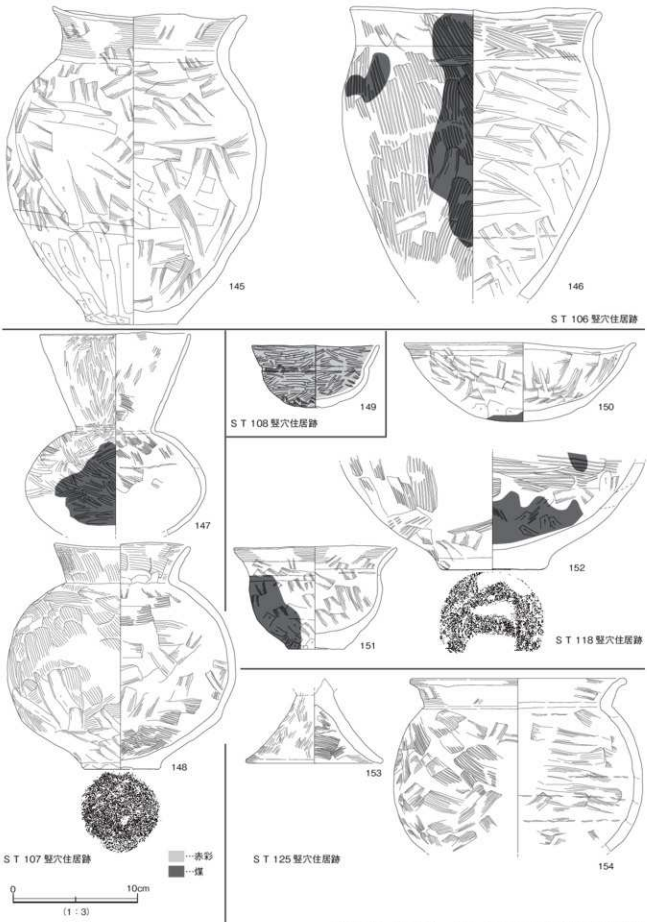


第 63 図　ＳＴ 105・106 竪穴住居跡出土遺物

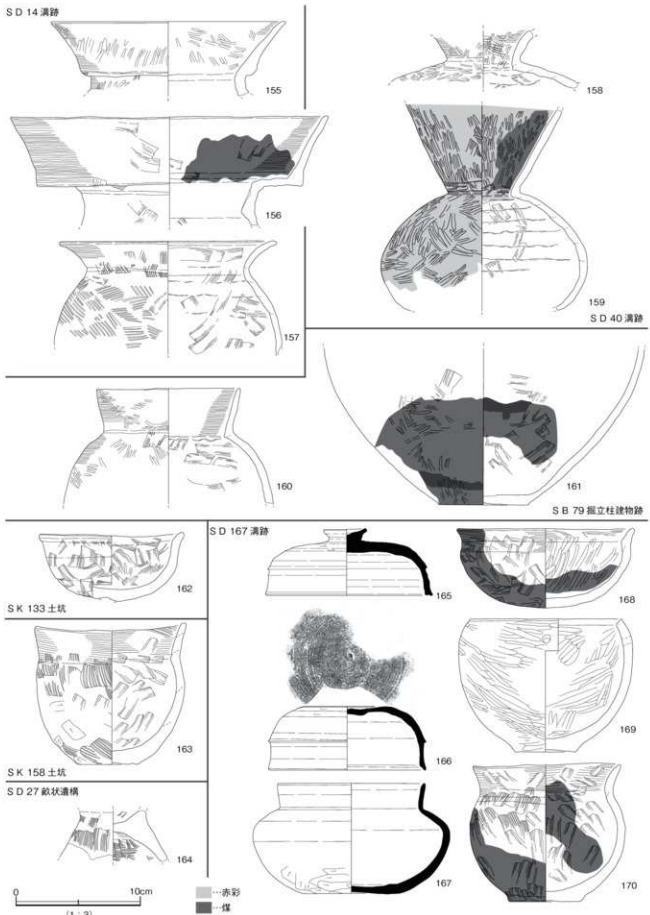


ＳＴ 106 竪穴住居跡

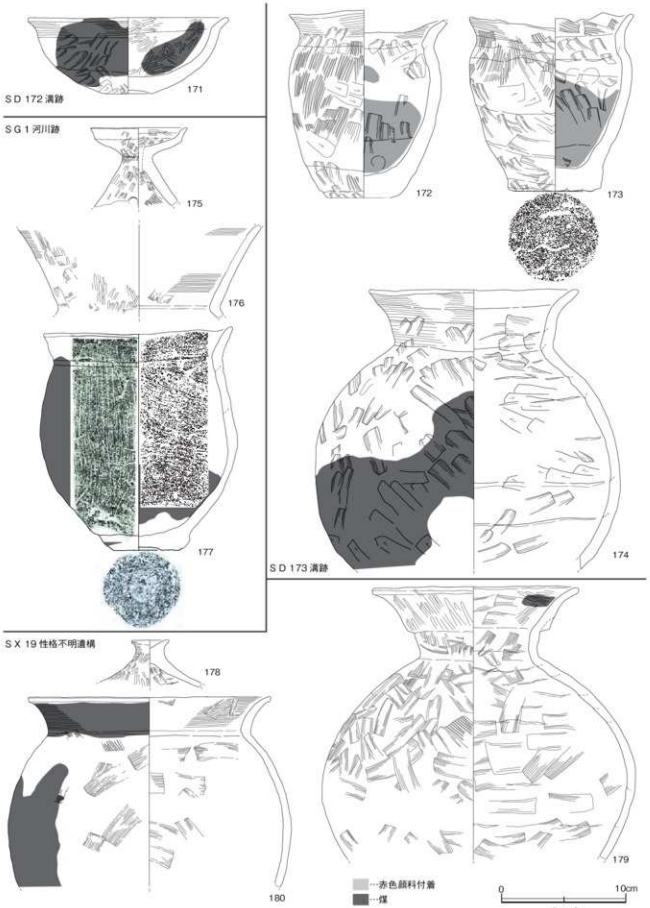
第 64 図　ＳＴ 106 竪穴住居跡出土遺物



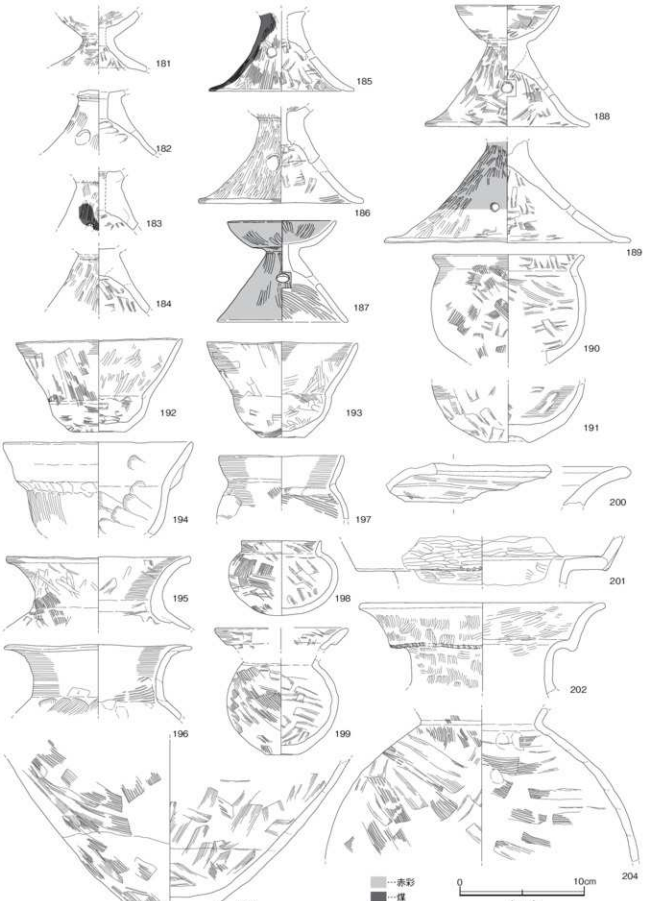
第 65 図　ＳＴ 106～108・118・125 竪穴住居跡出土遺物



第 66 図　SD 14・27・40・167 溝跡・SB 79 掘立柱建物跡出土遺物

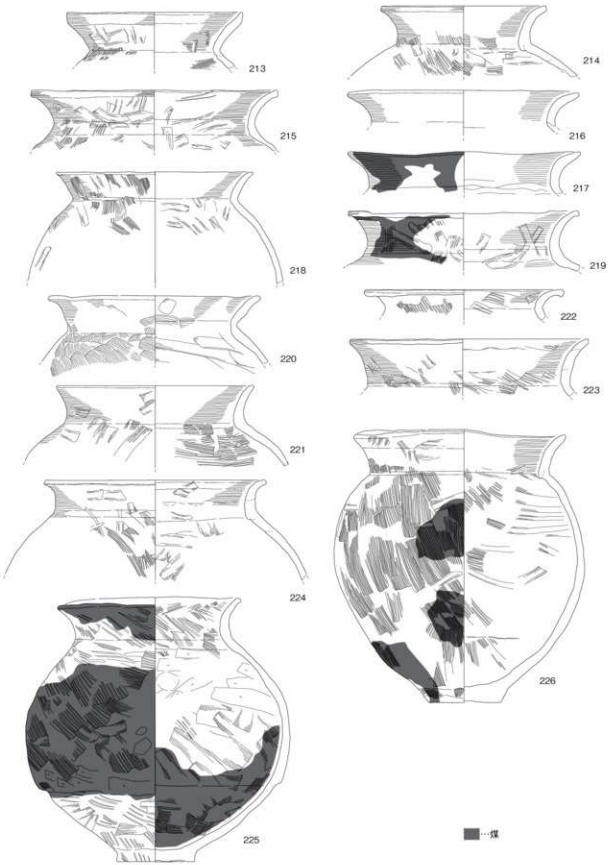


第 67 図　SD 172・173 溝跡・SG 1 河川跡・SX 19 性格不明遺構出土遺物

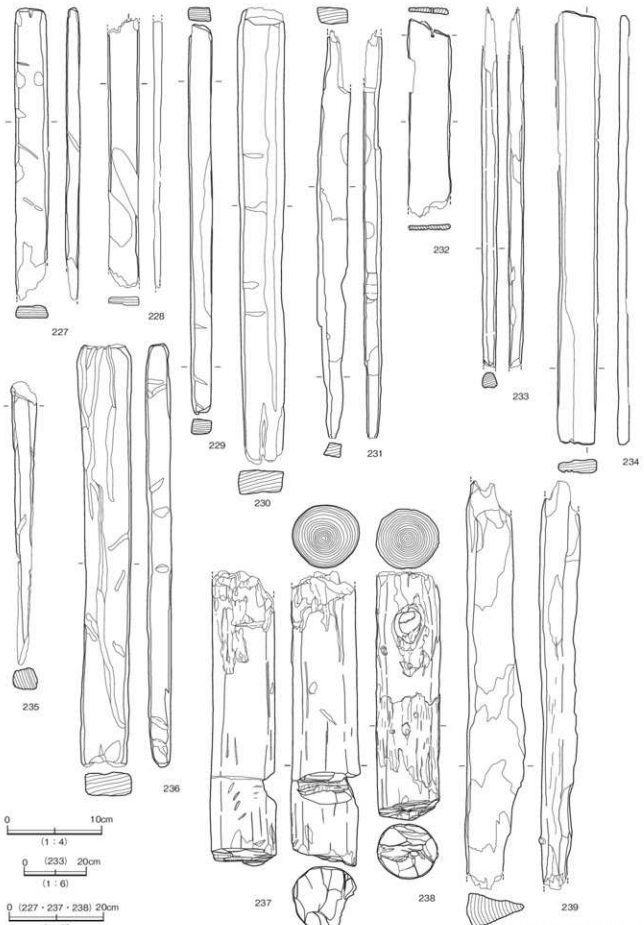


第 68 図　ＳＸ 50 捨場出土遺物（１）

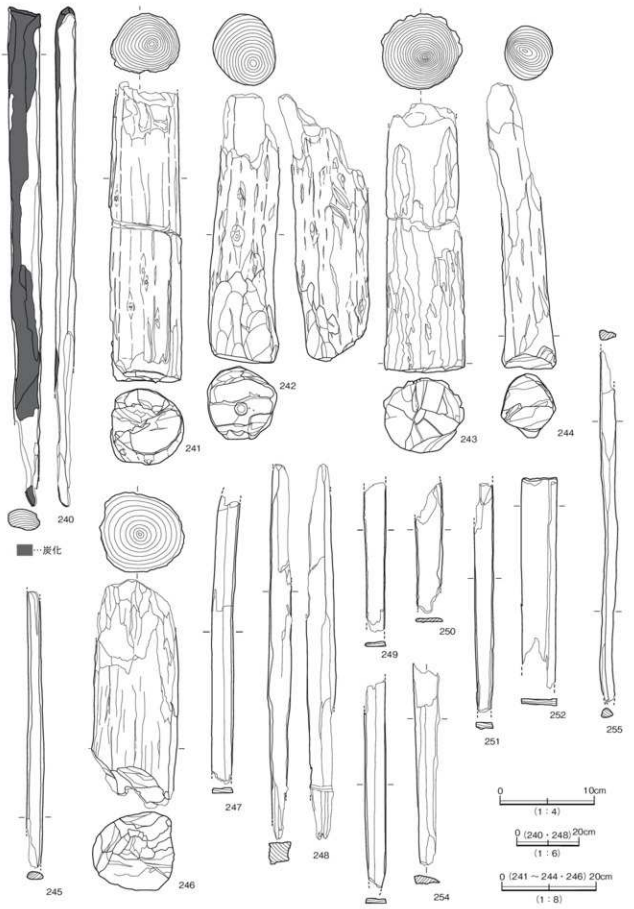
第69図　SX50 捨場出土遺物（2）



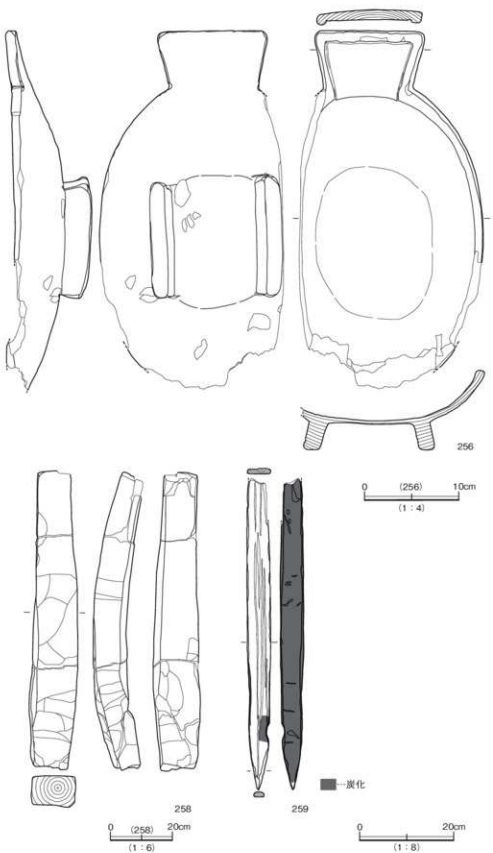
第 70 図　S X 50 捨場出土遺物（3）


227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
0 10cm
(1：4)
0 (233) 20cm
(1：6)
0 (227・237・238) 20cm
(1：8)

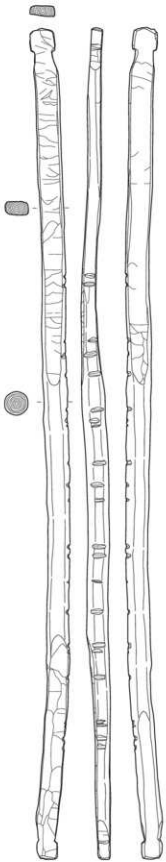
第71図　木製品（1）

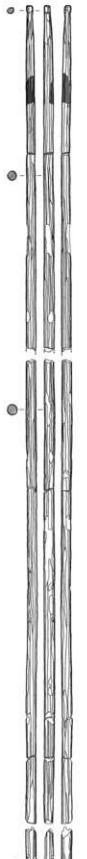

240
…炭化
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
0 10cm
(1 : 4)
0 (240・248) 20cm
(1 : 6)
0 (241～244・246) 20cm
(1 : 8)

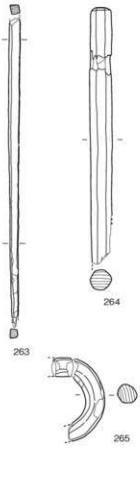
第 72 図　木製品（2）



第 73 図　木製品（3）

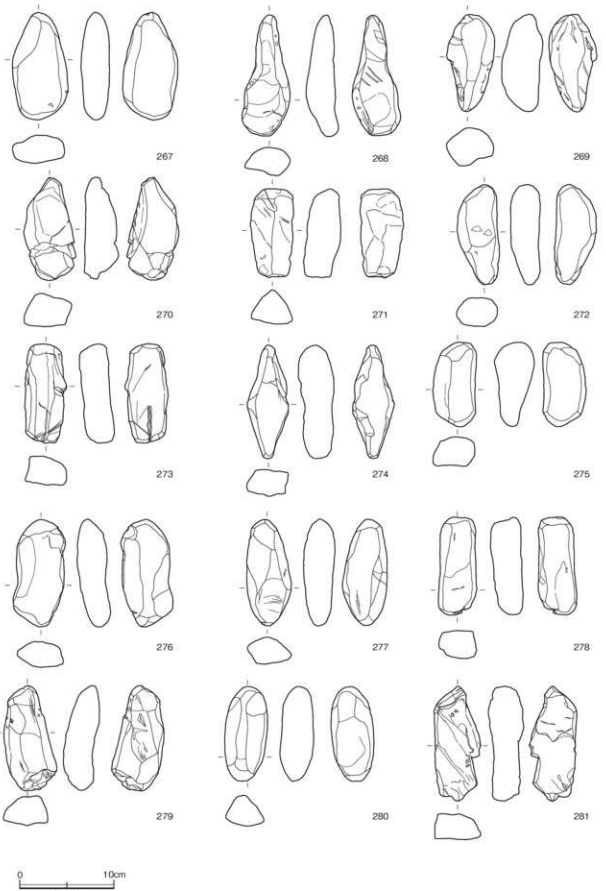






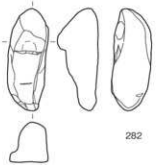
第 74 図　木製品（4）・漆製品

ＳＴ 104 竪穴住居跡

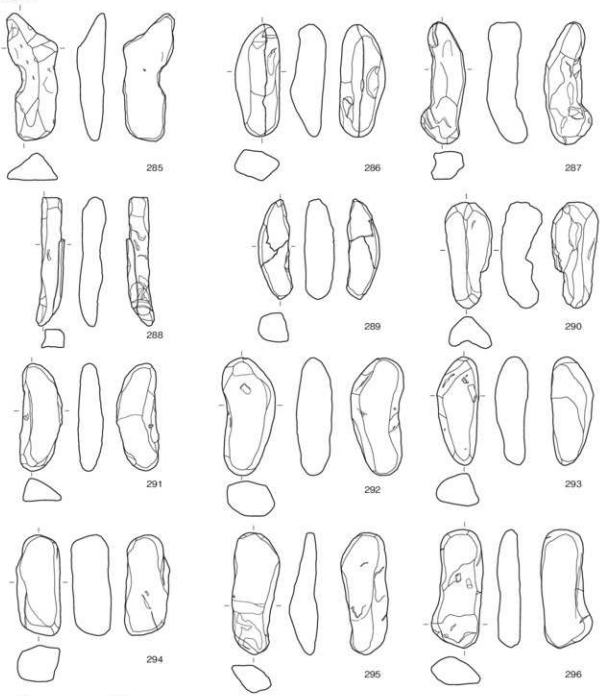


第 75 図　石製品（1）

S T 104 竪穴住居跡

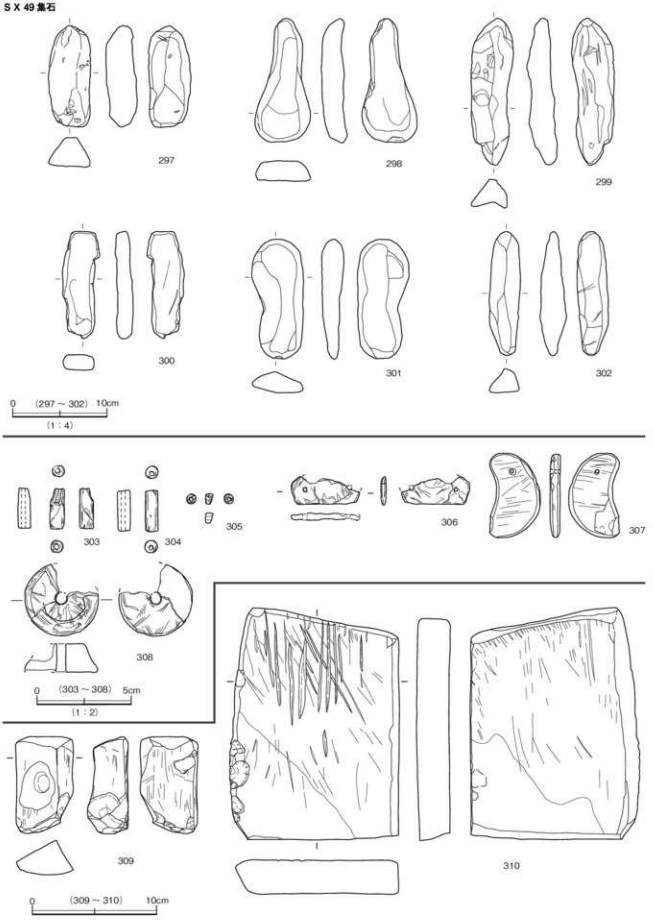


S X 49 集石

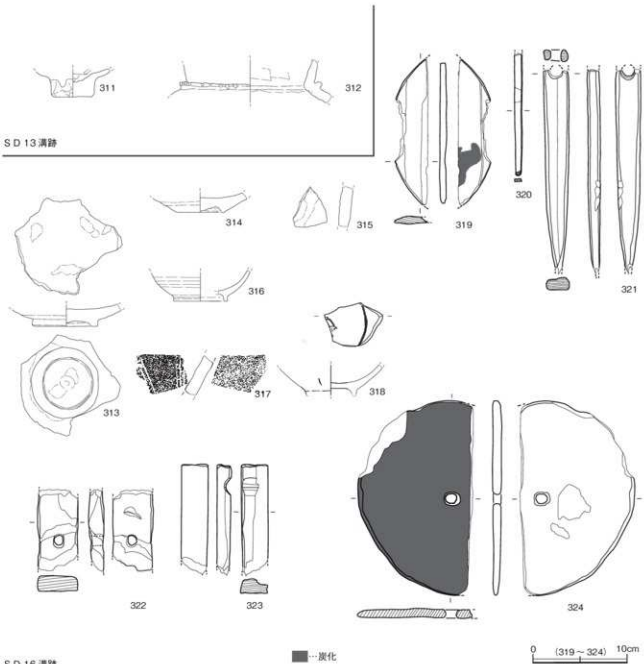


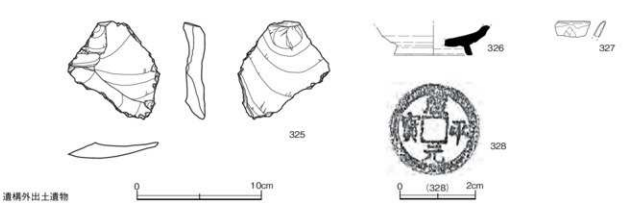
第 76 図　石製品（2）

ＳＸ49集石



第77図　石製品（3）





第 78 図　SD 13・16 溝跡・遺構外出土遺物

表4　古墳時代遺物観察表（1）　凡例：計測値の（ ）は口径・底径の復元値、器高・器厚・長さ・幅の場合は、残存する最大値を示す。備考中の高坏・器台の円窓（ ）内の記述は、遺存部で確認できた円窓の数である。

図版番号	遺物番号	出土地点	登録番号	種別	器種	分類 前期	分類 中期	計測値 (mm) 口径	計測値 (mm) 底径	計測値 (mm) 器高	計測値 (mm) 器厚	調整 外面	調整 内面	調整 底部	胎土	備考
	1	ST20Y	25	土師器	高坏	A 1		(116)	96	91	5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ハケ、ミガキ		微細混	円窓3、坏部内面に煤が付着、東海系高坏
	2	ST20Y	22	土師器	壺	B 2				(69)	5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ハケ、ナデ		微砂混	
	3	ST20Y	40	土師器	甕				(76)	(95.5)	8	ハケ	ハケ	ハケ、ナデ	粗砂混	体部外面に粘土痕残る
	4	ST20Y	23,24,39	土師器	甕	A 3		(142)		(164)	7	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	
	5	ST21F	27	土師器	器台	A		74		(27.5)	6	ミガキ、ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	受け部のみ
	6	ST21Y	32	土師器	器台	B		(86)		(22)	6	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ		微砂混	受け部のみ
	7	ST21Y	29	土師器	壺	A 1				(48)	7.5	ハケ、ミガキ	ハケ、ナデ		微砂混	二重口縁壺、頸部のみ
55	8	ST21Y	28	土師器	甕	B				(26)	5	ハケ、ナデ	ナデ		微砂混	コの字状口縁
	9	ST21Y	30b	土師器	甕				(60)	(51)	7	ナデ、ハケ	ハケ	ケズリ	細砂混	
	10	ST21Y	31	土師器	甕	D		(116)	(46)	(96)	6	ハケ、ナデ	ナデ	ナデ	微砂混	小型甕、外面に煤が付着
	11	ST21Y	30a	土師器	甕	A 2		(154)	58	248	6	ハケ、ナデ	ハケ、ケズリ、ナデ	ハケ	細砂混	外面全体に煤が付着、口縁部面取り
	12	ST22Y	57	土師器	壺	B 2		(154)		(57)	5	ヨコナデ、掘方向ナデ			粗砂混	全体に被熱痕
	13	ST22Y	61,66,52	土師器	壺	B 2		(112)							細砂混	直口壺、外面に被熱痕
	14	ST22Y	65,64,79	土師器	壺	A			(24)	(40)	7		ミガキ		細砂混	小型丸底壺、底部内状
	15	ST22Y	62	土師器	甕	A 2		(150)		(138)	8				細砂混	
	16	ST22Y	52～58	土師器	甕	A 2		(143)		(152)	7	ケズリ、ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	
	17	ST22	53,52	土師器	甕	A 2			60	(119)	7				細砂混	
	18	ST22Y	55	土師器	甕	C 1			50	(57)	16	ナデ	ナデ		細砂混	台付甕脚台
	19	SD34F	45a	土師器	高坏	B				(50)	15	ハケ、ヘラナデ	ミガキ		細砂混	受け部内湾、東海系
	20	SD34F	48	土師器	甕	A 1		144		(53)	9	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、指頭痕		細砂混	口縁端部を上に引き出す
	21	SD34	46	土師器	甕	A 4		(118)		(62)	8	ハケ、ナデ			細砂混	くの字甕
	22	SD34F	45b	土師器	甕	C 2			(104)	(27.5)	6	ナデ、ヘラナデ	ハケ、ナデ		粗砂混	台付甕、脚台中段が膨らむ
56	23	SD34	49	土師器	壺	C		(98)		(62)	6	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		微砂混	
	24	SD35F	82	土師器	鉢	B		(168)	(42)	(50)	8	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ		細砂混	
	25	ST101Y	240	土師器	鉢		B	(172)		76	7	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	
	26	ST101Y	205a	土師器	甕		C 1 a	165	56	196	7	ハケメ、ナデ	ナデ	ケズリ	粗砂混	
	27	ST101Y	205b	土師器	甕		D	154	54	253	8.5	ケズリ、ナデ	ハケメ、ナデ	ナデ	砂粒混	
	28	ST102F	208	土師器	坏		A 1	128		53	8	ナデ		ナデ	緻密	器面が赤褐色
	29	ST102F	209	土師器	坏		B 1	112		50	6	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	全体に被熱痕
	30	ST102F2	211	土師器	坏		B 1	115		69	6.5	ケズリ、ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	口縁部内湾、器面が赤褐色
	31	ST102Y	243	土師器	坏		B 2	128		66	7	ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	ケズリ痕ほし痕
	32	ST102	EK139F 279	土師器	坏		B 2	128		60	6	ケズリ、ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	ケズリ痕ほし痕、器面が赤褐色
	33	ST102Y	242	土師器	杯		C 2	133		58	6				緻密	焼成硬質、須恵器模倣坏
	34	ST102Y	277a	土師器	坏		B 2	(115)		59	7	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	ナデ	細砂混	内面端文状のミガキ調整
	35	ST102Y	241	土師器	坏		B 1	122		174	8	ケズリ、ナデ、ミガキ	ハケ、ナデ	ナデ	緻密	全体に煤が付着
	36	ST102Y	244	土師器	坏		D	164		56	6	ハケ、ナデ	ミガキ	ナデ	細砂混	大型坏、器面が赤褐色
	37	ST102Y	276	土師器	鉢		A 1	112	59	65	4	ケズリ、ナデ	ミガキ、ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	小型鉢
	38	ST102Y	248	土師器	甕		B 2 b	168		(235)	8	ケズリ、ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	全体に被熱痕、外面に煤が付着
	39	ST102	EK139F 245	土師器	甕		A 2 a	(238)	86	267	10	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ	細砂混	
	40	ST103F	235d	土師器	坏		A 1	102	43	49	5	ミガキ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	緻密	平底、外面全体に煤が付着
57	41	ST103F	235c	土師器	坏		A 1	131		56	5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	器面が赤褐色
	42	ST103F	236a	土師器	坏		C 1	118		50	6	ケズリ、ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ケズリ、ミガキ	砂粒混	
	43	ST103Y	227	土師器	坏		C 2	120		55	6	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	器面が赤褐色
	44	ST103Y	236b	土師器	坏		D	138		61	7.5	ケズリ、ハケメ、ナデ	ナデ、ミガキ	ケズリ	砂粒混	口縁部下に明瞭な接痕
	45	ST103Y	247	土師器	坏		C 1	131		47	5.5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	緻密	丸底
	46	ST103Y	256	土師器	坏		A 1	130		64	6	ナデ、ケズリ	ナデ、ケズリ	ナデ、ケズリ	粗砂混	平底気味
	47	ST103Y	258	土師器	坏		A 1	120	28	50	4.5	ナデ、ケズリ	ナデ、ケズリ	ケズリ、ナデ	粗砂混	全体的に被熱痕
	48	ST103Y	228	土師器	坏		A 2	134	36	66	5	ナデ	ハケ、ナデ	ナデ	細砂混	平底
	49	ST103	EL187Y 259b	土師器	坏		A 2	(180)		(65)	5	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	口縁端部が玉縁状
	50	ST103	EK156F	土師器	坏		A 1	(116)		(52)	5.5	ナデ	ナデ		細砂混	小型、内外面に煤が付着

古墳時代遺物観察表（2）

図版番号	遺物番号	出土地点	登録番号	種別	器種	分類 前期	分類 中期	計測値(mm) 口径	計測値(mm) 底径	計測値(mm) 器高	器厚	調整 外面	調整 内面	調整 底部	胎土	備考
58	51	ST103F	235a	土師器	坏		C 2	145		64	6	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	微砂混	赤彩、内外面下位に煤が付着
	52	ST103 EL187	233a	土師器	坏		C 2	150		62	6.5	ケズリ、ナデ、ミガキ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	微砂混	赤彩、口縁部が玉縁状
	53	ST103 EK156F	357	土師器	坏		B 1	127		52	6.5	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ケズリ	砂粒混	赤彩
	54	ST103Y	246	土師器	坏		D	128		56	6.5	ナデ、ミガキ	ミガキ、ナデ	ケズリ	砂粒混	赤彩、丸底
	55	ST103Y	373	土師器	坏		D	160		72	5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	赤彩、外面に煤が付着
	56	ST103 EK156		土師器	坏		D	162		69	6.5	ケズリ、ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ケズリ、ミガキ	砂粒混	赤彩、大型坏、ケズリ飛ばし痕
	57	ST103 EL187Y	374,230	土師器	坏		E	118		79	6	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ	砂粒混	埦状
	58	ST103Y	235b	土師器	坏		E	144		99	5.5	ハケメ、ナデ	ナデ、ハケメ	ケズリ、ナデ	砂粒混	埦状
	59	ST103 EL187	233b	土師器	甑		B 1	150		66	6	ケズリ、ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ケズリ、ハケ、ナデ	細砂混	底部に単孔（φ17mm）
	60	ST103 EL187	230	土師器	甑		B 1	184		97	8	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	底部に単孔（φ22～23mm）
	61	ST103Y	354a	土師器	甑		A 2	205	86	233	8	ケズリ、ナデ、ミガキ	ナデ		砂粒混	
	62	ST103 EL187	231	土師器	甕		C 2 b	157	70	159	9	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	ナデ	粗砂混	小型甕
	63	ST103Y	237b	土師器	壺				61	104	0.8	ケズリ、ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	転用甕
	64	ST103Y	237a	土師器	甕				76		8	ケズリ、ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	ケズリ	粗砂混	
	65	ST103Y	365	土師器	甕				68		10	ケズリ、ハケメ、ナデ	ナデ		粗砂混	外面に煤が付着
59	66	ST103F	238	土師器	甕		B 1 c	154	66	250	7	ケズリ、ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	外面に煤が付着
	67	ST103 EL187Y	229a	土師器	壺		B 1 a		73	274	7.5	ケズリ、ナデ、ミガキ	ナデ	ケズリ	粗砂混	転用甕
	68	ST103 EL187	353	土師器	壺		B 1 b	188		147	7	ハケメ、ナデ、ケズリ	ナデ		砂粒混	転用甕、内面に輪積み痕
	69	ST103 EL187	354b	土師器	甕		B 1 c	168			7	ナデ、ケズリ	ナデ		砂粒混	
	70	ST104Y	313	須恵器	䴗			92			4	ロクロ、波状文	ロクロ		緻密	
	71	ST104 EL142	297	土師器	坏		A 1	146		56	7	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	丸底
	72	ST104 EL142	302b	土師器	坏		B 1	136		71	7	ケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	丸底
	73	ST104 EL142	296	土師器	坏		B 3	154		62	15	ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	砂粒混	ケズリ飛ばし痕
	74	ST104 EL142Y	299b	土師器	坏		A 1	144		61	6	ケズリ、ナデ、ミガキ	ケズリ、ナデ、ミガキ	ケズリ、ナデ	細砂混	全体に被熱痕、丸底気味
	75	ST104 EL142Y	299c	土師器	坏		A 2	145		(63)	7	ミガキ、ナデ	ハケ、ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	丸底、器面が赤褐色、埦状
	76	ST104Y	308	土師器	坏		A 2	138		69	9	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ケズリ	砂粒混	器面が赤褐色
	77	ST104Y		土師器	坏		B 1	136		58	6.5	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	ケズリ	砂粒混	
	78	ST104 EK154	311	土師器	坏		B 2	141		53	11	ケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	粗砂混	
	79	ST104 EK154F	310	土師器	坏		B 1	142		65	7	ナデ、ケズリ	ナデ、ミガキ	ケズリ、ナデ	細砂混	ほぼ完形、器面が赤褐色
	80	ST104 EK154Y		土師器	坏		B 1	132		71	8	ナデ	ナデ、ミガキ	ケズリ	砂粒混	
60	81	ST104Y	307a	土師器	坏		A 2	150	40	76	7	ハケメ、ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ		砂粒混	平底
	82	ST104Y	307b	土師器	坏		A 2	(148)		(73)	6	ケズリ、ミガキ、ナデ	ケズリ、ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	粗砂混	内外面に煤が付着、器厚薄い
	83	ST104Y	218	土師器	鉢		A 2	130	62	89	7	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ケズリ	粗砂混	外面に煤が付着
	84	ST104 EK154		土師器	鉢		A 2		68		7	ケズリ、ヘラナデ	ヘラナデ	ナデ（輪台貼付）	粗砂混	外面全体的に被熱痕
	85	ST104 EL142	295	土師器	鉢		A 2	143	60	134	8.5	ナデ	ナデ、ミガキ	ナデ	砂粒混	胎土に雲母を含む、体部中位で接合痕
	86	ST104 EL142	294	土師器	壺				90			ケズリ、ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	内面に吃水痕、補修痕
	87	ST104 EL142	302a	土師器	甑		B 1	186		114	9	ケズリ、ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	鉢形、底部に単孔（φ24～26mm）
	88	ST104 EL142	300	土師器	甑		A 2	210	95	257	8.5	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ		粗砂混	
	89	ST104Y	309	土師器	甕				88		9	ハケメ	ナデ	ナデ	粗砂混	底部のみ
	90	ST104Y	312	土師器	甕		B 1 b	(172)			7	ハケ、ナデ	ヘラナデ		細砂混	内面に炭化物が付着
	91	ST104F	306	土師器	甕		B 2 a	(285)			8	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		砂粒混	
61	92	ST104 EL142	298	土師器	甕		A 1 a	201	68	281	7	ケズリ、ハケメ、ナデ	ケズリ、ナデ、ハケメ	ナデ	粗砂混	
	93	ST104 EL142Y	299a	土師器	甕		B 1 a	169	75	291	8	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ナデ	細砂混	粗いハケメ調整
	94	ST104 EL142	301	土師器	甕		B 1 c	184	68	308	8	ケズリ、ナデ	ナデ	ナデ	粗砂混	
62	95	ST105Y	224	須恵器	坏身			105		52	6	ケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	石英粒混	TK47 型式
	96	ST105Y	223	土師器	坏		B 1	106		47	5	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ケズリ	砂粒混	小型、内面暗文状のミガキ調整
	97	ST105Y	226	土師器	坏		C 2	104		40	5	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	ケズリ	砂粒混	小型
	98	ST105 EK166F		土師器	坏		B 1	110	47	42	6.5	ナデ、ケズリ	ナデ	ケズリ	粗砂混	小型、口唇部に平坦面をもつ
	99	ST105Y	225	土師器	坏		A 1	125		54	5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	微砂混	内外面に煤が付着
	100	ST105Y		土師器	坏		D	144		57	7	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	緻密	完形品、底部円状

古墳時代遺物観察表（3）

図版番号	遺物番号	出土地点	登録番号	種別	器種	分類 前期	分類 中期	計測値（mm） 口径	計測値（mm） 底径	計測値（mm） 器高	計測値（mm） 器厚	調整 外面	調整 内面	調整 底部	胎土	備考
	101	ST105　EK157F		土師器	坏		C1	166		68	6	ケズリ、ハケ、ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	粗砂混	大型坏、全体に被熱痕
	102	ST105Y	263	土師器	坏		B1	130	48	41	5.5	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	ナデ	砂粒混	平底
	103	ST105　EL137Y	268	土師器	坏		A2	152	70	53.5	6	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ	細砂混	口縁端部が玉縁状
	104	ST105　EL137	267	土師器	坏		A2	120		67	5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	緻密	赤彩、丸底、碗状
	105	ST105Y	221	土師器	坏		A2	150			5	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	底部欠損の坏？
	106	ST105F		土師器	坏		D	141		51	7	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ		微砂混	赤彩
	107	ST105F4	216.217	土師器	坏		A1	130	38	57	5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	赤彩、平底気味
	108	ST105Y	222	土師器	坏		A1	97		52	7.5	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ、ミガキ	緻密	赤彩、小型、内外面に煤が付着
	109	ST105Y		土師器	坏		D	138		61	5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ		細砂混	赤彩、内面に煤が付着
62	110	ST105　EK157Y	275	土師器	坏		B3	146		51	5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	緻密	赤彩、外面中位に段、ほぼ完形
	111	ST105Y	253	土師器	坏		B1	142		57	6	ケズリ、ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ケズリ、ナデ	微砂混	赤彩、外面中位に段
	112	ST105Y	314	土師器	坏		A2	(80)		54	6	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ミガキ、ナデ	緻密	赤彩
	113	ST105　EK166	266	土師器	壺		B2	100			6	ナデ、ミガキ	ミガキ、指頭痕		細砂混	赤彩、内面に輪積み痕
	114	ST105Y	262	土師器	注口鉢		D	114	52	108	5	ナデ	ナデ、ハケ	ナデ	細砂混	体部上半に注ぎ口が付く
	115	ST105Y	220	土師器	鉢		A1	132		75	5	ケズリ、ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	緻密	内外面に被熱痕、内面に暗文状のミガキ調整
	116	ST105F4	254	土師器	鉢		A2	(130)	54	90	5	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ミガキ	砂粒混	
	117	ST105F4	264	土師器	鉢		A1	156		126	7	ケズリ、ミガキ、ナデ	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	器面が赤褐色、下部に煤が付着
	118	ST105　EK157	274	土師器	鉢		A2	179	68	123	5	ナデ、ケズリ、ミガキ	ヘラナデ	ナデ	細砂混	赤彩
	119	ST105Y		土師器	鉢		A2	220	74	133	8	ケズリ、ハケ、ミガキ	ハケ、ナデ、ミガキ	ケズリ、ナデ	細砂混	内外面に煤が付着
	120	ST105F4	219	土師器	甑		A1	250	76	125	7.5	ケズリ、ハケメ、ナデ	ケズリ、ハケメ、ナデ		砂粒混	外面に炭化物が付着
	121	ST105　EK166F		土師器	甕		C1a	(186)			6	ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	外面全体に煤が付着
	122	ST105　EL137Y	266	土師器	壺		B1b	156	76	236	7	ケズリ、ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	ケズリ	砂粒混	転用甕、外面に煤が付着
	123	ST106　EL188Y		土師器	坏		B2	112		62	6	ケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	丸底、外面一部に煤が付着
	124	ST106　EK193Y	376	土師器	坏		B2	120		48	6	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	粗砂混	器面が赤褐色
	125	ST106　EL188	369	土師器	坏		A1	132		66.5	6	ケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	粗砂混	全体が被熱痕、カマド支脚に転用？
63	126	ST106　EK193Y	379	土師器	坏		A1	(118)		69	6	ケズリ、ナデ、ミガキ	ナデ	ケズリ、ナデ	微砂混	器面が赤褐色、ケズリ飛ばし痕
	127	ST106　EK193Y	381	土師器	坏		A2	178		(74)	8	ケズリ、ミガキ、ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	大型坏、丸底、外面に煤が付着
	128	ST106Y	339a	土師器	坏		B2	116		56	5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ミガキ、ナデ	細砂混	器面が赤褐色、外面に煤が付着
	129	ST106Y	343	土師器	坏		B3	(116)		68	6	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	外面全体に被熱痕、ケズリ飛ばし痕
	130	ST106　EK193Y	377	土師器	壺		B1b	(96)			7	ミガキ、ナデ	ナデ		細砂混	外面に煤が付着、外面全体に被熱痕
	131	ST106Y		土師器	壺		B2				7	ミガキ	ナデ		微砂混	直口壺、外面に煤が付着、器面が赤褐色
	132	ST106Y	338	土師器	壺		C	120	40	143	7	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	須恵器短頸壺の模倣、丸底、歪み有
	133	ST106　EK193Y	380	土師器	壺		C	90	(28)	82	7	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	須恵器短頸壺の模倣、外面に煤が付着
	134	ST106Y	342	土師器	鉢		C	100	56	65	5	ナデ	ハケ、ナデ	ナデ	細砂混	外面に煤が付着
	135	ST106Y	344	土師器	鉢		A2	138	45	85	6	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	外面に煤が付着
	136	ST106　EK193Y	382	土師器	鉢		A2	134	60	86	6	ケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	内外面に煤が付着
	137	ST106　EK193Y	378	土師器	鉢		A2	122	64	104	7	ケズリ、ハケ、ナデ	ケズリ、ハケ、ナデ	ナデ	細砂混	
	138	ST106　EK193Y	383	土師器	甑		B2	164	64	110	8	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	鉢形
64	139	ST106Y	348	土師器	甑		A1	205	85	229	7.5	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		砂粒混	
	140	ST106　EL188		土師器	甕			106	50	32	8	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	粗砂混	全体に被熱痕、底面に籾痕
	141	ST106Y	339b	土師器	甕		C2b	(142)	(60)		8	ケズリ、ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	細砂混	内外面に被熱痕、底面に籾痕
	142	ST106Y	347b	土師器	甕		C2b	120	(76)	184	9	ケズリ、ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ナデ	細砂混	
	143	ST106Y	340	土師器	甕		A1c	142	80	243	8.5	ナデ	ナデ	ナデ	粗砂混	外面に炭化物が付着、輪積み痕
	144	ST106Y	341	土師器	壺		A	145	70	235	10	ケズリ、ナデ、ミガキ	ケズリ、ナデ		粗砂混	転用甕、外面下半に炭化物が付着
	145	ST106Y	346	土師器	甕		A1c	152	72	251	8	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ		細砂混	
	146	ST106Y	347a	土師器	甑？		A2？	200			7	ハケメ、ナデ	ケズリ、ナデ、ハケメ		粗砂混	
65	147	ST107Y	336	土師器	壺	B2		(118)			4	ミガキ、ナデ	ナデ、ハケ、ミガキ		微砂混	直口壺、外面に煤が付着
	148	ST107Y	335	土師器	壺	D1			58	128	6	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	粗砂混	底面に籾痕
	149	ST108Y	329	土師器	鉢	A		(100)		(49)	4	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	緻密	赤彩
	150	ST118F	304	土師器	坏		A2	178		62	5	ケズリ、ナデ	ヘラナデ、ミガキ	ケズリ、ナデ	細砂混	外面に被熱痕

古墳時代遺物観察表（4）

図版番号	遺物番号	出土地点	登録番号	種別	器種	分類 前期	分類 中期	計測値(mm) 口径	計測値(mm) 底径	計測値(mm) 器高	器厚	調整 外面	調整 内面	調整 底部	胎土	備考
65	151	ST118F	305	土師器	鉢		A 2	(127)	43	82	4	ケズリ,ナデ	ナデ	ケズリ,ナデ	細砂混	外面に煤が付着
	152	ST118 EK189Y		土師器	甕				(80)		9	ハケ,ナデ	ケズリ,ハケ,ナデ	ケズリ,ナデ	細砂混	底部に刺圧痕,内面に煤が付着
	153	ST125Y	350	土師器	高坏	C			(106)	(69)	8	ミガキ,ナデ	ハケ,ナデ		微砂混	
	154	ST125Y	349	土師器	甕	A 3		(168)		(137)	7	ハケ,ナデ	ナデ		粗砂混	内外面に煤が付着,口縁部面取り
	155	SD14F	19	土師器	壺	A 2		(184)		(56)	6	ミガキ,ナデ	ミガキ,ナデ		粗砂混	二重口縁壺
	156	SD14F	18,21	土師器	壺	A 1		(250)		(86.5)	5	ヘラナデ,ヨコナデ	ヘラナデ,ヨコナデ		細砂混	二重口縁壺,内面に煤が付着
	157	SD14F	18	土師器	甕	A 3		168		(89)	6	ヨコナデ(口縁)ハケ	ヘラナデ		粗砂混	外面粗いハケメ調整
	158	SD80F	77a	土師器	壺	A 2				(45)	6	ナデ,ミガキ	ハケ,ナデ,ミガキ		微砂混	二重口縁壺,頸部内径φ72mm
	159	SD80F	78,84	土師器	壺	B 1				(163)	6.5	ミガキ,ナデ	ナデ		細砂	直口壺,赤彩
	160	SB79	EB77	土師器	壺	C		(112)		(91)	6	ミガキ,ハケ,ナデ	ヘラナデ		細砂混	外面に煤が付着
	161	SB79	ED68F	土師器	壺				(70)	(123)	6	ハケ,ミガキ	ヘラナデ	ナデ	微砂混	転用壺,内外面に煤・炭化物が付着
66	162	SK133Y	290	土師器	坏		A 2	172	14	54	8	ナデ	ナデ,ミガキ	ナデ	微砂混	器面が赤褐色,底部円状
	163	SK158F	202	土師器	鉢		A 2	116	48	115.5	9			ケズリ,ハケ	粗砂混	
	164	SD27F	38	土師器	不明					(40)	10	ハケ	ハケ,ナデ		微砂混	脚部
	165	SD67F	324,318	須恵器	有蓋高坏蓋			130		52	6	ロクロ,ケズリ	ロクロ		細砂混	有蓋高坏蓋,つまみ部：径0.35cm円状
	166	SD167F	325,284	須恵器	杯蓋			124		50	4	ロクロ,ケズリ	ロクロ		砂粒混	TK23～43古相？
	167	SD167F	323,324	須恵器	短頸壺			116	73	87	5.5	ロクロケズリ	ロクロ	ケズリ	細砂混	
	168	SD167F	325	土師器	坏		A 2	138		63	7	ケズリ,ナデ,ミガキ	ミガキ,ナデ	ケズリ,ナデ	微砂混	外面に被熱痕,内面に煤が付着
	169	SD167F	286	土師器	壺		D	120	47	105	7	ケズリ,ミガキ	ミガキ	ケズリ,ミガキ	粗砂混	口縁部下に径5 mmの穿孔
	170	SD172Y	366	土師器	鉢		A 2	115	56	109	7	ハケ,ナデ	ナデ	ケズリ,ナデ	細砂混	外面に被熱痕,内外面に煤が付着
	171	SD172F		土師器	坏		A 2	(154)	37	60	8	ケズリ,ナデ	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	微砂混	
	172	SD173Y	333,334	土師器	甕		C 2 b	(122)	46	(148)	9	ケズリ,ハケ,ナデ	ナデ,ユビオサエ	ナデ	細砂混	内面に赤色顔料が付着,容器？
	173	SD173F	330	土師器	甕		C 2 b	127	72	139	9	ケズリ,ハケ,ナデ	ハケ,ナデ	ナデ	細砂混	底部穿孔,内面に赤色顔料が付着,容器？
	174	SD173F	331	土師器	壺		B 1 a	162		(221)	9	ケズリ,ナデ	ケズリ,ナデ		細砂混	転用壺,外面に煤が付着
67	175	SG1F5	76	土師器	器台	C		76		(62)	6	ミガキ,ナデ	ミガキ,ハケ,ヘラナデ		微砂混	脚部円窓3
	176	SG1F4a		土師器	壺					(73)	7	ミガキ,ヘラナデ	ヘラナデ		微砂混	直口壺,磨滅が激しい
	177	SG1F3b	67	土師器	甕		C 2 b	147	52	186	6.5				細砂混	
	178	SX19F	36	土師器	壺	A				(36.5)	6	ミガキ,ナデ	ヘラナデ		細砂混	
	179	SX19	EK31	土師器	壺	A 2		160		(216)	7	ヘラナデ,ミガキ	ヘラナデ,ミガキ		細砂混	二重口縁壺,外面下半に煤が付着
	180	SX19	ED30Y	35	土師器	甕	A 2	(190)		(150)	5.5				細砂混	外面に被熱痕
	181	SX50	13-F	103	土師器	器台				(46)	6	ミガキ,ナデ	ミガキ,ナデ		微砂混	貫通孔
	182	SX50	9-E	125	土師器	器台					7	ミガキ	ナデ		砂粒混	
	183	SX50	12-H	108	土師器	器台				(46)	7	ミガキ	ナデ		細砂混	円窓(2)
	184	SX50	15-G	96	土師器	器台				(52)	6	ミガキ	ナデ		細砂混	貫通孔なし
	185	SX50	16-F	85	土師器	器台			125	(63)	6	ハケ,ミガキ	ナデ		微砂混	円窓4,外面に煤が付着
	186	SX50	15-F	70	土師器	器台			(128)	(76)	6	ミガキ,ナデ	ハケ,ナデ		微砂混	
	187	Ⅱb層	13-I	133	土師器	器台	B	86	104	80	5	ミガキ	ミガキ,ハケメ		砂粒混	赤彩
	188	SX50	12-G	118	土師器	高坏	A?	(82)	(134)	(96)	5				微砂混	円窓3
	189	SX50	11-F	100,85	土師器	高坏	A 2		(186)	(80)	6	ミガキ	ハケ,ナデ		微砂混	赤彩
68	190	SX50	16-G	91	土師器	鉢	D	(116)		(86)	6	ハケ,ナデ	ナデ		細砂混	
	191	SX50	16-H	94	土師器	鉢	D		(30)	(46)	6	ナデ	ナデ,ハケ	ナデ	細砂混	底部円状
	192	SX50	13-F	105	土師器	鉢	C	130	40	73	5	ハケ,ナデ	ミガキ,ナデ	ナデ	細砂混	平底,外面に被熱痕
	193	SX50	13-F	106,105	土師器	鉢	C	118	34	75	5	ハケ,ナデ	ミガキ,ナデ	ナデ	微砂混	平底
	194	SX50	20-H	34	土師器	鉢		(148)			6	指頭痕,ハケメ	ナデ		砂粒混	口縁部下部に隆帯貼付
	195	SX50	17-G	93,96	土師器	壺		(144)		(52)	7	ハケ,ミガキ,ナデ	ハケ,ナデ		細砂混	器面が赤褐色,口縁部面取り
	196	SX50	8-E	131	土師器	壺		(148)			7	ナデ,ハケメ	ナデ,ハケメ		粗砂混	
	197	SX50	20-E		土師器	壺		(98)			4.5	ハケメ,ナデ	ハケメ,ナデ		砂粒混	
	198	SX50	15-F	74b	土師器	壺	E	62		59	5	ハケ,ナデ	ハケ,ナデ	ハケ,ナデ	微砂混	小型丸底壺,口縁部が垂直に上がる
	199	Ⅱb層	10-E	121	土師器	壺	A 3	(104)	24	(76)	5	ハケ,ナデ	ナデ	ナデ	微砂混	小型壺,口縁部が折り返し状
	200	SX50	13-F	104	土師器	壺	A 1				8	ナデ	ナデ		粗砂混	二重口縁壺,内面に煤が付着

古墳時代遺物観察表（5）

図版番号	遺物番号	出土地点	登録番号	種別	器種	分類 前期	分類 中期	計測値(mm) 口径	計測値(mm) 底径	計測値(mm) 器高	計測値(mm) 器厚	調整 外面	調整 内面	調整 底部	胎土	備考
68	201	SX50 9-E	127	土師器	壺	A 1					9	ミガキ	ミガキ		粗砂混	二重口縁壺、頸部に刺突文
	202	SX50 10-E	122	土師器	壺	A 1		(194)			7	ミガキ	ミガキ		粗砂混	二重口縁壺、頸部に刺突文
	203	Ⅱb層 12-K	134c	土師器	壺				62		7	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	ナデ	粗砂混	転用甕、外面中位に煤が付着
	204	SX50 12-G	117,109	土師器	壺	D 1				(120)	7	ハケ	ハケ、ナデ		細砂混	
69	205	Ⅱb層 13-I	10	土師器	壺	B 2			(36)		5	ミガキ、ナデ	ナデ	ナデ	微砂混	直口壺、外面赤彩、外面一部に煤が付着
	206	SX50 15-F	73	土師器	壺	B 2		(96)	35	(100)	5	ケズリ、ミガキ、ナデ	ナデ	ナデ	微砂混	直口壺
	207	SX50 15-F	74a	土師器	壺	B 1		158		225	4.5	ハケ、ナデ	ナデ		細砂混	器厚が厚い、口縁部に煤が付着
	208	SX50 18-F,20-E		土師器	壺	D 1			68		7	ナデ、ケズリ	ナデ	ナデ、ミガキ	砂粒混	胴部最大径 230mm
	209	Ⅱb層 9-I	130	土師器	壺	D 1		(142)	81	316	7	ケズリ、ミガキ、ナデ	ハケ、ナデ	ナデ	細砂混	外面に煤が付着
	210	Ⅱb層 12-K	134a	土師器	壺	D 2		229	74	299	6.5	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		粗砂混	外面下半に炭化物が付着
	211	Ⅱb層	15	土師器	鉢				(18)	(23)	8	ハケ			粗砂混	有孔鉢、外面全体に煤・炭化物が付着
	212	Ⅱb層 16-H	1	土師器	甕	C 2			(90)	(60)	10	ヘラナデ	ヘラナデ		粗砂混	台付甕脚部、全体に被熱痕
70	213	SX50	111	土師器	甕	A 1		(138)		(45)	5.5	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		微砂混	口縁部面取り
	214	SX50 14-G	102	土師器	甕	A 2		(128)		(55)	6	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		微砂混	口縁部面取り
	215	SX50 19-F	112	土師器	甕	A 2		(192)		(48)	5.5	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	コの字状口縁
	216	SX50 9-E	124	土師器	甕	A 4		(182)			7	ナデ	ナデ		砂粒混	口縁部外面に炭化物が付着
	217	SX50 8-E	129	土師器	甕	A 4		(184)			8	ナデ	ナデ		粗砂混	口縁部に炭化物が付着
	218	SX50 16-G	88	土師器	甕	A 3		(154)		(88)	5	ハケ、ナデ	ヘラナデ		細砂混	くの字状口縁
	219	SX50 18-E	110	土師器	甕	A 2		179		(47)	7.5	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	コの字状口縁、口縁部面取り
	220	SX50 9-E	128	土師器	甕	A 2		(166)			7	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ		粗砂混	
	221	Ⅱb層 15-I	13	土師器	甕	A 4		(154)		(64.5)	6	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		粗砂混	外面に煤が付着
	222	Ⅱb層 14-I	14	土師器	甕	B		(114)		(24)	6	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	コの字状口縁
	223	SX50 15-F	70	土師器	甕	A 2		(198)		(45)	7	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ		細砂混	
	224	SX50 15-F	72	土師器	甕	B		(172)		(79)	7	ナデ、ハケ	ヘラナデ		微砂混	外面に煤が付着、口縁部面取り
	225	SX50 16-G	86,87,90	土師器	甕	A 2		140	60	208	6	ハケ、ナデ、ケズリ	ハケ、ナデ、ケズリ	ハケ	細砂混	体部下半部に段
	226	Ⅱb層 12-K	134b	土師器	甕	A 2		(166)	57	215	6	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ナデ	細砂混	全体に被熱痕、外面に煤が付着
78	311	SD13Y 15-F		土師器	小型土器				30	(22)	4	ハケ、ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	細砂	流れ込み
	312	SD13Y 13-E		土師器	壺					(33)	7	ナデ・指頭痕			細砂	流れ込み、付帯付壺、付帯に刺突文

表5　陶磁器・遺構外遺物観察表

図版番号	遺物番号	出土地点	登録番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	計測値(mm) 底径	計測値(mm) 器高	計測値(mm) 器厚	調整 外面	調整 内面	調整 底部	胎土	備考
78	313	SD16F 15-F		陶器	皿	50	(17.5)	6		ロクロナデ	ロクロナデ	削り高台	精良	肥前・内外面灰釉がかかる、内面見込みに砂目積痕
	314	SD16Y 15-F		陶器	皿	34	(15.5)	7		ロクロナデ	ロクロナデ	削り高台	精良	肥前・灰釉、唐津焼Ⅱ-2、ケズリ高台
	315	SD16F		陶器	不明		(31.5)	8		ロクロナデ	ロクロナデ		精良	灰釉が一部かかる、信楽？
	316	SD16F		陶器	鉢	(43)	(24)	3		ロクロナデ	ロクロナデ		精良	大堀相馬
	317	SD16F		陶器	擂鉢		31.5	9		ナデ	櫛目		精良	会津本郷・櫛目４条以上
	318	SD16F		磁器	碗		(24)	4		ロクロナデ	ロクロナデ		黒色粒混	肥前系染付碗・内面に圏線と文様
	326	表採		須恵器	有台坏	(60)	(23)			ロクロナデ	ロクロナデ			
	327	表採		青磁	碗		(12.5)	4		ロクロナデ	ロクロナデ		精良	龍泉窯、釉厚 0.5mm

表6　木製品観察表

図版番号	遺物番号	登録番号	出土地点	種別	長さ(直径)	幅	厚さ(高さ)	備考	時代
71	227	213①	ST102F3	板材	(307)	34	13		古墳
	228	213③	ST102F3	板材	(295)	32	9	両端欠く	古墳
	229	250	ST102F3	角材	(410)	24	14	両端欠く	古墳
	230	215	ST102F3	角材	(934)	25	50	両端欠く	古墳
	231	252	ST102F3	角材	(430)	32	18	両端欠く・炭化	古墳
	232	214	ST102F3	板材	(208)	46	5	腐食	古墳
	233	249	ST102F3	角材	(572)	23	24	両端欠く	古墳
	234	282	ST102	板材	(456)	40	14	両端欠く	古墳
	235	W②	ST102	角材	(297)	26	24	腐食・炭化	古墳
	236	281	ST102	板材	(445)	56	24	一端欠く	古墳
	237	367	ST102 EP203	柱材	(625)	142	133	樹皮残る	古墳
	238	368	ST102 EP204	柱材	(525)	133	126	樹皮残る	古墳
	239	360	ST103Y	角材	(430)	61	42	両端欠く	古墳
72	240	361	ST103Y	角材	(793)	50	31	腐食	古墳
	241		ST103 EP205	柱材	(640)	122	138	樹皮残る	古墳
	242		ST103 EP206	柱材	(572)	132	151	樹皮残る	古墳
	243		ST103 EP207	柱材	(570)	170	160	樹皮残る	古墳
	244		ST103 EP208	柱材	(605)	101	114	樹皮残る	古墳
	245		ST105 EK166	板材	(291)	17	8	両端欠く	古墳
	246		ST105 EP185	柱材	(485)	182	165	先端V字状	古墳
	247	255	SK133F3	板材	(304)	22	5.5	薄い・両端欠く	古墳
	248	257	SK133F3	角材	(637)	46	34	杭状・一端腐食	古墳
	249	256	SK133Y	板材	(157)	23	4.5	薄い・両端欠く	古墳
	250	289①	SK133Y	板材	(137.5)	28.5	4	薄い・両端欠く	古墳
	251	289③	SK133Y	板材	(241)	20	7	両端欠く	古墳
	252	261	SK133Y	板材	(222)	37	7	一端欠く	古墳
	253	288	SK133Y	板材	(219)	22	5	薄い・両端欠く	古墳
	254	291	SK133Y	板材	(210)	28	8	両端欠く	古墳
	255	292	SK133Y	角材	(373)	17	10	両端欠く	古墳
73	256	260	SK133Y	容器	(572)	291	139	2/3 残存	古墳
	257	75	SG 1	加工材	(1110)	61	38	一端欠く	古墳
	258		SG 1 F2	角材	(316)	46	36		古墳
	259	68	SG 1	加工材	(666)	50	12	一端欠く・炭化	古墳
74	260	69	SG 1	編台	(1760)	52	50		古墳
	261	371	SG130F2	加工材	(3245)	40	39	一端欠く	古墳
	262	372	SG130F	加工材	(1181.5)	36	23	一端欠く・炭化	古墳
	263	384	SG130F	角材	(256)	17	17	両端欠く	古墳
	264		北手部	加工材	(271)	23	21	一端欠く	不明
	265		Ⅱｂ層	把手	(88)	20	19		不明
	266	200	Ⅱｂ層	漆塗櫛	(31.5)	30	3.5	棟部のみ残存	古墳
78	319		SD13F	曲物底板	(154)	34	8	部分的に炭化	中世
	320		SD13F	板材	(129.5)	8	3	両端欠く	中世
	321	116	15- F	加工材	(216)	25	13	一端欠く・円孔	中世
	322		SD13F1	加工材	(86)	42	17	両端欠く・円孔	中世
	323		SD13F1	加工材	(117)	28.5	15	挟り入る	中世
	324		SD13F1	曲物底板	(206)	121	9	炭化・円孔	中世

表7　石製品・石器観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	種類	出土地点	登録番号	計測値（mm） 長さ	幅	厚さ	重量（g）	石材	備考
75	267		棒状礫	ST104	387	114	58.5	30	251.6	火成岩	編物石？
	268		棒状礫	ST104	388	128	51	30	140.9	泥岩	編物石？
	269		棒状礫	ST104	389	103	51	40	232.9	泥岩	編物石？
	270		棒状礫	ST104	390	109	55	35	279.3	火成岩	編物石？
	271		棒状礫	ST104	391	94.5	46	37	188.7	火成岩	編物石？
	272		棒状礫	ST104	392	106	45	30	188.5	ヒン岩？	編物石？
	273		棒状礫	ST104	393	105	45	31	262.5	火成岩	編物石？
	274		棒状礫	ST104	394	120	44	28	211.8	ヒン岩？	編物石？
	275		棒状礫	ST104	395	89	46	31	224.6	火成岩	編物石？
	276		棒状礫	ST104	396	114	55.5	27.5	264.5	火成岩	編物石？
	277		棒状礫	ST104	397	113	47	28.5	230.3	ヒン岩？	編物石？
	278		棒状礫	ST104	398	104	41	29.5	209.1	泥岩	編物石？
	279		棒状礫	ST104	399	111.5	56	32	251.2	礫岩	編物石？
	280		棒状礫	ST104	400	100	45	33	228.2	ヒン岩？	編物石？
	281		棒状礫	ST104	401	122	49	27	296.8	火成岩	編物石？
76	282		棒状礫	ST104	402	108	43.5	42	195.8	泥岩	編物石？
	283		棒状礫	ST104	403	109	44	26.5	173.8	泥岩	編物石？
	284		棒状礫	ST104	404	95	38	27	163.9	閃緑岩？	編物石？
	285		棒状礫	SX49		135	53	29	197	流紋岩？	編物石？
	286		棒状礫	SX49		119	47	32	254	泥岩	編物石？
	287		棒状礫	SX49		129	47	29	267	火成岩	編物石？
	288		棒状礫	SX49		137	30	19	105	泥岩	編物石？
	289		棒状礫	SX49		106	36	31	148	火成岩	編物石？
	290		棒状礫	SX49		112	50	33.5	190	流紋岩？	編物石？
	291		棒状礫	SX49		114	45	24	156	礫岩	編物石？
	292		棒状礫	SX49		124	56.5	37	286	泥岩	編物石？
	293		棒状礫	SX49		114	44.5	34	234	泥岩	編物石？
	294		棒状礫	SX49		106	47	38.5	356	火成岩	編物石？
	295		棒状礫	SX49		129	51	29	205	泥岩	編物石？
	296		棒状礫	SX49		125	55	29.5	249	火成岩	編物石？
77	297		棒状礫	SX49		106	45	31	180	流紋岩？	編物石？
	298		棒状礫	SX49		131	59	22	199	泥岩	編物石？
	299		棒状礫	SX49		155	45	30	180	流紋岩？	編物石？
	300		棒状礫	SX49		113	40	16	140	火成岩	編物石？
	301		棒状礫	SX49		126	55	22	139	泥岩	編物石？
	302		棒状礫	SX49		131	33	25	147	泥岩	編物石？
	303		管玉	SX50 10-E	120	21	7		0.38	緑色凝灰岩	径 6.5mm
	304		管玉	SX50 10-E	132	22	7		1.08	緑色凝灰岩	径 6.5mm、完形
	305		臼玉	Ⅱｂ層 34-K	351	5.5	5	4	1	緑色凝灰岩	
	306		双孔円板	SX119Y	204	36	15	3	2	粘板岩	孔が2穴
	307		石製模造品	Ⅱｂ層	352	44	24	6	8	粘板岩	
	308		紡輪	ST105 EK157	375			15	17	滑石	径 38mm、孔φ 5.5mm
	309		砥石	Ⅱｂ層 34-K	328	77	46	27	114	頁岩	
	310		砥石	Ⅱｂ層 35-L	283	158	134	26	119.7	凝灰質砂岩	
78	325		剥片						5.7	頁岩	

表8　金属製品観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	種類	出土地点	計測値（mm） 径	幅	厚さ	重量（g）	備考
78	267		古銭	Ⅱｂ層	24		1	3	咸平元寳

Ⅳ　理化学分析

1　放射性炭素年代測定（1）

（株）加速器分析研究所

試　料

分析試料の詳細を表9に示す。

試料は、河川跡や溝跡出土の木製品や種子、骨のほか、竪穴住居跡から出土した炭化材など計10点である。

化学処理工程

A．木片・炭化物の化学処理

（1）メス・ピンセットで、表面的な不純物を取り除く。

（2）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。なおAAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。

（3）試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。

（4）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO2）を精製する。

（5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

（6）グラファイトを内径1mmのカソードに、ハンドプレス機で詰めてホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

B．骨の化学処理

（1）骨試料はコラーゲン抽出（CEx）を行なう。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、表面的な不純物を取り除く。試料をビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

（2）0.2Nの水酸化ナトリウム溶液を骨試料と超純水の入ったビーカーに入れ、骨試料の着色がなくなるまで、1時間ごとに水酸化ナトリウム溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉砕用セルに入れ、粉砕する。リン酸塩除去のために試料を透析膜に入れて1Nの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、沈殿物を凍結乾燥させる。沈殿物に超純水を入れて、90℃で保湿した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

（3）抽出試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。以下、木片・炭化物の化学処理工程（4）～（6）と同じ。

測定方法

測定機器は、加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、測定は、米国国立標準局（NIST）提供のシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。標準試

表9　試料一覧・放射性炭素年代測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$（‰）(AMS)	$\delta^{13}C$補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-92381	1	SG1 覆土2層	木製品	AAA	-21.72 ± 0.70	1,420 ± 30	83.84 ± 0.29
IAAA-92382	2	SG1 覆土3層	種子	AAA	-25.98 ± 0.66	1,680 ± 30	81.09 ± 0.28
IAAA-92383	3	SG1 覆土5層	種子	AAA	-25.23 ± 0.49	1,570 ± 30	82.29 ± 0.28
IAAA-92384	4	SG1 覆土6層	種子	AAA	-24.73 ± 0.83	1,570 ± 30	82.30 ± 0.30
IAAA-92385	5	SD13 底面	骨	CEx	-18.72 ± 0.75	790 ± 30	90.66 ± 0.32
IAAA-92386	6	SD13 覆土1層（No.10）	木製品	AAA	-30.69 ± 0.76	990 ± 30	88.38 ± 0.31
IAAA-92387	7	SG1 覆土1層	種子	AAA	-26.39 ± 0.52	Modern	127.78 ± 0.38
IAAA-92388	8	SG1 覆土4b層	種子	AAA	-25.60 ± 0.72	1,560 ± 30	82.35 ± 0.30
IAAA-92389	9	ST22 覆土2層	炭化材	AAA	-30.95 ± 0.78	1,820 ± 30	79.76 ± 0.31
IAAA-92390	10	ST22 ELA3卜跡	炭化物	AAA	-25.78 ± 0.67	1,740 ± 30	80.47 ± 0.28

料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

算出方法

（1）年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

（2）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定と仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は δ^{13}C により補正された値である。^{14}C 年代と誤差は、1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示される。^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

（3）δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定して基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には、質量分析計または加速器を用いる。加速器 ^{13}C/^{12}C を測定した場合、表中に（AMS）表記する。

（4）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度濃度の割合である。

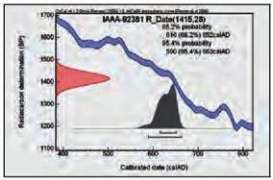
（5）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照合して、過去の ^{14}C 濃度変化等を補正して、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲で 1 標準偏差（1 σ = 68.2%）または 2 標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入した ^{14}C 年代値である。較正曲線及び較正プログラムは、データ蓄積によって更新される。プログラムの種類により結果が異なるため、年代への活用には種類やバージョンの確認が必要である。暦年較正年代の計算には、IntCal04 データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.0 較正プログラム（Bronk Ransey 1995;Bronk Ransey 2001;Bronk Ramsey,van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

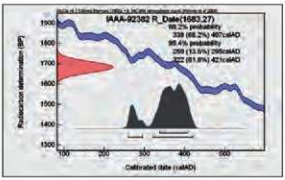
測定結果

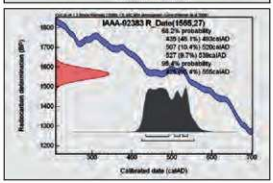
ＳＧ１河川跡試料は、覆土１層出土の７が Modern、覆土２層出土の１が 1420 ± 30yrBP、覆土３層出土の２が 1680 ± 30yrBP、覆土４ｂ層出土の８が 1560 ± 30yrBP、覆土５層出土の３が 1570 ± 30yrBP、覆土６層出土の４が 1570 ± 30yrBP である。暦年較正年代（1 σ）で見ると、２が４世紀中葉～５世紀初頭、３、４、８は５世紀中葉～６世紀前半、１が７世紀前半で、７を除いて古墳時代に相当する年代値を示した。ＳＤ 13 溝跡試料は、底面出土の５が 790 ± 30yrBP、覆土１層出土の６が 990 ± 30yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は、５が 13 世紀中頃、６が 11 世紀～12 世紀前半の間に複数の範囲で示される。ＳＴ 22 住居跡試料の ^{14}C 年代は、覆土２層出土の９が 1820 ± 30yrBP、ＥＬ 43 炉跡出土の 10 が 1740 ± 30yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は、９が２世紀中葉～３世紀前半、10 が３世紀中葉～４世紀前半の範囲となっている。炭素含有率は、試料の材質ごとに適正な値となり、化学処理、測定上の問題は認められない。

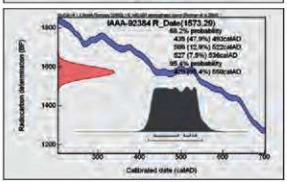
表 10　暦年較正結果

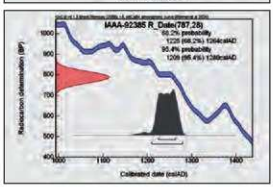
測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age　(yrBP)	pMC　(%)			
IAAA-92381	1,360 ± 30	84.41 ± 0.27	1,415 ± 28	616AD - 652AD (68.2%)	590AD - 663AD (95.4%)
IAAA-92382	1,700 ± 30	80.93 ± 0.25	1,683 ± 27	338AD - 407AD (68.2%)	259AD - 295AD (13.6%) 322AD - 421AD (81.8%)
IAAA-92383	1,570 ± 30	82.25 ± 0.27	1,565 ± 27	435AD - 493AD (48.1%) 507AD - 520AD (10.4%) 527AD - 539AD (9.7%)	425AD - 555AD (95.4%)
IAAA-92384	1,570 ± 30	82.25 ± 0.27	1,573 ± 29	435AD - 493AD (47.9%) 506AD - 522AD (12.9%) 527AD - 536AD (7.5%)	420AD - 550AD (95.4%)
IAAA-92385	680 ± 30	91.83 ± 0.29	787 ± 28	1225AD - 1264AD (68.2%)	1209AD - 1280AD (95.4%)
IAAA-92386	920 ± 30	89.16 ± 0.28	991 ± 28	997AD - 1005AD (4.4%) 1012AD - 1045AD (43.6%) 1096AD - 1120AD (16.5%) 1142AD - 1148AD (3.7%)	988AD - 1053AD (60.5%) 1081AD - 1154AD (34.9%)
IAAA-92387	Modern	127.42 ± 0.35	Modern		
IAAA-92388	1,570 ± 30	82.25 ± 0.27	1,539 ± 29	435AD - 492AD (47.1%) 507AD - 520AD (9.1%) 528AD - 543AD (12.1%)	425AD - 565AD (95.4%)
IAAA-92389	1,910 ± 30	78.79 ± 0.28	1,816 ± 30	129AD - 197AD (44.4%) 208AD - 237AD (23.8%)	93AD - 98AD (0.5%) 125AD - 259AD (91.2%) 297AD - 321AD (3.7%)
IAAA-92390	1,760 ± 30	80.35 ± 0.25	1,744 ± 27	248AD - 266AD (14.2%) 272AD - 335AD (54.0%)	236AD - 383AD (95.4%)

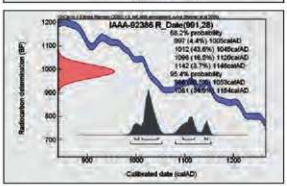


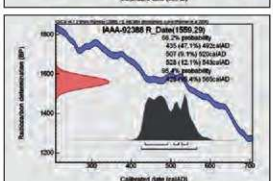


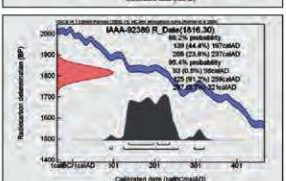


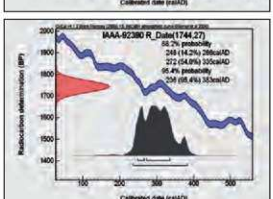












第 79 図　暦年較正年代グラフ（1）

引用文献

Stuiver M and Polash H.A　1977　Discussion: Reporting of 14C data　Radiocarbon 19,p.355 ～ p.363
Bronk Ramsey C　1995　Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy:the OxCal Program,Radiocarbon 37(2),p.425 ～ 430
Bronk Ramsey C　2001　Development of the Radiocarbon Program OxCal,Radiocarbon 43(2A),p.355 ～ 363
Bronk Ramsey C van der Plicht J,and Weninger B　2001　'Wiggle Matching'radiocarbon dates,Radiocarbon 43(2A),p.381 ～ 389

2　放射性炭素年代測定（2）

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤茂・尾寄大真・丹生越子
廣田正史・山形秀樹・小林紘一

試料と方法

鎌倉上遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

測定試料は、河川跡出土の生材3点、竪穴住居跡出土の生材4点、炭化材2点、生種実1点、土坑出土の生材1点の計11点である（表15）。

河川跡出土の試料は、ＳＧ130河川跡の2層出土の木製品である。竪穴住居跡出土の試料は、各住居跡の柱に用いられていた丸太材から採取した3点、カマドの覆土から出土した種子（オニグルミ核）のほか、住居機能時の柱材や構築材の可能性がある炭化材である。土坑出土の試料は、ＳＫ133土坑出土の木製容器の一部である。

竪穴住居跡の柱に用いられた丸太材の上部から採取された試料No. 4～6は、樹皮の内側が採取された試料である。これらは最外年輪を含む試料で、それ以外の試料は最外年輪以外の部位不明の木材であった。試料の想定年代は、ＳＧ130河川跡試料No. 1～3が古墳時代以降、それ以外の試料は、出土遺物の時期から古墳時代と推定されている。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・

表11　放射性炭素年代測定分析試料一覧

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-17317	試料No. 1 遺構：ＳＧ130河川跡 層位：2層　報告書遺物No.262　R W372	試料の種類：生材　状態：wet 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 3年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N、 水酸化ナトリウム:1N、塩酸:1.2N）
PLD-17318	試料No. 2 遺構：ＳＧ130河川跡 層位：2層　報告書遺物No.261　R W371	試料の種類：生材　状態：wet 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 3年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N、 水酸化ナトリウム:1N、塩酸:1.2N）
PLD-17319	試料No. 3 遺構：ＳＧ130河川跡 層位：2層　報告書遺物No.263　R W384	試料の種類：生材　状態：wet 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 5年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N、 水酸化ナトリウム:1N、塩酸:1.2N）
PLD-17320	試料No. 4 遺構：ＳＴ102竪穴住居跡ＥＰ203柱穴 層位：柱材の上部　報告書遺物No.237　R W367	試料の種類：生材　状態：wet 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外 - 3年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N、 水酸化ナトリウム:1N、塩酸:1.2N）
PLD-17321	試料No. 5 遺構：ＳＴ103竪穴住居跡ＥＰ206柱穴 層位：柱材の上部　報告書遺物No.242	試料の種類：生材　状態：wet 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外 - 2年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N、 水酸化ナトリウム:1N、塩酸:1.2N）
PLD-17322	試料No. 6 遺構：ＳＴ105竪穴住居跡ＥＰ185柱穴 層位：柱材の上部　報告書遺物No.246	試料の種類：生材　状態：wet 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外 - 2年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N 、水酸化ナトリウム:1N、塩酸:1.2N）
PLD-17323	試料No. 7 遺構：ＳＫ133号土坑 層位：土坑底面　報告書遺物No.256	試料の種類：生材　状態：wet 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 2年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N、 水酸化ナトリウム:1N、塩酸:1.2N）
PLD-17324	試料No. 8 遺構：ＳＴ104竪穴住居跡ＥＬ142カマド 層位：カマド覆土	試料の種類：オニグルミ核　状態：dry （生種子1点）	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N、 水酸化ナトリウム:1N、塩酸:1.2N）
PLD-17325	試料No. 9 遺構：ＳＴ106竪穴住居跡 層位：床面	試料の種類：生材　状態：dry 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 2年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N、 水酸化ナトリウム:1N、塩酸:1.2N）
PLD-17326	試料No.10 遺構：ＳＴ107竪穴住居跡ＥＰ179柱穴 層位：柱穴覆土中	試料の種類：炭化材　状態：dry 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 2年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N、 水酸化ナトリウム:1N、塩酸:1.2N）
PLD-17327	試料No.11 遺構：ＳＴ118竪穴住居跡ＥＫ189土坑 層位：土坑覆土1層	試料の種類：炭化材　状態：dry 試料の性状：最外以外部位不明 採取位置：外側 - 2年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N、 水酸化ナトリウム:1N、塩酸:1.2N）

ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度に同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

結　果

表 12 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正により得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 80・81 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値で、暦年較正曲線が更新された際に、この年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。^{14}C 年代は AD1950 年を基点に何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

考　察

各試料の暦年較正結果のうち、2 σ 暦年代範囲（95.4％の確率）に着目して結果を整理する。ＳＧ 130 河川跡の 2 層出土の木製品 3 点は、試料 No. 1（PLD-17317）が 3 世紀中頃～5 世紀前半、試料 No. 2（PLD-17318）が 6 世紀後半～7 世紀中頃、試料 No. 3（PLD-17319）が 5 世紀前半～6 世紀後半の暦年代範囲を示した。古墳時

表 12　暦年較正年代結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1 σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-17317　試料No. 1 報告書遺物No.262　R W372	-26.84 ± 0.31	1699 ± 24	1700 ± 25	264AD (10.2%) 276AD 332AD (58.0%) 391AD	257AD (23.1%) 301AD 317AD (72.3%) 410AD
PLD-17318　試料No. 2 報告書遺物No.261　R W371	-26.55 ± 0.27	1455 ± 25	1455 ± 25	591AD (68.2%) 640AD	564AD (95.4%) 648AD
PLD-17319 試料No. 3 報告書遺物No.263　R W384	-25.72 ± 0.20	1552 ± 26	1550 ± 25	436AD (46.0%) 490AD 509AD (5.8%) 518AD 529AD (16.4%) 548AD	428AD (95.4%) 566AD
PLD-17320　試料No. 4 報告書遺物No.237　R W367	-30.32 ± 0.29	1580 ± 23	1580 ± 25	433AD (25.4%) 465AD 483AD (42.8%) 533AD	424AD (95.4%) 540AD
PLD-17321 試料No. 5 報告書遺物No.242	-30.73 ± 0.17	1527 ± 22	1525 ± 20	466AD (9.7%) 482AD 533AD (58.5%) 582AD	435AD (26.0%) 491AD 509AD (1.9%) 518AD 529AD (67.5%) 600AD
PLD-17322 試料No. 6 報告書遺物No.246	-30.30 ± 0.15	1560 ± 22	1560 ± 20	436AD (50.8%) 490AD 510AD (6.1%) 517AD 529AD (11.3%) 541AD	428AD (95.4%) 552AD
PLD-17323 試料No. 7 報告書遺物No.256　R W360	-24.18 ± 0.16	1584 ± 22	1585 ± 20	430AD (11.4%) 443AD 451AD (9.6%) 462AD 483AD (47.2%) 533AD	422AD (95.4%) 539AD
PLD-17324 試料No. 8	-27.90 ± 0.14	1563 ± 22	1565 ± 20	435AD (50.3%) 491AD 509AD (7.7%) 518AD 528AD (10.1%) 540AD	427AD (95.4%) 549AD
PLD-17325 試料No. 9	-26.01 ± 0.15	1581 ± 23	1580 ± 25	432AD (25.7%) 465AD 483AD (42.5%) 533AD	423AD (95.4%) 540AD
PLD-17326 試料No.10	-28.09 ± 0.18	1747 ± 23	1745 ± 25	247AD (15.0%) 264AD 276AD (53.2%) 332AD	235AD (92.3%) 356AD 366AD (3.1%) 381AD
PLD-17327 試料No.11	-30.03 ± 0.15	1604 ± 23	1605 ± 25	416AD (23.8%) 441AD 485AD (44.4%) 532AD	411AD (95.4%) 536AD

代前期～古墳時代中期、古墳時代末～飛鳥時代、古墳時代中期～後期に相当する。木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。ＳＧ130河川跡の３点はすべて最外年輪以外の部位不明の木材である。試料の木材が実際に伐採された年代よりも古い年代が得られている可能性を考慮する必要がある。ＳＧ130河川跡出土の３点はそれぞれ異なる時期の暦年代を示すが、古木効果の影響の可能性を加味すると、古墳時代以降という想定年代に対してほぼ整合的な結果となった。

竪穴住居跡と土坑から出土した試料の計８点のうち、ＳＴ107竪穴住居跡のＥＫ189出土の試料No.10（PLD-17326）を除く７点（試料No.４～９、11：PLD-17320～17325、17327）は、すべて５世紀前半～６世紀末におさまる暦年代範囲を示した。これは古墳時代中期～後期に相当する。ＳＴ107竪穴住居跡のＥＫ189出土の試料No.10は３世紀前半～４世紀後半で、古墳時代前期～中期に相当する暦年代範囲を示した。いずれも古墳時代という想定年代に対して整合的であった。

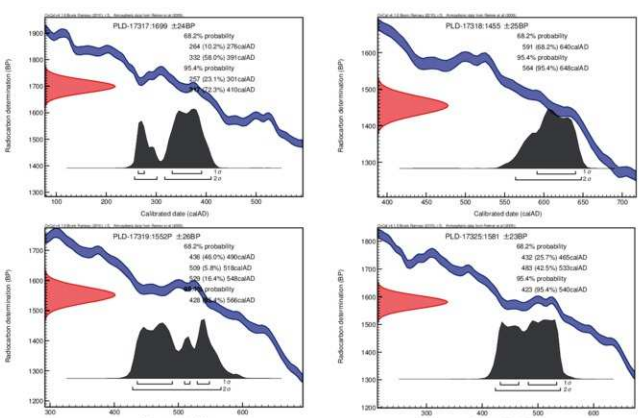
ただし木材の場合は、前述した古木効果の影響を受ける可能性も考えなければならない。最外年輪以外の部位不明の試料である試料No.７および試料No.９～11の４点は、解釈の際に古木効果の影響がある可能性を考慮に入れる必要がある。一方、ＳＴ102、103、105竪穴住居跡の柱である丸太材から採取した試料No.４～６は、最外年輪を含む試料であり、実際に木材が伐採された年代を示すと考えられる。ＳＴ104竪穴住居跡のカマド出土の試料No.８については、試料のオニグルミが熟して落下した年代を示すと考えられる。

参考文献

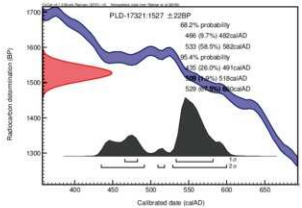
Bronk Ramsey,C.　2009　Bayesian Analysis of Radiocarbon dates,Radiocarbon,51(1),p.337 ～ p.360.

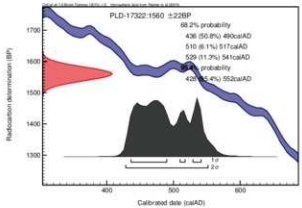
中村俊夫　2000「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編『日本先史時代の ^{14}C 年代』p.3 ～ p.20　日本第四紀学会

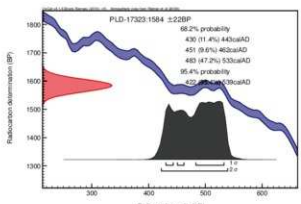
Reimer,P.J,Baillie,M.G.L,　Bard,E,Bayliss,　A,Beck,J,W,Blackwell,P.G,Bronk　Ramsey,C,Buck,C.E,Burr,G.S,Edwards,R.L,Friedrich,M,Grootes,P.M,Guilderson,T.P,Hajdas,I,Heaton,T.J,Hogg,A.G,Hughen,K.A,Kaiser,K.F,Kromer,B,McCormac,F.G,Manning,S.W,Reimer,R.W,Richards　2009　IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves,0–50,000 Years cal BP,Radiocarbon,51,p.1111 ～ p.1150.

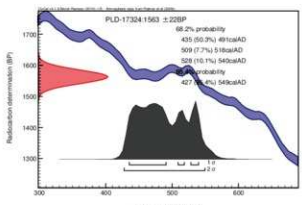


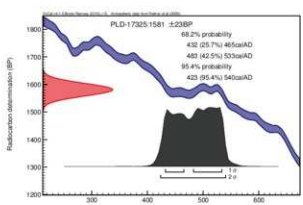
第80図　暦年較正年代グラフ（２）

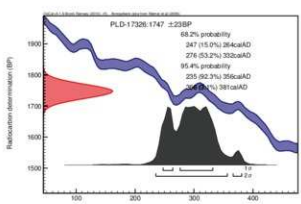


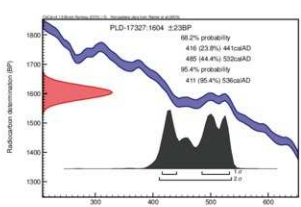












第 81 図　暦年較正年代グラフ（3）

3　樹種同定

（株）吉田生物研究所

試料と観察方法

試料は、鎌倉上遺跡から出土した服飾具１点、建築部材６点、用途不明品10点の合計21点である（表13）。

観察方法は、剥刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。これを顕微鏡で観察して同定した。

結　果

樹種同定結果（針葉樹２種、広葉樹３種）の表13と顕微鏡写真を示し、各種の解剖学的特徴を以下に記す。

１）**スギ科スギ属スギ**（*Cryptomeria japonica D.Don*）

（試料 No. 1，3～5，7～10，19，20）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

２）**ヒノキ科アスナロ属**（*Thujopsis sp.*）

（試料 No. 2，6，11）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

３）**クワ科クワ属**（*Morus sp.*）

（試料 No.15，17）

環孔材である。木口では大道管（～280 μm）が年輪界にそって１～５列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が２～６個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。小道管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物（チロース）が見られる。板目では放射組織は１～６細胞列、高さ～1.1mmからなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属はヤマグワ、ケグワ、マグワなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

４）**カエデ科カエデ属**（*Acer sp.*）

（試料 No.12，13）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～100 μm）が単独ないし２～４個複合して分布する。軸方向柔細胞は年輪界で顕著である。木繊維の壁に厚薄があり、木口面で濃淡模様が出る。柾目では道管は単穿孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり、同性である。板目では放射組織は１～６細胞列、高さ～１mmからなる。カエデ属はウリカエデ、イタヤカエデ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

５）**ヤナギ科ヤナギ属**（*Salix sp.*）

（試料 No.14，16，18）

散孔材である。木口では中庸やや小さい道管（～110 μm）が単独または２～４個放射方向ないし斜線方向に複合して分布する。軸方向柔細胞は年輪界で顕著である。柾目では道管は単穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、篩状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ～450 μmであった。ヤナギ属はバッコヤナギ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

参考文献

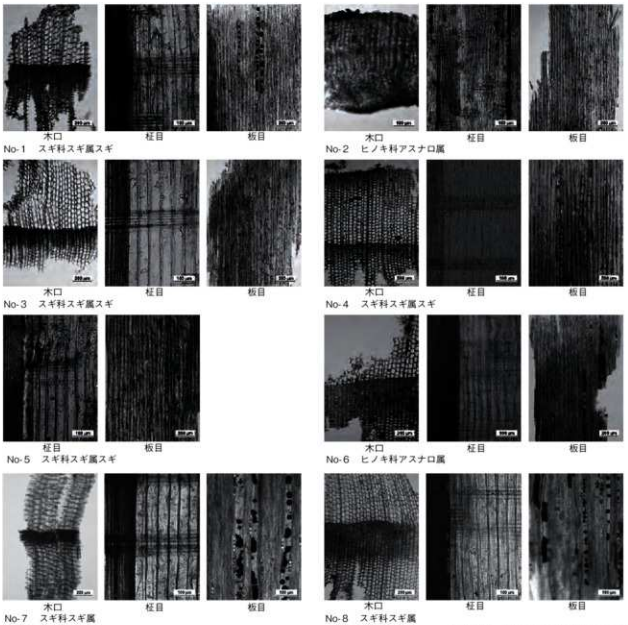
島地謙・伊東隆夫　1988『日本の遺跡出土木製品総覧』　雄山閣出版
島地謙・伊東隆夫　1982『図説木材組織』　地球社
伊東隆夫　1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ』　京都大学木質科学研究所
北村四郎・村田源　1979『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ』　保育社
深澤和三　1997『樹体の解剖』　海青社
奈良国立文化財研究所　1985『奈良国立文化財研究所　史料第27冊　木器集成図録　近畿古代篇』

使用顕微鏡
Nikon DS-Fi1

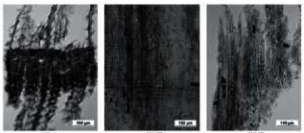
表 13　樹種同定分析試料一覧

試料 No.	報告書No.	出土地点	遺物番号	遺物名	樹種
1	259	S G 1	R W 68	加工材	スギ科スギ属スギ
2	260	S G 1	R W 69	編台	ヒノキ科アスナロ属
3	257	S G 1	R W 75	加工材	スギ科スギ属スギ
4	261	S G 130 : F2	R W 371	加工材	スギ科スギ属スギ
5	262	S G 130 : F	R W 372	加工材	スギ科スギ属スギ
6	263	S G 130 : F	R W 384	角材	ヒノキ科アスナロ属
7	230	S T 102 : F3	R W 215	角材	スギ科スギ属スギ
8		S T 102 E K 139	R W 280	板材	スギ科スギ属スギ
9	236	S T 102	R W 281	板材	スギ科スギ属スギ
10	234	S T 102	R W 282	板材	スギ科スギ属スギ
11	240	S T 103 : Y	R W 361	角材	ヒノキ科アスナロ属
12	237	S T 102 E P 203	R W 367	柱材	カエデ科カエデ属
13	238	S T 102 E P 204	R W 368	柱材	カエデ科カエデ属
14	241	S T 103 E P 205		柱材	ヤナギ科ヤナギ属
15	242	S T 103 E P 206		柱材	クワ科クワ属
16	243	S T 103 E P 207		柱材	ヤナギ科ヤナギ属
17	244	S T 103 E P 208		柱材	クワ科クワ属
18	246	S T 105 E P 185		柱材	ヤナギ科ヤナギ属
19	248	S K 133 : F3	R W 257	角材	スギ科スギ属スギ
20	256	S K 133 : Y	R W 260	容器	スギ科スギ属スギ
21	266	Ⅱ b 層	R W 200	櫛	木質部なし※

※同時に行った塗膜構造分析でも木質部は確認出来なかった

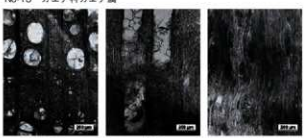


第 82 図　分析木材顕微鏡写真（1）

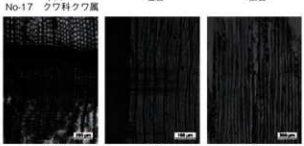

木口　柾目　板目
No-9　ヒノキ科アスナロ属

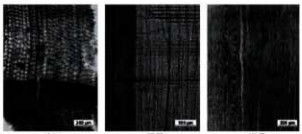
柾目　板目
No-11　ヒノキ科アスナロ属

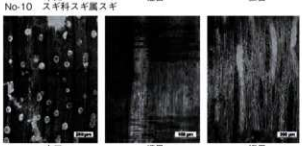
木口　柾目　板目
No-13　カエデ科カエデ属

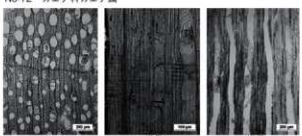

木口　柾目　板目
No-15　クワ科クワ属

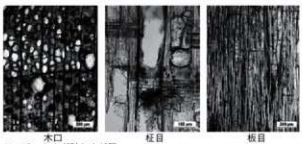
木口　柾目　板目
No-17　クワ科クワ属

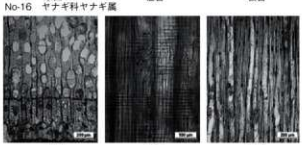

木口　柾目　板目
No-19　スギ科スギ属スギ


木口　柾目　板目
No-10　スギ科スギ属スギ


木口　柾目　板目
No-12　カエデ科カエデ属


木口　柾目　板目
No-14　ヤナギ科ヤナギ属


木口　柾目　板目
No-16　ヤナギ科ヤナギ属


木口　柾目　板目
No-18　ヤナギ科ヤナギ属

木口　柾目　板目
No-20　スギ科スギ属スギ

第 83 図　分析木材顕微鏡写真（2）

4　漆製品の塗膜構造調査

（株）吉田生物研究所

分析方法

鎌倉上遺跡から出土した古墳時代の竪櫛１点について、制作技法を復元する目的で塗膜構造調査行った。調査は、本体から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光下で検鏡した。

断面観察結果

塗膜構造：横木上（No. 1）、帯部上（No. 2）ともに素地は残存せず、下地も観察されず（元来施されていない）、漆膜のみが観察された。

漆層　：No. 1，2ともに色調の異なる漆層が４～５層観察された。最下層には油煙類の黒色微粒子の混和が認められる。

帯の素材：漆膜の中に、白く抜けた部分が横方向に続く様子が観察される。この白く抜けた部分は帯の糸がかつて存在した部分である。糸の縦断面方向である。帯の糸は植物繊維ではなく、その形状から絹と判断される。

櫛の歯　：素地は残存していない。しかし、櫛の帯部と平行、つまり櫛の横断面方向の帯部の塗膜断面を観察すると、櫛の歯の横断面が円形ではなく、四角形であったことがわかる（写真9.10）。そして歯と歯の間に漆が十分に浸透していることがわかる（写真7，9.11）。

表 14　調査資料詳細表

資　料	概　　要
結歯式U字形竪櫛	古墳時代の竪櫛。この時代の類例と同様に、棟部両面に塗布された漆膜のみが遺存している。櫛の歯や横木の素地は遺存していない。歯の本数は不明であるが、櫛の中央部の２本は、それより外側のように一本をU字形に曲げたものではなく、直線状のものが挿入されている。帯は数mmの幅を持つものではない。横木を縦じている糸は、片面ではほぼ垂直方向に横木上に現れるが、もう一方の面では左上の斜線状に現れている。なお今回は、帯部上と横木上の塗膜を採取し、その塗膜断面を観察した。

棟部		縦糸	帯部		横木	
高さ	幅		高さ	幅	長さ	幅
3.0	3.0	1.2	1.2	3.0	3.0	0.1

法量（単位はcm）

概　要

竪櫛は、棟部の漆膜のみが遺存した状態で、櫛の歯や横木、帯や糸は遺存していなかった。今回は、帯部・横木上部の塗膜構造の観察結果を反映させた上で、調査した竪櫛の制作方法を復元してみる。

① 櫛の歯となる断面四角形の棒状の素材（タケ？）を一列に並べる。

② ばらばらにならないように、歯（棒）の長さの半分くらいの位置で、細い紐状のもので棒を１本ずつ綴じて固定する。

③ 紐で綴じた部分を頂点として、歯（棒）の束を両側から力を加えて折り曲げ、U字形に湾曲させ、その形状を保つように仮留めする。

④ 並んだ歯（棒）の中央部分の隙間に、折り曲げた歯（棒）の半分程の長さの歯（棒）を２本挿入する。

⑤ 櫛の向きと水平に、断面円形の横木を両面に１本ずつ同じ高さに添える。（２本の横木によって歯を両面から挟むことになる）

⑥ 櫛を天地逆の方向（棟部が下で歯部が上）に持った状態で、歯を固定し歯間に間隔を持たせるため、歯を１本ずつ２本の横木に紐状のもので８の字状に綴じ付ける。（この結果、一方の面では横木上を紐が垂直方向に伝い、もう一方の面では斜めに伝うことになる）

⑦ 櫛全体の仮留めを外し、横木より上部を適度な幅で、紐糸で緊縛する。（櫛の成形は終了）

⑧ 仕上げに漆を４～５層塗布する。下地は施さない。素地にいきなり漆を塗布する。素地が透けて見えないように、素地の直上には油煙類が黒色の顔料として混和された漆（黒漆）が塗布される。歯と歯の間には十分に漆をしみ込ませ、櫛全体を固める。上層には混和物を含まない透明漆が塗布される。（完成）

⑤と⑥の工程については、明確な順番は確定できず、逆であった可能性もある。なお、遺存しているのは櫛の棟部の漆膜のみであるので、横木より下の歯部の歯に漆が塗布されたのか、あるいは白木のままだったのかは不明である。既往の調査例には、歯の素材としてタケが遺存していた事例や、歯部に塗布されていた漆が遺存していた事例等もある。

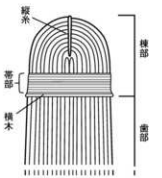


写真1　資料A面

写真2　資料B面

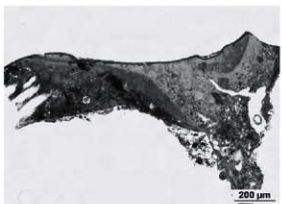


写真3　棟部上

写真4　棟部上拡大

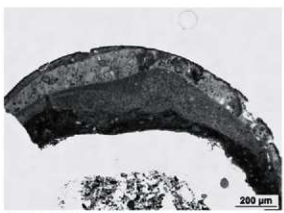


写真5　横木上

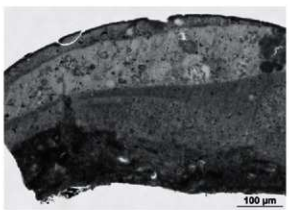


写真6　横木上拡大

写真7　棟部上

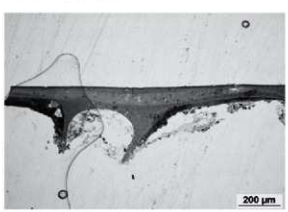


写真8　棟部上

第84図　竪櫛模式図・塗膜分析顕微鏡写真（1）

写真９　棟部上

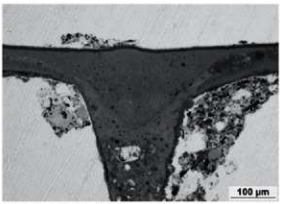


写真１０　棟部上（歯間）

写真１１　棟部の帯上

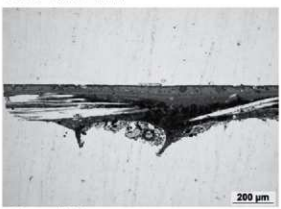


写真１２　帯拡大

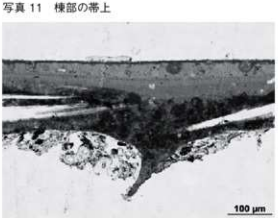


写真１３　帯上最下層の油煙類

写真１４　帯拡大

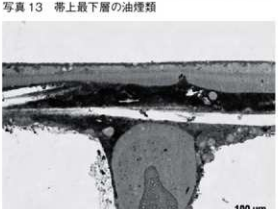


写真１５　帯上最下層の油煙類

第 85 図　塗膜分析顕微鏡写真（２）

Ⅴ　調査のまとめ

1　古墳時代集落について

鎌倉上遺跡では、古墳時代の２時期にわたる集落の変遷が確認された。前期の集落では、６棟の竪穴住居跡が検出された。１区の３棟（ＳＴ20・21・22）、２区の３棟（ＳＴ107・108・125）である。竪穴住居跡は、５ｍ前後の比較的規模が大きいタイプ（ＳＴ22・107・108）と、住居規模が４ｍに満たない小型の住居（ＳＴ20・21・125）がある（第86・87図）。ＳＴ22は焼失住居で外周溝が付属する。このタイプの住居は、県内の鶴岡市畑田遺跡（山形県埋文1995）、山形市梅野木前１遺跡（山形県埋文2007）、米沢市大清水遺跡（米沢市教委1986）で確認されている。掘立柱建物跡は３棟（ＳＢ２・54・79）検出された。間取りは２×２間と考えられ、規模は3.6ｍ～4.8ｍと小型である。倉庫の役割を担うと考えられる。

掘立柱建物跡と竪穴住居跡の配置は、ＳＴ22とＳＢ２が、ＳＴ20・21とＳＢ54の主軸が類似する。これらの竪穴住居と掘立柱建物は、それぞれ対応し同時期に存在していた可能性がある。住居分布域の西側に、捨場（ＳＸ50）が広がる。周囲よりやや低い南北方向に伸びる浅い窪地で、土師器を中心とした遺物が廃棄されている。生産施設として、畑と考えられる畝状遺構が検出された。主に東西方向にのびる群が３ヶ所、南北方向にのびる群が３ヶ所確認される。河川跡であるが、ＳＧ１は、前期集落が営まれた時期に機能しており、中・後期にかけて堆積が進んだものと思われる。前期集落の広がりは、１区東側に中心域があり、１区西側にも確実に集落域が広がることが想定される。

前期集落から時期的な断絶の後、中期後半の集落跡が営まれる。中期の竪穴住居群は、２区のＳＧ130河川跡の北側に分布し、前期集落跡の分布域と異なる。竪穴住居跡は、古墳時代の中期後半に位置づけられるものが７棟（ＳＴ101・102～106・118）、詳細な時期が不明なものは２棟（ＳＴ100・120）である。竪穴住居の規模は、一辺が５ｍを超える住居跡と（ＳＴ103～105）、４ｍ前半以下の住居に分かれる。ＳＴ102～106は煙道を有するカマドを備え、住居の東辺や北辺に構築される。カマドが備わる住居には貯蔵穴が確認される。

中期の集落には焼失住居が確認された。ＳＴ105は住居の全面に炭化材が検出された。ＳＴ102・103・106も焼失住居の可能性が高い。これらの住居跡から、中期後半の土師器・須恵器のセット関係や、土器の使用状況を把握できる良好な資料を得た。ＳＴ102・103・105は、住居の柱材や建築部材の一部が残され、住居の建築材の樹種の情報を得ることができた。

中期集落では、掘立柱建物跡は確認されないが、カマドを伴わない竪穴状遺構とも称すべきＳＸ119や、焼土が検出されたが生活痕跡が希薄なＳＴ118が確認された。これらは、倉庫もしくは作業場的施設の役割を担っていたと思われる。生産施設は調査区内に確認されていないが、出土土師器に籾痕が確認される個体が複数あり、集落が水田を備えていたことが想定される。中期の集落域は、２区の東・西に拡大することは確実であるが、東側が中心域と考えられる。

周辺遺跡との関係について触れたい。前期の集落として、米沢盆地では大清水遺跡がある。外周溝をもつ竪穴住居跡、掘立柱建物跡、畑跡、方形周溝墓が検出された。

鎌倉上遺跡は、墓域は確認されないものの、同様の構成をなし、前期集落の事例が少ない米沢盆地での集落構成を明らかにする好例となろう。また、墳墓との関連であるが、米沢市大西遺跡（米沢市教委2004）は、鎌倉上遺跡から南西に約400ｍに位置し、前期後半を主体とする周溝墓や箱形石棺などが検出された。鎌倉上の集落と併存していた可能性が高く、関連が注目される。

中期では、本遺跡周辺の河川間低地に、前期より多数の遺跡が確認される。米沢市窪田町には中里遺跡、北東約３kmには、河川の両岸に古墳時代中期の竪穴住居が33棟検出された大規模な集落である高畠町南原遺跡（山形県埋文1994）があり、併存していたと考えられる。

鎌倉上遺跡も類似した立地であり、今後これらの集落間の比較や古墳との関係の研究の進展が期待される。

2　出土遺物の特色

（1）出土遺物の分布状況

遺物の出土量分布図を第88図に示す。遺物量が多い1・2区の北側は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が密集する居住域である。遺構の希薄な1区西側にみられる遺物量の分布は、土器類を廃棄したＳＸ50捨場の範囲にあたる。1区Ｄ～Ｊ－8列から南側の範囲では、遺構・遺物共に殆どみられず、ＳＧ1河川跡出土の遺物が僅かに確認されるのみである。

ＳＸ50捨場の出土遺物は、器台や二重口縁の壺など古墳時代前期に属する遺物が多い傾向がある。口縁端部に面取りのある甕や、刺突文による刻目状の加飾を施す壺など、北陸北東部系の特徴を有する土師器が一定量認められる。他に管玉や棒状礫の出土がある。

（2）古墳時代前期の遺物

古墳時代前期の遺物は、当期に属する竪穴住居跡と溝状遺構が隣接する建物跡出土の土師器が相当する。ＳＴ20・21・22竪穴住居跡では、床面出土の一括遺物が認められる。これらの器種は、高坏、器台、鉢、壺、甕の5種がある。以下に代表的な遺物を取り上げて詳細を述べる。括弧内は遺物番号を示す。

時期や様相を表す高坏は、出土数が僅小で遺構出土のものは限られる。ＳＴ20住居跡出土の高坏（1）は、受け部となる口縁部が直線的に開く高坏Ａ1類に分類される。受け部と脚部の境に稜線が認められず、全体の形状から外来（東海系）の影響を受けたものと捉えた。時期については、新潟シンポジウム編年（新潟考古2005）の9期に属し、古墳時代前期後葉に比定される。

ＳＤ34溝跡は、「周溝式竪穴建物」の外周溝であり、高坏の上半部（19）が出土する。全形は把握し得ないが、口縁部が外傾する小型鉢状の受け部に、中空柱状の脚部が付く高坏Ｂ類と推定される。

捨場出土の高坏Ａ2類（188・189）は、塊状の小型の受け部と、脚部裾が伸びる形状が特徴的で、市内の古墳出土資料の中に近似するものが見受けられる。

ＳＴ22・108竪穴住居跡の底面出土の小型丸底鉢（14・149）は、口縁部と体部の境に段を有し、凹状の底部である。これらは、器台との対応関係が考えられる。甕は、口縁部に面をもつ北陸北東部系の「能登型甕」が多く確認される。口縁端部を摘み上げる甕Ａ類（20）や台付甕の甕Ｃ類（18）は、そのなかでも古手と考えられる。

県内の古墳時代前期の土師器については、東北地方南部の土器編年（辻1993）や、北陸地方の漆町遺跡の編年観（田嶋1986）との比較がなされてきた。また、近年の発掘調査による資料増加から、土器群の集成と各地域毎の土器の変遷や年代時期の検討が試みられている（植松2005）。これらの土器の編年案を基に、出土遺構である竪穴住居跡の形態も踏まえて、本遺跡の前期集落を概ね二つの時期に細別した。

1期：ＳＴ22・107・108竪穴住居跡の出土遺物が相当する。この時期の特徴的な遺物は、鉢Ａ類の小型丸底鉢で、器台とのセット関係の様相が読み取れる。

甕は、北陸北東部系の甕が占め、口縁部が強く面取りされるものをはじめ、口縁端部を上方につまみ出す古手のもの（甕Ａ1類）や、台付甕（甕Ｃ類）が含まれる。

壺Ａ類は、遺構外出土に多くみられる器種で、口縁部と頸部の境に刺突文が巡る北陸地方の影響を受けるものが存在する。また、ＳＸ19性格不明遺構出土のつまみを有する蓋は、県内でも古手の器種として捉えられる。これらの遺物が認められることから、1段階古い遺構が周辺に存在する可能性も考えられる。

本期では、甕の口縁端部に明瞭な面を持つ特徴が多く認められ、総じて北陸色の強い様相を示す。

2期：ＳＴ20・21・125竪穴住居跡出土・ＳＢ54・79掘立柱建物跡の土器が相当する。前述した東海系の高坏（1）や、器形が15㎝以内に収まる小型の甕（10）が含まれる。壺については、口縁部が長頸の直口壺が多く、体部が扁平となる傾向が認められる。捨場出土の遺物では、長頸の口縁部を持つ平底の鉢Ｃ類や、口縁部の面取りが弱くなるもの、または面をもたない甕（甕Ａ4類）など前段階の北陸北東部系の特徴が弱まる傾向や、新手の器種が出現することが把握される。

前期集落について、出土遺物や竪穴住居跡の形態を中心に2時期に細別したが、遺物量や器形を把握できる資料が少量であること、遺構の前後関係が明確でないことなど多くの課題点があり、今後検討する必要性がある。

しかし、これら土器群の時期については、新潟シンポジウム編年の9・10期に属する遺物が多いことから、古墳時代前期の後半段階のものと考えられる。

（3）古墳時代中期の遺物

カマドを有する竪穴住居跡出土の一括遺物が挙げられる（ＳＴ 102 ～ 106）。このうちＳＴ 102・103・105 の焼失住居では、カマド周辺や貯蔵穴から一括性のある坏や鉢類、甕が多く出土している。これらの土器類は、南小泉式が終焉する時期から、次期への過渡期段階にあたる。この段階では、供膳具形態が高坏から丸底や平底状の坏・鉢類に代わる変遷が前々から指摘されてきた。

最も多い坏類は、形状や容量などの特徴から、口縁部が外傾または外反するＡ類、口縁部が内湾するＢ類、口縁部が屈曲して直立気味に立ち上がるＣ類、口縁部と体部の境に稜や段を有するＤ類、深みのある塊状のＥ類の５種に大別される。なかでもＣ類は、須恵器模倣坏と考えられ、次期に主体を占めるＤ類と共に新手であろう。

坏や鉢類、壺の器種には、器面を赤く発色させるものが多く認められる。赤色土器と総称されるこの土器は、地域毎にその技法が異なることが指摘されている（長谷川 1993・大川 1996）。主なものに、ベンガラなどの赤色顔料を塗布するものや、胎土に鉄分を含有して焼成後に赤く発色させる方法がある。

当遺跡では、これらの技法による赤色土器が双方とも認められる。また、赤色顔料に用いられたベンガラを入れた容器（172・173）が出土している。赤色の有無については、遺物観察表の備考欄に示した。同時期の集落跡である南原遺跡や中里遺跡においても、赤色土器は認められる。坏・高坏・鉢などの小型の器種に多く、同時にヘラミガキ調整の多用するなど、他器種と比較して精製土器に用いられる傾向がある。

赤色土器の初現は南小泉式まで遡り、以後の佐平林式まで比較的多くの資料が赤色土器を含んでいる。この状況は、次期で減少傾向となり、更に次の栗囲式まで至らないとされている（青山 1999）。

一方で、古墳時代中期後半から後期段階に多くみられる黒色処理を施す黒色土器が、本遺跡では認められないことが特徴として挙げられる。

甑は、無底式のＡ類と単孔式のＢ類に大別される。前者は、引田式段階まで球胴状を呈するものが多いが、佐平林式段階に入ると、長胴化が進行したものが凌駕する傾向がある。本遺跡出土の甑Ａ類は、いずれも長胴化した甕形を呈しており、他器種の年代観とも対応する。

年代決定の主な資料となる須恵器は、鉢、坏身、坏蓋、有蓋高坏蓋、短頸壺の計５点が出土する。いずれもＴＫ 23 ～ 47 型式に併行する時期と考えられる。

土器の出土頻度や器種組成・形態の変遷の検討を行ったが、各遺構間に大きな差異は認められず、共通した要素が多い。このことは比較的短い期間のうちに建物が廃絶したものと考えられる。土器群は、次の１群に大別でき、さらに２段階の小期を設けた。以下詳細を述べる。

第１ａ群土器

ＳＴ 101・102・104 竪穴住居跡の出土遺物が相当する。

土師器の坏、鉢、壺、甑、甕、須恵器蓋などから構成される。本土器群の特徴は、内湾するＡ類と外反するＡ類であり、内湾するＢ類がＡ類よりも量的に多い、もしくは同等の割合で構成されることが挙げられる。

甕については、最大径が体部中位にある甕Ａ・Ｄ類などの球胴状を呈するものが大半を占めるが、長胴化した甕Ｂ類も僅かに確認できる。口縁部の形態は、「く」の字状の口縁部が多く見られるが、直立気味に立ち上がるものや、外傾して開くものもある。

以上の内容を有するＳＴ 104 竪穴住居跡からは、床面からＴＫ 23 ～ＴＫ 47 型式の須恵器蓋が出土している。本土器群の年代時期は、６世紀初頭を中心に、５世紀末に遡る可能性を提示しておきたい。

第１ｂ群土器

ＳＴ 103・105・106 竪穴住居跡の出土遺物が相当する。

土師器の坏、鉢、壺、甑、小型甕、甕、須恵器の坏身から構成される。土器組成の中心となる坏類は、坏Ａ・Ｂ類（前時期の外反・内湾）が主体を占めるが、坏Ｃ類（須恵器模倣坏）が一定量認められることが一つの特徴といえる。また、口縁部と体部に稜や段を有する坏Ｄ類や深みのある塊状の坏Ｅ類が含まれる。

甕の形態では、前段階まで頸部が「く」の字状をしていたものが、口縁部が直立気味に立ち上がるようになり、体部の長胴化も更に進行する。他に須恵器の短頸壺を模倣した壺Ｃ類や、小型甕の甕Ｃｂ２類など他器種でも様々な形態が認められることも特徴である。

土器群の坏や鉢類は、川西町太夫小屋２遺跡の竪穴住居跡内の出土遺物と同時期か、前出するものと考えられる。年代は、第１ａ群土器の継続性と太夫小屋２遺跡の年代観から６世紀前半代に比定しておきたい。

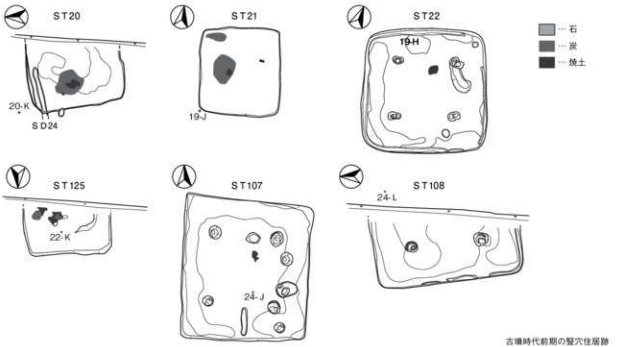
古墳時代中期の土師器は、坏、鉢、壺、甑、甕が多く、器面が赤く彩色される赤色土器も多く認められる。最も多い坏は、口縁部が外反するA類や内湾するB類が多く混在するが、口縁部がほぼ垂直に立ち上がる須恵器模倣の坏C類や大型坏を呈する器形への変遷がみられる。甕では、球胴状の甕A類から、長胴化が進行した甕B類へと移り代わること、ＳＴ104・105竪穴住居跡出土の須恵器が、ＴＫ23型式～ＴＫ47型式に併行することから、５世紀後葉～６世紀初頭の南小泉式の終末段階から次期への過渡期にあたると捉えた。

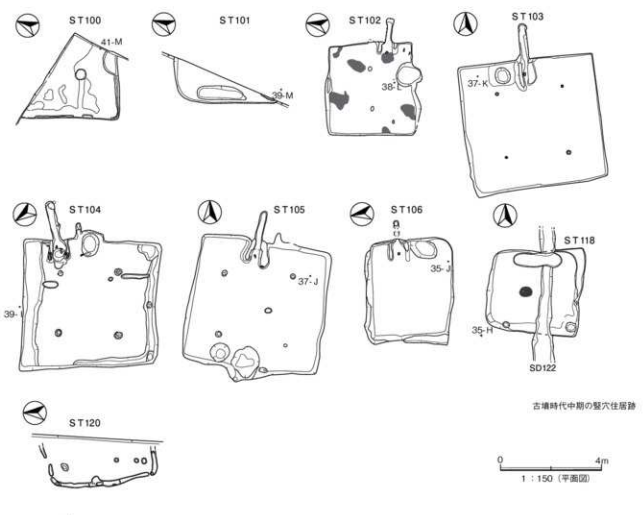
置賜地方における古墳時代中期から後期に属する集落遺跡は、鎌倉上遺跡周辺でも確認されており、高畠町南原遺跡、米沢市中里遺跡、北小屋屋敷遺跡、川西町太夫小屋遺跡などが挙げられる。出土土器の特徴から南原遺跡古相・中里遺跡→南原遺跡新相・北小屋屋敷遺跡→太夫小屋２遺跡の変遷が考えられている。

鎌倉上遺跡の出土資料は、古墳時代後期に主体を占める黒色土器や有段丸底坏が出現する直前の土器様相であること、年代時期を判断する須恵器の共伴関係から、当地域の古墳時代中期から後期への変遷を比較できる資料となろう。

引用・参考文献

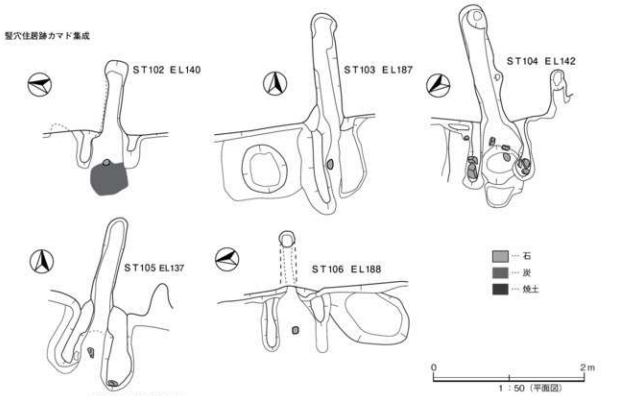
青山博樹　1999「古墳時代中～後期の土器編年－福島県中通り地方南部を中心に－」『福島考古』第40号 PP. 54 － 57
青山博樹　2010「古墳時代前期の土器編年－仙台平野とその周辺－」『北社』辻秀人先生還暦記念論集 辻秀人先生還暦記念論集刊行会
阿部明彦・吉田江美子　2002「山形県における古墳時代中期の土器様相（１）」『山形考古』第７巻第２号（通巻32号）山形考古学会
植松暁彦　2005「山形県の弥生後期～古墳時代前期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現（第１分冊）』PP. 259 － 277　新潟県考古学会
大阪府立近つ飛鳥博物館　2006「年代のものさし－陶邑の須恵器－」大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1994「南原遺跡・堂ノ下遺跡・飯塚館跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第２集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1995「畑田遺跡・中野遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 22 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1995「屋ノ越遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 27 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1996「下柳Ａ遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 38 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2000「中里遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2001「太夫小屋１・２・３遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 160 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2002「北小屋屋敷発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 103 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2004「服部遺跡・藤治屋敷遺跡第２次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 119 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2004「浜江遺跡第２・３次遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 124 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2004「的場遺跡第２・３次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 126 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2007「梅野木前１遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 160 集
佐久間正明　2000「福島県における五世紀代の土器変遷－様式的側面を中心に－」『法政考古学』第 26 集
佐藤鎌雄　2011「百花繚乱－米沢盆地・長井盆地のムラと古墳－」『山形の古墳時代－最上川流域のムラと古墳－』PP. 27 － 50　山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
滝沢規朗　2011「阿賀北における古墳時代前期の土器について（上）－器種分類と基準資料の提示－」『三面地域の考古学』第９号 PP. 66 － 98　奥三面を考える会
田嶋明人　1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人　2011「古墳確立期土器の広域編年－東日本を対象とした検討（その４）－」『西相模考古』第 20 号　西相模考古学研究会
辻秀人　1993「東北南部の古墳出現期の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
新潟県考古学会　2005「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現（第１分冊）」
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　2005「日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ　道端遺跡Ⅲ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 142 集
長谷川厚　1993「赤い土器・黒い土器」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集刊行会
福島県教育委員会　1978「佐平林（Ⅰ～Ⅳ）」『母畑地区遺跡発掘調査報告書』Ⅱ
福島県教育委員会　「正直入遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告書』34
福島県会津坂下町教育委員会　1995「柞ガ森古墳・稲荷塚遺跡発掘調査報告書」
福島県会津坂下町教育委員会　2003「会津坂下町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ・中平遺跡・男堂遺跡」会津坂下町文化財調査報告書第 54 集
柳沼賢治　1999「福島県における５世紀土器とその前後」『東国土器研究』第５号　東国土器研究会
山形県教育委員会　2010「分布調査報告書（36）」山形県埋蔵文化財調査報告書第 212 集
米沢市教育委員会　1986「米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書第Ⅲ集大清水遺跡」米沢市埋蔵文化財調査報告書第 17 集
米沢市教育委員会　1993「上新田Ａ遺跡発掘調査報告書　第２集」米沢市埋蔵文化財調査報告書第 39 集
米沢市教育委員会　2004「大西遺跡発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第 85 集
吉田江美子　2008「山形県内の古墳時代前期土師器について－近年における発掘調査の成果－」『研究紀要』第５号　財団法人山形県埋蔵文化財センター



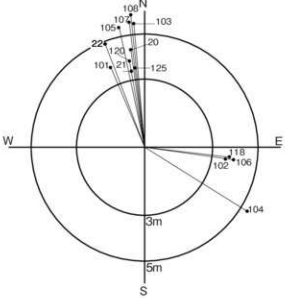


第 86 図　竪穴住居跡集成

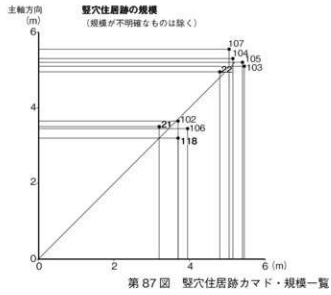
竪穴住居跡カマド集成



竪穴住居跡の主軸方向



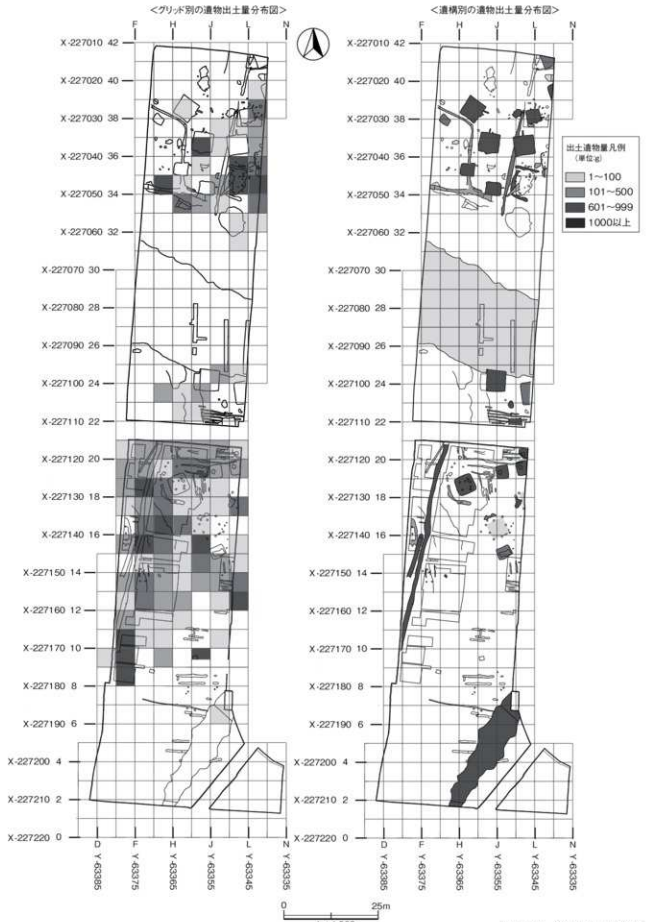
竪穴住居跡の規模
（規模が不明確なものは除く）



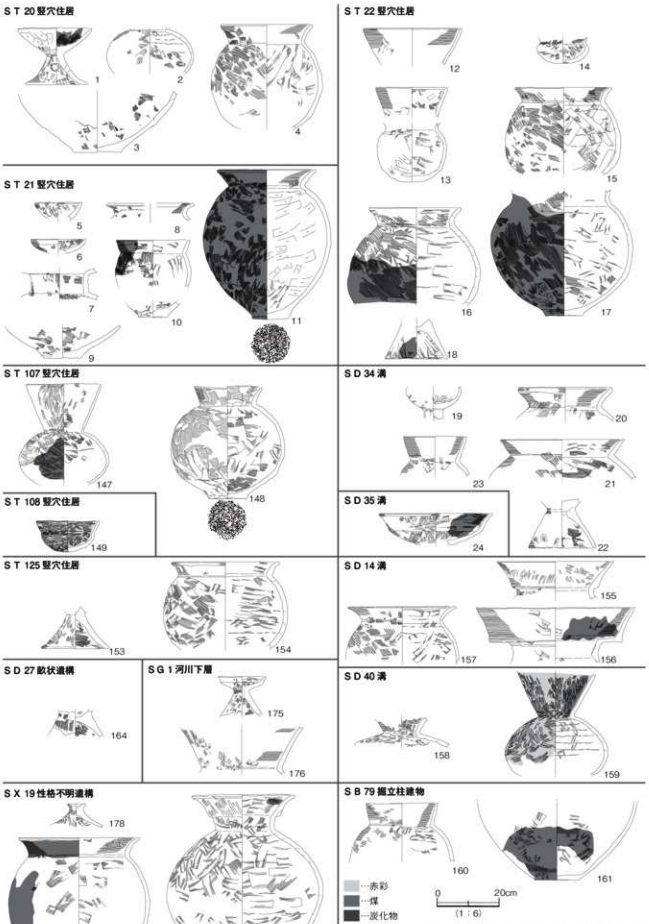
第 87 図　竪穴住居跡カマド・規模一覧

表 15　竪穴住居跡詳細表

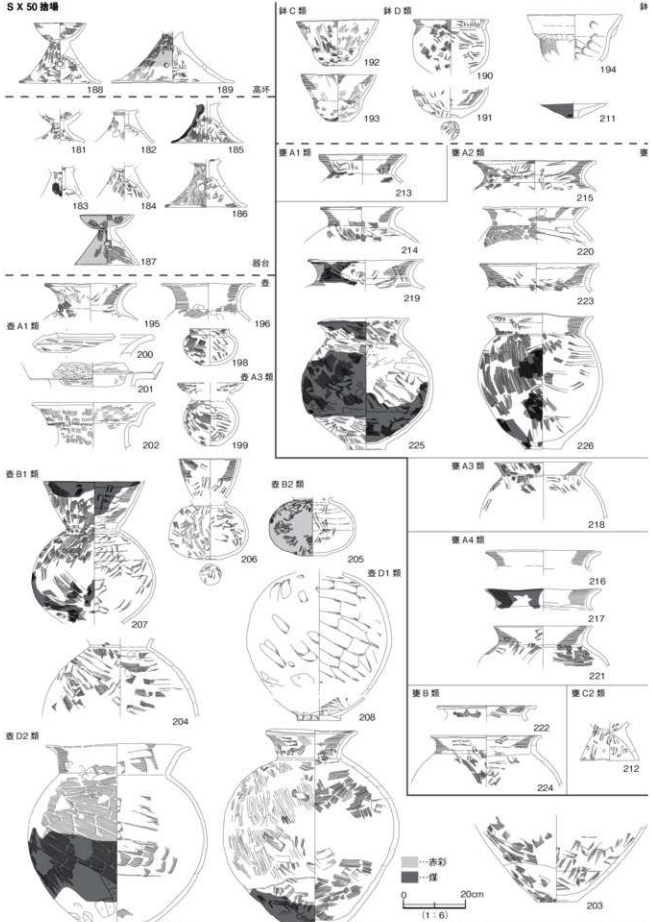
挿図	遺構番号	グリッド	平面形	主軸方位（長軸）	規模（m）	深さ（cm）	壁	床面状況	遺構内遺構（ピット、貯蔵穴など）	炉・カマド	備考
11	ST20	19－K	隅丸方形	N-10˚-W	（3.85）×（2.80）	15	外傾	貼床		地床炉1：中央部	柱穴なし
12	ST21	19－J	隅丸方形	N-10˚-W	3.50×3.20	15	外傾	貼床		地床炉1：西寄り	柱穴なし
15	ST22	18・19－H	隅丸方形	N-21˚-W	4.95×4.80	35	垂直	貼床	柱穴4基、壁溝	地床炉1：中央部	外周溝
16	ST100	41－L	方形	N-25˚-W	（3.80）×（2.50）	15	垂直	貼床	壁溝	不明	
16	ST101	39－L	隅丸方形	N-20˚-W	4.00×（1.80）	15	垂直	直床	長楕円状の掘り込み	不明	
19	ST102	38－L	隅丸方形	E-8˚-S	3.65×3.70	30	垂直	直床	東西軸に柱穴2基	カマド：東壁南寄り	
21	ST103	36・37－K	隅丸方形	N-5˚-W	5.10×5.45	20	垂直	直床	柱穴4基、北壁西側に貯蔵穴1	カマド：北壁中央	
23	ST104	38・39－I	隅丸方形	E-32˚-S	5.30×5.15	20	垂直	貼床	柱穴4基、南壁中央に貯蔵穴1、開仕切り溝	カマド：東壁北寄り	
25	ST105	36・37－I	隅丸方形	N-12˚-E	5.20×5.40	20	垂直	直床	柱穴4基、南壁中央に貯蔵穴2	カマド：北壁中央	
27	ST106	34・35－I	隅丸方形	E-8˚-S	3.45×3.95	50	垂直	直床	東壁中央に貯蔵穴1	カマド：東壁北寄り	柱穴なし
29	ST107	24－J	隅丸方形	N-7˚-E	5.55×5.05	20	垂直	貼床	柱穴4基、東側に貯蔵穴1、開仕切り溝	地床炉1：北寄り	
30	ST108	23－M	隅丸方形	N-6˚-W	5.85×（3.15）	20	垂直	貼床	柱穴2基（推定4基）、壁溝	不明	
31	ST118	35－I	隅丸方形	E-7˚-S	3.20×3.70	25	外傾	貼床	北側に長楕円状の掘り込み	地床炉1：中央部	
32	ST120	36－L	方形	N-8˚-W	（4.30）×（2.20）				壁溝、西壁際に4基	不明	
33	ST125	22－K	隅丸方形	N-7˚-W	3.50×（2.40）	10	外傾	貼床		地床炉1：中央部	



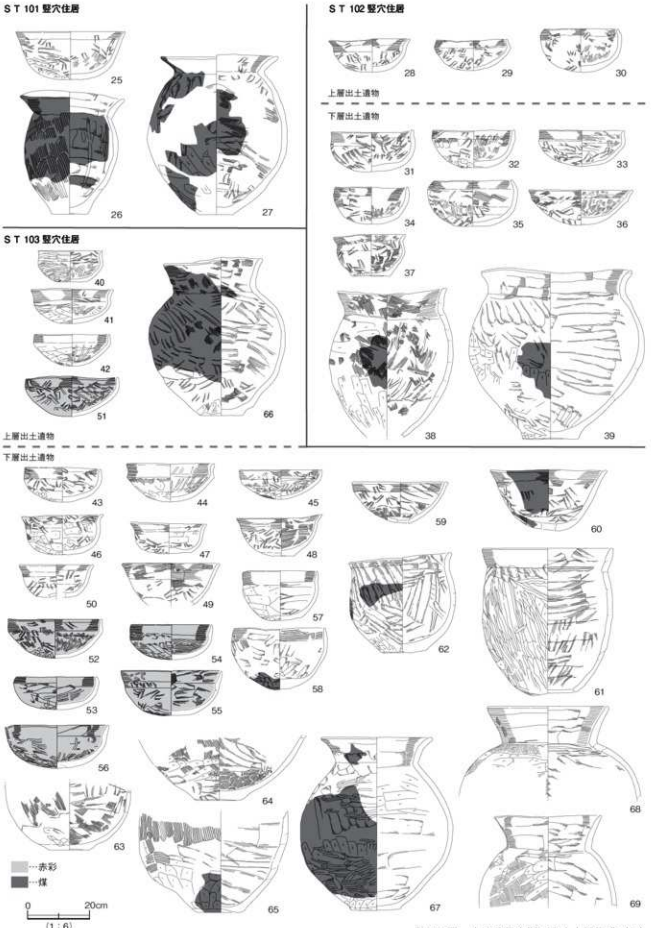
第 88 図　遺物出土量分布図



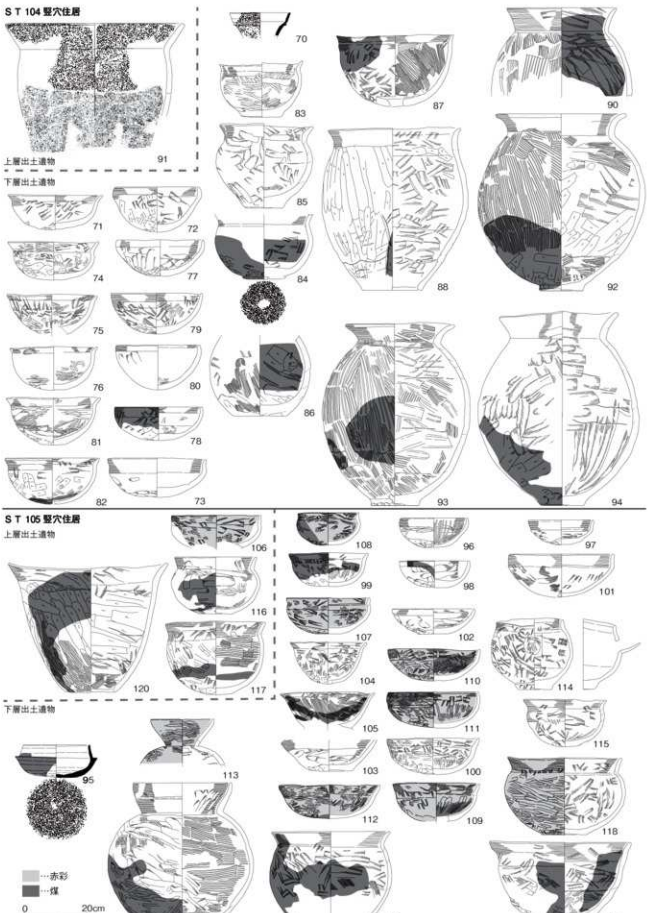
第 89 図　古墳時代前期の出土土器集成（1）



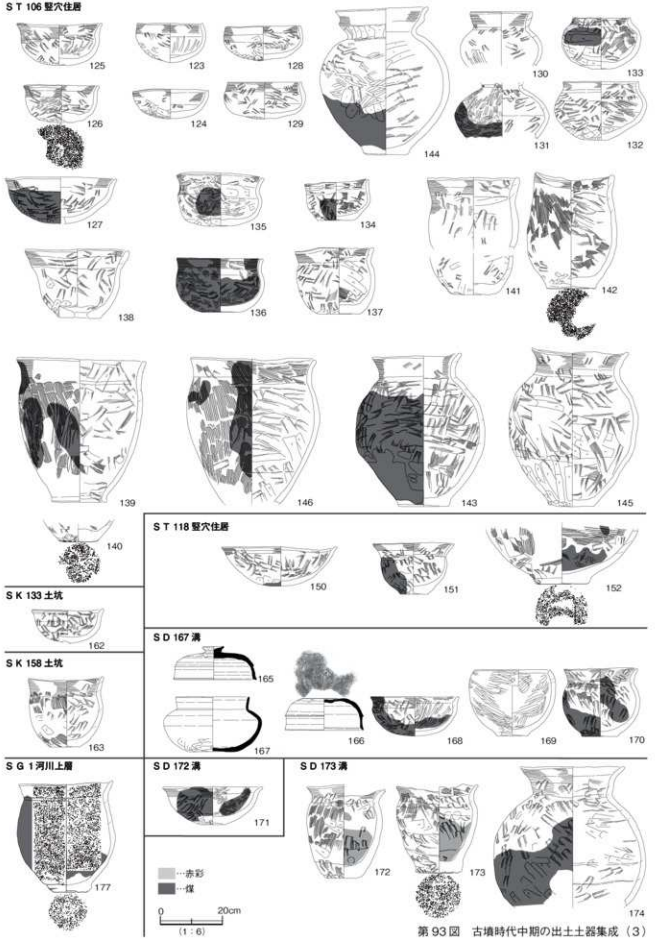
第 90 図　古墳時代前期の出土土器集成（2）



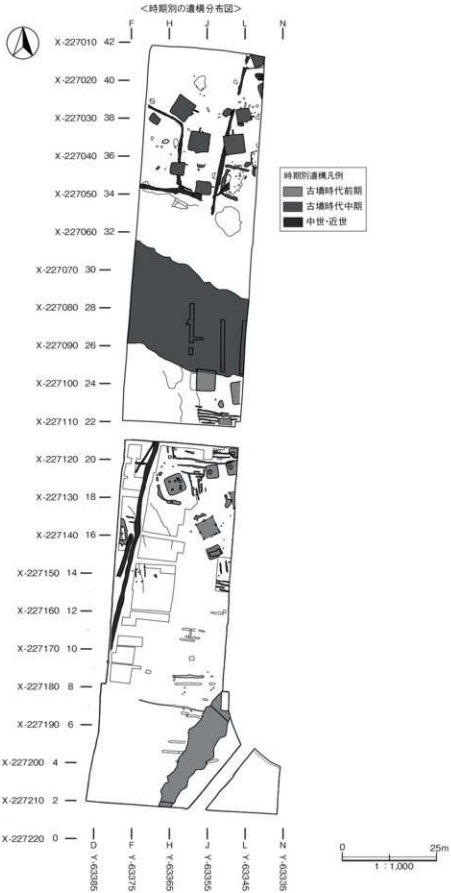
第 91 図　古墳時代中期の出土土器集成（1）



第 92 図　古墳時代中期の出土土器集成（2）

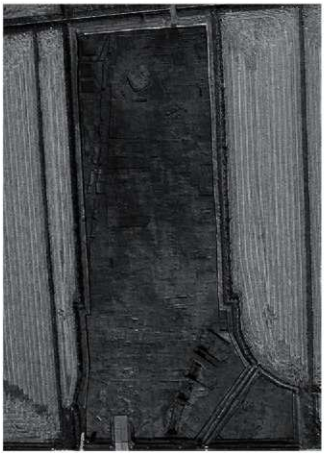


第 93 図　古墳時代中期の出土土器集成（3）



第 94 図　時期別遺構配置図

写真図版



1区調査区全景（上が北）

2区調査区全景（上が北）

1区基本層序北壁（南から）

1区基本層序西壁（北東から）

1区基本層序東壁（西から）

2区調査区東壁土層断面（北西から）

ＳＴ 20 遺物出土状況（西から）

ＳＴ 20 ＲＰ 22 出土状況（北から）

ＳＴ 20 床面検出状況（西から）

ＳＴ 20 ＲＰ 24・25 出土状況（北西から）

ＳＴ 20 完掘状況（東から）

ＳＴ 21 土層断面（東から）

ＳＴ 21 遺物出土状況（西から）

ＳＴ 21 完掘状況（西から）

ＳＴ 21 ＲＰ 30 出土状況（北から）

ＳＴ 21 完掘状況（東から）

ＳＴ 22 遺物出土状況（北から）

ＳＴ 22 土層断面（南から）

ＳＴ 22 ＲＷ 60 炭化材出土状況（北から）

ＳＴ 22 ＲＰ 55 ～ 58 出土状況（西から）

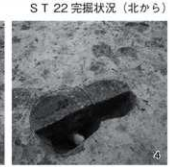
ＳＴ 22 ＲＰ 61・62 出土状況（南から）

ＳＴ 22 完掘状況（北から）

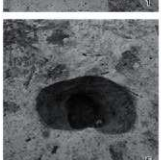
1 ＥＰ 44 土層断面（北から）

2 ＥＰ 45 土層断面（北から）

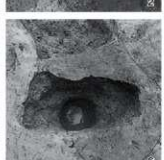
3 ＥＰ 46 土層断面（南から）



4 ＥＰ 47 土層断面（南から）



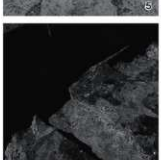
5 ＥＰ 44 完掘状況（北から）



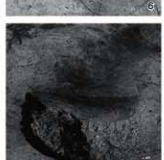
6 ＥＰ 45 完掘状況（北から）

7 ＥＰ 46 完掘状況（北から）

8 ＥＰ 47 完掘状況（南から）



9 ＥＤ 51 土層断面（南から）



10 ＥＫ 52 土層断面（北から）

SD 34 遺物出土状況（北から）

SD 35 炭化物集中域状況（西から）

SD 34 土層断面（南から）

SD 35 土層断面（東から）

SD 34 完掘状況（北から）

SD 35 完掘状況（東から）

ＳＴ 100 床面検出（西から）

ＳＴ 101 土層断面（北西から）

ＳＴ 100 遺物出土（北から）

ＳＴ 101 ＲＰ 205 出土状況（北から）

ＳＴ 100 完掘状況（南から）

ＳＴ 101 完掘状況（北から）

ＳＴ 102 遺物出土状況（西から）

ＳＴ 102 土層断面（西から）

ＳＫ 128 土層断面（西から）

ＳＴ 102 ＲＰ 241 出土状況（西から）

ＳＴ 102 ＲＰ 242 出土状況（東から）

ＳＴ 102 ＲＷ 313～315 出土状況（南から）

ＳＴ 102 ＲＰ 243～245 出土状況（南東から）

ＳＴ 102 ＥＬ 140 土層断面（南西から）

ＳＴ 102 ＥＫ 139 土層断面（西から）

ＳＴ 102 ＥＬ 140 完掘状況（北西から）

ＳＴ 102 ＥＫ 139 遺物出土状況（西から）

ＳＴ 102 完掘状況（西から）

ＳＴ 102 ＲＰ 210・炭化材出土状況（南から）

ＳＴ 102 ＥＰ 203 土層断面（南から）

ＳＴ 102 ＲＰ 348・ＲＷ 349 ～ 351 出土状況（北から）

ＳＴ 102 ＥＰ 204 土層断面（南から）

ＳＴ 103 遺物出土状況（北から）

ＳＴ 103 南北土層断面（南西から）

ＳＴ 103 ＲＷ 361 出土状況（南東から）

ＳＴ 103 ＲＰ 235・236 出土状況（南から）

ＳＴ 103 ＲＰ 246・247・228 出土状況（北から）

ＳＴ 103 ＥＬ 187 土層断面（南から）

ＳＴ 103 ＲＰ 229 ～ 231 出土状況（南から）

ＳＴ 103 ＥＬ 187 東側遺物出土状況（南から）

ＳＴ 103 ＥＬ 187 完掘状況（南から）

ＳＴ 103 ＲＰ 233 出土状況（北から）

ＳＴ 103 完掘状況（北から）

ＳＴ 103 ＥＰ 207 土層断面（南から）

ＳＴ 103 ＥＫ 156 土層断面（東から）

ＳＴ 103 ＥＰ 208 土層断面（南から）

ＳＴ 103 ＥＫ 156 遺物出土状況（南から）

ＳＴ 104 遺物出土状況（西から）

ＳＴ 104 南北軸土層断面（西から）

ＳＴ 104 ＲＰ 313 出土状況（東から）

ＳＴ 104 ＲＰ 306 出土状況（南から）

ＳＴ 104 ＲＱ 319 ～ 321 出土状況（西から）

ＳＴ 104 ＥＬ 142 土層断面（南西から）

ＳＴ 104 ＲＰ 298・299 出土状況（北から）

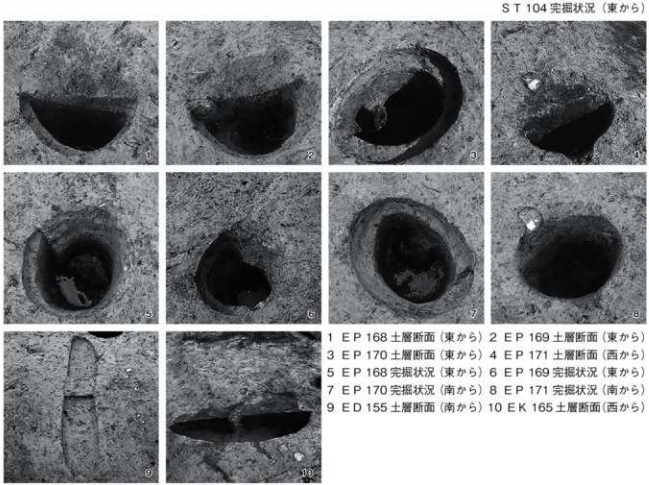
ＳＴ 104 ＥＬ 142 床面検出（西から）

ＳＴ 104 ＥＬ 142 遺物出土状況（北から）

ＳＴ 104 ＥＫ 154 土層断面（南から）

ＳＴ 104 南東隅棒状礫出土状況（東から）

ＳＴ 104 完掘状況（東から）



1 ＥＰ 168 土層断面（東から） 2 ＥＰ 169 土層断面（東から）
3 ＥＰ 170 土層断面（東から） 4 ＥＰ 171 土層断面（西から）
5 ＥＰ 168 完掘状況（東から） 6 ＥＰ 169 完掘状況（東から）
7 ＥＰ 170 完掘状況（南から） 8 ＥＰ 171 完掘状況（南から）
9 ＥＤ 155 土層断面（南から） 10 ＥＫ 165 土層断面（西から）

ＳＴ 105 遺物出土状況（南から）

ＳＴ 105 南東隅遺物出土状況（南東から）

ＳＴ 105 ＥＬ 137 炭化材出土状況（南から）

ＳＴ 105 ＲＰ 262・263 出土状況（西から）

ＳＴ 105 ＥＬ 137 遺物出土状況（北から）

ＳＴ 105 ＥＫ 157 遺物出土（南東から）

ＳＴ 105 ＥＬ 137 完掘状況（南西から）

ＳＴ 105 ＥＫ 157 完掘状況（東から）

ＳＴ 105 ＥＰ 183 土層断面（南から）

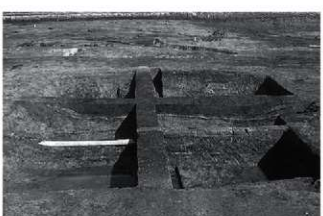
ＳＴ 105 ＲＱ 375 紡錘車出土状況（南東から）

ＳＴ 105 ＥＰ 184 土層断面（南から）

ＳＴ 105 ＥＫ 166 土層断面（西から）

ＳＴ 105 完掘状況（北から）

ＳＴ 106 遺物出土状況（東から）



ＳＴ 106 土層断面（西から）

ＳＴ 106 ＲＰ 345・346 出土状況（北から）

ＳＴ 106 ＲＰ 339 出土状況（北から）

ＳＴ 106 ＲＰ 340・341 出土状況（北から）

ＳＴ 106 完掘状況（西から）

ＳＴ 106 ＥＬ 188 土層断面（南西から）

ＳＴ 106 ＥＬ 188 ＲＰ 369 出土状況（西から）

ＳＴ 106 ＥＬ 188 完掘状況（西から）

ＳＴ 106 ＥＫ 193 遺物出土状況（西から）

ＳＴ 107 遺物出土状況（西から）

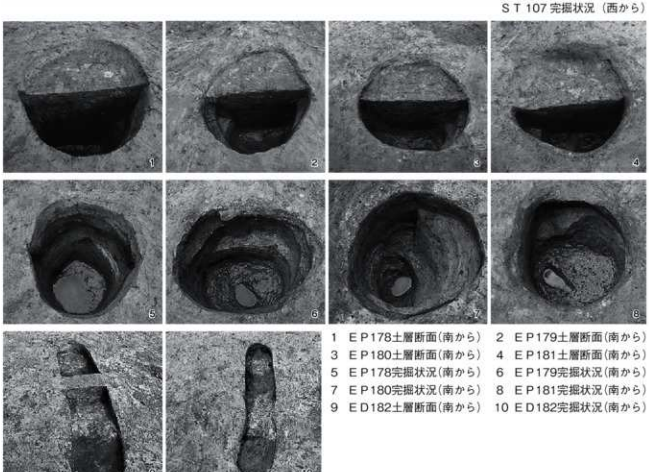
ＳＴ 107 土層断面（西から）

ＳＴ 107 ＥＫ 192 土層断面（南から）

ＳＴ 107 ＲＰ 335・336 出土状況（東から）

ＳＴ 107 ＥＫ 192 完掘状況（南から）

ＳＴ 107 完掘状況（西から）



1　ＥＰ178土層断面（南から）　2　ＥＰ179土層断面（南から）
3　ＥＰ180土層断面（南から）　4　ＥＰ181土層断面（南から）
5　ＥＰ178完掘状況（南から）　6　ＥＰ179完掘状況（南から）
7　ＥＰ180完掘状況（南から）　8　ＥＰ181完掘状況（南から）
9　ＥＤ182土層断面（南から）　10　ＥＤ182完掘状況（南から）

ＳＴ 108 完掘状況（西から）

ＳＴ 108 土層断面（南西から）

ＳＴ 108 ＥＰ 175 完掘状況（西から）

ＳＴ 108 ＲＰ 329 出土状況（西から）

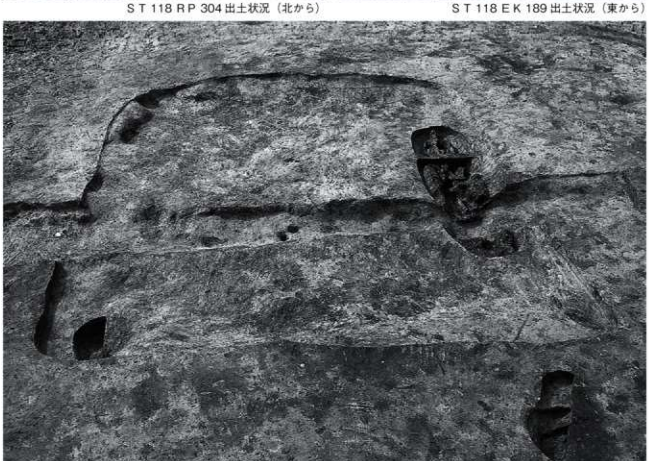
ＳＴ 108 ＥＰ 176 土層断面（南から）

ＳＴ 118 遺物出土状況（北から）

ＳＴ 118 土層断面（南東から）

ＳＴ 118 ＲＰ 304 出土状況（北から）

ＳＴ 118 ＥＫ 189 出土状況（東から）



ＳＴ 118 完掘状況（東から）

ＳＴ 120 検出状況（西から）

ＳＴ 125 遺物出土状況（北から）

ＳＴ 120 土層断面（北西から）

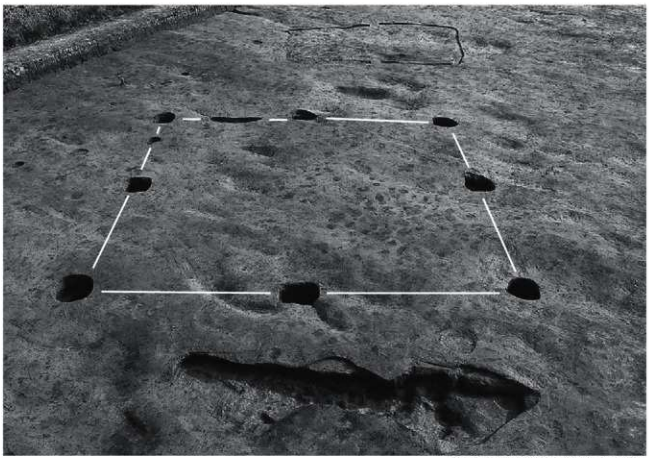
ＳＴ 125 土層断面（西から）

ＳＴ 120 ＥＰ 144 土層断面（西から）

ＳＴ 125 ＲＰ 350 出土状況（北から）

ＳＴ 120 完掘状況（西から）

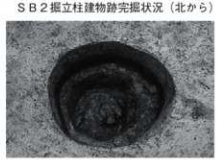
ＳＴ 125 完掘状況（北から）



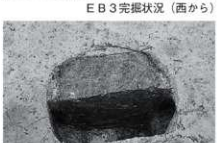
ＳＢ２掘立柱建物跡完掘状況（北から）

ＥＢ３完掘状況（西から）

ＥＢ４土層断面（北から）

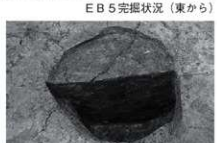


ＥＢ５完掘状況（東から）



ＥＢ６土層断面（東から）

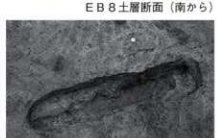
ＥＢ７完掘状況（東から）



ＥＢ８土層断面（南から）

ＥＢ９完掘状況（北東から）

ＥＢ 10 土層断面（北西から）



ＥＤ 11 完掘状況（南から）

SD 14 遺物出土状況（西から）

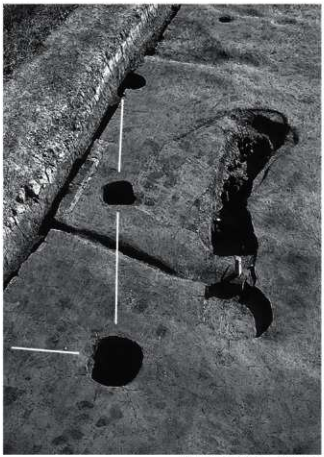
SD 14 RP 18 出土状況（北西から）

SD 14 土層断面（西から）

SD 14 RP 19 出土状況（北から）

SD 14 完掘状況（東から）

SD 14 RP 21 出土状況（東から）



SB 54 完掘状況（北から）

SD 40 土層断面（南から）

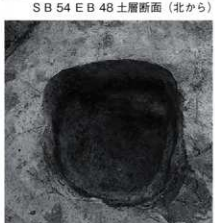
SD 40 RP 78 出土状況（北から）

SB 54 EB 42 土層断面（南から）

SB 54 EB 48 土層断面（北から）

SB 54 EB 53 土層断面（東から）

SB 54 EB 42 完掘状況（南から）



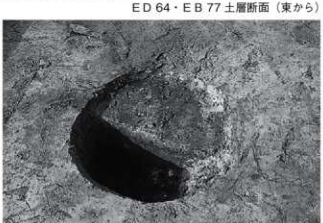
SB 54 EB 48 完掘状況（北から）

SB 54 EB 53 完掘状況（東から）

ＳＢ 79 完掘状況（東から）

ＥＤ 64・ＥＢ 77 土層断面（東から）

ＥＢ 77 上面遺物出土状況（西から）



ＳＢ 79 ＥＢ 69 土層断面（北から）

ＳＢ 79 ＥＢ 77 土層断面（東から）

SK 111 土層断面（東から）

SK 133 土層断面（西から）

SK 111 遺物出土状況（西から）

SK 133 完掘状況（北から）

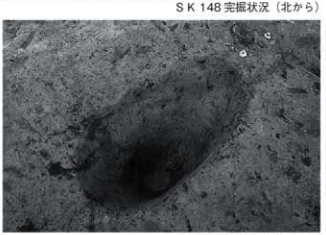
SK 133 遺物出土状況（北から）

ＳＫ 41 完掘状況（西から）

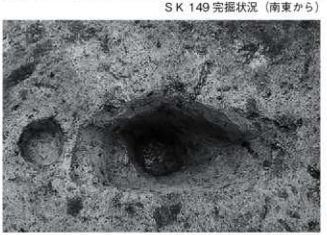
ＳＫ 135 完掘状況（南から）

ＳＫ 148 完掘状況（北から）

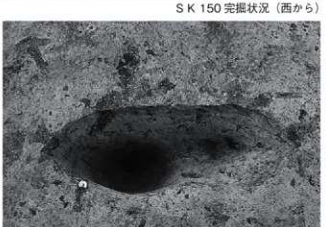
ＳＫ 149 完掘状況（南東から）



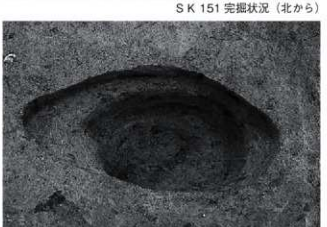
ＳＫ 150 完掘状況（西から）



ＳＫ 151 完掘状況（北から）



ＳＫ 152 完掘状況（西から）



ＳＫ 153 完掘状況（西から）

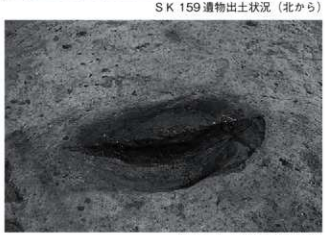
ＳＫ 158 土層断面（西から）

ＳＫ 158 ＲＰ 202 出土状況（南西から）

ＳＫ 159 土層断面（東から）

ＳＫ 159 遺物出土状況（北から）

ＳＫ 164 土層断面（南西から）



ＳＫ 177 土層断面（南から）

ＳＰ 134 土層断面（南西から）

ＳＰ 138 土層断面（北西から）

S D160・167・172・173 遺物出土状況（北西から）

S D167 土層断面（東から）

S D167 遺物出土状況（東から）

S D172 土層断面（南から）

S D173 土層断面（西から）

S D160・167・172・173 完掘状況（北西から）

S D167 R P 323・324 出土状況（南から）

S D167 完掘状況（南西から）

S D172 R P 330 出土状況（南から）

S D173 R P 331 出土状況（西から）

遺物包含層出土状況（西から）

遺物包含層土層断面（南から）

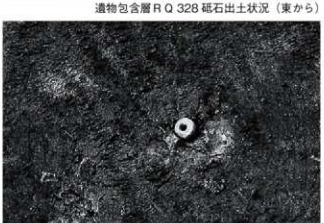
遺物包含層ＲＰ 286 出土状況（西から）

遺物包含層ＲＷ 200 柵出土状況（西から）

遺物包含層ＲＱ 283 砥石出土状況（北から）

遺物包含層ＲＱ 328 砥石出土状況（東から）

遺物包含層ＲＱ 352 石製模造品出土（南から）



遺物包含層ＲＱ 351 管玉出土（北から）

S D13 完掘状況（北から）

S D12・13 土層断面（南から）

S D13 土層断面（南から）

S D13・16 土層断面（南から）

S D16 唐津皿出土状況（南から）

S D112～117 畝跡完掘状況（西から）

S D 23～26 畝跡完掘状況（西から）

S D 55～62 畝跡完掘状況（北から）

SG1精査状況（上が北）

SG1RP67出土状況（北から）

SG1RP76出土状況（北から）

SG1精査状況（北から）

ＳＧ１北トレンチ土層断面（南から）

ＳＧ１ＲＷ６８出土状況（南から）

ＳＧ１中央トレンチ土層断面（南西から）

ＳＧ１ＲＷ６９出土状況（南東から）

ＳＧ１南トレンチ土層断面（南から）

ＳＧ１ＲＷ７５出土状況（東から）

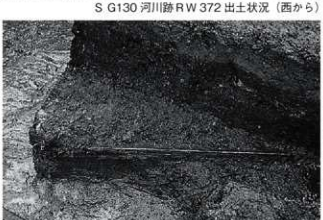
S G 130 河川跡検出状況（南から）

S G130 河川跡東壁面土層断面（南西から）

S G130 河川跡精査状況（西から）

S G130 河川跡ＲＷ 372 出土状況（西から）

S G130 河川跡中央トレンチ土層断面（西から）



S G130 河川跡ＲＷ 384 出土状況（西から）

S G130 河川跡ＲＷ 371 出土状況（西から）

SX 19 遺物出土（北から）

SX 19 ED 30 遺物出土（南から）

SX 19 EK 31 土層断面（南から）

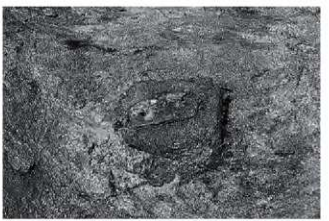
SX 19 完掘状況（東から）

SX 19 EK 31 RP 37 出土状況（西から）

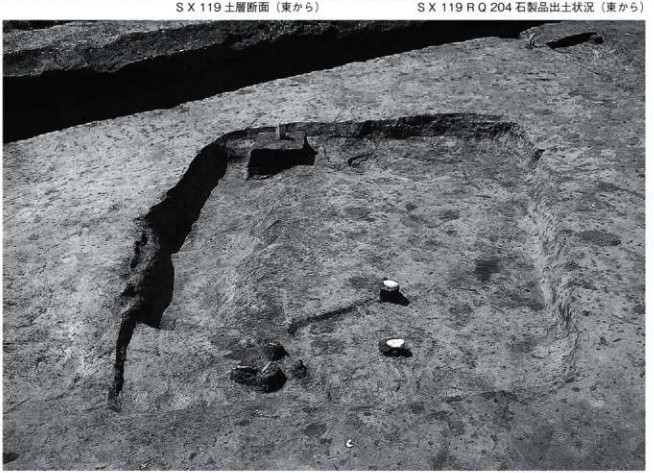
ＳＸ 63 遺物出土状況（北から）

ＳＸ 161 土層断面（南西から）

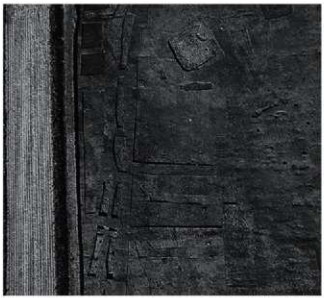
ＳＸ 119 土層断面（東から）



ＳＸ 119 ＲＱ 204 石製品出土状況（東から）



ＳＸ 119 完掘状況（東から）



ＳＸ 50 捨場（上が北）

ＳＸ 50 捨場全景（北から）

ＳＸ 50 捨場土層断面（南西から）

ＳＸ 50 捨場中央部遺物出土状況（南から）

ＳＸ 49 集石棒状礫出土状況（南東から）

ＳＸ 50 捨場南側（南から）

S X 50 捨場 R P 105・106 出土状況（東から）

S X 50 捨場 R P 118 器台出土状況（南から）

S X 50 捨場 R P 122 出土状況（南西から）

S X 50 捨場 R P 130 出土状況（南から）

S X 50 捨場 R P 134 出土状況（西から）

S X 50 捨場 R Q 132 管玉出土状況（西から）

1 区北東域遺物包含層出土状況（南から）

1 区北東域遺物包含層 R P 1 出土状況（南から）

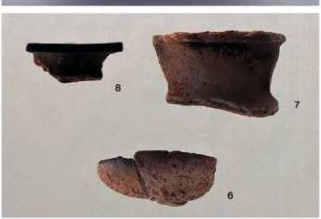
S T 102 竪穴住居跡出土遺物

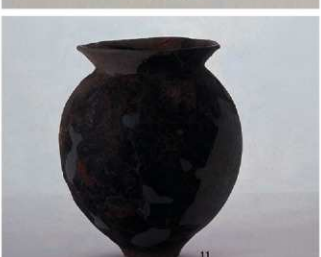
S T 103 竪穴住居跡出土遺物

S T 104 竪穴住居跡出土遺物

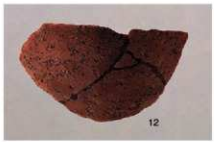
S T 105 竪穴住居跡出土遺物

S T 106 竪穴住居跡出土遺物

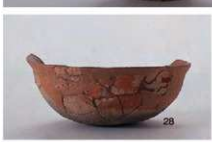




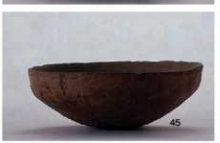
ＳＴ 20・21 竪穴住居跡出土遺物



ＳＴ 22 竪穴住居跡・ＳＤ 34・35 溝跡出土遺物



S T 101・102 竪穴住居跡出土遺物



ＳＴ 102・103 竪穴住居跡出土遺物

55

57

58

56

60

59

61

62

63

S T 103 竪穴住居跡出土遺物

65

64

66

67

69

68

70

71

72

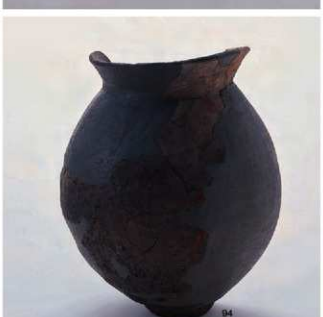
73

74

75

S T 103・104 竪穴住居跡出土遺物

ＳＴ 104 竪穴住居跡出土遺物



S T 104 竪穴住居跡出土遺物

ＳＴ 105 竪穴住居跡出土遺物

116

117

118

114

119

120

121

122

S T 105 竪穴住居跡出土遺物

123

124

125

126

127

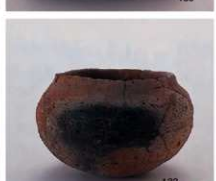
128

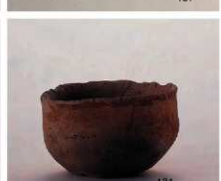
129

130

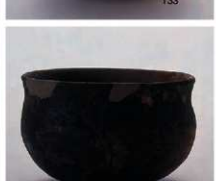
131

132


133


134

135


136

137

ＳＴ 106 竪穴住居跡出土遺物（１）

ＳＴ 106 竪穴住居跡出土遺物（2）

147

148

149

150

153

151

154

152

S T 107・108・118・125 竪穴住居跡出土遺物

SD 14・27・40 溝跡・SB 79 掘立柱建物跡・SK 133・158 土坑出土遺物

165

166

167

169

170

168

171

172

173

175

177

174

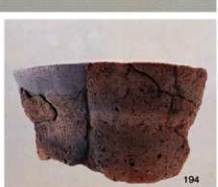
176

178

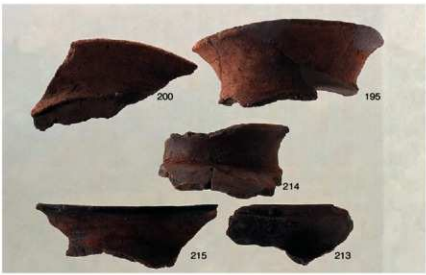
179

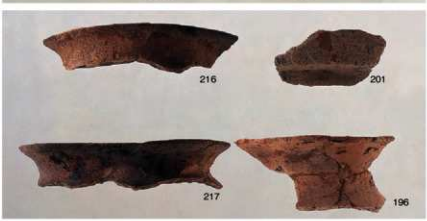
180

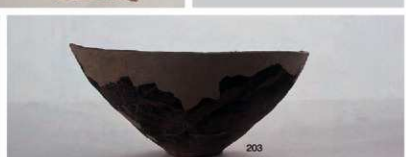
SD 167・172・173 溝跡・SG 1 河川跡・SX 19 性格不明遺構出土遺物

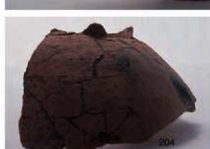


S X 50 捨場出土遺物（1）



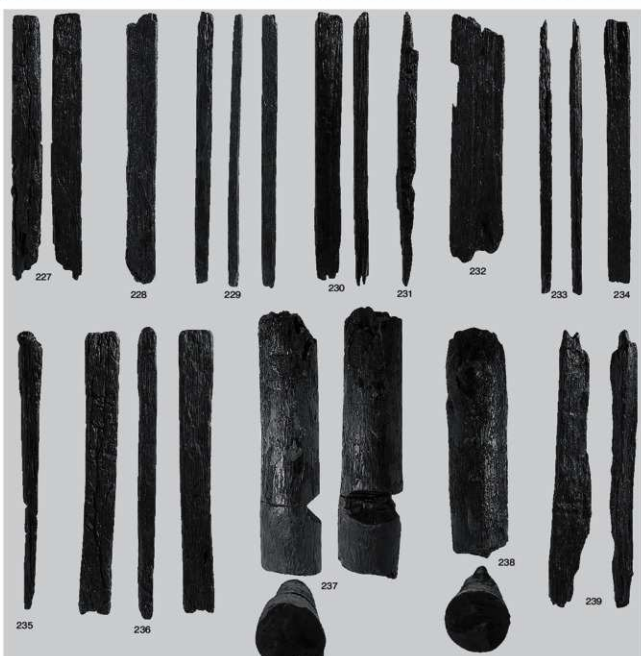




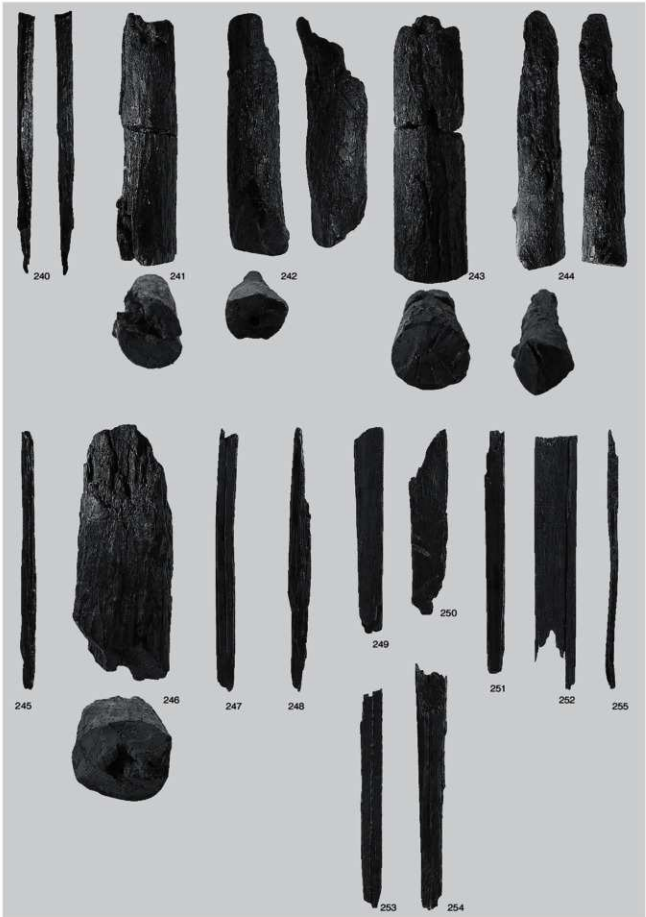


SX 50 捨場出土遺物（2）

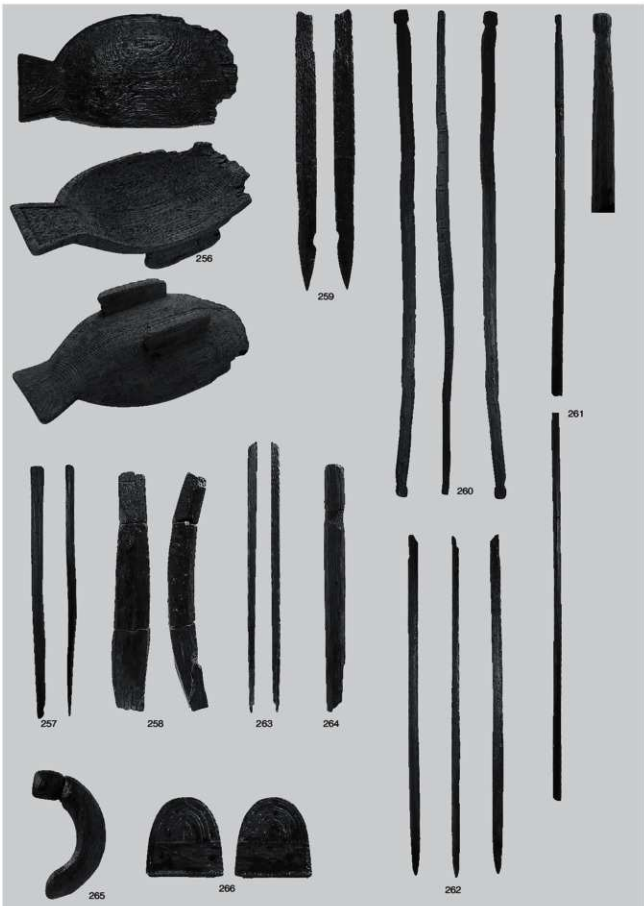
S X 50 捨場出土遺物（3）



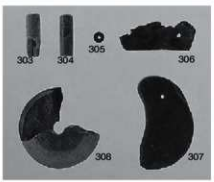
S X 50 捨場出土遺物（4）・木製品（1）

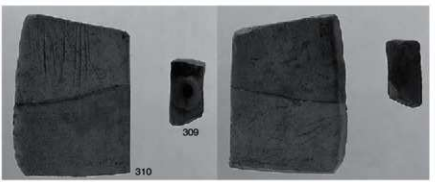


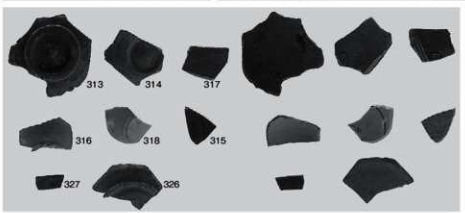
木製品（2）

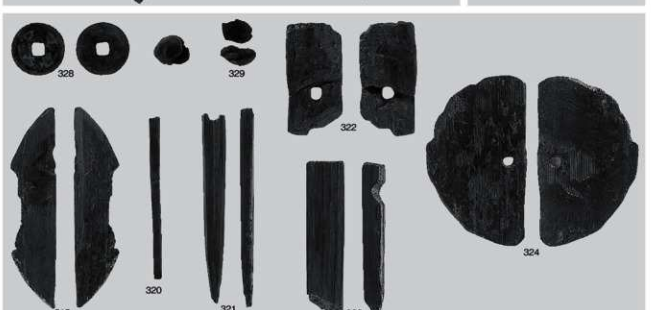


木製品（3）









石製品・石器・SD13・16溝跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらかみいせきだい1・2じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉上遺跡第1・2次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第201集
編著者名	菅原哲文　山本巧
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL　023-672-5301
発行年月日	2012年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
かまくらかみいせき 鎌倉上 遺跡	やまがたけん 山形県 よねざわし 米沢市 くはたまち 窪田町 こぜあざ 小瀬字 かまくらかみ 鎌倉上	6202	033	38° 24′ 12″	140° 18′ 7″	20090721 ～ 20091113	3,500	一般国道287号米沢北バイパス道路改築事業（交付金・国道）
						20100601 ～ 20101015	3,500	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かまくらかみいせき 鎌倉上 遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡　15 掘立柱建物跡　3 土坑　19 溝跡・畝状遺構　40 河川跡　2 性格不明遺構　3	土師器 須恵器 木製品 漆製品 石製品	古墳時代前期と中期の集落跡である。特に、中期の集落では、焼失住居跡が検出され、土師器を中心とした良好な一括資料が出土した。 （文化財認定箱数：計57） 第1次　21 第2次　36
		中世・近世	溝跡　5	陶器・磁器 木製品 古銭	

要約

遺跡は、鬼面川と最上川による河川間の後背湿地に立地する。標高は、約230ｍを測る。古墳時代と中近世の複合遺跡である。

古墳時代では、東西にのびる河川跡をはさんで、南側に前期後半の集落跡が、北側に中期後半の集落跡が分布する。古墳時代前期の集落は、外周溝をもつ竪穴住居跡や、倉庫と考えられる掘立柱建物跡、畑の畝跡、拾場で構成され、当期の集落の構成が明らかになった。中期後半の集落跡は、カマドを備える竪穴住居跡で構成される。3棟の焼失住居跡を含む竪穴住居跡からは、土師器や須恵器が良好な状態で出土し、当期の編年や使用状況を検討できる一括資料を得ることができた。河川跡や土坑からは木製品が出土し、漆製品として櫛が出土したことが注目される。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第201集

鎌倉上遺跡第1・2次発掘調査報告書

2012年3月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話　023－672－5301
印刷　中央印刷株式会社
〒990－0051　山形県山形市銅町一丁目1－5
電話　023－631－5533